寄贈図書
1986年6月25日 受領
筑波大学歴史・人類学系

茨城県教育財団文化財調査報告第33集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13

屋代B遺跡 I

昭和61年3月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

298
1
NK
寄贈
歴史・人類学系
平成 年 月 日

茨城県教育財団文化財調査報告第33集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13

屋代（やしろ）B遺跡 I

昭和61年3月

住宅・都市整備公団　茨城開発局
財団法人　茨城県教育財団

96605132

序

竜ヶ崎市北部の北竜台・龍ヶ岡地域では，竜ヶ崎ニュータウンの建設が，住宅・都市整備公団によって進められております。その開発区域内に存在が確認されている埋蔵文化財包蔵地について，その保護と，時代の要請に基づくニュータウンの建設とをどのように調和させていくかが，大切な問題となっております。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団の委託を受けて，昭和52年度から竜ヶ崎ニュータウン建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。これらの調査によって，数多くの貴重な資料が検出され，郷土の歴史の解明に大きな成果を上げることができました。

本書は，屋代Ｂ遺跡の昭和58・59両年度分の調査成果を収録したものであります。本書が，研究の資料としてはもとより，教育・文化の向上の一助として広く活用されることを切望しております。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し，感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会をはじめとする関係各機関及び関係各位からいただいた御指導・御協力に対し，衷心より謝意を表します。

昭和61年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により発掘調査を実施している屋代Ｂ遺跡の昭和58・59年度分の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　屋代Ｂ遺跡の昭和58･59年度調査分の調査･整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		大金新一	～昭和58年11月
		竹内藤男	昭和58年12月～
副理事長		古橋靖	～昭和58年７月
		川又友三郎	昭和58年７月～
常務理事		綿引一夫	～昭和60年３月
		萩原藤之助	昭和60年４月～
事務局長		小林洋	～昭和60年３月
		堀井昭生	昭和60年４月～
調査課長		寺内寛	～昭和59年３月
		青木義夫	昭和59年４月～
企画管理班	班長	今村信夫	～昭和59年３月
	〃	市毛洋一	昭和59年４月～昭和60年３月
	〃	北畠健	昭和60年４月～
	主任調査員	加藤雅美	
	主事	鈴木三郎	～昭和60年３月
	〃	田所多佳男	昭和60年４月～
	〃	海老沢一夫	～昭和60年３月
	〃	大曽根徹	
	〃	山崎初雄	昭和60年４月～
調査第二班	班長	渡辺千秋	昭和58年度
	〃	安蔵幸重	昭和59年度
	主任調査員	中根節男	昭和58年度調査
	〃	佐藤正好	昭和59年度調査
	調査員	根本康弘	昭和58・59年度調査，60年度整理・執筆
整理班長		石井毅	昭和60年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，根本康弘が執筆・編集を担当した。

4　本書に使用した記号等については，第３章第１節２の記載方法の項を参照されたい。

5　発掘調査や出土品の整理に際して，青山学院大学講師伊禮正雄氏並びに茨城県立歴史館学芸部学芸第二室長後藤道雄氏の御助言・御教示を賜った。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……2
　　1　調査区設定……2
　　2　遺跡の基本層序……2
　　3　遺構確認……3
　　4　遺構調査……4
　第３節　調査経過……5
第２章　位置と環境……8
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境……11
第３章　遺構と遺物……16
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……16
　　1　遺跡の概要……16
　　2　遺構・遺物の記載方法……17
　第２節　縄文時代……21
　　1　遺構……21
　　2　遺構出土遺物……21
　　3　遺構外出土遺物……30
　第３節　弥生時代……43
　　1　遺構と遺物……43
　　2　遺構外出土遺物……61
　第４節　古墳・奈良・平安時代……66
　　1　遺構と遺物……66
　　2　遺構外出土遺物……105
　第５節　中世……109
　　1　土坑……109

2　地下式坑…… 131
3　堀…… 140
第6節　その他…… 203
1　土坑…… 213
2　溝…… 239
第4章　まとめ…… 256
第1節　縄文時代…… 256
第2節　弥生時代…… 258
第3節　古墳・奈良・平安時代…… 260
第4節　中世…… 262
1　屋代城とその時期…… 262
2　粘土貼り土坑…… 268
3　地下式坑…… 269
4　掘立柱建物跡状遺構…… 269
5　遺物…… 271
6　地割と遺構…… 273
第5節　その他…… 275
1　土坑…… 275
2　溝…… 275
終章　むすび…… 276

挿　図　目　次

第1図　調査区呼称方法概念図……2
第2図　基本土層図……3
第3図　遺跡周辺地形図……9
第4図　屋代B遺跡周辺遺跡分布図…… 14
第5図　屋代B遺跡全体図…… 20
第6図　土坑実測図…… 22
第7図　土坑出土遺物実測拓影図(1)…… 24
第8図　土坑出土遺物実測拓影図(2)…… 26
第9図　土坑出土遺物拓影図(3)…… 28
第10図　土坑出土遺物実測拓影図(4)…… 29
第11図　遺構外出土遺物拓影図(1)…… 31
第12図　遺構外出土遺物拓影図(2)…… 33
第13図　遺構外出土遺物拓影図(3)…… 34
第14図　遺構外出土遺物拓影図(4)…… 35
第15図　遺構外出土遺物拓影図(5)…… 36
第16図　遺構外出土遺物実測拓影図(6)…… 37
第17図　土製品・石器実測図…… 38
第18図　石器実測図(1)…… 39

第 19 図　石器実測図(2)…… 40
第 20 図　第 1 号住居跡実測図…… 44
第 21 図　第 1 号住居跡炉跡実測図…… 45
第 22 図　第 1 号住居跡出土遺物実測拓影図(1)…… 46
第 23 図　第 1 号住居跡出土遺物拓影図(2)…… 47
第 24 図　第 1 号住居跡出土遺物実測拓影図(3)…… 48
第 25 図　第 2 号住居跡実測図…… 49
第 26 図　第 2 号住居跡出土遺物実測拓影図…… 50
第 27 図　第 4 号住居跡実測図…… 51
第 28 図　第 4 号住居跡炉跡実測図…… 52
第 29 図　第 4 号住居跡出土遺物実測拓影図…… 53
第 30 図　第 9 号住居跡実測図…… 55
第 31 図　第 9 号住居跡炉跡実測図…… 56
第 32 図　第 9 号住居跡出土遺物実測図(1)…… 57
第 33 図　第 9 号住居跡出土遺物実測拓影図…… 58
第 34 図　第 9 号住居跡出土遺物実測図(3)…… 59
第 35 図　第16号住居跡実測図…… 60
第 36 図　第16号住居跡出土遺物実測拓影図…… 61
第 37 図　遺構外出土遺物拓影図(1)…… 63
第 38 図　遺構外出土遺物実測拓影図(2)…… 64
第 39 図　第10号住居跡実測図…… 67
第 40 図　第10号住居跡出土遺物実測図…… 68
第 41 図　第11号住居跡実測図…… 70
第 42 図　第11号住居跡カマド実測図…… 71
第 43 図　第11号住居跡出土遺物実測図(1)…… 72
第 44 図　第11号住居跡出土遺物実測図(2)…… 73
第 45 図　第11号住居跡出土遺物実測図(3)…… 74
第 46 図　第12号住居跡実測図…… 76
第 47 図　第12号住居跡カマド実測図…… 77
第 48 図　第12号住居跡出土遺物実測図…… 77
第 49 図　第13号住居跡カマド実測図…… 78
第 50 図　第13号住居跡実測図…… 79
第 51 図　第13号住居跡出土遺物実測図(1)…… 81
第 52 図　第13号住居跡出土遺物実測図(2)…… 82
第 53 図　第17号住居跡実測図…… 84
第 54 図　第17号住居跡出土遺物実測図…… 85
第 55 図　第18号住居跡カマド実測図…… 85
第 56 図　第18号住居跡実測図…… 86
第 57 図　第18号住居跡出土遺物実測図…… 87
第 58 図　第19号住居跡出土遺物実測図…… 88
第 59 図　第19号住居跡実測図…… 89
第 60 図　第212号土坑実測図……90
第 61 図　第212号土坑出土遺物実測図……90
第 62 図　第 3 号住居跡実測図…… 92
第 63 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(1)…… 93
第 64 図　第 3 号住居跡出土遺物実測図(2)…… 94
第 65 図　第15号住居跡実測図…… 96
第 66 図　第15号住居跡出土遺物実測図…… 97
第 67 図　第 7 号住居跡出土遺物実測図…… 98
第 68 図　第 7 号住居跡実測図…… 99
第 69 図　第 5 号住居跡実測図……100
第 70 図　第 6 号住居跡出土遺物実測図……101
第 71 図　第 6 号住居跡実測図……102
第 72 図　第 8 号住居跡実測図……104
第 73 図　第14号住居跡実測図……106
第 74 図　遺構外出土遺物実測図……107
第 75 図　第383・387号土坑リン濃度分布図……110
第 76 図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－１）……112
第 77 図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－２）……113
第 78 図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－３）……114
第 79 図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－４）……115
第 80 図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－５）……116

第81図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－１）……119
第82図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－２）……120
第83図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－３）……121
第84図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－４）……122
第85図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－５）……123
第86図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－６）……124
第87図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－７）……125
第88図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－８）……126
第89図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－９）……127
第90図　土坑実測図（粘土貼り土坑－１）……129
第91図　土坑実測図（粘土貼り土坑－２）……130
第92図　土坑実測図（粘土貼り土坑－３）……131
第93図　第１号地下式坑実測図……133
第94図　第２号地下式坑実測図……134
第95図　第３号地下式坑実測図……136
第96図　第４号地下式坑実測図……137
第97図　第５号地下式坑実測図……139
第98図　第１号堀跡実測図(1)……141
第99図　第１号堀跡実測図(2)……143
第100図　第２号堀跡実測図……145
第101図　第３～６号堀跡実測図……146
第102図　第３・４号堀跡実測図……147
第103図　第５・６号堀跡実測図……149
第104図　中世遺物実測図(1)……151
第105図　中世遺物実測図(2)……152
第106図　中世遺物実測図(3)……153
第107図　中世遺物実測図(4)……154
第108図　中世遺物実測図(5)……155
第109図　中世遺物実測図(6)……156
第110図　中世遺物実測図(7)……157
第111図　中世遺物実測図(8)……158
第112図　中世遺物実測図(9)……159
第113図　中世遺物実測図(10)……160
第114図　中世遺物実測図(11)……161
第115図　中世遺物実測図(12)……162
第116図　中世遺物実測図(13)……163
第117図　中世遺物実測図(14)……164
第118図　中世遺物実測図(15)……165
第119図　中世遺物実測図(16)……166
第120図　金属製品実測図(1)……177
第121図　金属製品実測図(2)……178
第122図　貨幣拓影図(1)……179
第123図　貨幣拓影図(2)……180
第124図　貨幣拓影図(3)……181
第125図　貨幣拓影図(4)……182
第126図　貨幣拓影図(5)……183
第127図　貨幣拓影図(6)……184
第128図　貨幣拓影図(7)……185
第129図　石塔実測図(1)……192
第130図　石塔実測図(2)……193
第131図　石塔実測図(3)……194
第132図　石臼実測図……195
第133図　石製品・砥石実測図(1)……197
第134図　砥石実測図(2)……198
第135図　砥石・土製品実測図(3)……199
第136図　南北朝期要図……202
第137図　土坑実測図（その他－１）……214
第138図　土坑実測図（その他－２）……215
第139図　土坑実測図（その他－３）……216
第140図　土坑実測図（その他－４）……217
第141図　土坑実測図（その他－５）……218
第142図　土坑実測図（その他－６）……219
第143図　土坑実測図（その他－７）……220
第144図　土坑実測図（その他－８）……221
第145図　土坑実測図（その他－９）……222
第146図　土坑実測図（その他－10）……223
第147図　土坑実測図（その他－11）……224
第148図　土坑実測図（その他－12）……225
第149図　土坑実測図（その他－13）……226
第150図　土坑実測図（その他－14）……227
第151図　土坑実測図（その他－15）……228
第152図　土坑実測図（その他－16）……229

第153図　土坑実測図（その他－17）……230
第154図　土坑実測図（その他－18）……231
第155図　土坑実測図（その他－19）……232
第156図　土坑実測図（その他－20）……233
第157図　土坑実測図（その他－21）……234
第158図　土坑実測図（その他－22）……235
第159図　土坑実測図（その他－23）……236
第160図　土坑実測図（その他－24）……237
第161図　土坑実測図（その他－25）……238
第162図　第１・２号溝実測図……240
第163図　第３・５号溝実測図……241
第164図　第６・７号溝実測図……242
第165図　第８号溝実測図……243
第166図　第９号溝実測図……244
第167図　第10号溝実測図……245
第168図　第11・12号溝実測図……246
第169図　第16号溝実測図……247
第170図　第15・17・18号溝実測図……248
第171図　第19・20号溝実測図……249
第172図　第21・22号溝実測図……250
第173図　第23・33号溝実測図……251
第174図　第29号溝実測図……252
第175図　第32号溝実測図……253
第176図　第30・31号溝実測図……255
第177図　縄文時代の屋代Ｂ遺跡……257
第178図　弥生時代の屋代Ｂ遺跡……259
第179図　古墳・奈良・平安時代の屋代Ｂ遺跡……261
第180図　中世の屋代Ｂ遺跡……263
第181図　第Ⅰ期の屋代城……265
第182図　第Ⅱ期の屋代城……266
第183図　第Ⅲ期の屋代城……267
第184図　掘立柱建物跡状遺構(1)……270
第185図　掘立柱建物跡状遺構(2)……271
第186図　遺跡周辺地籍図……274

表　目　次

表１　屋代Ｂ遺跡周辺遺跡一覧表…… 15
表２　土坑一覧表(1)縄文時代…… 21
表３　出土遺物解説表…… 41
表４　遺構外出土遺物出土位置一覧表(1)…… 41
表５　遺構外出土遺物出土位置一覧表(2)…… 65
表６　第10号住居跡出土遺物解説表…… 68
表７　第11号住居跡出土遺物解説表…… 71
表８　第12号住居跡出土遺物解説表…… 77
表９　第13号住居跡出土遺物解説表…… 80
表10　第17号住居跡出土遺物解説表…… 83
表11　第18号住居跡出土遺物解説表…… 87
表12　第19号住居跡出土遺物解説表…… 90
表13　土坑一覧表(2)古墳時代…… 91
表14　第212号土坑出土遺物解説表……91
表15　第３号住居跡出土遺物解説表…… 94
表16　第15号住居跡出土遺物解説表…… 97
表17　第７号住居跡出土遺物解説表…… 98
表18　第６号住居跡出土遺物解説表……103
表19　遺構外出土遺物解説表……107
表20　土坑一覧表(3)墓坑及び墓坑と思われる土坑……111
表21　土坑一覧表(4)墓坑の可能性がある土坑……117
表22　土坑一覧表(5)粘土貼り土坑……128
表23　中世遺物解説表……167
表24　金属製品解説表……186
表25　石塔・石臼解説表……196
表26　石製品・砥石解説表……200
表27　土坑一覧表(6)その他の土坑……203
表28　溝一覧表……239

写真図版目次

ＰＬ　１　調査前全景・内郭全景
ＰＬ　２　調査終了時全景
ＰＬ　３　調査前・伐開風景（昭和58年度）
ＰＬ　４　調査前全景（昭和59年度）
ＰＬ　５　発掘前全景
ＰＬ　６　第１号・９号住居跡
ＰＬ　７　第４号・16号住居跡
ＰＬ　８　第11号・12号住居跡

ＰＬ　9　第11号住居跡土層・遺物出土状況
ＰＬ　10　第13号・17号住居跡
ＰＬ　11　第18号・19号住居跡
ＰＬ　12　第14号・15号住居跡
ＰＬ　13　第７号・８号住居跡
ＰＬ　14　第174号土坑遺物出土状況
第１号住居跡Ｐ７遺物出土状況
ＰＬ　15　第11号住居跡遺物出土状況
第17号住居跡カマド
ＰＬ　16　第28号・34号・40号土坑
ＰＬ　17　第83号土坑・土層・灰層
ＰＬ　18　第95号土坑，第40号・41号土坑灰層
ＰＬ　19　第190号土坑・灰層，第218号土坑
ＰＬ　20　第278号土坑・遺物・炭化籾出土状況
ＰＬ　21　第295号土坑，第308号土坑・土層
ＰＬ　22　第333号・334号土坑，第387号土坑・土壌サンプリング
ＰＬ　23　第365号土坑，第367号土坑・土層
ＰＬ　24　第179号・180号・183号土坑
ＰＬ　25　第186号・189号・192Ａ号・Ｂ号土坑
ＰＬ　26　第194号土坑・土層，第195号土坑
ＰＬ　27　第198号土坑，第321号土坑・土層
ＰＬ　28　第325号土坑・土層，第326号土坑
ＰＬ　29　第340号土坑・土層，第341号土坑
ＰＬ　30　第354号土坑・土層，第381号土坑
ＰＬ　31　第99号土坑，第193号土坑・土層
ＰＬ　32　第203号土坑土層，第219号土坑・土層
ＰＬ　33　第277号土坑・粘土，第283号土坑
ＰＬ　34　第267号土坑遺物出土状況，第334号土坑・土層
ＰＬ　35　第１号地下式坑・土層
ＰＬ　36　第２号地下式坑
ＰＬ　37　第３号地下式坑・竪坑部土層
ＰＬ　38　第４号地下式坑
ＰＬ　39　第５号地下式坑
ＰＬ　40　第１号堀跡
ＰＬ　41　第１号堀跡Ｄ－Ｄ′土層・落とし穴
ＰＬ　42　第２号堀跡・Ａ－Ａ′土層
ＰＬ　43　第３号堀跡
ＰＬ　44　第４号堀跡・遺物出土状況
ＰＬ　45　第５号堀跡・Ｆ－Ｆ′土層
ＰＬ　46　第１号・６号堀跡，第６号堀跡遺物出土状況
ＰＬ　47　第１号堀跡調査風景，第３号堀跡遺物出土状況
ＰＬ　48　第４号・５号・６号堀跡遺物出土状況
ＰＬ　49　出土遺物(1)，縄文式土器・弥生式土器
ＰＬ　50　出土遺物(2)，弥生式土器・土師器
ＰＬ　51　出土遺物(3)，土師器
ＰＬ　52　出土遺物(4)，土師器・須恵器
ＰＬ　53　出土遺物(5)，土師器
ＰＬ　54　出土遺物(6)，土師器・須恵器
ＰＬ　55　出土遺物(7)，土製品
ＰＬ　56　出土遺物(8)，石器・剥片
ＰＬ　57　出土遺物(9)，石器・石製品
ＰＬ　58　出土遺物(10)，輸入磁器
ＰＬ　59　出土遺物(11)，陶磁器－１
ＰＬ　60　出土遺物(12)，陶磁器－２
ＰＬ　61　出土遺物(13)，陶器・土器
ＰＬ　62　出土遺物(14)，内耳土器
ＰＬ　63　出土遺物(15)，土師質土器－１
ＰＬ　64　出土遺物(16)，土師質土器－２
ＰＬ　65　出土遺物(17)，宝篋印塔・宝塔
ＰＬ　66　出土遺物(18)，五輪塔
ＰＬ　67　出土遺物(19)，石製品
ＰＬ　68　出土遺物(20)，貨幣－１
ＰＬ　69　出土遺物(21)，貨幣－２
ＰＬ　70　出土遺物(22)，貨幣－３
ＰＬ　71　出土遺物(23)，金属製品－１
ＰＬ　72　出土遺物(24)，金属製品－２

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

住宅・都市整備公団は，竜ヶ崎市の北部台地上に竜ヶ崎ニュータウンの建設を進めている。これは，首都圏における膨大な住宅用地の需要に対して，住宅用地を大量に供給すると共に，健全な市街地の形成を図り，さらに，地域内に就業の場を設けることにより，居住者の地元定着を意図している。竜ヶ崎ニュータウンの建設は，住宅用地の供給だけではなく，竜ヶ崎市の調和ある発展をも併せて目指しているのである。

この竜ヶ崎ニュータウン建設計画は，当初日本住宅公団によって計画されたもので,「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として昭和46年1月に市街地開発事業に関する都市計画が決定され，その事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称した。その後，昭和51年4月に設立された宅地開発公団茨城開発局が，日本住宅公団に代わって事業を引き継いだ。同56年10月1日には，宅地開発公団と日本住宅公団の統合による「住宅・都市整備公団」の発足に伴い，従来の契約によって生じた権利・義務は，そのまま新公団に継承され，今日に至っている。

開発面積は，北竜台で326.6ha，龍ヶ岡で344.9haの計671.5haである。その現況は，北竜台においては山林原野が約70%，耕地が約24%を占め，龍ヶ岡においては山林原野が約50%，耕地が約40%を占めている。

茨城県教育委員会は，昭和45年に実施した埋蔵文化財分布調査の結果に基づき，開発地域内に所在する22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため，地元竜ヶ崎市教育委員会と協議を重ねた。その後，昭和51年7月に再度実施した分布調査によって7遺跡，昭和55年5月に2遺跡，昭和56年5月には工業団地予定地内で2遺跡,昭和57年10月に1遺跡を各々追加し，北竜台地区で17遺跡，龍ヶ岡地区で17遺跡となった。県教育委員会は，これ等34遺跡について関係機関と再度協議を行った。その結果，31遺跡については現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は，昭和52年4月,「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を当時の宅地開発公団と締結し，竜ヶ崎ニュータウン建設計画区域内の埋蔵文化財発掘調査を継続して実施して来た。

昭和59年度の発掘調査遺跡は，屋代B遺跡・十三塚遺跡・尾坪台遺跡・南三島遺跡5区・同3区であるが，この中で，南三島遺跡3区を除く4遺跡について，発掘調査を終了した。

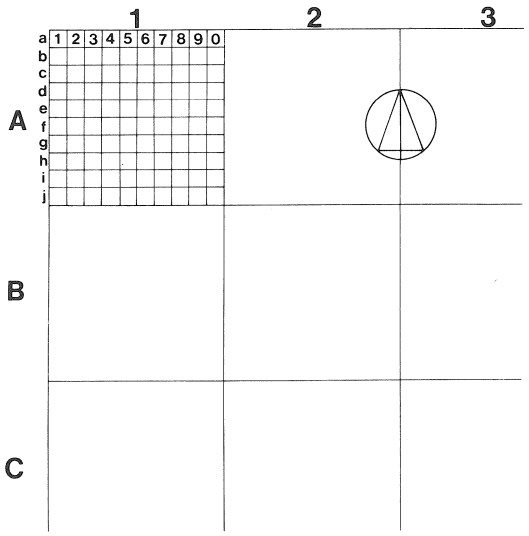
第２節　調査方法

１　調査区設定

屋代Ｂ遺跡の調査対象面積は，昭和58年度が6,964㎡，昭和59年度が11,350㎡である。

当遺跡の地区設定は，昭和54・55両年度にまたがって調査された屋代Ａ遺跡の地区設定時に同時に行われたもので，同一の地区割がなされている。重複を避け，以下に詳述する。

日本平面直角座標第IX系Ｘ座標－8,900ｍ，Ｙ座標＋34,100ｍを基準点とし，その基準点を中心に40ｍ方眼を設定し，この40ｍ四方の区域を大調査区（大グリッド）とした。さらに，大調査区を東西・南北方向に各10等分して４ｍ四方の小調査区（グリッド）を設定した。すなわち，40ｍ四方の大調査区内に，４ｍ四方の小調査区を100個設定したわけである。



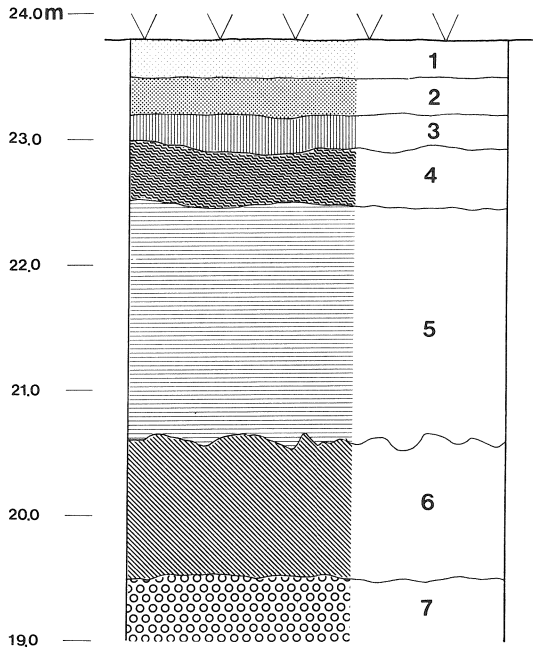
第１図　調査区呼称方法概念図

大調査区は，基準点から北へ160ｍ，西へ200ｍの点を起点とし，南へ大文字のアルファベットで「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」……，東へ「１」・「２」・「３」……とし，Ａ１区・Ｂ２区とした。小調査区は，南へ小文字のアルファベットで「ａ」・「ｂ」・「ｃ」……「ｉ」・「ｊ」とし，東へ「１」・「２」・「３」……「９」・「０」と表した。各調査区の名称は，大調査区と小調査区を合わせて「Ａ１ａ$_1$」・「Ｂ２ｂ$_2$」のように表記した。

２　遺跡の基本層序

当遺跡の基本層序は，第２図のとおりである。１は表土層で，耕作土となっている。全体的に

30cm内外の厚さであるが，根菜類の栽培が行われた場所では，60～70cmの厚さを有している。また，山林であった場所には，当然のことながらこの層は認められない。2は漸移層で，暗褐色または褐色を呈する。3は，いわゆるソフトローム層である。4はハードローム上位のブロック化した層である。5はハードローム層で，色調等で3層に分けることが可能である。6は，常総粘土層と呼ばれているものである。7は，竜ヶ崎砂礫層である。



第2図　基本土層図

地表面はほぼ平担であるが，調査範囲内での標高を比べると，北東側が南西側と比較してやや高く，200m離れた地点で40cm内外の差が認められる。各地点における土層もこれに対応しており，6の上面は同じ地点で40cm内外の差を示している。

遺構の掘り込みは，深い場合でも5の上位までである。しかし，地下式坑・堀の落し穴等の場合には，6の内部または7にまで及んでいる。

3　遺構確認

屋代B遺跡の調査対象面積は，当初昭和58年度分として13,693m²が示された。調査に先立ち，担当者間で遺構確認の方法について協議を行った。その結果，城館跡という遺跡の性格を考慮して，全体の20%の割合でトレンチによる試掘を実施することとした。トレンチの方向は，内郭と推定される土塁と直交させ，堀跡の検出を目ざした。

試掘の結果，堀・溝・住居跡・土坑等と思われる落ち込みが多数検出された。その分布状況から，場所によって遺構の密集の度合には差が認められるものの，ほぼ全域に遺構が分布していると判断されたこと，遺構確認面まで40～60cmと比較的深いことの２点を考慮して，重機により調査エリア全域の表土除去を実施し，その後遺構の確認調査を進めた。

遺構確認調査の結果，多数の遺構が検出され，その数から判断して，昭和58年度中に13,693m²の調査を終了させることは困難であると思われた。そこで関係諸機関で協議を行い，調査エリアを二つに分け，6,964m²を58年度，6,729m²を59年度に実施することになった。また，後に59年度調査面積に4,621m²が追加された。

4　遺構調査

住居跡の調査は，長（主）軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設けて掘り込む四分割法で実施し，地区名を北から時計回りで１～４区とした。土坑の調査は二分割法を用い，分割の方向は長軸によるものとした。しかし，長軸と短軸の長さの差が極めて大きい場合は，短軸で二分割した。地区名は，住居跡に準じた。堀・溝は，長さに応じて適宜数か所に土層観察用ベルトを設けた。

土層については，色調・含有物・粘性・しまり・吸水性等を総合的に観察して分類した。遺物の取り上げについては，住居跡・土坑の場合は各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳や図面に記録して収納した。堀・溝の場合には，区名に代わってグリッド名を用い，他は住居跡・土坑と同様とした。

遺構の観察では，床・壁・柱穴や内部施設等の状態に特に注意をした。平面実測は，座標北をもとにした水糸方眼地張測量で行った。土層断面・遺構断面実測は，標高を測って水糸を水平にセットし，その水糸を基準にして実測した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→同図作成→遺物出土状況写真撮影→同図作成→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成を基本とした。図面や写真等に記録できない事項はその都度野帳等に記録し，これを調査日誌や遺構カードに整理した。

第３節　調査経過

屋代Ｂ遺跡の昭和58・59年度の発掘調査は，昭和58年７月１日に開始された。以後，翌59年６月１日から７月24日まで十三塚遺跡の調査のため一時中断したが，昭和60年１月16日まで継続された。以下にその経過の概要を記述する。

昭和58年度

7　月　１日から作業を開始し，プレハブ倉庫建設・テント設営・上物除去・基準杭打ち等，発掘準備作業を進めた。25日には調査エリア全体の清掃を実施し，全景写真撮影後トレンチ発掘を開始した。

8　月　トレンチ発掘が進むにしたがい，堀・住居跡・土坑等の落ち込みが確認された。特に南西部Ｆ2区・Ｇ2区と東部Ｃ７区では，極めて濃密であることが明らかになった。月末になって，北東側に残された部分の上物除去を開始した。

9　月　上旬には，遺構の分布状態や表土の厚さ等について，担当者間で協議を行い，表土除去作業を重機によって実施することにした。中旬にはトレンチ発掘が終了し，19日から重機による表土除去作業を開始した。下旬には，降雨のため現場作業が遅れがちであった。29日から，重機による表土除去作業と平行して残土除去・遺構確認作業を開始した。これに伴って，堀跡・土坑等が次々に確認された。

10　月　上旬から表土除去作業・遺構確認作業と平行して，グリッド杭打ち作業を行い，小調査区を設定した。遺構確認作業の進展に伴い，Ｆ２区・Ｇ２区の堀に囲まれた部分が特に土坑が多く，その外側は土坑が少いことがわかった。中旬には，遺構確認略図の作成を始めた。下旬には，一部の堀がエリア外まで延びていることが判明した。月末には，表土除去作業が終了した。

11　月　４日までに，残土除去作業・遺構確認作業が終了し，同中旬に全景写真を撮影した。７日から，住居跡・土坑等の遺構調査を開始した。11日から，堀の調査に着手した。

12　月　前月に引き続き遺構調査を行い，住居跡は第８号まで，土坑は第169号まで，溝は第８号まで調査を実施した。

1　月　寒さで土壌の凍結がひどいので，エリア北東部のＡ５区・Ｂ４区・Ｂ５区の調査を先行させることとし，第９号住居跡，第170号土坑の調査を開始した。19日にはこの地方では珍しい大雪が降り，調査の進行に支障をきたした。

2　月　１日には再び雪に見舞われた。除雪作業を実施する一方，遺構調査を進めた。下旬には，第13号住居跡の覆土から多量の焼土が検出され，第216号土坑は地下式坑であること

が判明した。

3　月　59年度調査面積に4,621㎡が追加されることになった。その中で，４月早々に発掘調査を実施する北側の部分について，８日・９日の両日にわたり，上物除去を行った。13日には，第16号住居跡の調査を終え，同時に堀の清掃・全景写真撮影・平面実測を行った。14日・15両日にわたって，上物除去を実施した部分の表土除去を行い，23日まで遺構確認作業を実施した。同日，58年度分の調査を終了し，器材を片付けて現場を閉鎖した。58年度中に調査を実施した遺構は，住居跡が第１号から16号まで，土坑が第１号から238号まで，溝が第１号から13号（４号と７号は継続）までである。

昭和59年度

4　月　11日に調査再開の準備を行い，翌12日から遺構調査を開始し，エリア北部のＢ３区・Ｂ４区の堀コーナー部，及びその周辺を中心に掘り込みを進めた。また，下旬から住居跡２軒の調査に着手した。

5　月　堀の覆土を重機で除去することにし，７日から11日まで実施した。覆土内の遺物を採取するため，残土置場に作業員を配置し，排出された土砂をならしながら遺物の検出に努めた。月末までに調査を終え，十三塚遺跡調査のため，現場を閉鎖した。

7　月　10日から，北西側追加分の表土除去作業が開始された。同日，仮設道路がこの表土除去範囲の一部にかかることが明らかになったので，この部分の表土除去・遺構調査を先行させることとし，土坑５基・溝５条を調査した。16日には仮設道路部分の遺構調査が終了し，17日には表土除去作業も終了した。25日から，現場再開諸準備を行った。

8　月　１日から遺構確認作業を実施し，10日には全景写真撮影を行った。22日から，Ｆ２区・Ｇ２区の堀と土坑から遺構調査を開始した。また，この日から竜ヶ崎二高地歴クラブの体験学習が行われた。

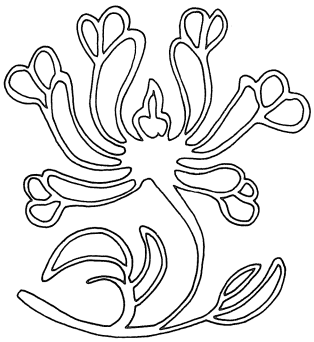
9　月　前月に引続き，堀と土坑の調査を継続した。25日から，堀の覆土を除去するため，重機を導入した。この頃から，堀の中から五輪塔が発見されるようになった。

10　月　調査エリア南部のＦ２区・Ｇ２区の堀に囲まれた部分が，墓域である可能性が高まった。また，25日には南側の堀に切り合いが確認された。このことから，屋代城が少なくとも２期にわたることが明らかになった。

11　月　引き続き，堀と土坑の調査を継続する。７日から，各堀の平面実測の準備を始めた。22日から，平面実測を開始した。

12　月　７日に，堀関係の実測を終了した。その後，溝・土坑等の調査を進める一方，器材を片付け，現場閉鎖の準備を進めた。

1　　月　7日から16日まで，補足調査を実施した。その後，3月13日に航空写真を撮影し，屋代Ｂ遺跡の59年度の発掘調査を終了した。59年度中に調査を実施した遺構は，住居跡が第17号から19号まで，土坑が第239号から409号まで，溝が第14号から33号までである。



第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

屋代Ｂ遺跡は，茨城県竜ヶ崎市八代町字二ッ堂後2445番地ほかに所在する。

竜ヶ崎市は茨城県の南部に位置し，東は稲敷郡江戸崎町・同郡新利根村，南は同郡河内村・北相馬郡利根町，西は取手市・北相馬郡藤代町・筑波郡伊奈村，北は稲敷郡茎崎町・同郡牛久町に接する。東西約12㎞，南北約９㎞，面積約75㎢で，人口は48,945人（昭和61年１月１日現在）を数える。市街地は小貝川によって形成された自然堤防上に営まれており，国鉄常磐線佐貫駅から東へ延びる関東鉄道竜ヶ崎線の終点である竜ヶ崎駅付近から東へ約２㎞にわたって細長く広がっている。近年，周囲の水田埋め立てや道路建設に伴い，市街地が徐々に広まりつつある。

竜ヶ崎市は，周辺の取手市・藤代町・牛久町等とともに東京の通勤圏内にある。事実，朝晩の通勤・通学時には，常磐線の上りの各列車は東京方面への通勤者のため激しい混雑を見せている。また，かつては土浦市の商業圏に含まれていたが，千葉県の常磐線沿いの諸都市の商業圏の拡大に伴い，千葉県側との結び付きが強まりつつあると見られる。

竜ヶ崎市付近は稲敷台地の南縁にあたり，至るところに浸食谷が刻まれて複雑な地形を呈している。市域は，南部（市街地の東側から西北西にかけて）の低地と北部（市街地の東北東から北西にかけて）の台地とに大別できる。前者は，鬼怒川と小貝川によって形成された標高３～６ｍの沖積地であり，水田に利用されている。後者は，前述した標高20～27ｍの稲敷台地であり，平地林・畑に利用されている。両者の境界は，比高15～20ｍの急崖になっている。

屋代Ｂ遺跡は，竜ヶ崎市街地の北東約２㎞の台地上に所在する。土塁を除いた遺跡内の標高は23～24ｍを測り，ほぼ平坦である。遺跡の北東から北にかけて，同市八代町から別所町に達する幅150～200ｍの細長い浸食谷が入り込んでいる。このため，遺跡の所在する台地は，南北を低地に挟まれた状態を示している。台地と低地の境界は急崖になっており，その比高は北で17ｍ内外，南で19ｍ内外を測る。台地上の平坦部は狭く，300ｍ～350ｍに過ぎない。また，西側は平坦面が続いているものの，東側には浸食谷から分れた支谷が南に向って入り込んでいるため，この部分の平坦面の幅は20～30ｍとかなり狭まっている。この支谷の谷底と台地上面との比高は，支谷の中ほどで10～14ｍ，奥で約５ｍを測る。

現在の八代町の集落は，台地南縁に沿った微高地上に形成されており，遺跡の南側の崖下から東方へ1.6㎞にわたって細長く延びている。遺跡の北側へ入り込んだ浸食谷は，八代町の集落とさらに東方の長峰町の集落との間に開口している。

原
中道
城内
二ノ谷後
寺谷
寺久保
天神前
花見堂
西方
南下
天久保
西方前下
大道
道地
新道
池田
白幡
新屋敷
番郷
新屋敷台
宮山
宮山下
八代町
東
東前
西谷
後久保
塩
寺向
尾坪田
富士ノ入
0
200m

第3図　遺跡周辺地形図

第２節　歴史的環境

茨城県南部，とりわけ霞ヶ浦沿岸や利根川下流域は，数多くの遺跡が所在することで知られ，中でも陸平貝塚[1]・上高津貝塚[2]・花輪台貝塚[3]等は特に著名である。

竜ヶ崎市北部台地にあっても同様である。先土器時代の石器が出土した沖餅遺跡[4]を始めとして，縄文時代早・前期の遺物が出土した廻り地Ｂ遺跡[5]，中期の赤松遺跡[6]，地点貝塚を伴う中期の南三島２区[7]と中期末から後期初頭の廻り地Ａ遺跡[8]等があり，調査・報告がなされている。弥生時代以降では，弥生時代から国分期までの集落が調査された屋代Ａ遺跡[9]・外八代遺跡[10]等がある。これらを含めて，これまでに調査・報告された遺跡から，限られた地域内であるが，その当時の様相をうかがい知ることが可能になりつつある。

当遺跡周辺は，古代には『和名抄』に見える信太郡稲敷郷に属したとされる。『常陸國風土記』の信太郡の条に，「其里西飯名社此卽筑波岳所有飯名神之別屬也」とある。中山信名は，『新編常陸國誌』の信太郡稲敷郷の条に，「倭名鈔ニ云，稲敷，按ズルニ，今ノ河内郡八代〔寺院記ニハ，社トアリ，コレハ飯名社ヨリ出タル名ナルベシ〕，貝原塚龍ヶ崎ノ邊，古ノ稲敷郷ナリ」と述べ，さらに稲敷の地名の由来を「飯名社の敷地」に，八代の地名の由来を「飯名社」によるとした（傍点筆者）。この「飯名社」については，牛久町女化の女化稲荷神社に比定する説と稲塚[11]の墳頂にまつられている小祠に比定する説がある。中山信名自身は，両論を併記しながらも，後者を支持している[12]。

中世には，この地域は小野川を境として東条・西条・河内郡に区分された。東条は小野川以南の東部で，平安末期以後大掾氏の一族が土着してこれを支配し，鎌倉中期には東条庄[13]となった。西条はほぼ小野川以北で，平安末期には信太庄[14]が成立した。東条を含むこの地には，源為義の子志田義広が土着して勢力を伸ばしたが，後に下河辺政義が南郡総地頭[15]としてこの地方を支配し，その子孫が竜ヶ崎氏を名乗った。その後，常陸守護となった八田（小田）知家の子孫が，信太庄や河内郡を含めた広い範囲の地頭職を世襲するようになった。

延元３（1338）年，北畠親房は東条浦[16]に漂着し，同年10月には神宮寺城[17]に，次いで阿波崎城[18]に拠ったが，いずれも佐竹義篤に破られ，小田城に移った。翌４（1339）年，高師冬が常陸に進み，親房等南朝方の軍と戦闘を繰り返した。この頃，竜ヶ崎周辺の諸城もこの戦乱に巻き込まれ，高井城[20]（貝原塚城）・馴馬城[21]等では数度の攻防が行われた。興国２（1341）年９月，師冬は信太庄に侵入した際に，「屋代信經ヲ部屬トシ，之ガ郷導タラシメ」[22]た。この「屋代信經」は，屋代城主と目されている。以後，屋代氏は少数の史料に散見される。

この地方における小田氏の後退に伴って，江戸崎城[23]に拠る土岐氏が勢力を伸ばした。16世紀半ば過ぎには竜ヶ崎城[24]が築かれ，土岐治英の次男胤通が城主となった[25]。天正18（1590）年，佐竹義

宣の弟芦名盛重は土岐氏を滅し，初め竜ヶ崎城に拠ったが，後江戸崎城に移り，竜ヶ崎城をその支城とした。この間，竜ヶ崎城下は，土岐・芦名両氏によって城下町として整備された[26]。竜ヶ崎城は，慶長7（1602）年 の佐竹氏の秋田転封に際して廃城となり，その後は仙台藩の伊達氏が城の近くに陣屋[27]を設けて竜ヶ崎を支配した。

竜ヶ崎市内における中世の城館跡は，12ヶ所と言われている[28]。その中で，前述の竜ヶ崎城・貝原塚城・馴馬城のほか，屋代城・若柴城・泉城については，文献・伝承が伝えられている。しかし，長峰城・七曜塚城・登城山・要害山・大月山については，まったく不明である。また，外八代遺跡の調査によって発見・調査された外八代城についても，形態的に見て中世後期と推定される以外に文献・伝承は残されていない。

註

(1) I. IIJIMA, AND C. SASAKI,「OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI」『TOKYO DAIGAKU. SCIENCE DEPARTMENT』MEMOIR VOL1. PART1）TOKYO DAIGAKU 明治16年

(2) 国指定史跡。土浦市上高津所在。
小宮 孟「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」(『第四紀研究』VOL1. 19) 1980

(3) 吉田 格・甲野 勇「花輪台貝塚」(『縄文式文化編年図集第一回』)1949

(4) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 「沖餅遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年

(5) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5 「前清水遺跡・大羽谷津遺跡・打越A遺跡・打越C遺跡・廻り地B遺跡」 茨城県教育財団 昭和56年

(6) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4 「赤松遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年

(7) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10 「南三島1・2区」 茨城県教育財団 昭和59年

(8) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7 「廻り地A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年

(9) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6 「成沢遺跡・屋代A遺跡」 茨城県教育財団 昭和57年

(10) 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2 「外八代遺跡」 茨城県教育財団 昭和55年

(11) 竜ヶ崎市八代町3903所在。塚ではなく，残丘である。

(12) 同書同条，及び墳墓稲塚の条。

(13) 『新編常陸國誌』の信太郡稲敷郷の条に,「屋代，龍ヶ崎，長峰，薄倉，貝原塚，羽原，別所，馴馬，中島，若芝等（中略）鎌倉將軍ノ比ヨリ，河内郡ニ入ル，コレヨリ東ハ東条庄ト

ナレリ」とあり，庄の範囲が推定できる。

⑭　仁平元（1151）年，平忠盛の妻藤原宗子（後の池禅尼）が，西条を美福門院に寄進して信太庄が成立した。範囲はほぼ小野川以北で，西は現在の土浦市にまで及んだ。

⑮　常陸国の府中（現在の石岡市）以南を指す。

⑯　現在の霞ヶ浦。

⑰　県指定史跡。稲敷郡桜川村神宮寺所在。

⑱　県指定史跡。稲敷郡東村阿波崎天神台所在。

⑲　国指定史跡。筑波郡筑波町小田所在。

⑳　竜ヶ崎市貝原塚町下貝原塚所在。高井城は古名。

㉑　県指定史跡。竜ヶ崎市馴馬町山王台所在。

㉒　『新編常陸國誌』の建置沿革興國２年の条。

㉓　稲敷郡江戸崎町大宿甲所在。現，江戸崎町立江戸崎小学校。

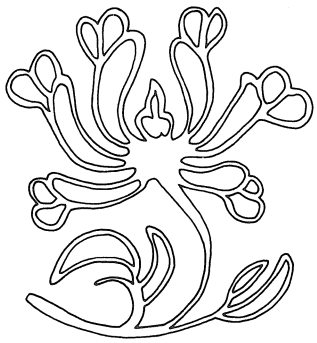
㉔　竜ヶ崎市古城所在。現，茨城県立竜ヶ崎第二高等学校。

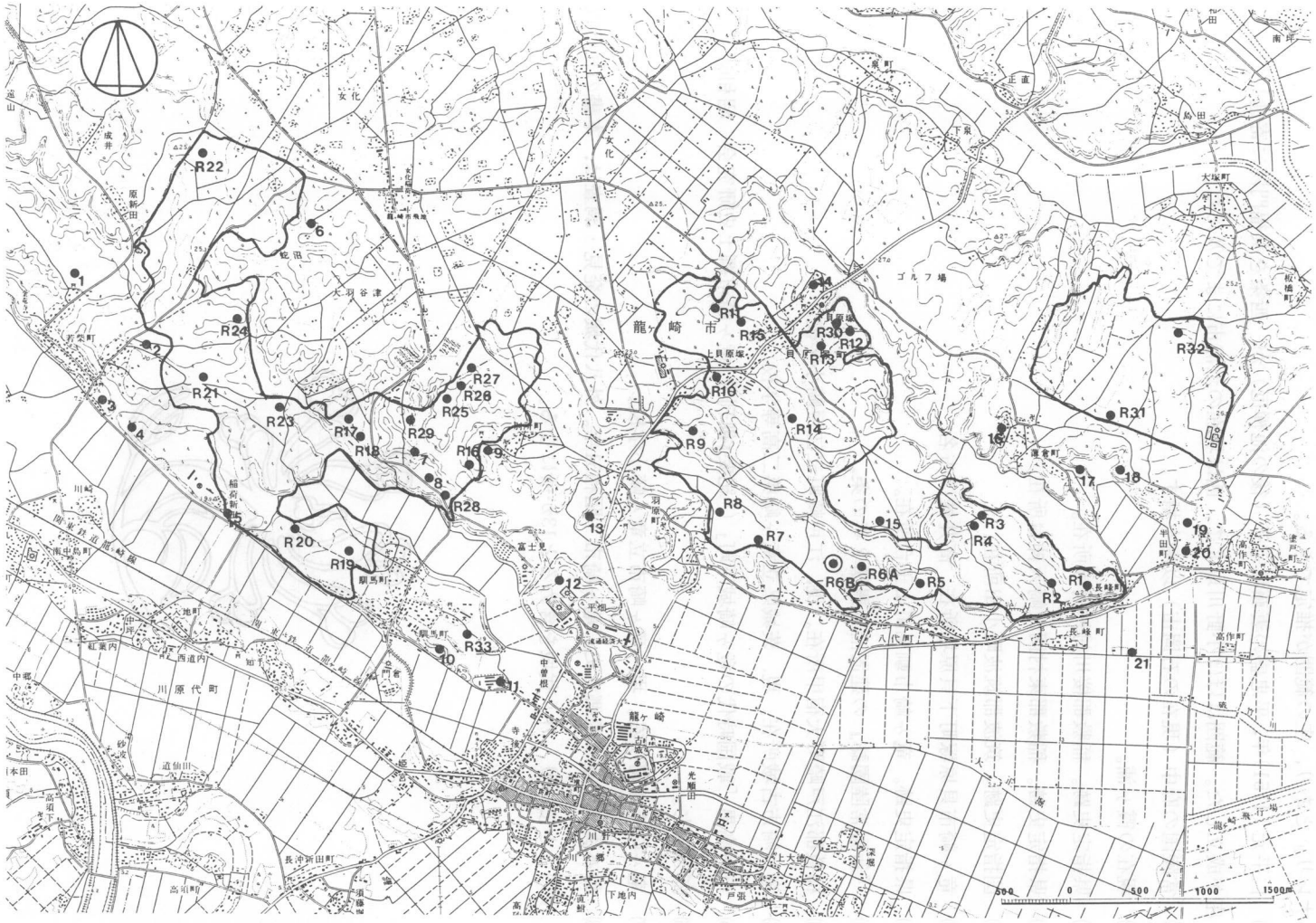
㉕　市村高男「戦国時代の竜ヶ崎城下町」（『紀要』創刊号）竜ヶ崎市郷土史研究会　昭和60年。

㉖　㉕と同じ。

㉗　竜ヶ崎市根町所在。現，竜ヶ崎市立竜ヶ崎小学校。

㉘　鈴木秀雄『竜ヶ崎郷土史』竜ヶ崎市　昭和51年。外八代城の発見・調査は，本書の刊行以後のことであり，外八代城を含めると13か所になる。





第４図　屋代Ｂ遺跡周辺遺跡分布図

表1　屋代B遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R1	長峰城跡	城館跡					○
R2	長峰古墳群	古墳群				○	
R3	十三塚塚群	塚群					○
R4	尾坪台遺跡	集落跡		○		○	
R5	外八代遺跡	集落跡・城館跡			●	●	●
R6－A	屋代A遺跡	城館跡・集落跡			●	●	●
R6－B	屋代B遺跡	城館跡・集落跡		●	●	●	●
R7	稲荷塚古墳群	古墳群				○	
R8	南三島遺跡	集落跡		●		●	●
R9	ダンゴ塚	塚					○
R10	町田塚群	塚群					●
R11	かがみ塚	塚					○
R12	高井城下城跡	城館跡・寺院跡					○
R13	前清水遺跡	集落跡・貝塚・塚群				●	●
R14	塚下遺跡	塚群・他					●
R15	町田遺跡	集落跡		●			●
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚		○			
R17	大羽谷津遺跡	集落跡				●	
R18	廻り地A遺跡	集落跡		●		●	
R19	平台遺跡	集落跡				●	
R20	成沢遺跡	集落跡				●	
R21	松葉遺跡	集落跡・塚群				●	●
R22	庚申塚遺跡	集落跡		○		○	
R23	沖餅遺跡	集落跡	●	●		●	
R24	赤松遺跡	集落跡		●		●	●
R25	打越A遺跡	集落跡		●			
R26	打越C遺跡	集落跡		●			
R27	ウツブタ遺跡	集落跡		●			
R28	仲根台塚群	塚群(1・2号)		●			●

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
R28－A	仲根台塚群	塚群(3・4号)					●
R28－B	仲根台B遺跡	集落跡		●		●	●
R29	廻り地B遺跡	集落跡		●			
R30	白蔵寺遺跡	包蔵地					
R31	薄倉古墳	塚					●
R32	稲荷峰古墳	塚					●
R33	山王台遺跡	集落跡				●	●
1	金塚遺跡	集落跡	○	○		○	
2	林遺跡	集落跡				○	
3	若柴城跡	集落跡					○
4	宿畑遺跡	集落跡				○	
5	稲荷古墳	古墳				○	
6	永山前遺跡	集落跡		○			
7	仲根台遺跡	集落跡・古墳		○		○	
8	奈戸岡古墳群	古墳群				○	
9	堂ノ下貝塚	貝塚群		○			
10	馴馬城跡	城館跡					○
11	愛宕山古墳	古墳				○	
12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡				○	
13	西花輪貝塚群	貝塚群		○			
14	貝原塚城跡	城館跡					○
15	向井原遺跡群	集落跡	○	○		○	
16	西平遺跡	集落跡		○			
17	馬込稲荷遺跡	集落跡		○			
18	要害山館跡	城館跡					○
19	半田遺跡	集落跡				○	
20	登城山館跡	城館跡					○
21	向須賀遺跡	包蔵地		○	○		

●印は発掘調査を実施した遺跡等である。

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１　遺跡の概要

当遺跡は，昭和53年まで屋代城跡と呼称されていた。一方昭和54年に，茨城県教育委員会の調査によって，当遺跡の東側に隣接する台地上に弥生時代から近世に及ぶ集落跡が確認され，同年11月から発掘調査を実施することになった。このことから，新たに確認された遺跡を隣接する屋代城跡の名をとって屋代Ａ遺跡と呼称し，当遺跡を屋代Ｂ遺跡と呼称することになった。屋代Ａ遺跡は，調査面積12,578㎡で，すでに報告書が刊行されている。屋代Ｂ遺跡（当遺跡）は，昭和58・59年度の調査面積が18,314㎡で同60年度の調査対象面積が22,503㎡である。

さて，当遺跡の昭和58・59年度の発掘調査によって検出された遺構とその内訳は次のとおりである。

住居跡　19軒

　弥生時代　５軒　　奈良・平安時代　３軒

　古墳時代　７軒　　時期不明　　４軒

土坑　426基（枝番号があるため，土坑番号は409までである）

　縄文時代　15基

　古墳時代　　1基

　中世　　106基（内，地下式坑５基）

　不明　　304基（内，掘立柱建物跡状遺構の柱穴と思われるもの24基）

溝　　31条（欠番があるため，番号は33までである）

　中世　　６条（これは堀跡である）

　不明　　25条

これらの遺構の分布状態には，ある規則性を認めることができる。住居跡は，エリア北側の谷に近い部分に位置し，土坑は３か所に特に密集している。一方，溝については，その多くが方向性を有していることを指摘することが可能である。

遺物は，遺物収納箱に78箱分である。その内容は，縄文式土器・弥生式土器・土師式土器・陶磁器とそれぞれの破片が多い。五輪塔・宝篋印塔も多数見られ，他には縄文時代の石器や中世の金属製品・貨幣等がある。

2　遺構・遺物の記載方法

本書では，遺構・遺物を記載するに際して，次のような方法を採った。

(1)　使用記号

遺構

名称	住居跡	土坑・地下式坑	溝・堀
記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ

(2)　遺構・遺物実測図中の表示

＝炉・カマド　＝灰　＝繊維土器（断面）　＝施釉部分

(3)　土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調については，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用して分類・番号化した。また，土層の含有物についても分類して記号化し，色調とともに次のように表した。

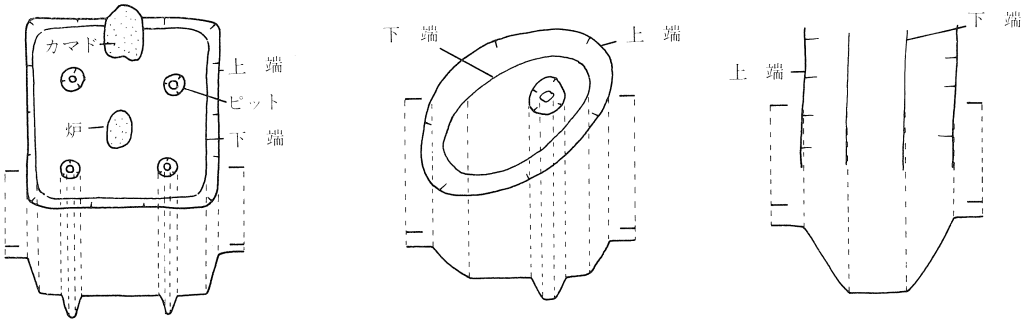
番号	土色名	色相　明度／彩度
1	明褐色	Hue　7.5ＹＲ　5/6　5/8
2	黄褐色	Hue　10ＹＲ　5/6
3	にぶい褐色	Hue　7.5ＹＲ　5/3　5/4
4	褐色	Hue　7.5ＹＲ　4/3　4/4　4/6
		Hue　10ＹＲ　3/4　4/4　4/6
5	暗褐色	Hue　7.5ＹＲ　3/3　3/4
		Hue　10ＹＲ　3/4
6	極暗褐色	Hue　7.5ＹＲ　2/3
7	黒褐色	Hue　5ＹＲ　2/1
		Hue　7.5ＹＲ　2/2　3/1　3/2
8	灰褐色	Hue　7.5ＹＲ　4/2
9	褐灰色	Hue　5ＹＲ　4/1
10	明赤褐色	Hue　2.5ＹＲ　5/8
		Hue　5ＹＲ　5/6　5/8
11	にぶい赤褐色	Hue　5ＹＲ　4/4
12	赤褐色	Hue　2.5ＹＲ　4/6　4/8
		Hue　5ＹＲ　4/6　4/8
13	暗褐色	Hue　2.5ＹＲ　3/3　3/4　3/6
		Hue　5ＹＲ　3/2　3/3　3/4　3/6
14	極暗赤褐色	Hue　2.5ＹＲ　2/2　2/3　2/4
15	橙色	Hue　2.5ＹＲ　6/8
		Hue　7.5ＹＲ　7/6　6/8
16	にぶい橙色	Hue　5ＹＲ　6/3
		Hue　7.5ＹＲ　6/4
17	浅黄橙色	Hue　7.5ＹＲ　8/3　8/4
18	灰白色	Hue　5ＹＲ　8/2
		Hue　7.5ＹＲ　8/2
19	黒色	Hue　7.5ＹＲ　1.7/1　2/1

含有物

- a　ローム粒子を含む
- b　ロームブロックを含む。（ハードローム・ソフトローム・ハードロームブロック）ロームブロック（大・中）を含む。
- B　ローム
- c　焼土粒子
- d　焼土ブロック
- D　焼土
- e　炭化粒子
- f　炭化材
- F　木炭・木炭片
- g　粘土粒子
- h　粘土ブロック
- H　粘土
- i　砂質粘土
- j　暗褐色土粒子・黒褐色土粒子・褐色土粒子・黒色土粒子
- k　暗褐色土粒子・黒褐色土粒子・褐色土粒子・黒色土粒子の各ブロック
- l　表土・耕作土
- m　灰

a　b　……少量（面積10％未満）
a・　b・　……中量（〃　10％以上30％未満）
a・・　b・・　……多量（〃　30％以上）

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



◦各遺構は，原則として縮尺二十分の一の原図を，炉・カマドは縮尺十分の一の原図をそれぞれトレースして版組し，それをさらに三分の一に縮小して掲載した。

◦長大な溝は，その規模に応じて縮尺二十分の一の原図を二分の一，四分の一，八分の一に縮小したものをトレースして版組し，それをさらに三分の一に縮小して掲載した。

◦水糸の標高は，同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し，それ以外は個々に表示した。単位はｍである。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

◦土器の実測は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

◦土器拓影図は，右側に断面を図示した。表裏双方の拓影を掲載する場合には，断面を中央に配し，左側を外面，右側を内面とした。

◦遺物は原則として実測図をトレースしたものを三分の一に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより，それ以外の縮尺を使用した場合もある。

(6) 表の見方について

土坑一覧表

番号	位置	方　向	平面形	規　模		壁面	底面	覆土	出　土　遺　物	備　考
				長さ×幅（ｍ）	深さ（cm）					

◦方向は，主軸・長軸・長径の示す方向である。長軸・長径の方向は，N－x°－Wに統一した。

◦平面形は，円形・楕円形の場合に下記の分類規準を設けて表示した。

・円形（短径：長径＝１：1.2未満のもの）

・楕円形（短径：長径＝１：1.2以上のもの）

◦規模の欄の深さは，確認面から坑底の最も深い部分までの計測値である。

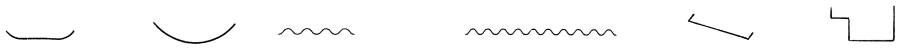
◦壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準を設け記号で表示した。

I ┐
└ 86～90°の傾き－垂直

II ┐
└ 60°～85°の傾き－外傾

◦坑底は，下記の基準を設け番号で表示した。

1　平坦　　2　皿状　　3　凸凹　　4　凸凹が激しい　　5　傾斜　　6　段状



◦覆土は，自然堆積をＮ，埋め戻されたものをＡで表示した。

◦地下式坑は土坑一覧表から除外し，文章で記述した。

溝一覧表

番号	位置	角度	断面形	規模 長さ×幅(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考

◦位置は，長大な溝については大グリッドで表示した。

◦角度の計測は土坑に準じ，角度のみを記入した。屈曲する溝では，その都度計測した。

◦長さに( )を付したのは，調査した部分の長さを示している。

◦その他の観点は，土坑一覧表の観点に準じた。

◦堀は溝一覧表から除外し，文章で記述した。

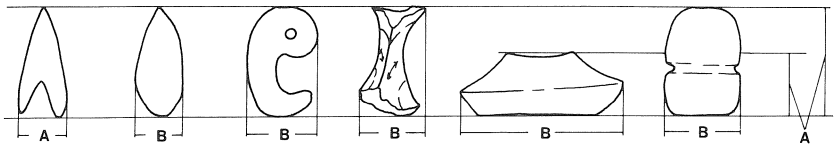
遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	特徴（器形・文様・文字等）	整形	焼成・胎土・色調	備考

番号	器種	法量	石質（部位を含む）	備考	番号	器種	法量	石質	備考

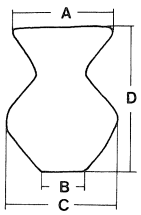
◦番号の欄には，その遺物が掲載されている図版の番号と，図版内の遺物の番号を記載した。

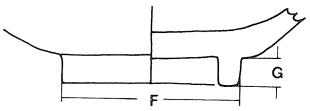
◦遺物の法量は，次のように計測し，推定値には( )を付した。



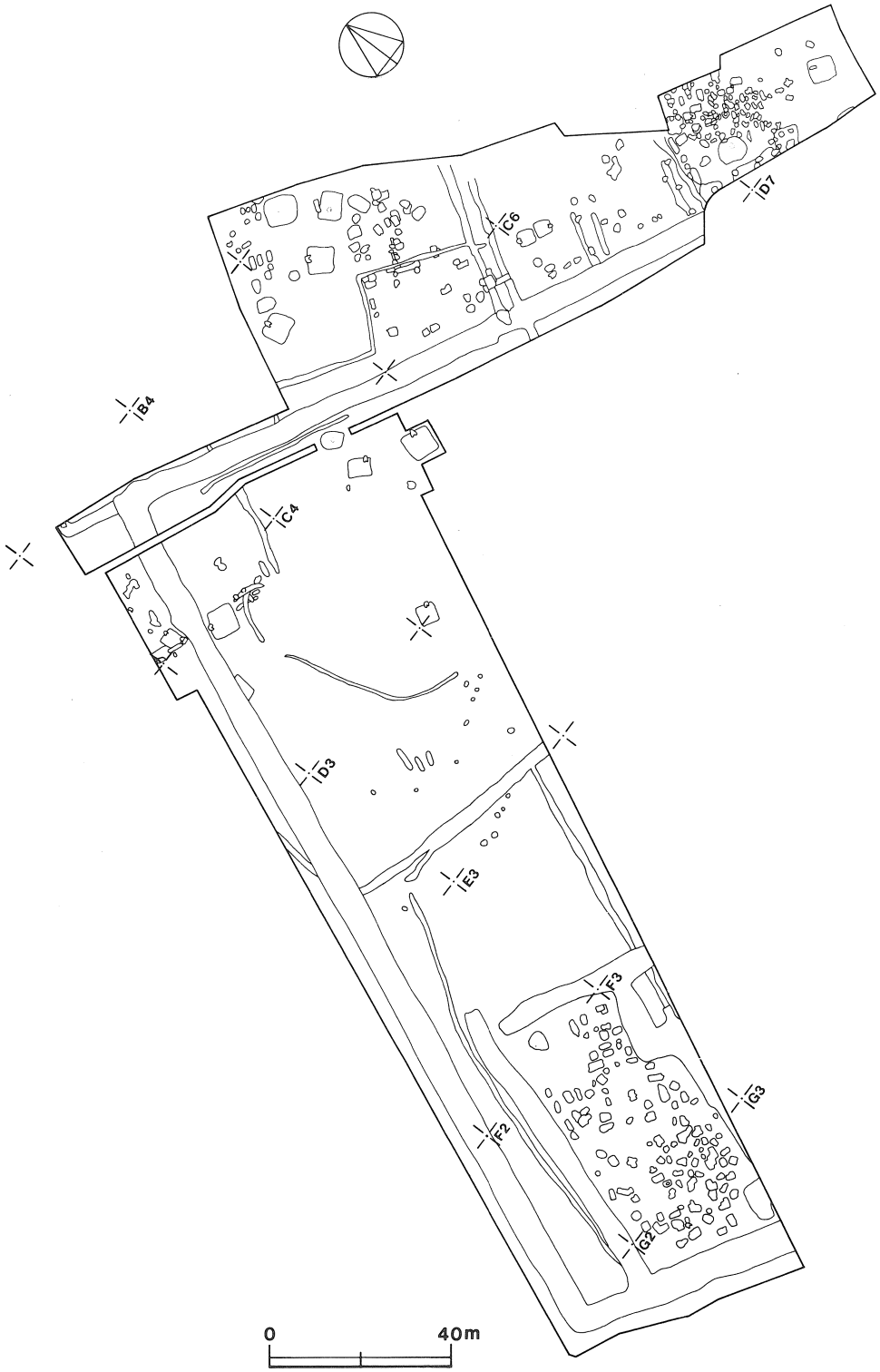
現存高 E

重　量 G





現存高 E



第５図　屋代Ｂ遺跡全体図

第２節　縄文時代

昭和58・59年度に検出された縄文時代のものと考えられる遺構は，土坑15基である。これらの土坑は，Ａ５区・Ｄ３区・Ｅ３区に集中している。この時期の遺物の多くはグリッド出土のもので，上記の各区に特に多い。

なお，土器の時期区分は,「茨城県史料，－考古資料編，先土器・縄文時代－」(茨城県　昭和54年３月）によった。

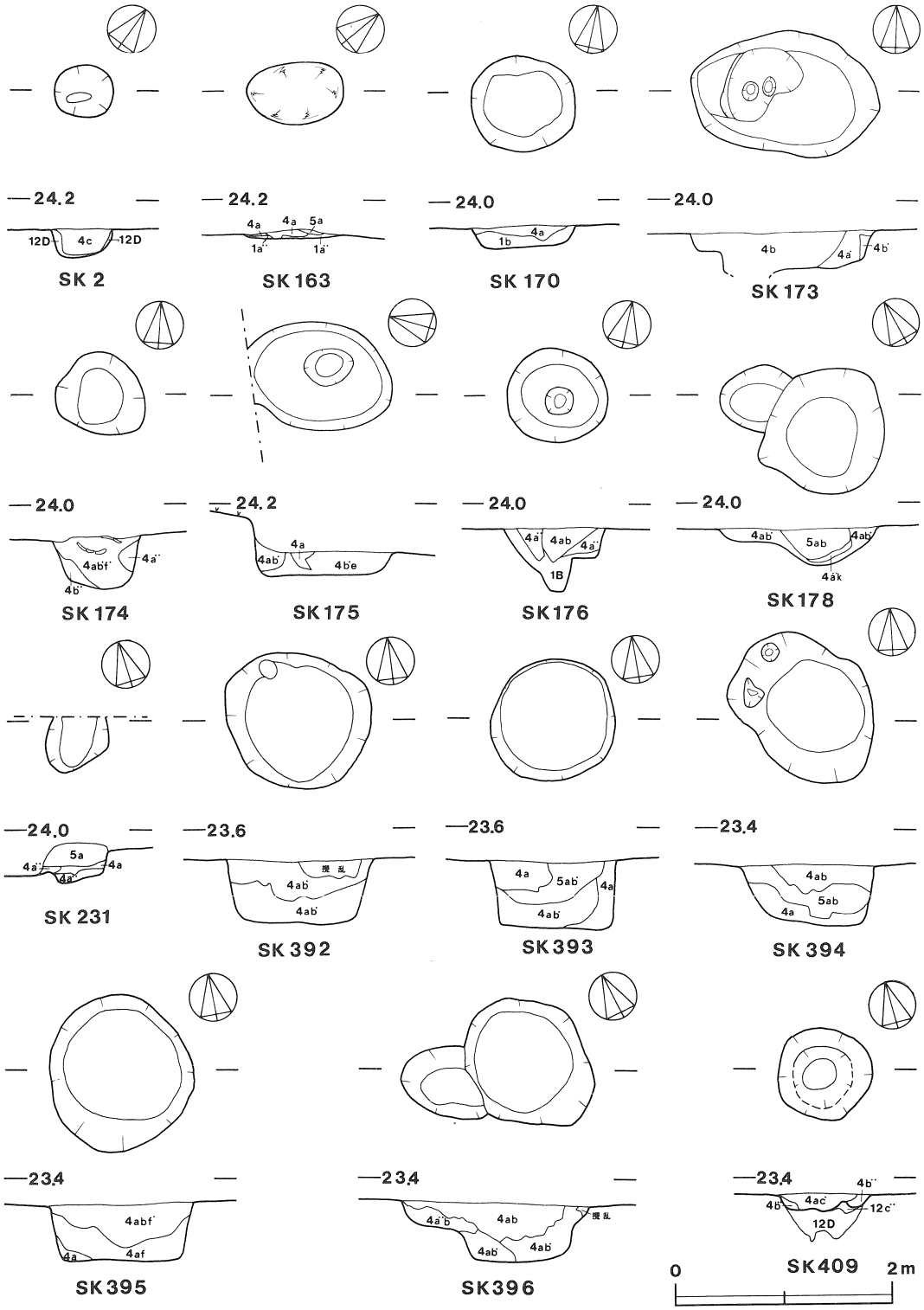
１　遺　構

表２　土坑一覧表(1)　　縄文時代

土坑番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
2	Ｄ７ａ６	－	円形	0.55×0.5	30	Ⅰ	2	N	縄文式土器片５	ファイアーピットか
163	Ｃ５ａ４	N－36°－E	楕円形	1.0×0.6	2	－	2	－	縄文式土器１　同土器片３	
170	Ａ５ｉ１	－	円形	1.0×0.86	20	Ⅲ	2	N	縄文式土器片８ 内耳土器片１　陶磁片２　石１	
173	Ａ５ｊ１	N－80°－W	楕円形	1.75×1.1	30	Ⅱ	6	N	縄文式土器片42 内耳土器片１	
174	Ａ５ｊ２	－	不整円形	0.83×0.73	50	Ⅰ	1	N	縄文式土器１　同土器片17	ピット１
175	Ａ５ｉ３	N－３°－E	楕円形	1.4×1.02	15	Ⅱ	1	N	縄文式土器片９ 陶磁片１　石１	
176	Ａ５ｉ３	－	円形	0.95×0.84	30	Ⅱ	5	N	縄文式土器片30 内耳土器片２	ピット１
178	Ａ５ｊ３	－	不整形	1.58×1.15	35	Ⅲ	5	N	縄文式土器片４	
231	Ａ５ｉ３	N－29°－W	楕円形	(0.83)×0.63	25	Ⅱ	3	N	縄文式土器片２ 内耳土器片１	
392	Ｄ３ｊ６	－	円形	1.4×1.22	60	Ⅱ	1	N	縄文式土器片18	
393	Ｄ３ｊ５	－	円形	1.13×1.11	60	Ⅰ	1	N	縄文式土器片24	
394	Ｄ３ｊ５	N－30°－W	不整楕円形	1.54×0.99	60	Ⅱ	1	N	縄文式土器片８	本来は円形
395	Ｅ３ａ４	－	円形	1.46×1.31	50	Ⅱ	1	N	なし	
396	Ｅ３ａ３	N－11°－W	不整楕円形	1.77×1.1	50	Ⅱ	6	N	縄文式土器片５	本来は円形
409	Ｄ３ｇ６	－	円形	0.9×0.87	10	Ⅲ	3	N	縄文式土器片２	炉跡か

２　遺構出土遺物

本項においては縄文時代の各遺構に伴って出土した遺物のみを掲載し，混入と考えられる遺物と，弥生時代以降の遺構から出土した縄文時代の遺物については，別項に掲載した。


24.2
12D
4c
12D
SK 2
24.2
4a
4a
5a
1a'
1a''
SK 163
24.0
1b
4a
SK 170
24.0
4b
4a'
4b'
SK 173
24.0
4abf'
4a''
4b''
SK 174
24.2
4a
4ab'
4b'e
SK 175
24.0
4a'
4ab
4a''
1B
SK176
24.0
4ab'
5ab
4ab'
4a'k
SK178
24.0
5a
4a''
4a
4a'
SK 231
23.6
攪乱
4ab'
4ab'
SK 392
23.6
4a
5ab'
4a
4ab'
SK393
23.4
4ab
5ab
4a
SK 394
23.4
4abf'
4a
4af
SK395
23.4
4a'b
4ab
攪乱
4ab'
4ab'
SK396
23.4
4b''
4b'
4ac'
12c''
12D
SK409
0
2m

第6図　土坑実測図

第２号土坑出土遺物（第７図１～３）

いずれも覆土中から出土した胴部片で，二次焼成を受けている。１・２はＬＲ単節斜縄文が，３は櫛状工具による条痕文が施されている。３点とも，縄文時代後期に編年できる。このことから，本坑は縄文時代後期のものと考えられる。

第163号土坑出土遺物（第７図４～７）

４は，深鉢形土器である。口径は推定で20.5cm，現存高は20.7cmを測り，色調はにぶい赤褐色を呈する。口縁から胴部中位までＬＲ単節斜縄文を施して地文とし，口縁から２条の沈線を垂下させている。この沈線による懸垂文の両側には，沈線による渦巻文と蛇行沈線文が見られる。この渦巻文と蛇行沈線文は，垂下する２条の沈線とともに胴部に繰り返し施されたものと思われ，土器の大きさから判断して，３単位で一周したものと考えられる。

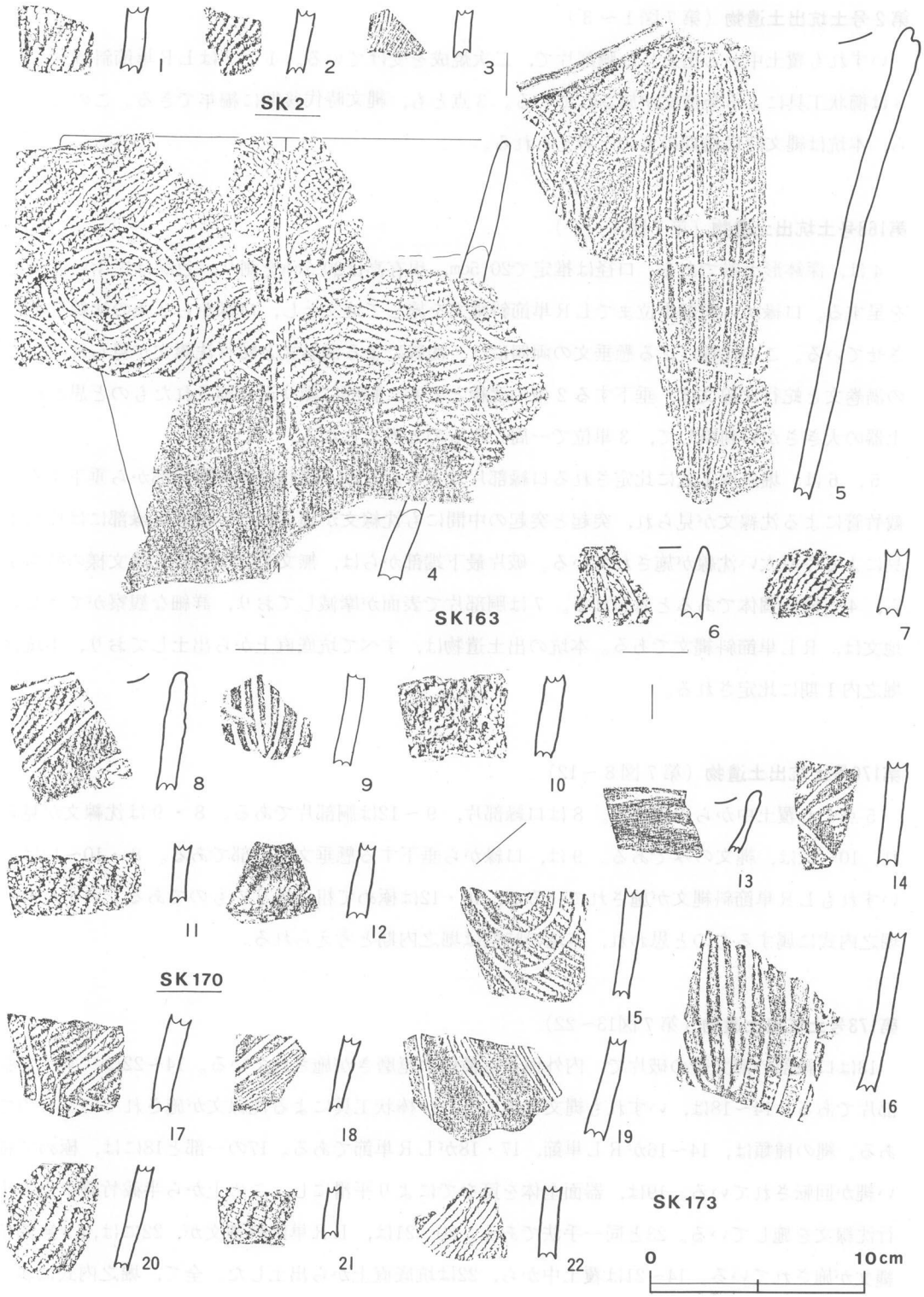
５，６は，堀之内Ｉ式に比定される口縁部片である。５は，波状口縁の突起部から垂下する半截竹管による沈線文が見られ，突起と突起の中間にも沈線文が施されている。口縁部には棒状工具によるやや太い沈線が施されている。破片最下端部からは，無文帯になる。６は文様の特徴から，４と同一個体であると思われる。７は胴部片で表面が摩滅しており，詳細な観察ができない。地文は，ＲＬ単節斜縄文である。本坑の出土遺物は，すべて坑底直上から出土しており，本坑は堀之内Ｉ期に比定される。

第170号土坑出土遺物（第７図８～12）

５点とも覆土中から出土した。８は口縁部片，９～12は胴部片である。８・９は沈線文が見られ，10～12は，縄文のみである。９は，口縁から垂下する懸垂文の一部である。８・10～12は，いずれもＬＲ単節斜縄文が施されているが，10・12は極めて粗い撚りのものである。いずれも，堀之内式に属するものと思われ，本坑の時期は堀之内期と考えられる。

第173号土坑出土遺物（第７図13～22）

13は口縁部の無文帯の破片で，内外面とも横位の箆磨きが施されている。14～22は，すべて胴部片である。14～18は，いずれも縄文を地文とし，棒状工具による沈線文が施されているものである。縄の種類は，14～16がＲＬ単節，17・18がＬＲ単節である。17の一部と18には，極めて細い縄が回転されている。19は，器面全体を箆なでにより平滑にし，この上から半截竹管による平行沈線文を施している。23と同一手法である。20・21は，ＬＲ単節斜縄文が，22には，Lr無節斜縄文が施されている。14～21は覆土中から，22は坑底直上から出土した。全て，堀之内式に属するものと思われ，本坑は堀之内期のものであると考えられる。



第７図　土坑出土遺物実測拓影図（1）

第174号土坑出土遺物（第８図23～28）

23は，大型の深鉢である。口径28.3cm，胴部最大径27.7cm，現存高29.8cmを測り，色調はにぶい橙色を呈する。胴部は強く張って丸味を有し，口縁は外反している。口縁は波状を呈し，３か所の突起を有する。突起の先端は２つに分れ，各々から粘土紐を貼り付けた隆帯が垂下し，隆帯には棒状工具による刻み目が施され，隆帯の左右には対称形に弧線文が配されている。隆帯と隆帯の間には，半截竹管による平行沈線文が垂下し，この平行沈線文を挟んで，左右対称の弧線文が施されている。この隆帯・平行沈線文・弧線文が一単位として３か所に配され，各単位の間にも平行沈線と弧線による懸垂文が施されている。

24は口縁部片で，ＬＲ単節斜縄文を地文とし，半截竹管による懸垂文が描かれたものである。直線と蛇行沈線の組合せによる懸垂文と，渦巻または弧線文が繰り返されて胴部を一周したものと考えられる。25～28は胴部の破片で，ＬＲ単節斜縄文が見られるだけである。

本坑の出土遺物は，すべて覆土中から検出された。この中で23は，倒立した状態にあり，本坑の埋没途中で投棄されたものとみられることから，本坑は堀之内Ｉ期に比定される。

第175号土坑出土遺物（第８図29～33）

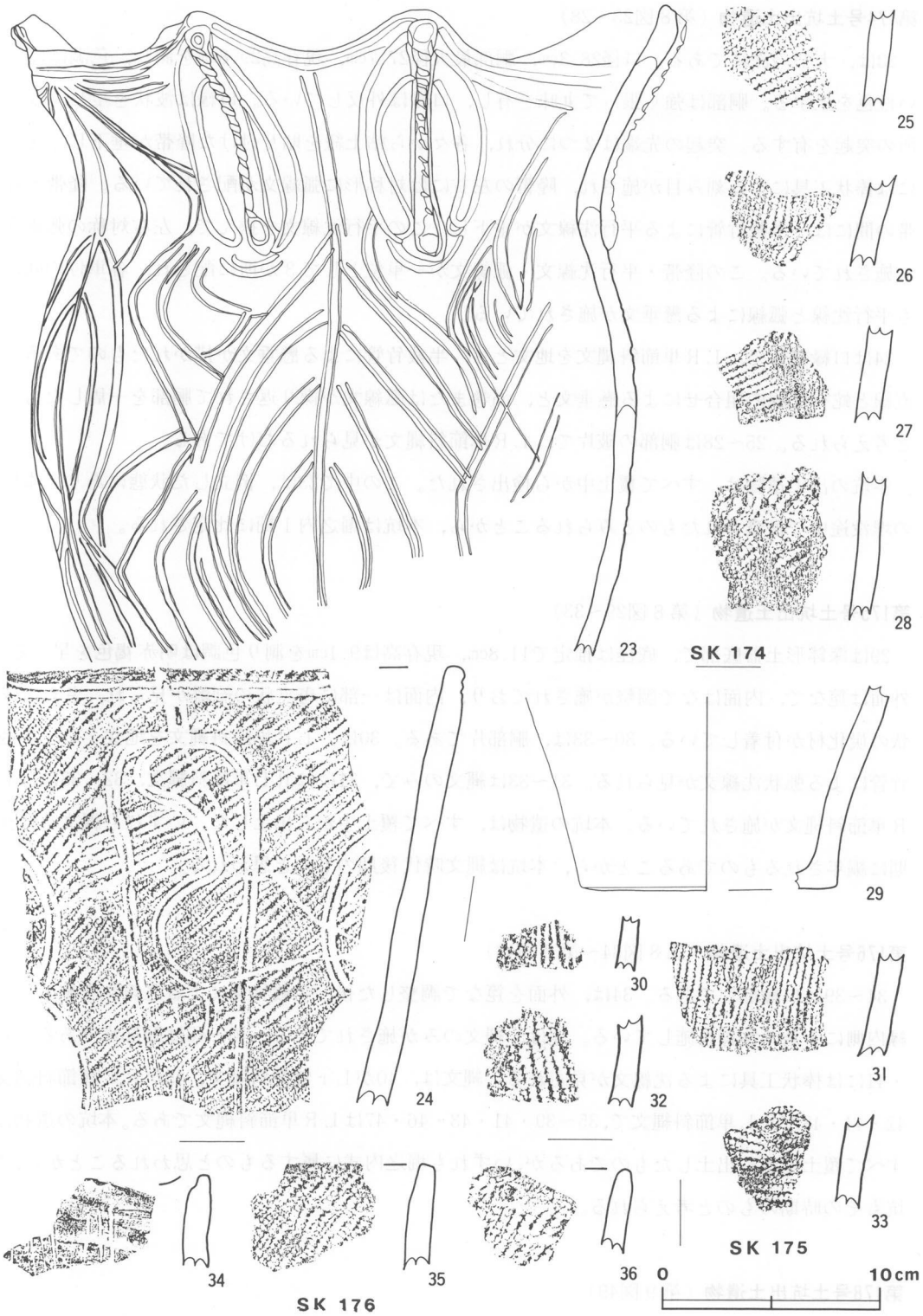
29は深鉢形土器底部で，底径は推定で11.8cm，現存高は9.1cmを測り色調は明赤褐色を呈する。外面は箆なで，内面はなで調整が施されており，内面は一部に斑点状の剥離が見られ，さらに煤状の炭化材が付着している。30～33は，胴部片である。30は，ＬＲ単節斜縄文を地文とし，半截竹管による弧状沈線文が見られる。31～33は縄文のみで，31にはＲＬ単節斜縄文，32・33にはＬＲ単節斜縄文が施されている。本坑の遺物は，すべて覆土中から出土した。いずれも縄文時代後期に編年されるものであることから，本坑は縄文時代後期のものと思われる。

第176号土坑出土遺物（第８図34～第８図48）

34～39は口縁部片である。34は，外面を箆なで調整した後，半截竹管による沈線文を施し，口縁内側に１条の沈線を施している。他は，縄文のみが施されている。40～48は胴部片である。40・41には棒状工具による沈線文が見られる。縄文は，40がＬｒ無節斜縄文，45がＲℓ無節斜縄文，42・44・48がＲＬ単節斜縄文で，35～39・41・43・46・47はＬＲ単節斜縄文である。本坑の遺物はすべて覆土中から出土したものであるが，いずれも堀之内式に属するものと思われることから，本坑もその時期のものと考えられる。

第178号土坑出土遺物（第９図49）

本坑の遺物は，覆土中から出土した49の１点だけである。胴部片でＲＬ単節斜縄文が施され，



第8図　土坑出土遺物実測拓影図（2）

胎土は精製されている。小片であり，時期は明らかにできない。

第231号土坑出土遺物（第９図50）

本坑からの出土遺物は，50の１点だけである。胴部片で覆土中から出土した。外面にはＲＬ単節斜縄文が施され，内面は箆磨きが施されている。縄文時代中期後半頃のものと思われ，本坑の時期もその頃と考えられる。

第392号土坑出土遺物（第９図51～63）

すべて覆土中から出土したもので，51・52が口縁部片，53～63が胴部片である。51は，棒状工具による刺突文と縄文が施され，54は，一部が箆削りによって無文になっている。他は，全て単節または無節の縄文だけである。52・54・58がＬＲ単節斜縄文，53・55～57がＲＬ単節斜縄文，59・61がＬｒ無節斜縄文で，62は判然としない。63は櫛状工具による細い沈線文が縦横に施されている。いずれも堀之内期の土器片であり，本坑の時期は堀之内期であると考えられる。

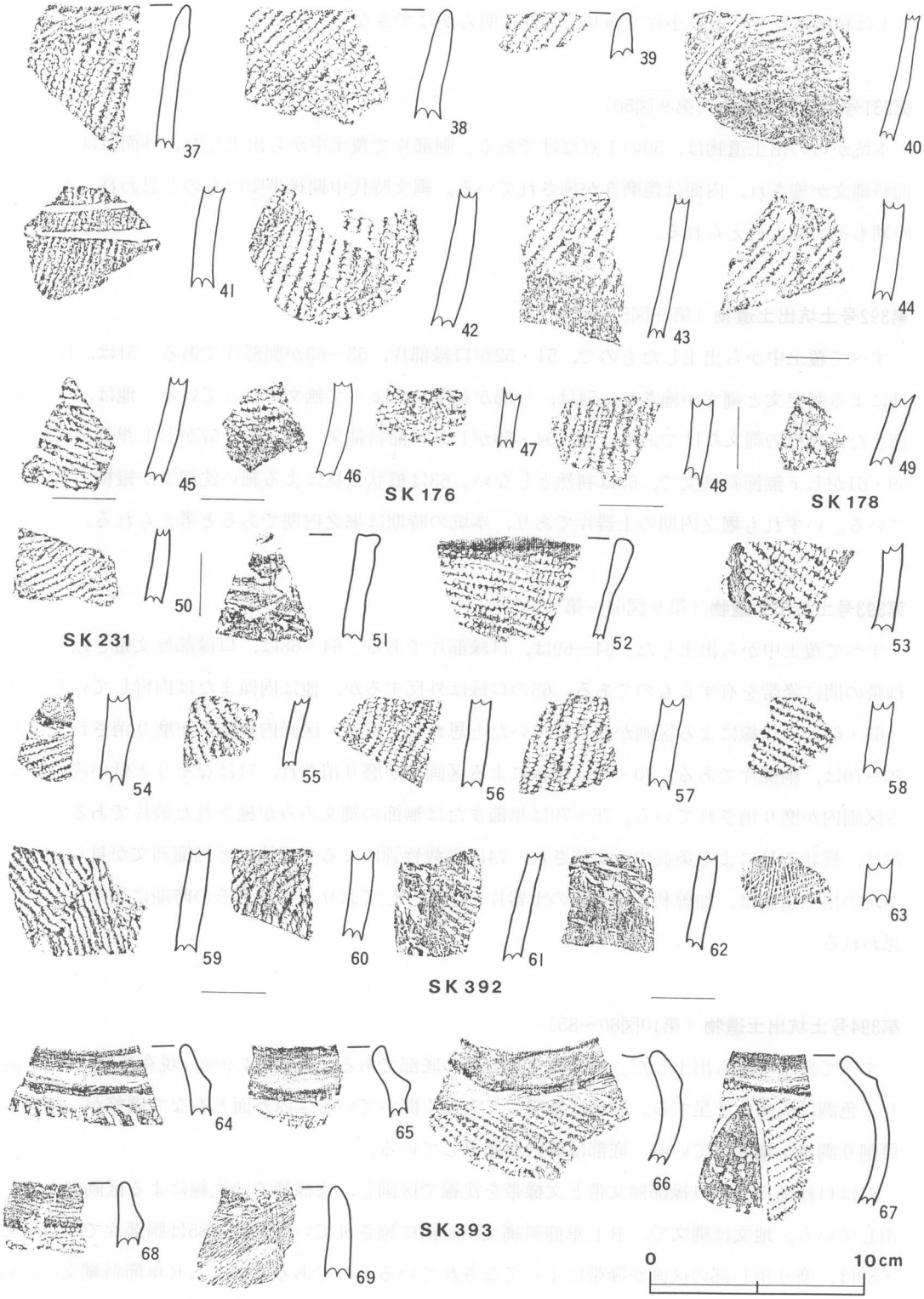
第393号土坑出土遺物（第９図64～第９図79）

すべて覆土中から出土した。64～69は，口縁部片である。64～68は，口縁部無文帯と以下の文様帯の間に隆帯を有するものである。65の口縁は外反するが，他は内傾または内彎している。64・65・68は，沈線による区画がなされていたと思われ，67は，区画内の縄文が磨り消されている。70～79は，胴部片である。70・72は沈線による区画内が磨り消され，71はなぞりと低い隆帯による区画内が磨り消されている。75～79は単節または無節の縄文のみが施された破片である。69・73は，櫛状工具による条痕のみが施され，74は半截竹管による平行沈線と無節縄文が見られる。本坑の出土遺物は，加曽利Ｅ期後半の土器片を主体としており，本坑もその時期に属するものと思われる。

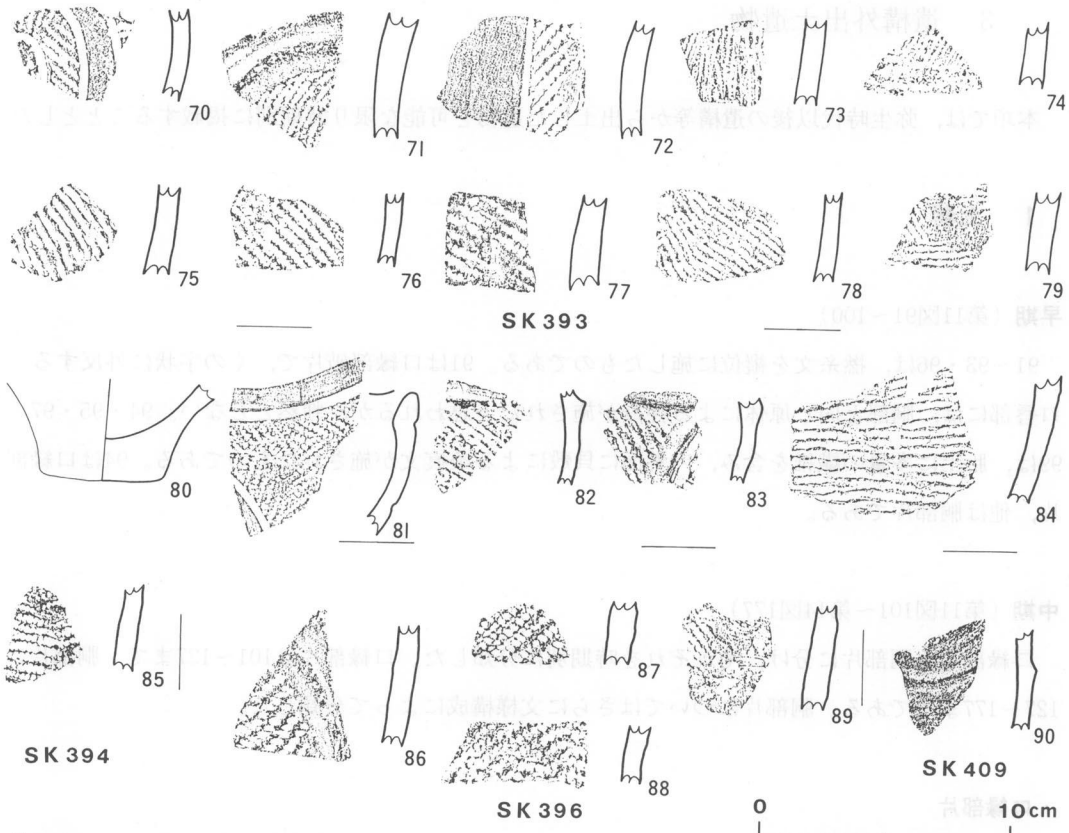
第394号土坑出土遺物（第10図80～85）

すべて覆土中から出土した。80は縄文式土器の底部である。底径は4.9cm，現存高は4.2cmを測り，色調は灰褐色を呈する。胴部は外反して大きく開いている。内外面ともなで調整が，底部は箆削り調整が施されている。底部は器肉が肥厚している。

81は口縁部片で，口縁部無文帯と文様帯を沈線で区画し，文様帯では沈線による区画内を磨り消している。地文は縄文で，ＲＬ単節斜縄文が縦横に施されている。82～85は胴部片である。82・83は，磨り消し部の区画が隆帯によってなされているものである。85はＬＲ単節斜縄文が，84はＬｒ無節斜縄文が施されている。本坑の出土遺物は，加曽利ＥⅢ式期の土器を主体としており，



第９図　土坑出土遺物拓影図（3）



第10図　土坑出土遺物実測拓影図（4）

本坑の時期もほぼその頃と思われる。

第396号土坑出土遺物（第10図86～89）

いずれも覆土中から出土したもので，すべて胴部片である。86は，なぞりと低い隆帯による区画内を磨り消しているもので，71と同一手法であり，同時期のものと判断される。87～89は縄文のみが施されているもので，87・88は胴部，89は底部に近い部分である。87・89はＲＬ単節斜縄文，88はＬＲ単節斜縄文が施されている。71と86が同時期とみなされることから，本坑は加曽利Ｅ期後半のものと思われる。

第409号土坑出土遺物（第10図90）

90は覆土中から出土したもので，頸部片である。磨り消し部分の破片である。内部には低い隆帯が見られる。隆帯の両側には，なぞり痕があり，71・86と同様の手法であり，同時期のものと考えられる。このことから，本坑は加曽利Ｅ期後半のものと判断される。

3　遺構外出土遺物

本項では，弥生時代以後の遺構等から出土した遺物を可能な限り時期別に掲載することとした。

1　土器

早期（第11図91～100）

91～93・96は，撚糸文を縦位に施したものである。91は口縁部破片で，くの字状に外反する。口唇部には，胴部と同じ原体による押捺が施されたと思われるが，判然としない。94・95・97～99は，胎土に多量の繊維を含み，内外面に貝殻による条痕文が施されたものである。94は口縁部片，他は胴部片である。

中期（第11図101～第14図177）

口縁部片と胴部片に分け，それぞれを時期別に分類した。口縁部片は101～127まで，胴部片は127～177までである。胴部片についてはさらに文様構成によって分類した。

・口縁部片

101～104は，加曽利ＥⅢ式に比定される。口縁から直接文様帯へ移行するもの（101～104）と，口縁部無文帯を有するもの（105～118）がある。後者には，無文帯と文様帯の境界に列点文が施されているもの（105・106），沈線が施されているもの（107～110・119），隆帯状を呈するもの（111～113），特別な境界を有さないもの（115～118）がある。118では，文様帯の最上部だけ原体の回転方向を変えている。

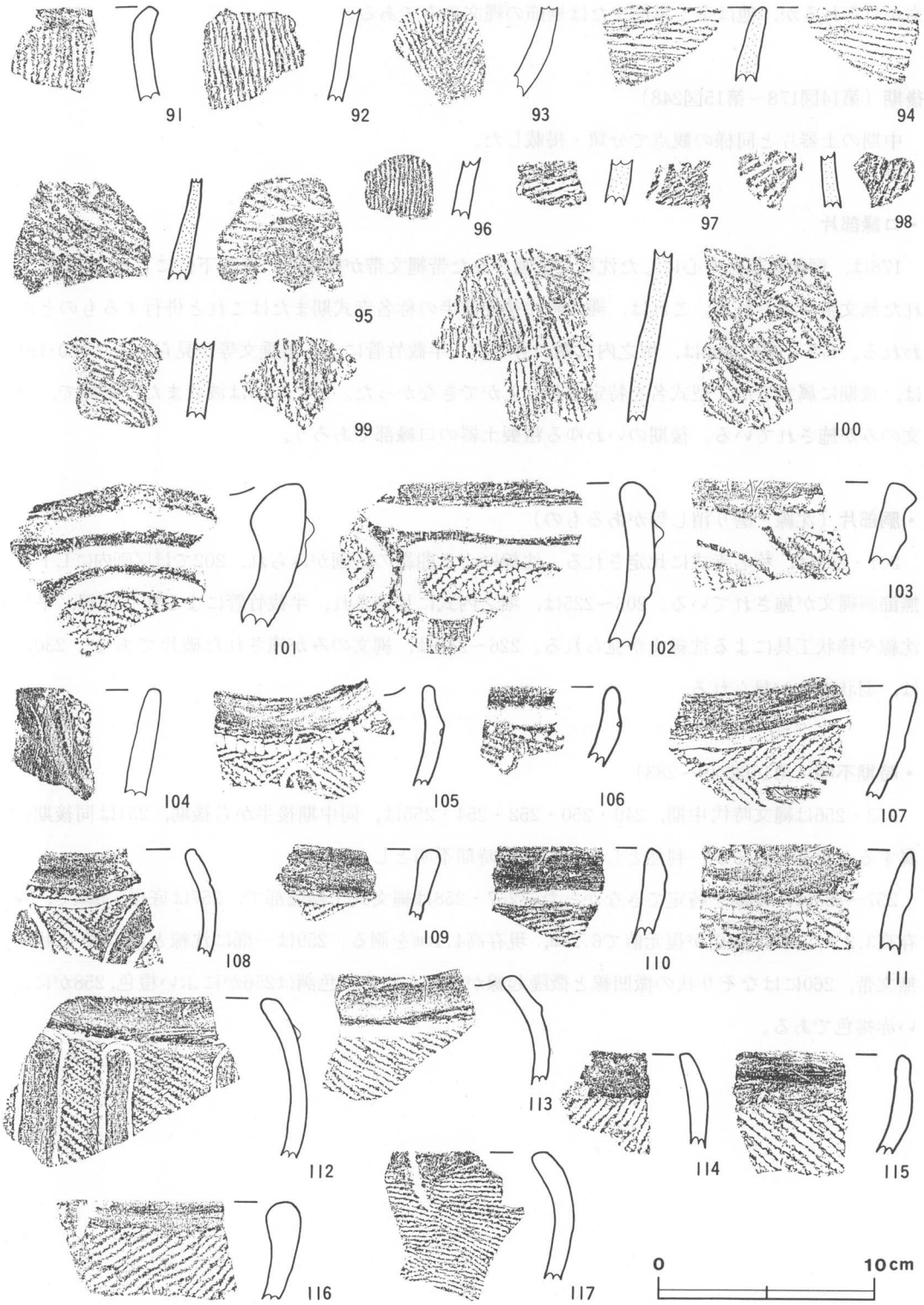
120～127は，加曽利ＥⅣ式に比定される。120・122～125では，無文帯と文様帯の境界の上位で急激に器厚を減じ，さらに強くなぞりを加えることにより，シャープな稜を表現している。127は無文帯の幅が広く，口縁はやや外反している。

・胴部片（沈線・磨り消し等があるもの）

128～140は，加曽利ＥⅢ式，141～143は同ＥⅣ式，144・145はそのどちらとも断定できないものである。137～140は，ＥⅢ式の新しい部分である。

・胴部片（縄文・条線のみのもの）

146～177は中期の遺物と考えられるが，細分はできなかった。157・158に櫛状工具による条痕



第11図　遺構外出土遺物拓影図（1）

文が見られるが，他は全て単節または無節の縄文のみである。

後期（第14図178～第15図248）

中期の土器片と同様の観点で分類・掲載した。

・口縁部片

178は，瘤状突起を中心にした沈線で区画された帯縄文帯が横走し，その下位に沈線で区画された無文帯が見られる。これは，縄文時代後期前半の称名寺式期またはこれと併行するものと思われる。179～189・192は，堀之内式期のもので，半截竹管による懸垂文等が見られる。190・191は，後期に属するが，型式名を特定することができなかった。193～200は波状または平縁で，縄文のみが施されている。後期のいわゆる粗製土器の口縁部であろう。

・胴部片（沈線・磨り消し等があるもの）

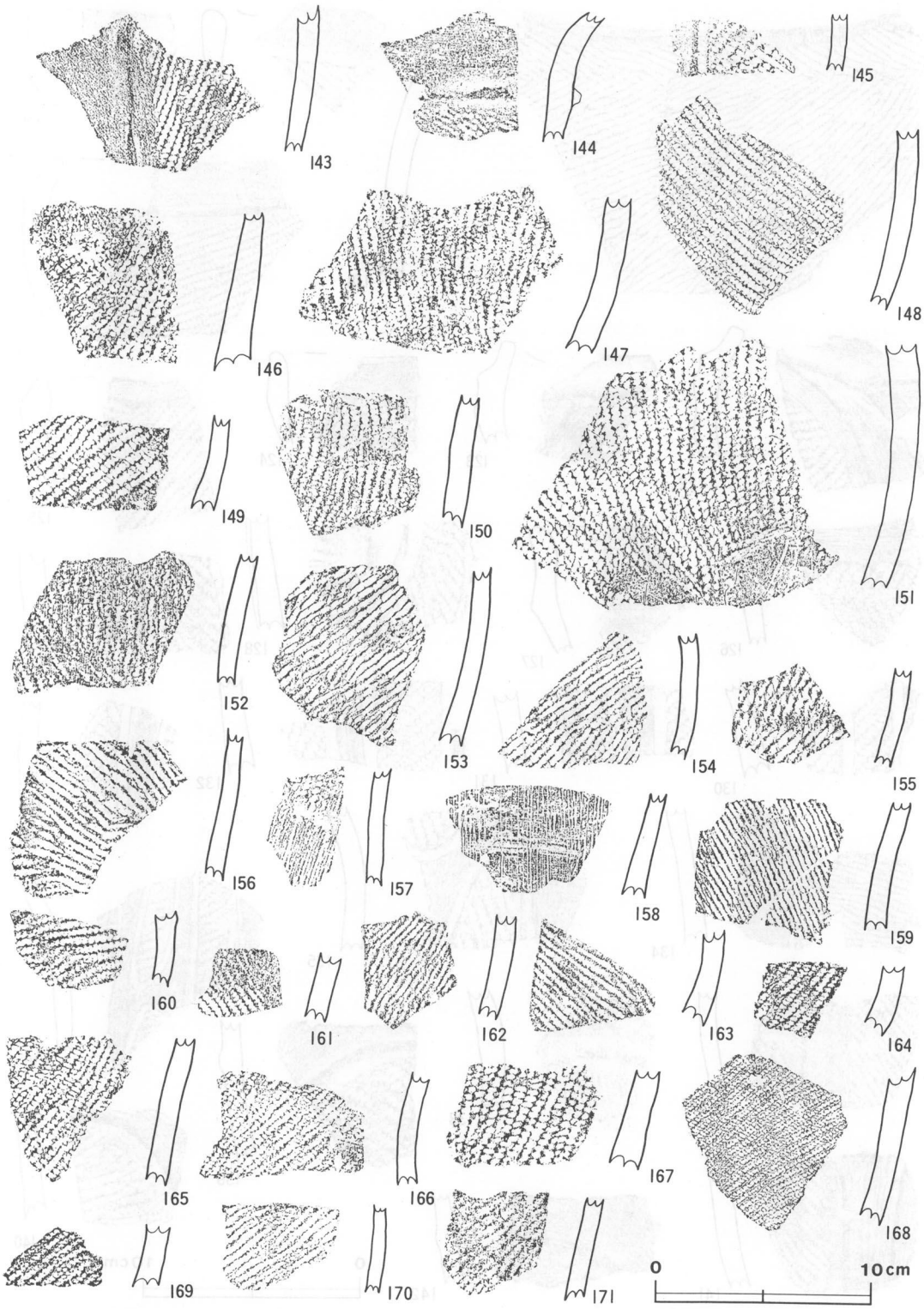
201・202は，称名寺式に比定される。沈線による曲線の区画がみられ，202では区画内にＬｒの無節斜縄文が施されている。203～225は，堀之内式に比定され，半截竹管による蛇行沈線，平行沈線や棒状工具による沈線文が見られる。226～248は，縄文のみが施された破片である。230には，羽状縄文が見られる。

・時期不明（第16図249～283）

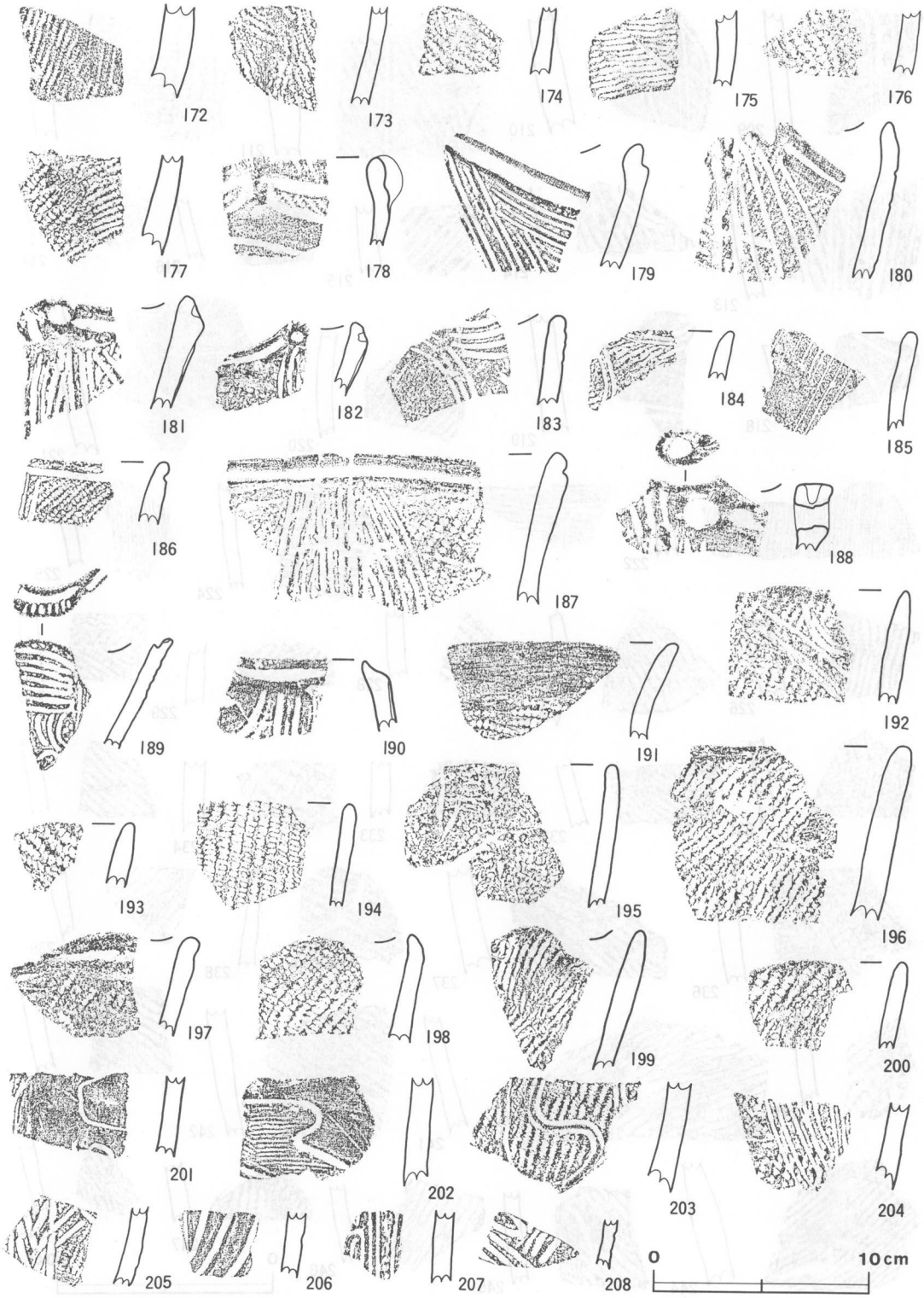
253・256は縄文時代中期，249・250・252・254・255は，同中期後半から後期，251は同後期に属すると考えられるが，判然としないため，時期不明とした。

257～283は，時期を特定できなかった。257・258は縄文式土器底部で，257は底径5.5cmで，現存高3.2cm，258は底径が復元値で6.2cm，現存高4.1cmを測る。259は一部に沈線と磨り消し状の無文帯，260にはなぞり状の微凹線と微隆起線が認められる。色調は256がにぶい橙色，258がにぶい赤褐色である。

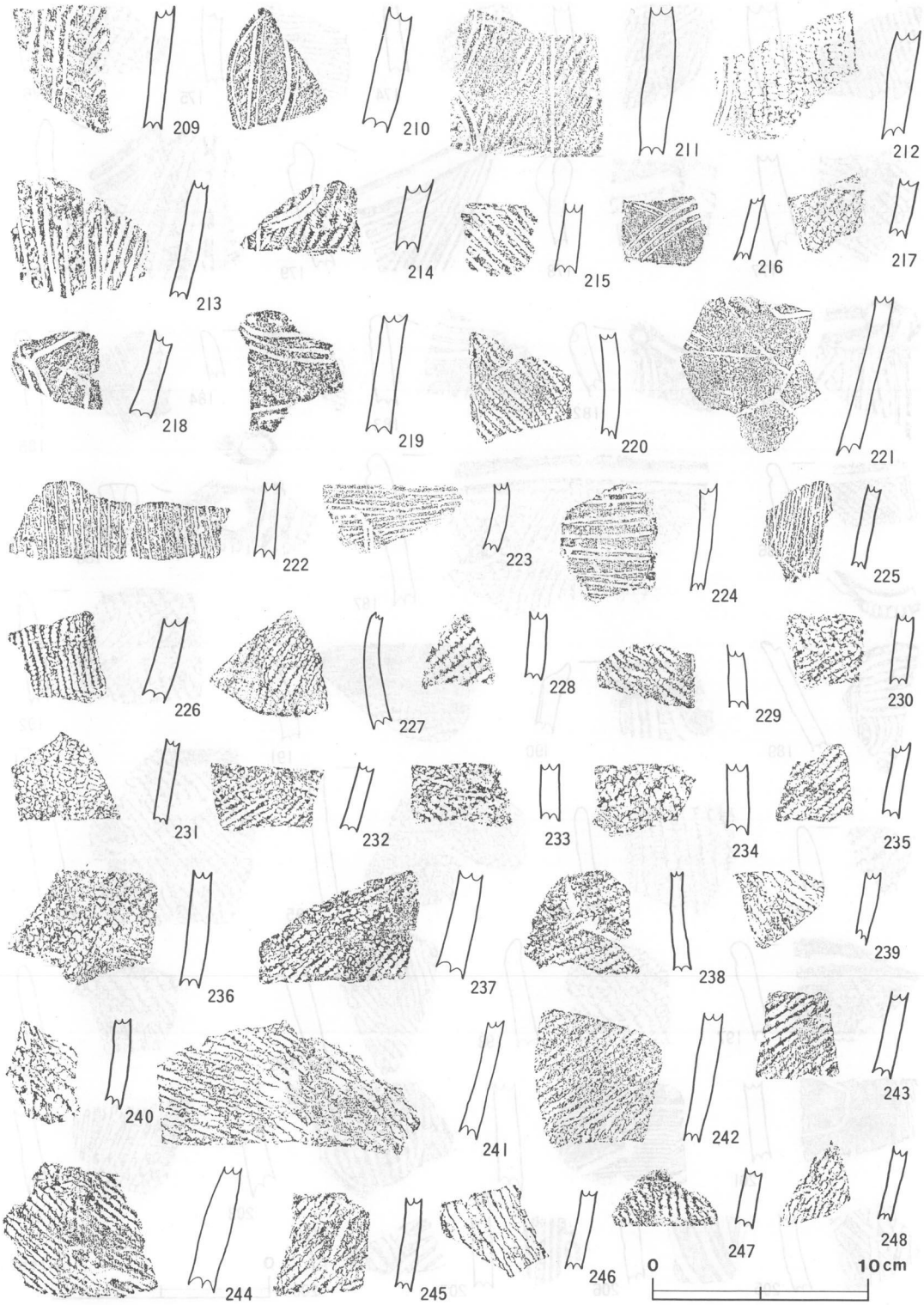
第12図　遺構外出土遺物拓影図（2）



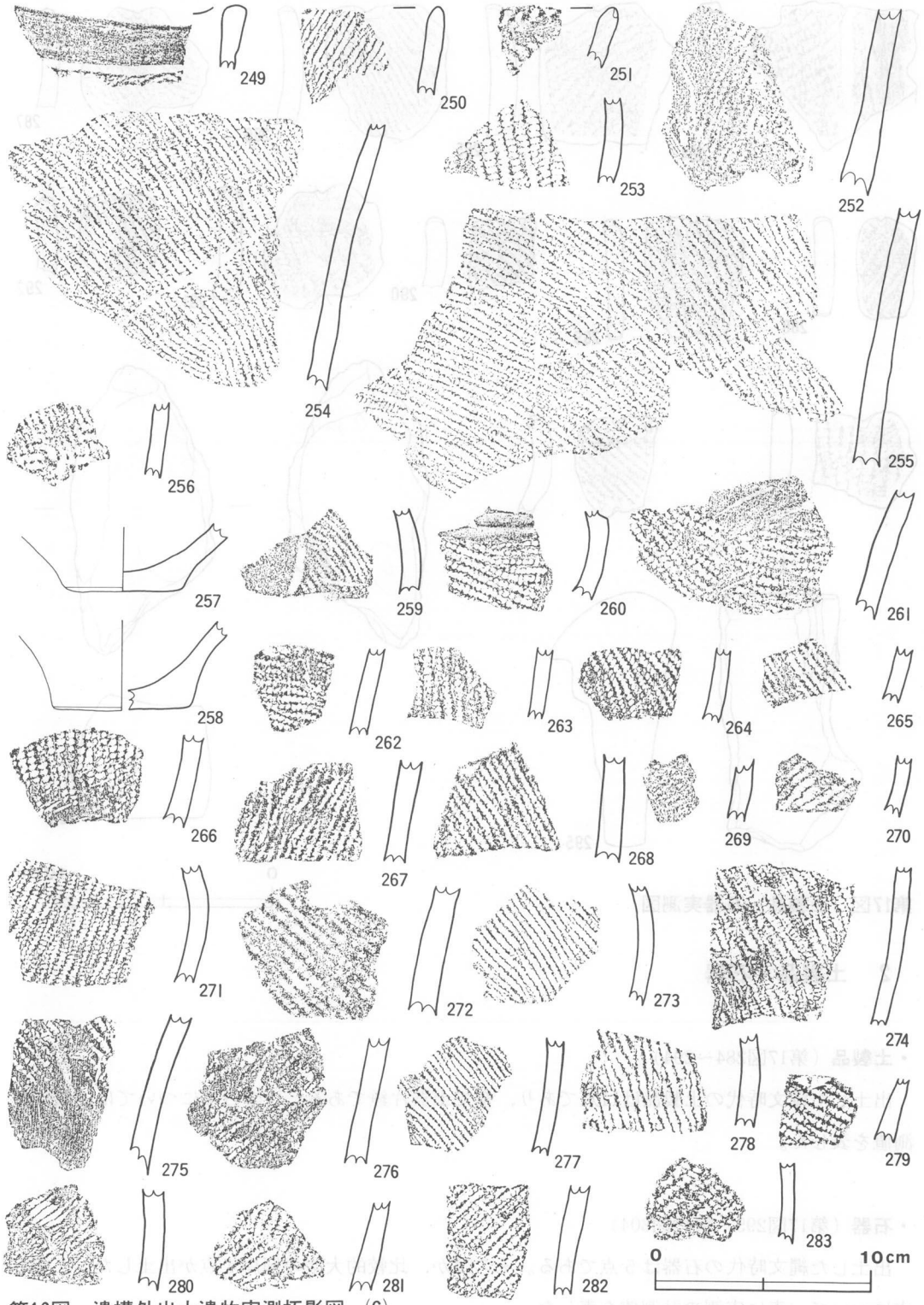
第13図　遺構外出土遺物拓影図　(3)



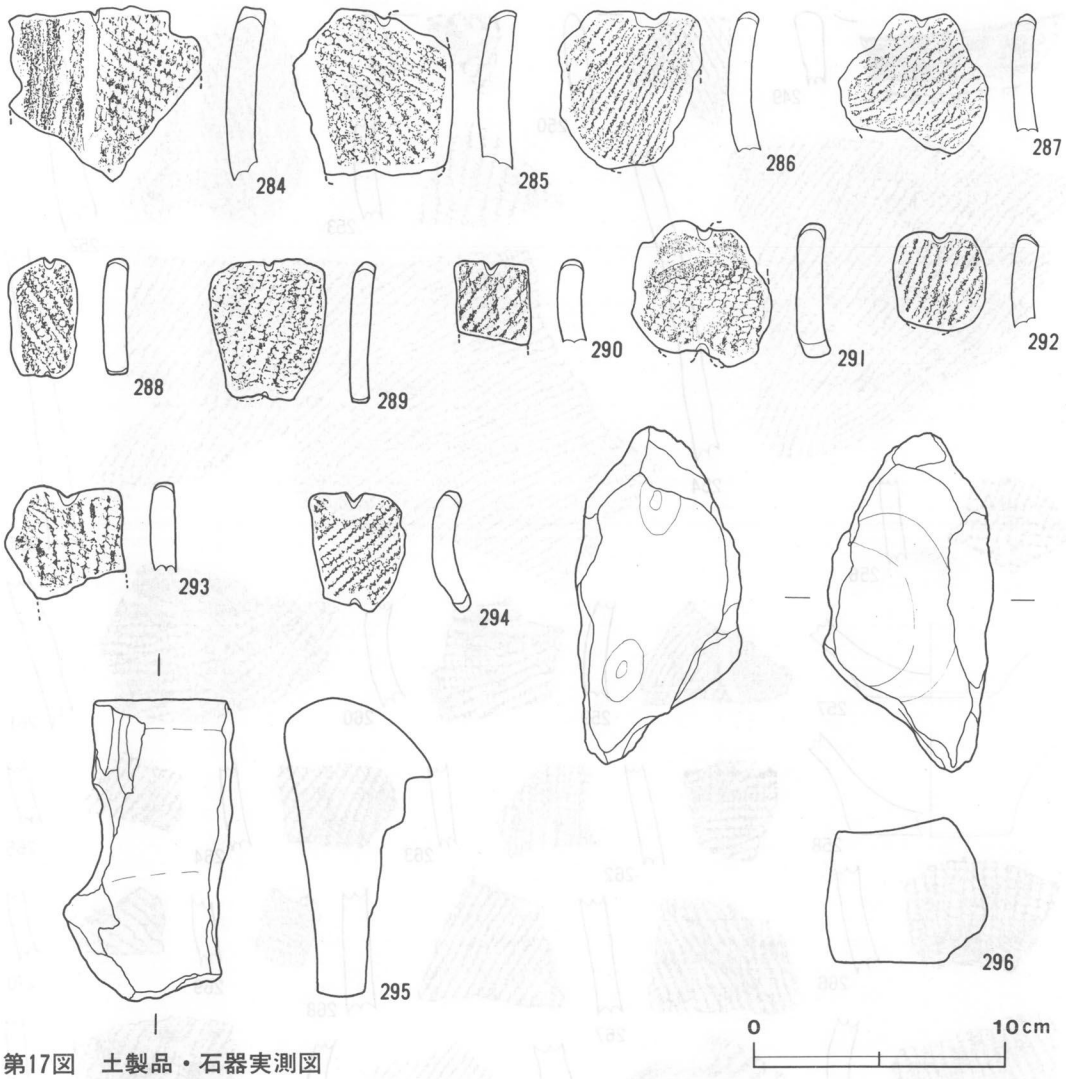
第14図　遺構外出土遺物拓影図　(4)



第15図　遺構外出土遺物拓影図 (5)



第16図　遺構外出土遺物実測拓影図（6）



第17図　土製品・石器実測図

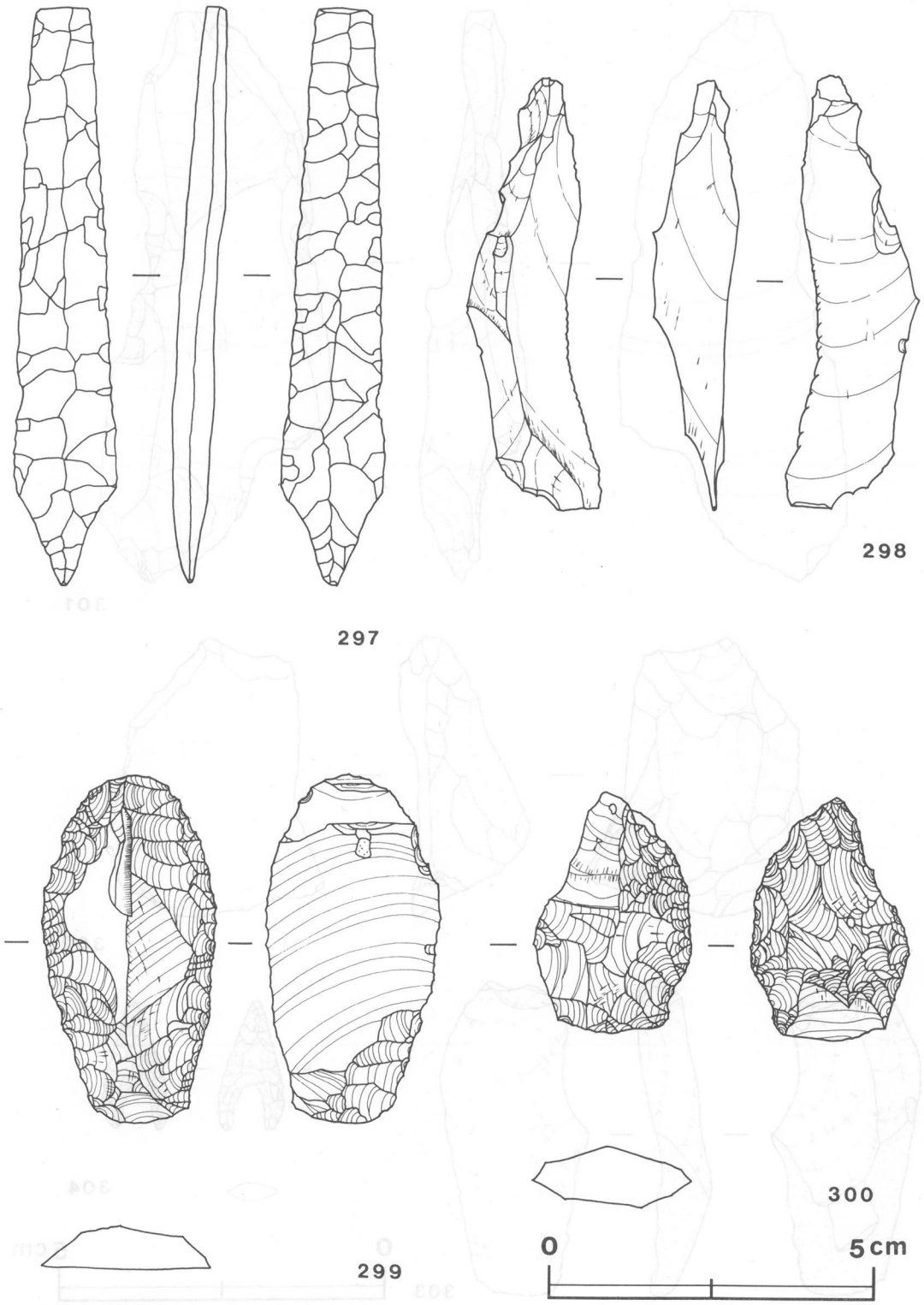
2　土製品・石器

・土製品（第17図284～294）

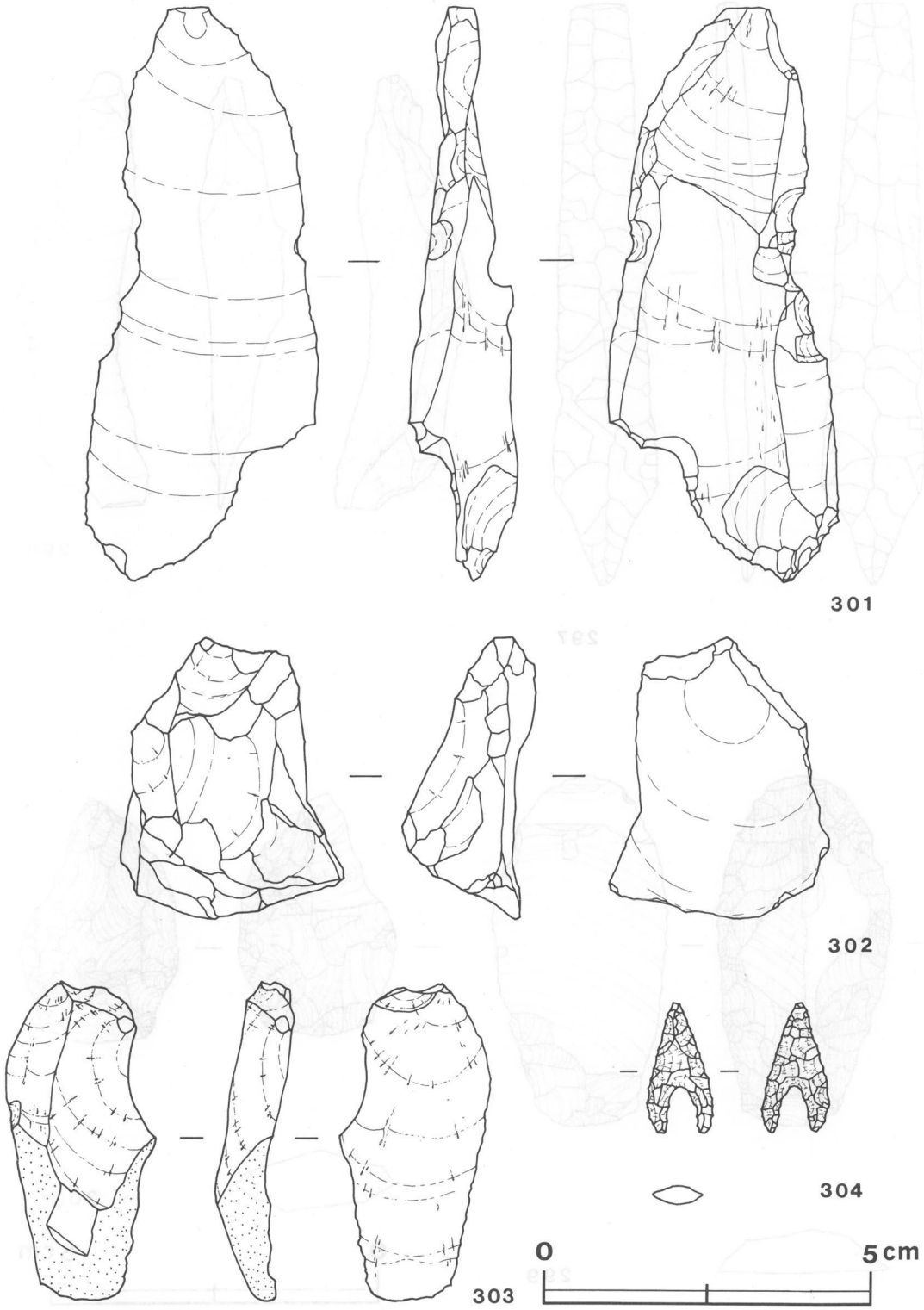
出土した縄文時代の土製品は11点であり，全て土器片錘である。この11点については，表に計測値を表した。

・石器（第17図295～第19図304）

出土した縄文時代の石器は５点である。そのほか，比較的大型の剝片４点が出土した。この９点について，表に実測の計測値を表した。



第18図　石器実測図　(1)



第19図　石器実測図 (2)

表3　出土遺物解説表

番号	器種	法量	部位	備考	番号	器種	法量	石質	備考
17 ｜ 284	土器片錘	E 7.0 B 7.6 G 55.5	胴部	SK 19	295	石皿	E 13.5 B 6.5 G 755	花崗岩	SD 4
285	〃	E 6.5 B 6.3 G 56.5	〃	SD 4	296	〃	E 12.0 B 6.9 G 393	砂石	D3g6
286	〃	E 6.0 B 6.2 G 44.5	〃	〃	18 ｜ 297	有舌尖頭器	E 9.0 B 1.6 G 9.5	安山岩	B5e0
287	〃	E 4.5 B 5.9 G 24.5	〃	〃	298	剝片	A 6.7 G 6.7	頁岩	SK 221
288	〃	A 3.8 B 2.8 G 17.0	〃	〃	299	掻器	A 5.4 B 2.7 G 11.5	黒曜石	D3a0
289	〃	A 5.7 B 4.6 G 30.5	〃	〃	300	〃	A 3.7 B 2.9 G 6.0	〃	E3i1
290	〃	E 3.3 B 3.2 G 12.5	〃	SD 25	19 ｜ 301	剝片	A 8.9 G 18.0	チャート	19号トレンチ
291	〃	A 5.6 B 5.6 G 39.5	〃	SD 26	302	〃	A 4.3 G 19.5	〃	SK 42
292	〃	E 3.8 B 3.7 G 17.5	〃	SD 30	303	〃	A 4.8 G 11.5	流紋岩	SI 15
293	〃	E 4.5 B 4.8 G 19.5	〃	E3f1	304	石鏃	A 2.0 B 1.0 G 0.45	〃	E3e2
294	〃	A 4.8 B 3.9 G 16.5	〃	表採					

表4　遺構外出土遺物出土位置一覧表（1）

番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置
91	SI－8	101	表採	111	SD－30	121	E3c1
92	SK－3	102	SD－29	112	SD－25	122	SI－11
93	SK－126	103	SD－4	113	SD－4	123	〃
94	SI－1	104	SK－188	114	SK－321	124	C7j3
95	〃	105	SD－4	115	E3d1	125	D2a3
96	SI－6	106	SK－343	116	SD－4	126	表採
97	SK－3	107	SK－85	117	〃	127	SD－20
98	SI－2	108	表採	118	SD－25	128	C4
99	〃	109	SK－85	119	SK－120	129	SD－4
100	SK－126	110	E2b0	120	SI－11	130	〃

番　号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番　号	出土位置
131	SD－4	175	SK－188	219	SK－125	263	SI－18
132	SD－29	176	SK－45	220	SK－117	264	SI－11
133	SK－308	177	SD－7	221	SK－161	265	SK－308
134	SK－105	178	SI－4	222	SK－180	266	SI－11
135	SD－25	179	SI－9	223	SK－1	267	SI－8
136	〃	180	SD－4	224	〃	268	SI－3
137	SK－397	181	SK－216	225	SK－164	269	SK－293
138	SD－30	182	SI－10	226	SI－9	270	SI－12
139	SD－25	183	SK－201	227	SK－222	271	SD－4
140	SK－321	184	SK－180	228	SK－126	272	〃
141	SI－11	185	〃	229	SK－117	273	〃
142	〃	186	SK－228	230	SK－126	274	Fl e 0
143	〃	187	SK－216	231	SK－148	275	SI－8
144	SK－291	188	SK－161	232	SK－125	276	SD－4
145	SK－1	189	SI－9	233	〃	277	SK－343
146	E2 g 8	190	〃	234	〃	278	SD－4
147	E2 g 9	191	表　採	235	SK－126	279	SI－11
148	SD－25	192	SD－4	236	SK－216	280	SD－4
149	SK－321	193	SK－183	237	SK－125	281	SK－222
150	SD－30	194	SD－4	238	SK－188	282	SI－11
151	D2 a 3	195	SK－164	239	SI－15	283	SI－3
152	SD－30	196	SK－216	240	SK－184	284	SK－19
153	SD－25	197	SK－125	241	SI－15	285	SD－4
154	SD－30	198	SK－188	242	SK－228	286	〃
155	SK－321	199	SI－9	243	SI－9	287	〃
156	D3 j 5	200	SK－180	244	〃	288	〃
157	SK－120	201	SK－238	245	SK－164	289	〃
158	SD－30	202	SD－4	246	SI－15	290	SD－25
159	F1 d 0	203	SI－9	247	SK－125	291	SD－26
160	SK－291	204	SK－190	248	SK－183	292	SD－30
161	SI－18	205	SI－10	249	SK－41	293	E3 f 1
162	SK－291	206	SI－9	250	A5 j 3	294	表　採
163	SI－18	207	〃	251	SK－105	295	D3 g 6
164	SK－3	208	SI－10	252	SI－18	296	SD－4
165	D2 a 3	209	SK－216	253	SK－63	297	B5 e 0
166	SK－120	210	SI－9	254	SI－1	298	SK－221
167	D2 a 3	211	SD－4	255	〃	299	D3 a 0
168	SK－120	212	SK－216	256	SI－15	300	E3 i 0
169	SK－3	213	SK－201	257	SK－162	301	表　土
170	SK－120	214	SI－9	258	SK－343	302	SK－42
171	SK－333	215	SK－216	259	SI－3	303	SI－15
172	SK－125	216	SI－12	260	SI－11	304	E3 e 2
173	SK－1	217	SK－185	261	SD－4		
174	SK－188	218	SK－188	262	SI－11		

第３節　弥生時代

１　遺構と遺物

弥生時代の遺構は，住居跡５軒を調査した。一方，弥生時代のものと断定できる土坑は認められなかった。

第１号住居跡（第20図）

本跡は，調査エリア東端のC7 i_8・j_8を中心に確認された竪穴住居跡で，第２号住居跡の北北東約7.5ｍに位置している。中央から北西に寄った部分を，第44号土坑に切られている。

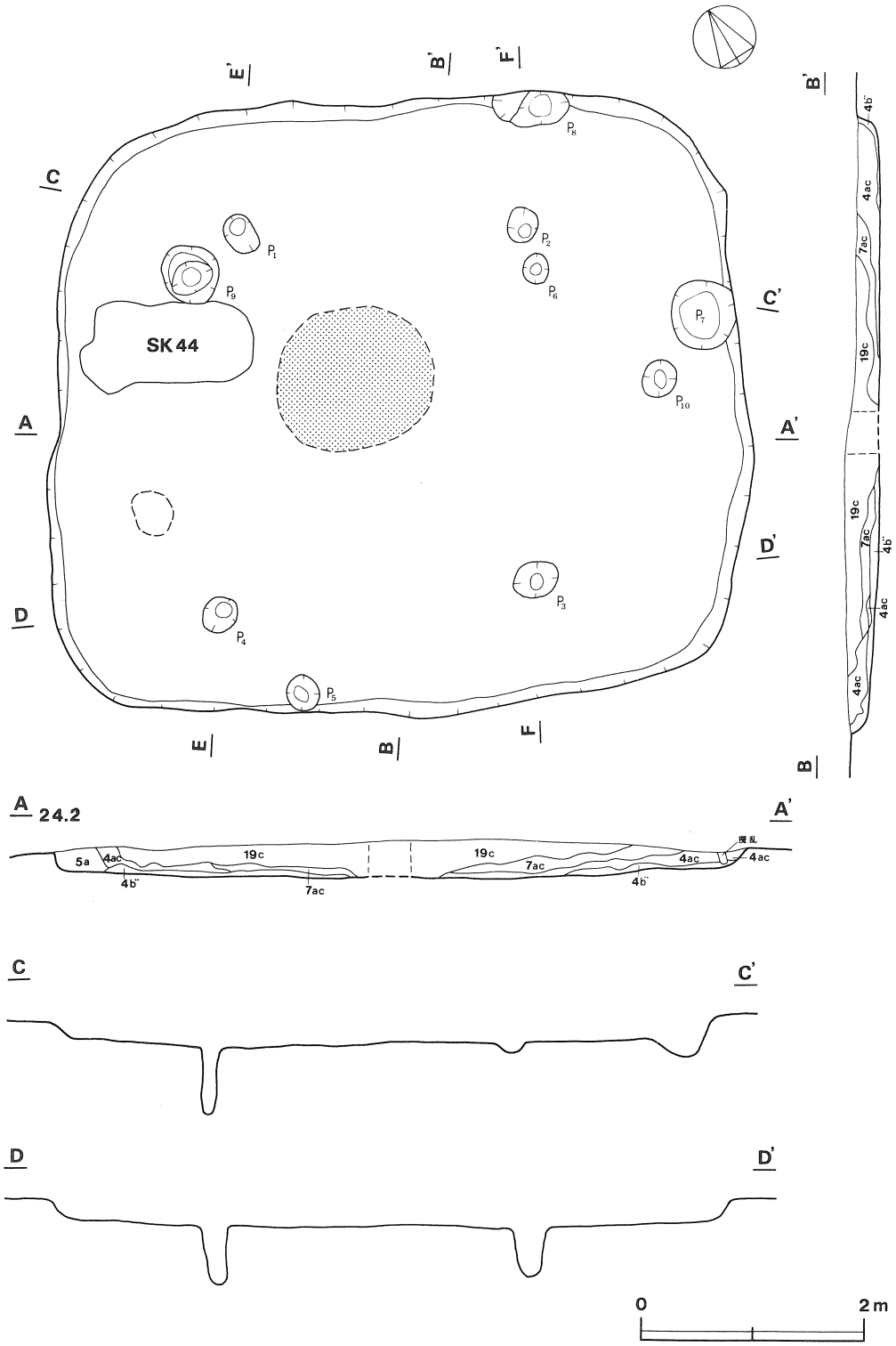
平面形は隅丸長方形状を呈し，長軸方向はＮ－58°－Ｗを指す。規模は，長軸が6.3ｍ，短軸が5.5ｍである。北東側の辺が4.8ｍであるのに対し，南西側の辺は5.4ｍとやや長く，若干いびつである。北西側の辺と南東側の辺は，いずれも4.4ｍの長さを有している。各コーナーは丸味を有するが，北・東両コーナーが特に丸い。壁はロームで，70～80°の傾斜をもって立ち上がり，壁高は約20cmである。床面はロームで，平坦である。東側コーナー付近（P_7周辺）が硬く踏み固められている以外は，全体に軟弱である。壁溝は検出されなかった。炉は，床の中央からやや北西に寄った位置にあり，平面形は長径1.45ｍ，短径1.3ｍの楕円形状を呈する地床炉である。床を約５cm程掘り凹めている。長径方向は，Ｎ－33°－Ｗを指している。ピットは，10か所である。P_1～P_4は，いずれも30～40cmの直径を有し，それぞれ60cm・37cm・47cm・54cmの深さを有していることから，主柱穴と考えられる。P_6はP_2に近接していることから，補助柱穴であると思われる。P_{10}は，直径約30cm，深さ18cmを測り，出入口等の施設に伴うものと思われる。P_5・P_8は，攪乱である。P_7は，前述したように周辺が踏み固められていること，覆土が軟らかく弥生の壺形土器（第22図305）が出土したこと等から，貯蔵穴であると判断した。この壺は，P_7の底面直上から半ばつぶれた状態で出土した。P_7が貯蔵穴として機能していた時期，あるいはこの住居跡の廃絶直後でP_7が埋まる前に投棄されたと考えられる。

覆土は，自然堆積である。上位から黒色土・黒褐色土・褐色土の順に堆積しており，最下層を含有物によって二分した。全体にややしまりがある。

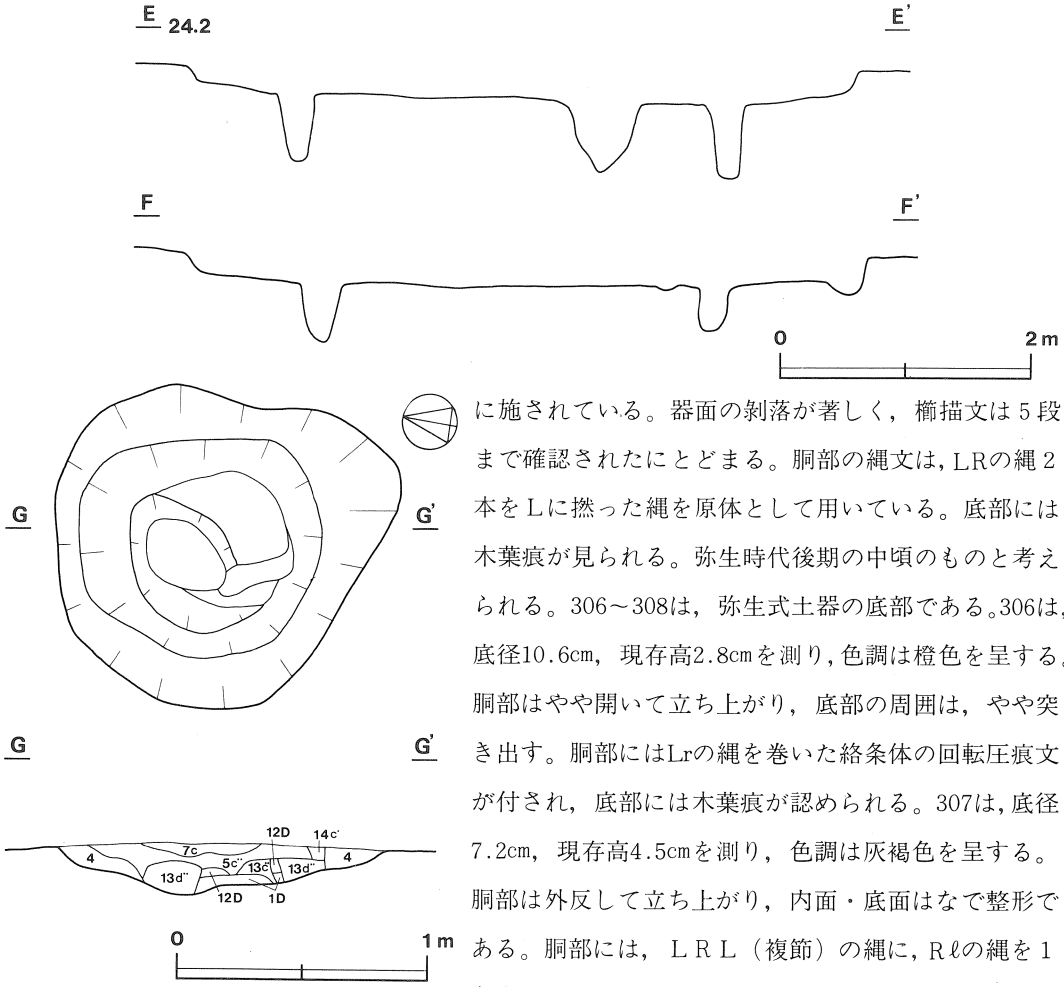
遺物は，第22～24図に示したもののほか，弥生式土器片491点が出土した。

第１号住居跡出土遺物（第22図305～第24図362）

305は，口縁を欠損する壺である。胴部最大径18.4cm，底径7.3cm，現存高26.3cmを測り，色調は明赤褐色を呈する。器肉は全体に薄く，胴部は中央が最も張る。頸部には，櫛描波状文が横位



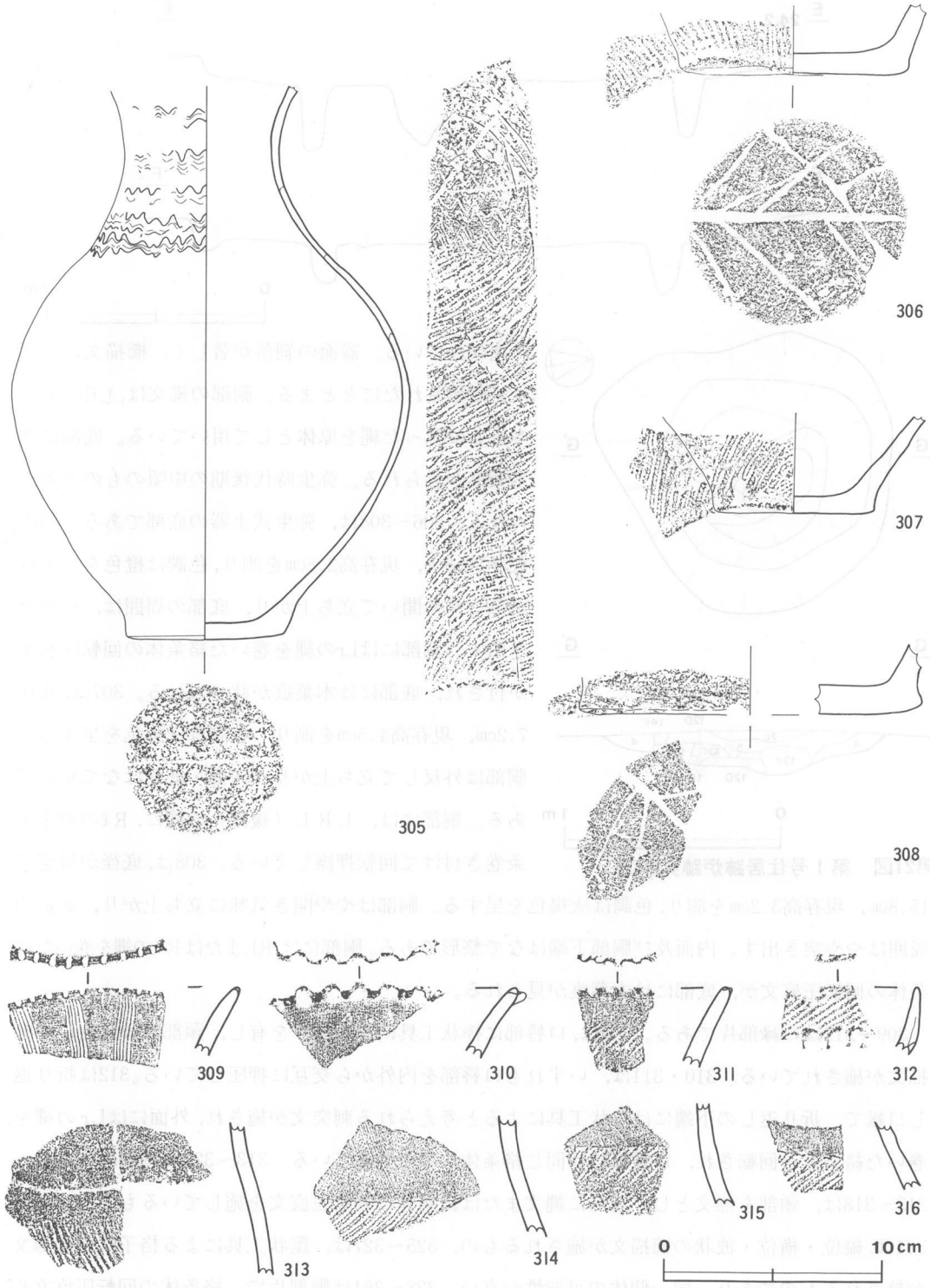
第20図　第１号住居跡実測図



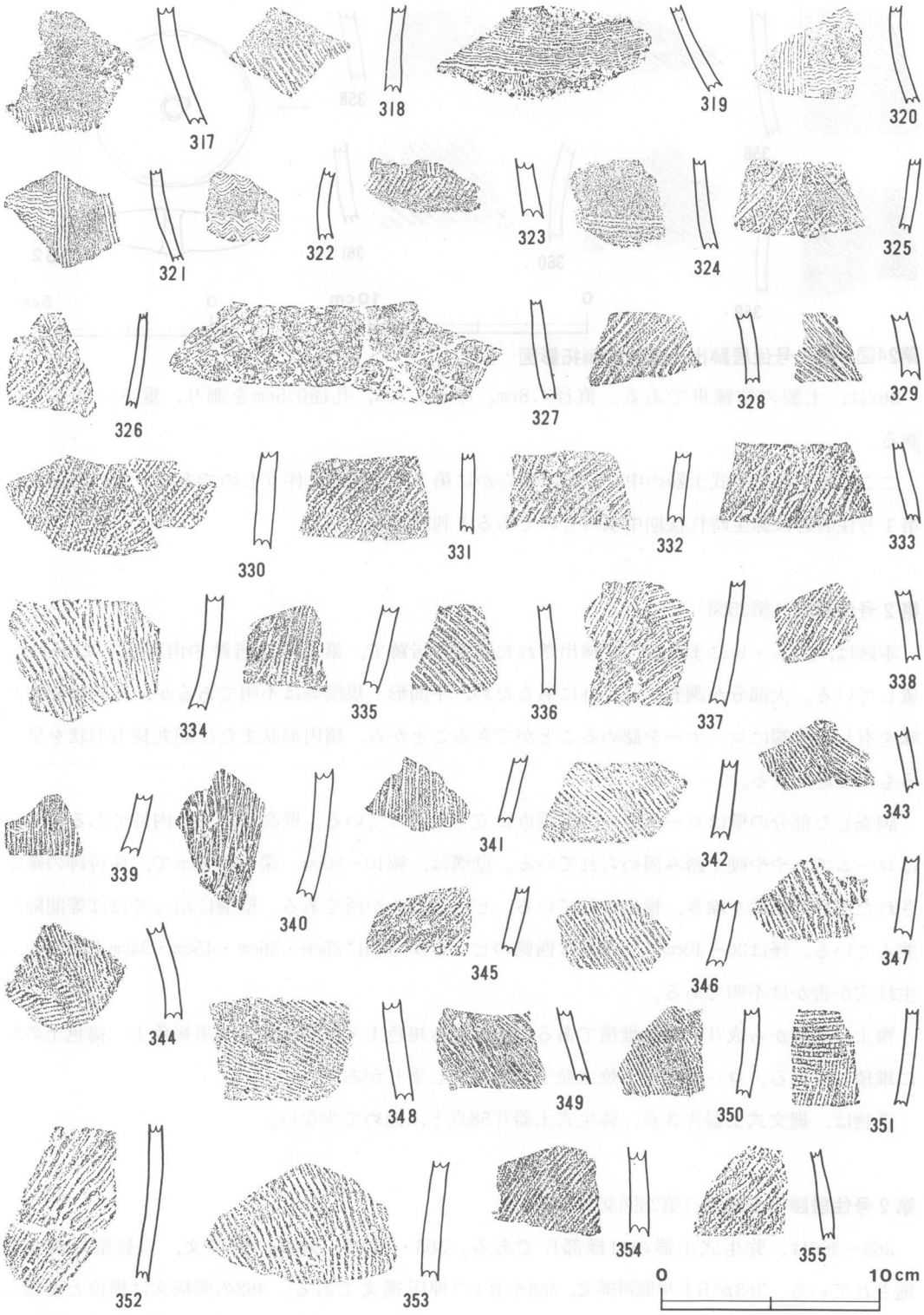
第21図　第１号住居跡炉跡実測図

に施されている。器面の剝落が著しく，櫛描文は５段まで確認されたにとどまる。胴部の縄文は，LRの縄２本をLに撚った縄を原体として用いている。底部には木葉痕が見られる。弥生時代後期の中頃のものと考えられる。306～308は，弥生式土器の底部である。306は，底径10.6cm，現存高2.8cmを測り，色調は橙色を呈する。胴部はやや開いて立ち上がり，底部の周囲は，やや突き出す。胴部にはLrの縄を巻いた絡条体の回転圧痕文が付され，底部には木葉痕が認められる。307は，底径7.2cm，現存高4.5cmを測り，色調は灰褐色を呈する。胴部は外反して立ち上がり，内面・底面はなで整形である。胴部には，ＬＲＬ（複節）の縄に，Rℓの縄を１条巻き付けて回転押捺している。308は，底径が推定で15.8cm，現存高3.2cmを測り，色調は灰褐色を呈する。胴部はやや開き気味に立ち上がり，底部の周囲はやや突き出す。内面及び胴部下端はなで整形である。胴部には，RLまたはRℓの縄を巻いた絡条体の回転圧痕文が，底部には木葉痕が見られる。

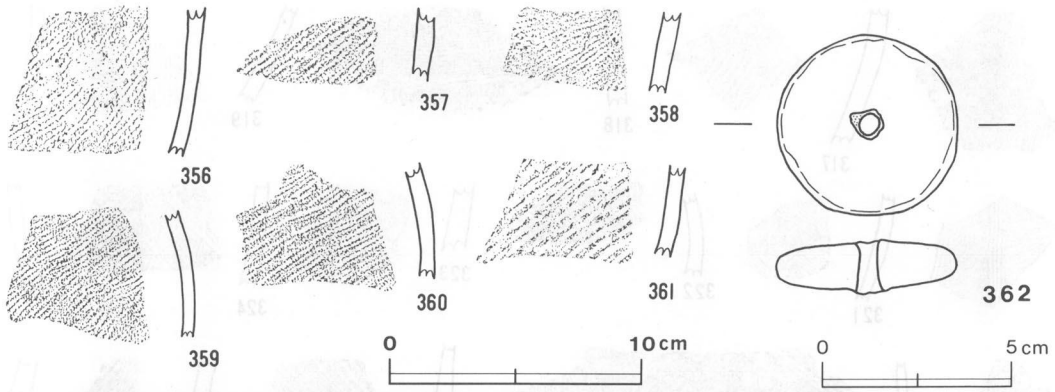
309～312は口縁部片である。309は，口唇部に棒状工具による刻みを有し，頸部には，縦位の櫛描文が施されている。310・311は，いずれも口唇部を内外から交互に押圧している。312は折り返し口縁で，折り返しの下端には棒状工具によると考えられる刺突文が施され，外面にはLrの縄を巻いた絡条体が回転され，口唇部には同じ絡条体が押圧されている。313～327は頸部片である。313～318は，頸部を無文とし，胴部に縄文または絡条体の回転圧痕文を施しているもの，319～324は，縦位・横位・波状の櫛描文が施されるもの，325～327は，箆状工具による格子状の沈線文が施されるものであり，同一個体の可能性が高い。328～361は胴部片で，絡条体の回転圧痕文や縄文のいずれか一方，または双方が見られる。



第22図　第１号住居跡出土遺物実測拓影図　(1)



第23図　第１号住居跡出土遺物拓影図　(2)



第24図　第１号住居跡出土遺物実測拓影図（3）

362は，土製の紡錘車である。直径4.8cm，厚さ1.3cm，孔径0.5cmを測り，重さは30.5ｇを測る。

ここに述べた弥生式土器の中で，305は明らかに第１号住居跡に伴うものである。このことから，第１号住居跡は弥生時代後期中頃のものであると判断した。

第２号住居跡（第25図）

本跡は，D7b_7・b_8にまたがって検出された竪穴住居跡で，第１号住居跡の南南西約7.5ｍに位置している。大部分が調査エリア外にあるため，平面形・規模等は不明であるが，東側半分が丸味を有し，東端にコーナーを認めることができることから，楕円形状または隅丸長方形状を呈するものと思われる。

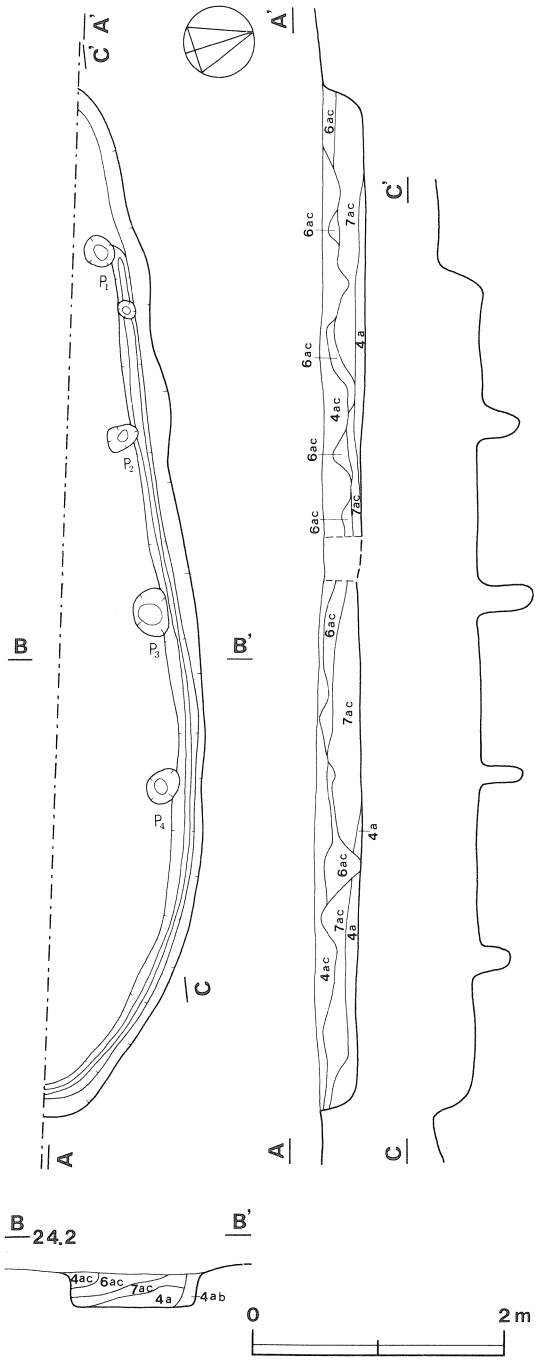
調査した部分の壁はロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は，35cm内外である。床面はロームで，やや硬く踏み固められている。壁溝は，幅10～20cm，深さ約５cmで，住居跡の確認された部分の西端を除き，検出されている。ピットは４か所である。壁溝に沿ってほぼ等間隔に並んでいる。径は30～40cmで，深さは西側のピットから順に25cm・36cm・45cm・34cmを測るが，主柱穴か否かは不明である。

覆土は４層から成り，自然堆積である。上位から褐色土・極暗褐色土・黒褐色土・褐色土の順に堆積している。ローム粒子・焼土粒子を含み，しまりがある。

遺物は，縄文式土器片３点，弥生式土器片58点と，極めて少ない。

第２号住居跡出土遺物（第26図363～380）

363～366は，弥生式土器の口縁部片である。363・366は，頸部に櫛描文，口唇部に縄文が施されている。363がＲＬ単節斜縄文，365がＲℓの押圧縄文である。362の櫛描文は横位と連弧文を配するという珍しいモチーフになっている。364の頸部は無文で，口唇部は箆状工具を斜位に



第25図　第２号住居跡実測図

押圧している。365は頸部外面の輪積み痕を意図的に残し，その頂部に絡条体の回転圧痕文を施している。また，部分的にＲℓの押圧縄文が見られ，口唇部には，棒状工具による刻みが施されている。367～370は，頸部片である。367は，312と同一個体と思われる。368は頸部を無文とするもの，369・370は頸部に櫛描波状文を有しているものである。371～379は胴部片である。371～377は，全て絡条体の回転圧痕文が施されたものである。378・379には結節縄文が見られる。

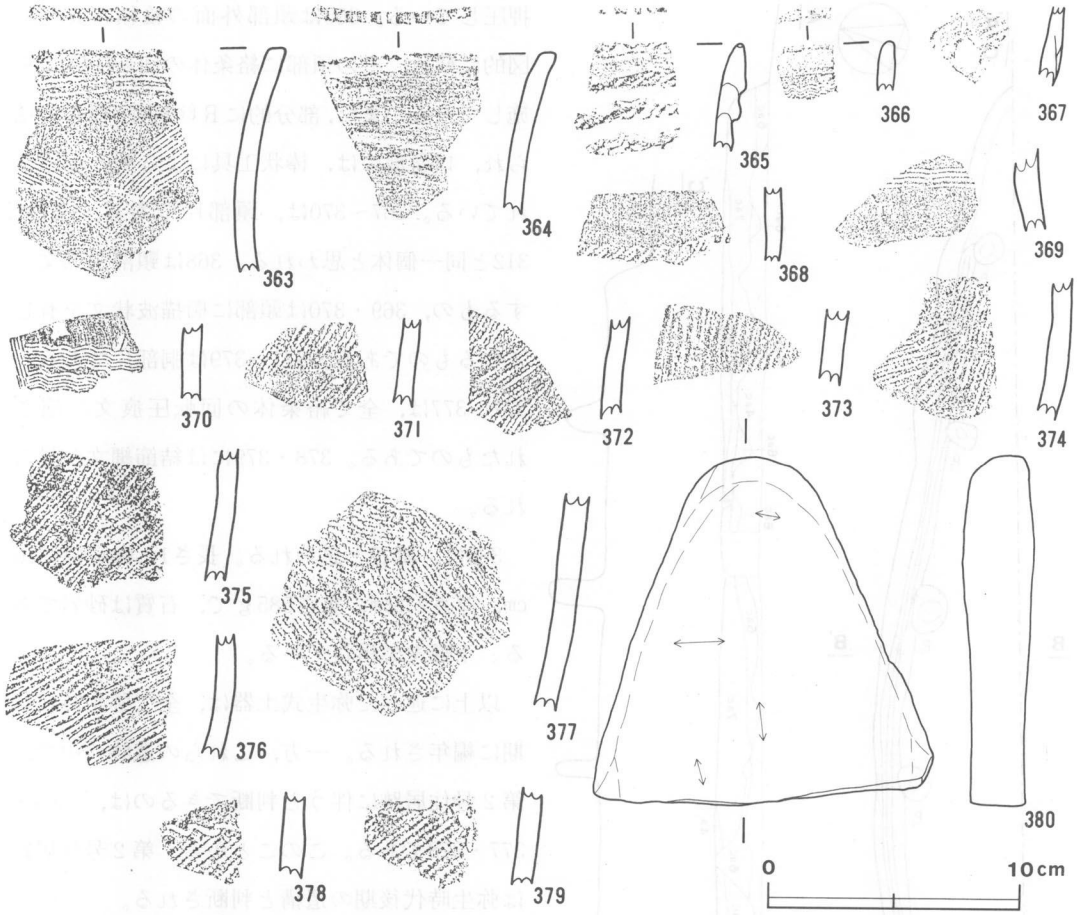
380は，砥石と思われる。長さ14.0cm，幅13.6cm，厚さ2.8cm，重さ585ｇで，石質は砂岩である。下部を欠損している。

以上に述べた弥生式土器は，全て弥生時代後期に編年される。一方，これらの遺物の中で，第２号住居跡に伴うと判断できるのは，363・377・378である。このことから，第２号住居跡は弥生時代後期の遺構と判断される。

第４号住居跡（第27図）

本跡は，C7h_1・h_2・i_1・i_2にまたがって検出された竪穴住居跡で，第６号住居跡の西約4.5mに位置している。北コーナー付近を，第86号土坑に切られている。

平面形は隅丸長方形状であるが，東コーナー部は特に丸味を有し，西コーナーは，南北両コーナーと比較して，やや張り出している。長軸方向はＮ－52°－Ｗを指す。規模は6.5m×5.3mである。壁はロームで，50～70°のゆるやかな立ち上がりを示している。壁高は，15～20cmである。床面はロームで，平坦であり，全体に軟弱である。壁溝は検出されなかった。炉は，中央からやや北東側の辺に寄った位置に検出された。平面形は長径1.1m，短径0.75mの不整楕円形状を呈し，

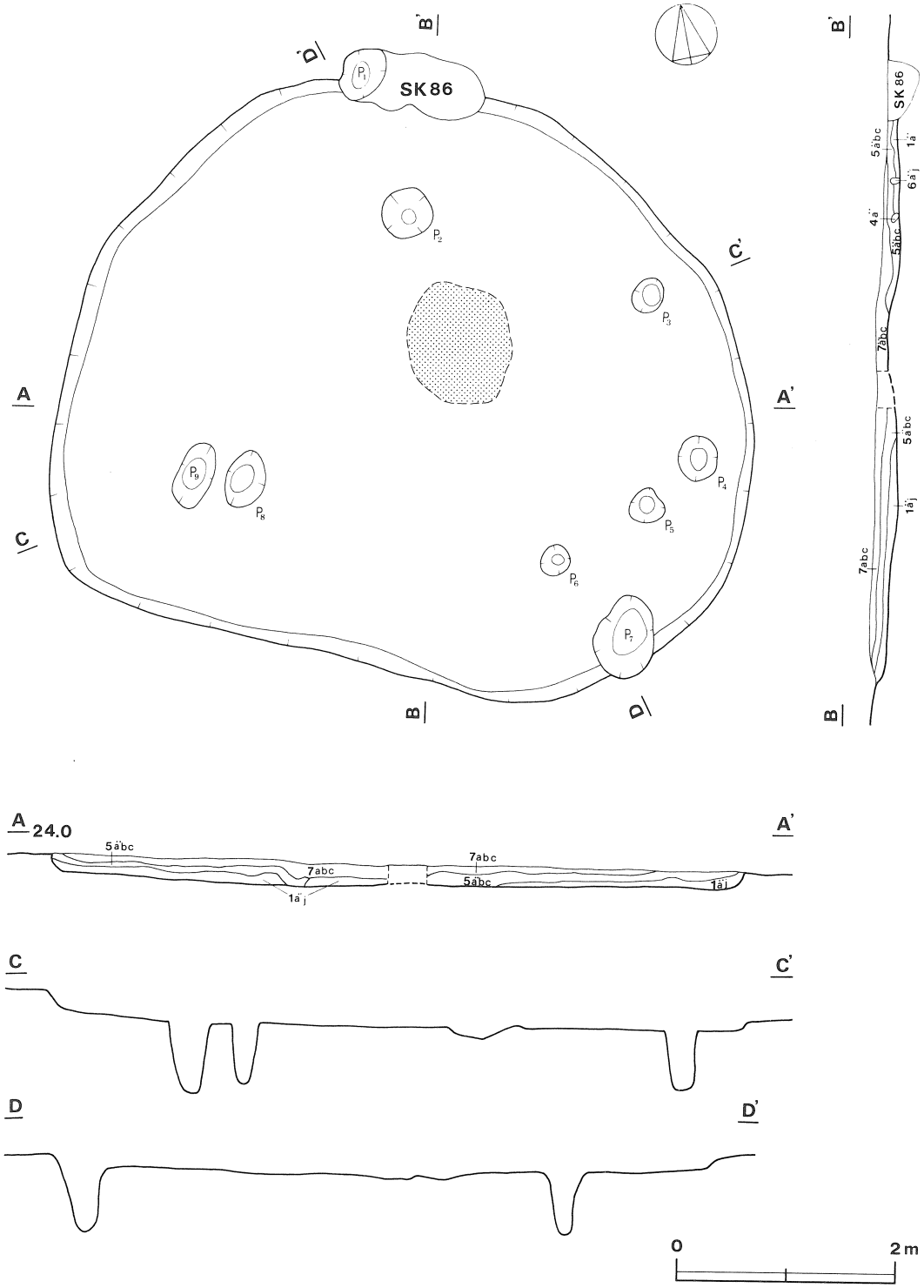


第26図　第２号住居跡出土遺物実測拓影図

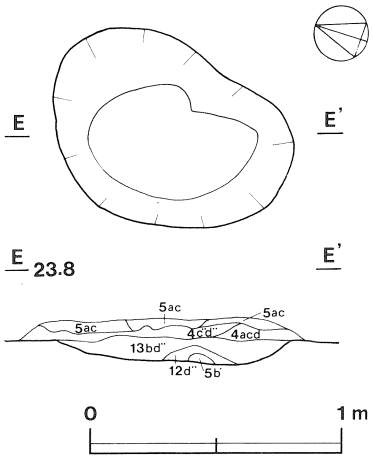
床を皿状に５cm程掘り凹めた地床炉である。長径方向は，N－32°－Eを指している。ピットは，９か所である。P_1とP_7は，壁にかかっている。さらに，ピットの配列を見ると，東コーナーを除き，炉を中心にして対称になっている。つまり，P_1とP_2，P_6とP_7，P_8とP_9がそれぞれ１組になり，３か所の柱穴群を構成するらしい。これらは，直径30～50cm，深さは50～66cmである。しかし，東コーナーのP_3は径30cm，深さ52cmであるが，対になるピットは見当らなかった。P_4・P_5は，直径30～40cmであるが，深さはP_4が14cm，P_5が33cmと浅いものである。本跡の平面形状とこれらのピット群の配列から，このP_4とP_5がP_3と対応して出入口部を構成した可能性を指摘することができる。この東コーナーが他のコーナーと比較して特に丸いのは，この場所が本跡の出入口部であったからであろう。

覆土は３層からなり，自然堆積である。上位から，黒褐色土・暗褐色土・明褐色土の順に堆積している。各々ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含み，ややしまっている。

遺物は，第29図に掲載したもののほか，弥生式土器片101点，中世の遺物４点がある。



第27図　第４号住居跡実測図



第28図　第４号住居跡炉跡実測図

第４号住居跡出土遺物（第29図381～401）

381は，口縁部・底部を欠損する弥生式土器である。胴部最大径20.1cm，現存高17.3cmを測り色調は赤灰色を呈する。頸部は箆による格子文と鋸歯文を配し,中間にはＬＲ単節斜縄文を施している。縄文原体は，上が閉端，下が開端である。開端は，一方の条を他方に結んで撚りの戻りを防止している。このため，Ｓ字状の結節文が見られる。胴部はＲＬの縄を巻き付けた絡条体を横位及び斜位に回転押捺している。384は頸部で，口縁と胴部を欠損している。現存高6.2cmを測り色調はにぶい赤褐色を呈する。すぼまった胴部からほぼ垂直に頸部が立ち上がり，やや外反気味に上方へ広がっている。頸部を無文とし,胴部にはＲＬ単節斜縄文を施している。382・383は底部である。382は,底径が推定7.0cm，現存高が2.8cmを測り，色調は黒褐色を呈する。383は，底径が推定7.6cm,現存高が2.4cmを測り，色調はにぶい赤褐色を呈する。いずれも内面はなで整形，外面にはＬＲの縄にＲℓの縄を巻いた絡条体の回転圧痕文が施され，底部には木葉痕が認められる。

385～387は口縁部片である。いずれも折り返し口縁で，外面に縄文が施されている。385は，口唇部に縄の押圧が，386・387は折り返しの下端に指頭または棒状工具によると思われる刺突文が見られる。縄文の原体は，385が付加条（ＬＲ単節にＲℓの縄を２条巻いたもの）で，386がＬＲ単節の縄，387がRL単節の縄である。388～394は頸部片である。389・391・394は頸部を無文とし，胴部に縄文を施したもの，388・392・393は頸部に櫛描文を施したものである。389・391の縄文は，ＲＬ単節斜縄文，392は絡条体の回転圧痕文，394はLR単節の縄をＬに撚った縄の回転圧痕文である。390は，LR単節の縄による縦位押圧と，その間に箆による格子文を施している。箆先を縦にあてた部分と横にあてた部分がある。

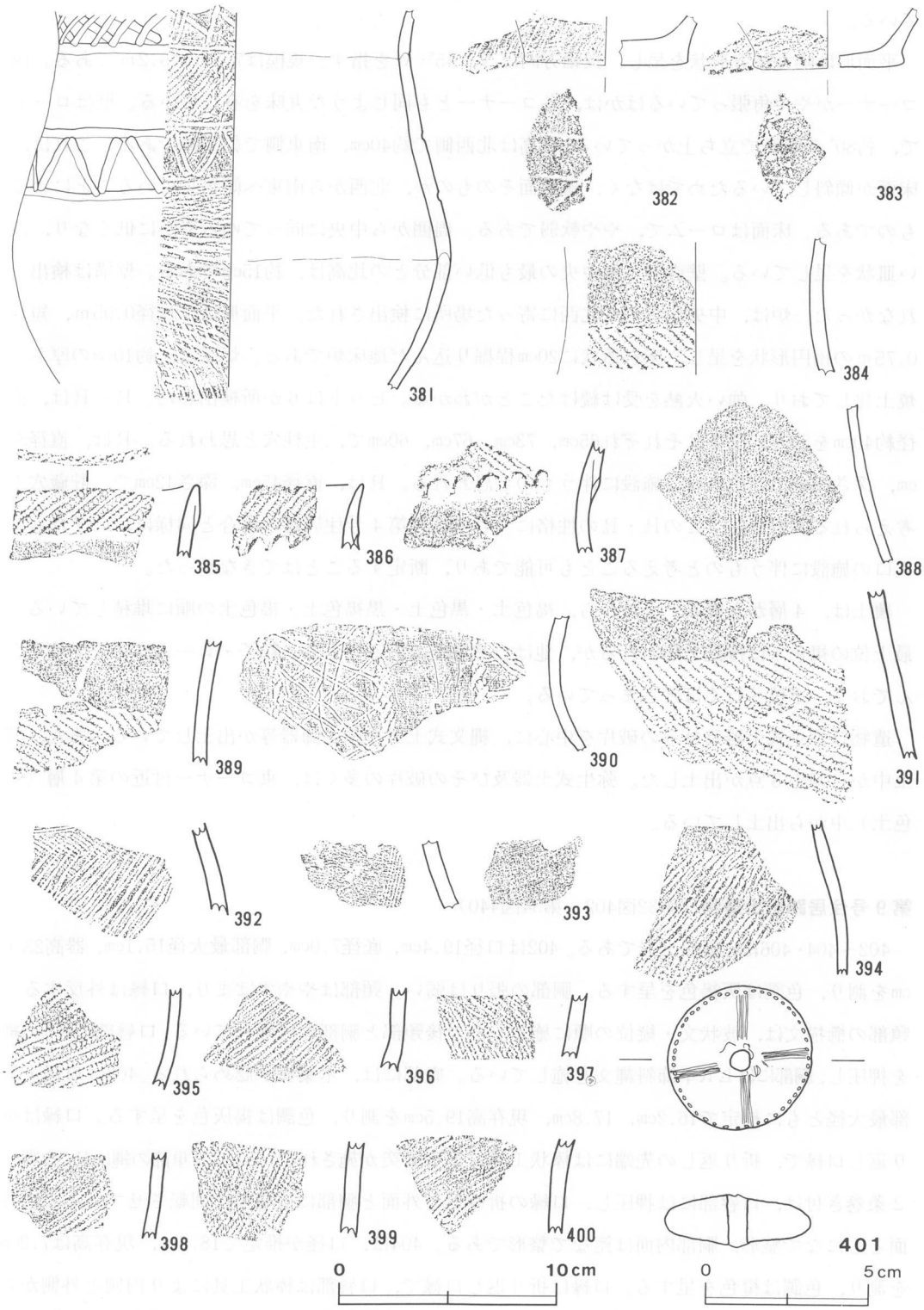
395～400は，縄文または絡条体の回転圧痕文が施された胴部片である。

401は，土製の紡錘車である。直径4.4cm，厚さ1.5cm，孔径0.6cmを測り，重さは25.5ｇを測る。３条の櫛描文が十字状に施され，外縁には細い棒状工具による刺突文が施されている。表・裏とも同じ文様である。刺突文は，表・裏各１周と最外縁にも１周施されている。

以上に述べた弥生式土器は，弥生時代後期に編年されるものであり，第４号住居跡の時期も弥生時代後期と判断される。

第９号住居跡（第30図）

本跡は，A5j_4・B5a_4を中心に確認された竪穴住居跡で，第10号住居跡の北西約4.5ｍに位置し



第29図　第４号住居跡出土遺物実測拓影図

ている。

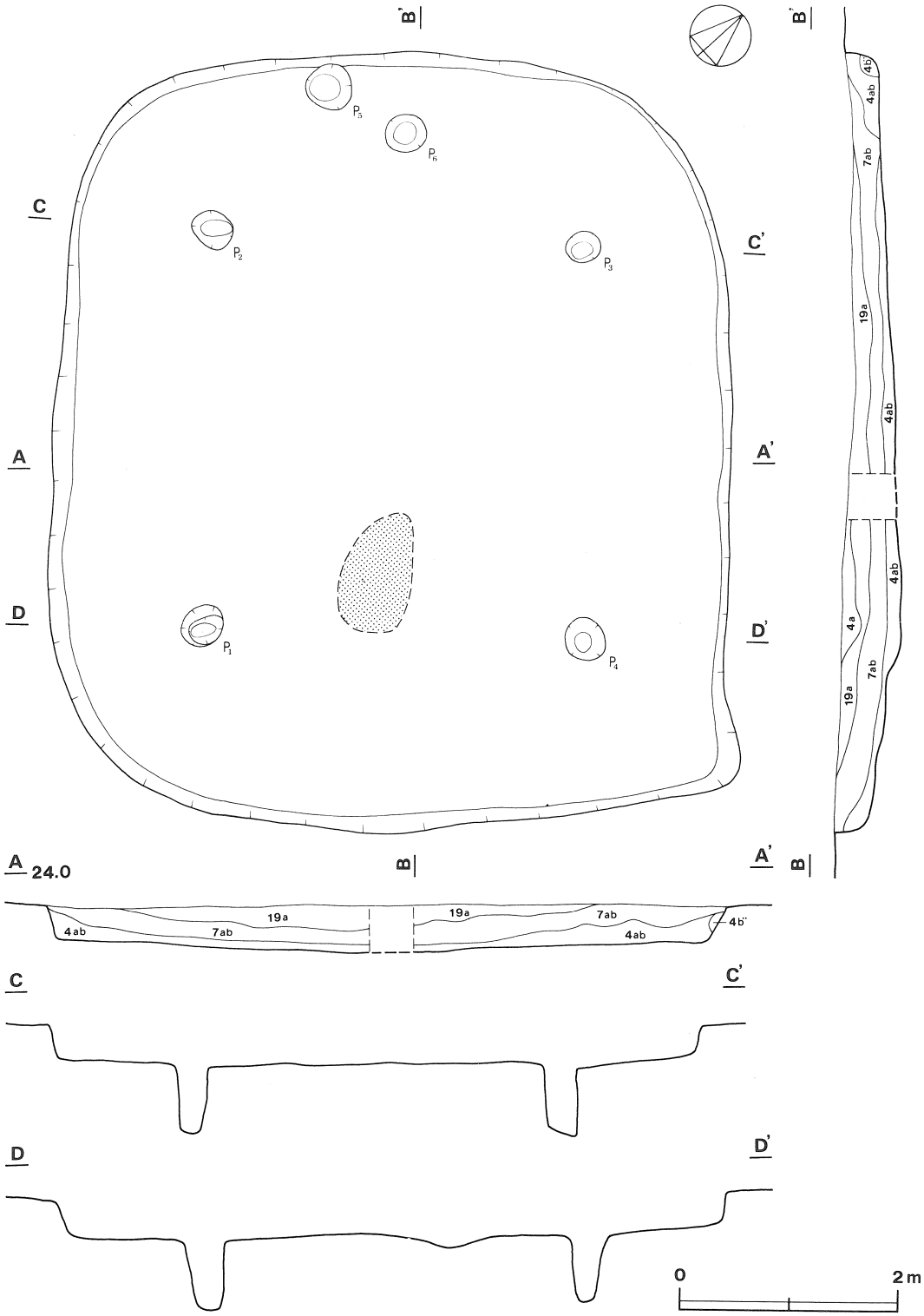
平面形は隅丸長方形状を呈し，長軸方向はN－45°－Wを指す。規模は7.2m×6.2mである。西コーナーがやや角張っているほかは，各コーナーとも同じような丸味を有している。壁はロームで，約80°の傾斜で立ち上がっている。壁高は北西側で約40cm，南東側で約30cmである。これは，床面が傾斜しているためではなく，確認面そのものが，北西から南東へ傾斜していることによるものである。床面はロームで，やや軟弱である。周囲から中央に向ってゆるやかに低くなり，浅い皿状を呈している。壁直下と床中央の最も低い部分との比高は，約15cmである。壁溝は検出されなかった。炉は，中央からやや北西に寄った場所に検出された。平面形は，長径0.95m，短径0.75mの楕円形状を呈し，床を皿状に20cm程掘り込んだ地床炉である。炉床は，約10cmの厚さで焼土化しており，強い火熱を受け続けたことがわかる。ピットは6か所検出した。P_1～P_4は，直径約40cmを測り，深さはそれぞれ65cm，73cm，67cm，60cmで，主柱穴と思われる。P_6は，直径35cm，深さ28cmで，出入口の施設に伴うものと思われる。P_5は，直径45cm，深さ42cmで，貯蔵穴と考えられる。しかし，このP_5・P_6の性格については，第4号住居跡の場合と同様に，いずれも出入口の施設に伴うものと考えることも可能であり，断定することはできなかった。

覆土は，4層から成る。上位から，褐色土・黒色土・黒褐色土・褐色土の順に堆積している。最上位の褐色土は攪乱と思われるが，他は自然堆積である。ローム粒子・ロームブロック等を含んでおり，下位へ行くほどしまっている。

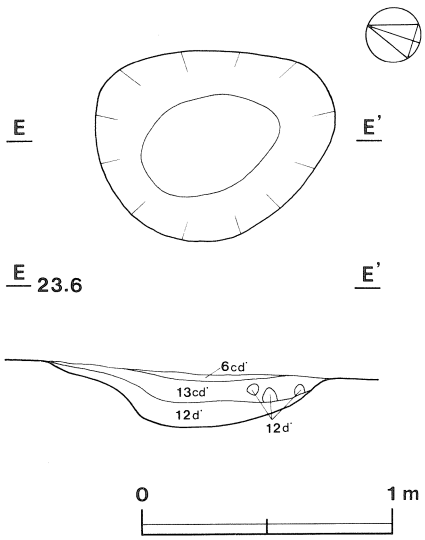
遺物は弥生式土器及びその破片を中心に，縄文式土器片や土師器等が出土している。また，覆土中から勾玉3点が出土した。弥生式土器及びその破片の多くは，東コーナー付近の第4層（褐色土）中から出土している。

第9号住居跡出土遺物（第32図402～第34図440）

402～404・406は，甕形土器である。402は口径19.4cm，底径7.0cm，胴部最大径15.1cm，器高23.0cmを測り，色調は灰褐色を呈する。胴部の張りは弱い。頸部はややすぼまり，口縁は外反する。頸部の櫛描文は，波状文・縦位の順に施し，その後頸部と胴部を区画している。口唇部にRℓの縄を押圧し，胴部にはLR単節斜縄文を施している。底部には，木葉痕が認められる。403は口径・胴部最大径ともに推定で16.2cm，17.8cm，現存高19.5cmを測り，色調は褐灰色を呈する。口縁は折り返し口縁で，折り返しの先端には棒状工具による刺突が施されている。LR単節の縄にRℓの縄を2条巻き付け，口唇部には押圧し，口縁の折り返し外面と胴部には横位に回転させている。内外面ともになで整形，胴部内面は篦なで整形である。404は，口径が推定で18.6cm，現存高は7.2cmを測り，色調は橙色を呈する。口縁は折り返し口縁で，口唇部は棒状工具により内側と外側から交互に押圧されている。406は，口径14.2cm，底径5.9cm，器高14.8cmを測り，色調は褐灰色を呈



第30図　第９号住居跡実測図

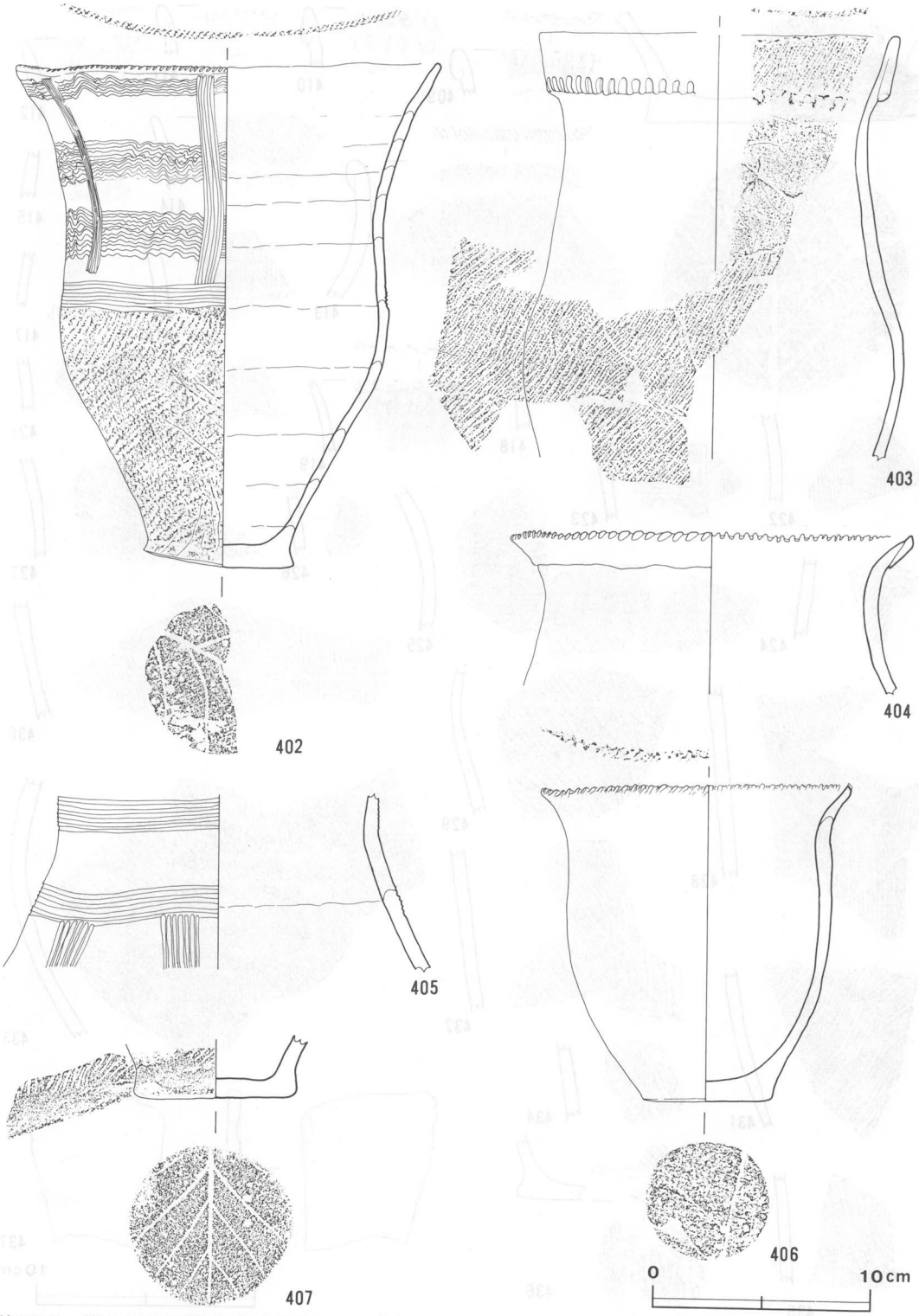


第31図　第９号住居跡炉跡実測図

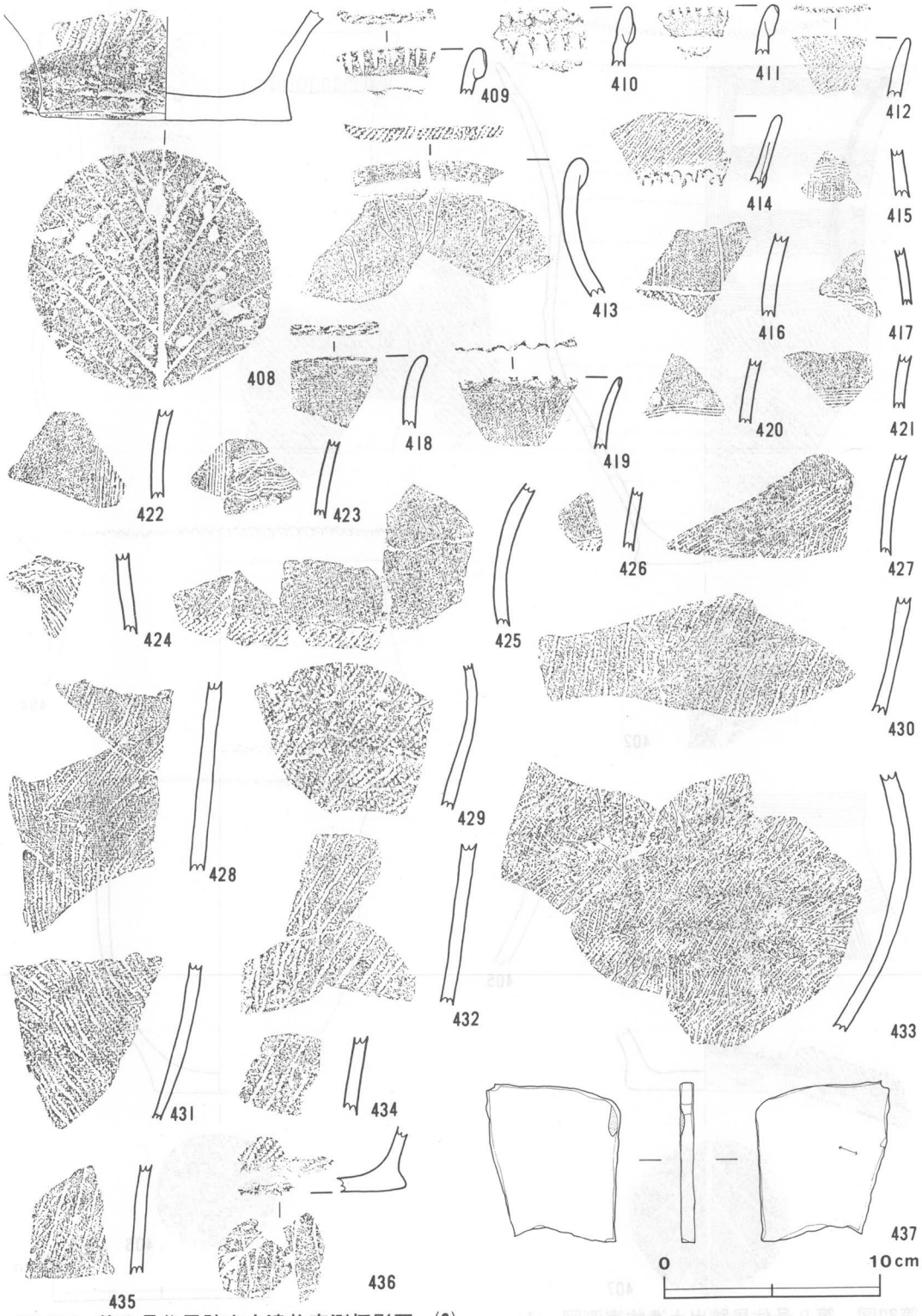
する。胴部の中ほどから直立し，口縁は外反している。口唇部の形状は404と同じで，棒状工具の交互押圧が施されているが，頸部以外は無文である。底部には木葉痕が認められる。405は，壺形土器の頸部である。現存高は7.9cmを測り，色調はにぶい赤褐色を呈する。強くくびれた部分で，７本刃の櫛描文が，横位・縦位の順に施されている。407・408は，底部である。406は底径7.6cm，現存高2.9cmを測り，色調はにぶい橙色を呈する。408は底径11.6cm，現存高5.2cmを測り，色調はにぶい赤褐色を呈する。両者とも，胴部には付加条の縄文が施され，底部には木葉痕が認められる。いずれも内面はなで整形である。

409～416は，口縁部片である。409～411・413・414は折り返し口縁である。409・411は，口唇部の外寄りの位置を棒状工具で押圧して刻みを付し，409ではさらに口唇部に押圧文を施している。410は，折り返し下端に棒状工具の押圧文が施され，口唇部は内側と外側から交互に押圧を加えている。413は，口縁の外反がやや強く，口唇部にはLRの縄にＬｒの縄を１条巻き付けた付加条の縄文が施されている。412は，口縁に羽状縄文が施されていると思われるが，摩滅しているため判然としない。口唇部にも押圧が施されている。414は，折り返し下端に棒状工具による刺突が施され，口縁にはLRの縄にＲℓの縄を２本巻き付けた付加条の縄文が施されている。415は，口唇部に縄の圧痕が見られるが，押圧によるものか，回転によるものか判然としない。416は，410の口唇部の形態と同様である。417～423・425～427は頸部片である。これらの中で，417～423は櫛描文が施され，425～427は頸部を無文にしている。424・428～435は胴部片である。424は，胴部の縄文帯の上端で，撚りの戻りを防止するために条を結び付けたと思われ，Ｓ字状の結節文が見られる。428～435は，縄文・付加条の縄文・絡条体の回転圧痕文が見られる。436は底部片である。胴部にLR単節斜縄文が施され，底部には木葉痕が認められる。底部周囲は突き出ており，胴部はやや開いて立ち上がっている。

437は砥石である。長さ7.4cm，幅6.2cm，厚さ0.6cm，重さは57.5ｇで，石質は頁岩である。火熱を受けている。438～440は勾玉で，いずれも石質は滑石片岩である。438は，高さ4.3cm，幅2.4cm，厚さ1.25cmで，重さは17ｇである。孔は，ほぼ図の見える面側から穿孔されており，反対側からは孔の形を調整するにとどまっている。439は，高さ2.7cm，幅1.6cm，厚さ1.2cmで，重さは6.0ｇである。孔は両側から穿孔されている。440は，高さ1.5cm，幅1.0cm，厚さ0.6cmで，重さは1.0ｇである。孔は両側から穿孔されている。一部が欠損している。この３点の中で，438・439は覆土中から出土した。



第32図　第９号住居跡出土遺物実測図（1）



第33図　第９号住居跡出土遺物実測拓影図　(2)

第34図　第９号住居跡出土遺物実測図（3）

以上に述べた弥生式土器は，すべて弥生時代後期に編年される。このことから，第９号住居跡は弥生時代後期に比定できるものと判断される。

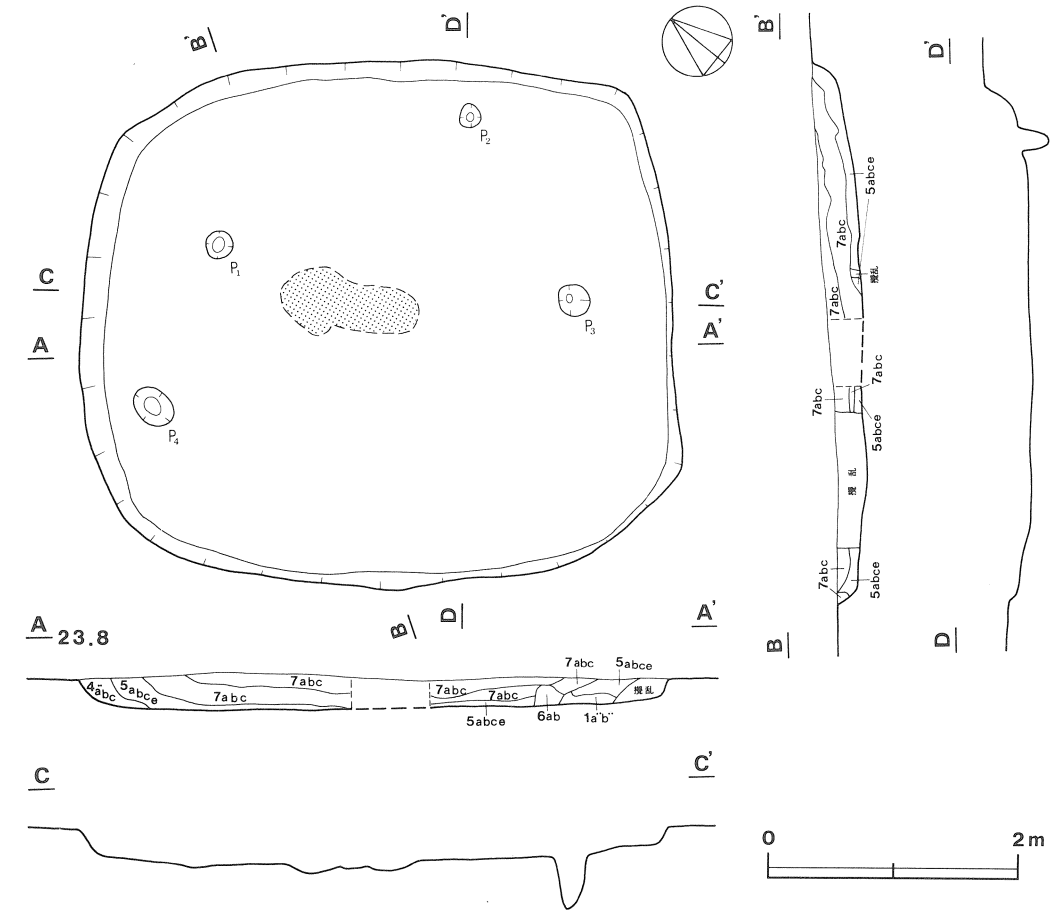
第16号住居跡（第35図）

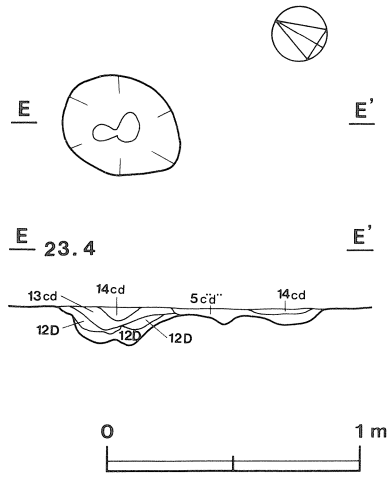
本跡は，B4j_6・C4a_6を中心に検出された竪穴住居跡で，第14号住居跡の北約３ｍに位置する。

平面形は隅丸長方形状を呈し，長軸方向は，N－41°－Wを指す。規模は4.7ｍ×4.2ｍである。東コーナーが，やや角張っている。また，北東・北西・南西の各辺がゆるやかな弧状を呈するのに対し，南東辺は直線状である。壁はロームで，約70°の傾斜を有し，立ち上がりはゆるやかである。壁高は，15～25cmである。床面はロームで，軟弱であり，比較的平坦である。壁溝は検出されなかった。炉は，中央からやや北西へ寄った位置に検出された。平面形は，長径0.5ｍ，短径0.4ｍの楕円形状を呈し，長径方向はＮ－０°を指す。床を皿状に10cm程掘り凹めた地床炉である。炉床のロームは，約５cmの厚さが焼土化していた。ピットは，４か所である。深さは，P_1が18cm，P_2が28cm，P_3が43cm，P_4が20cmである。配列には規則性が認められず，また，主柱穴と判定できるものも無かった。

覆土は，自然堆積である。上位から黒褐色土・暗褐色土の順に堆積している。黒褐色土層は，上位が暗くさらに二層に分けた。

遺物は，弥生式土器及びその破片を中心に，P_3の周囲から少量が出土したのみである。





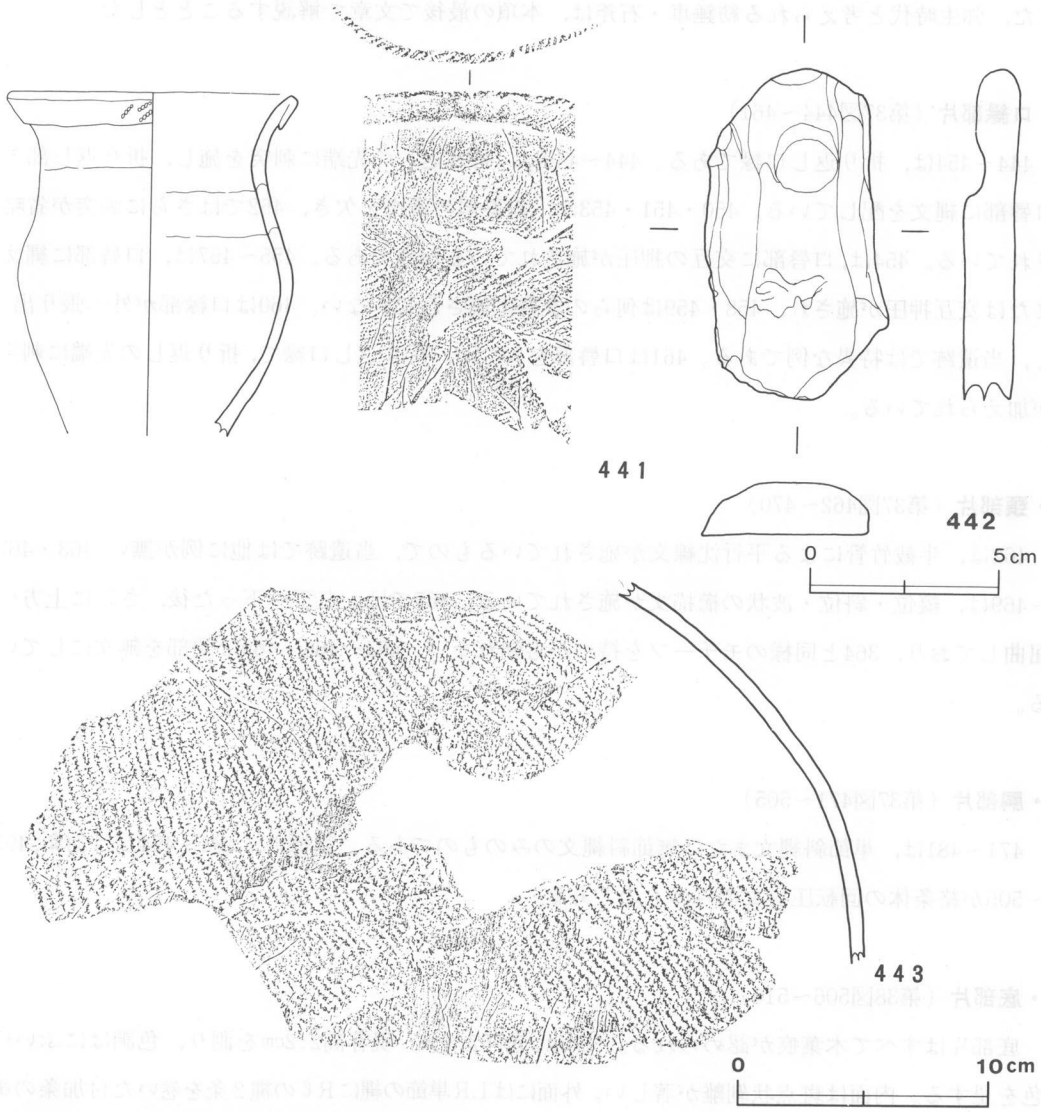
第35図　第16号住居跡実測図

第16号住居跡出土遺物（第36図441～443）

441は，小型壺形土器である。口径11.1cm，胴部最大径10.9cm，現存高13.7cmを測り，色調はにぶい橙色を呈する。口縁は折り返し口縁で，外面は大部分なで整形がなされ，一部に縄文が施されている。口唇部と胴部は，LR単節の縄にRℓの縄２条を巻き付けた付加条の縄文が施されている。内面はなで整形であるが，斑点状剥離が見られる。

442は，大型壺形土器の胴部から頸部にかけての破片である。胴部は強く張って球状を呈したと思われ，頸部はすぼまっていたのであろう。RL単節斜縄文が施されている。内面は剥離が著しく，調整痕の観察ができない。胎土は砂粒を多量に含み，色調は明赤褐色を呈する。

443は石器で，使途等は不明である。砥石であろうか。長



第36図　第16号住居跡出土遺物実測拓影図

さ8.7cm，幅5.0cm，重さ85.0ｇである。石質は砂岩で，熱を受けている。

442は，明らかに第16号住居跡に伴うものであり，弥生時代後期と判断されることから，第16号住居跡の時期も弥生時代後期と考えられる。

2　遺構外出土遺物

遺構外出土の弥生式土器は，実測可能な506・507を除き，すべて破片である。また，時期的にも弥生時代後期のみと見られる。そこで，ここでは，部位ごとにまとめて解説することとする。

また，弥生時代と考えられる紡錘車・石斧は，本項の最後で文章で解説することとした。

・口縁部片（第37図444～461）

444～454は，折り返し口縁である。444～449は，折り返しの先端に刺突を施し，折り返し部と口唇部に縄文を配している。450・451・453は，口唇部の縄文を欠き，452ではさらに刺突が省略されている。454は，口唇部に交互の押圧が施されているだけである。455～457は，口唇部に縄文または交互押圧が施され，458・459は何らの文様も施されていない。460は口縁部が外へ張り出し，当遺跡では特異な例である。461は口唇部を欠くが，折り返し口縁で，折り返しの先端に刺突が加えられている。

・頸部片（第37図462～470）

462は，半截竹管による平行沈線文が施されているもので，当遺跡では他に例が無い。463・467～469は，縦位・斜位・波状の櫛描文が施されている。467では，左下へ下った後，さらに上方へ屈曲しており，364と同様のモチーフを持つかも知れない。464～466・469は頸部を無文にしている。

・胴部片（第37図471～505）

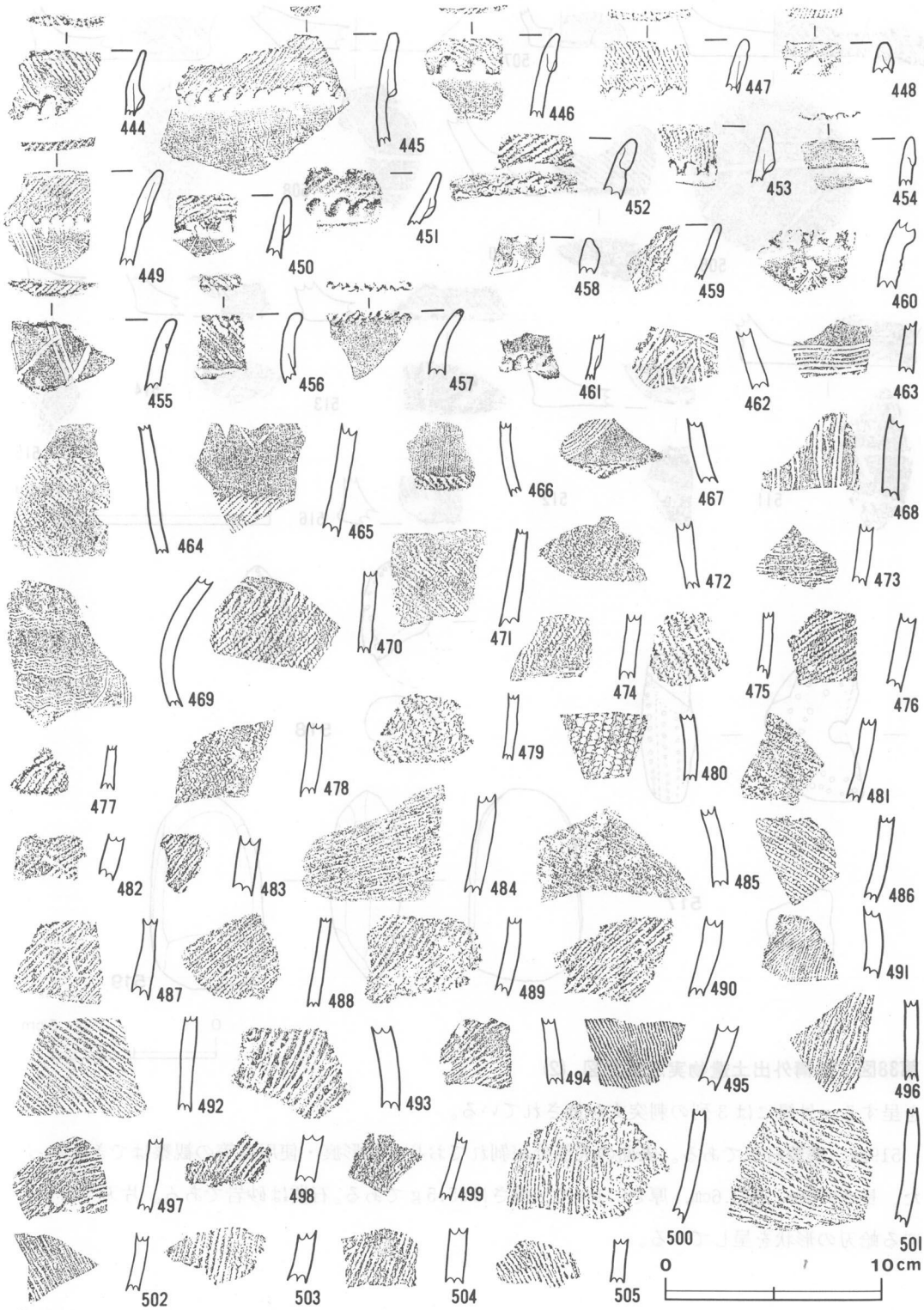
471～481は，単節斜縄文または無節斜縄文のみのものである。同様に，482～494が付加条，495～505が絡条体の回転圧痕文のみのものである。

・底部片（第38図506～516）

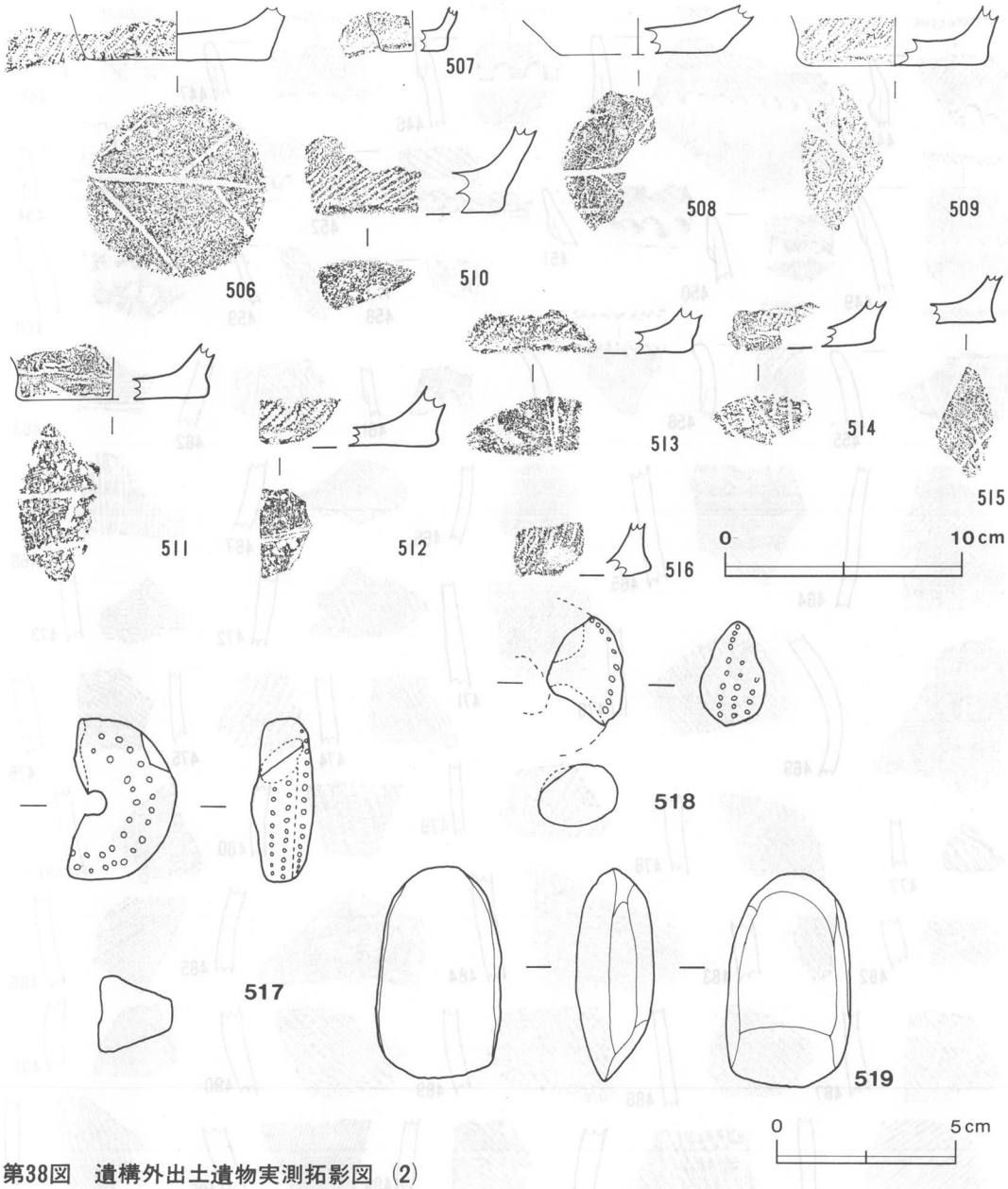
底部片はすべて木葉痕が認められる。506は，底径7.8cm，現存高2.2cmを測り，色調はにぶい橙色を呈する。内面は斑点状剥離が著しい。外面にはLR単節の縄にRℓの縄２条を巻いた付加条の縄文が施されており，底部には木葉痕が認められる。507は，ミニチュア土器である。底径は推定で2.6cm，現存高は1.8cmを測り，色調は橙色を呈する。内面と底部はなで整形，外面は絡条体の回転圧痕が施されている。また，508・515を除き，縄等の回転圧痕文が施されている。底部の周囲はやや突き出す例（506・507・510～516）が多い。

・その他（第38図517～519）

517・518は土製紡錘車である。517は，直径4.6cm，厚さ1.7cm，孔径0.7cmで，重さは19gである。色調はにぶい橙色を呈し，片面に２列，外縁に３列の刺突文を施している。518は，小片のため直径等の復元は困難である。厚みは1.8cm，現存長は3.0cmで，重さは6.0ｇである。色調は浅黄橙色



第37図　遺構外出土遺物拓影図　(1)



第38図　遺構外出土遺物実測拓影図（2）

を呈する。外縁には３列の刺突文が施されている。

519は，磨製石斧である。表面の大部分が剝れており，整形痕・使用痕等の観察はできなかった。長さ6.0cm，幅3.6cm，厚さ2.1cmで，重さは55.5ｇである。石質は砂岩である。片刃で，いわゆる蛤刃の形状を呈している。

表5　遺構外出土遺物出土位置一覧表（2）

番　号	出土位置	番　号	出土位置
444	SI－ 3	482	SK－ 4
445	SI－ 17	483	SI－ 6
446	SI－ 10	484	SD－ 4
447	SI－ 18	485	〃
448	SK－ 186	486	SI－ 3
449	SD－ 4	487	SK－ 182
450	SI－ 3	488	SK－ 144
451	SI－ 6	489	SI－ 17
452	SK－ 125	490	SK－ 41
453	SK－ 3	491	SI－ 3
454	SI－ 10	492	SD－ 4
455	SI－ 3	493	SI－ 3
456	〃	494	SI－ 13
457	SI－ 6	495	SK－ 3
458	SI－ 10	496	SK－ 216
459	SK－ 188	497	SI－ 10
460	SK－ 231	498	SK－ 3
461	SI－ 13	499	SK－ 188
462	SK－ 137	500	SI－ 3
463	〃	501	〃
464	SD－ 24	502	SI－ 10
465	SK－ 300	503	SK－ 216
466	SI－ 11	504	SK－ 137
467	SI－ 6	505	SK－ 144
468	SI－ 3	506	SD－ 4
469	SD－ 4	507	SI－ 3
470	SI－ 10	508	SD－ 4
471	SD－ 24	509	〃
472	SI－ 10	510	SI－ 11
473	〃	511	SD－ 4
474	〃	512	SI－ 6
475	SI－ 17	513	SI－ 11
476	SI－ 6	514	SK－ 176
477	SI－ 13	515	SK－ 144
478	SI－ 10	516	SK－ 188
479	SI－ 17	517	SK－ 256
480	SI－ 6	518	SK－ 45
481	SK－ 41	519	SI－ 3

第４節　古墳・奈良・平安時代

古墳時代の遺構は，住居跡７軒，土坑１基を調査した。住居跡は，１軒が五領期，６軒が鬼高期のものと考えられる。土坑は，古墳時代後期のものであろう。

奈良・平安時代の遺構は，住居跡３軒を調査した。この中で，２軒が真間期，１軒が国分期と判断される。

１　遺構と遺物

１　五領期

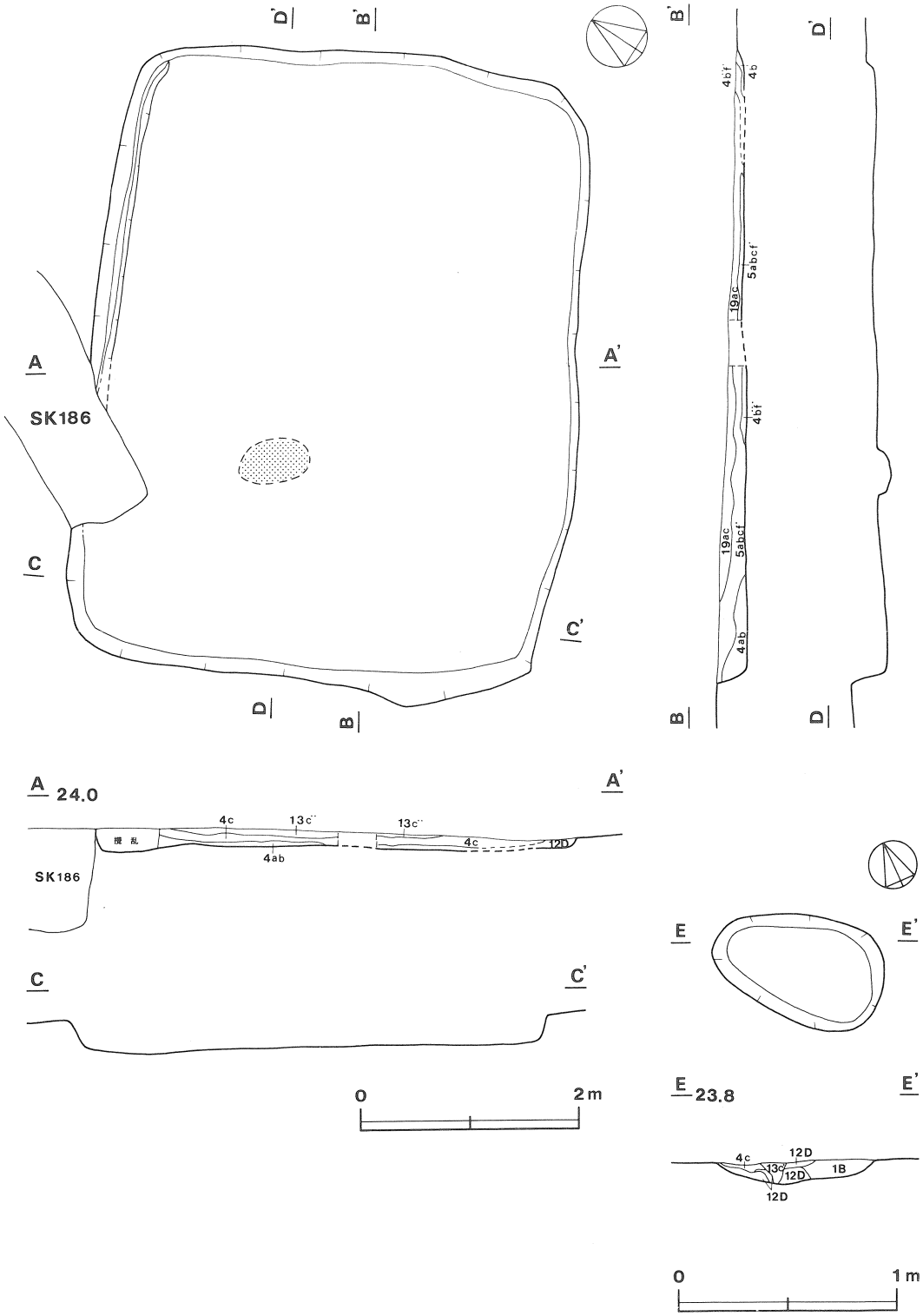
第10号住居跡（第39図）

本跡は，B5 b_6・B5c_6を中心に確認された竪穴住居跡で，第９号住居跡の南東約５ｍに位置している。北西側の壁の中央からやや西へ寄ったところを，第186号土坑によって切られている。

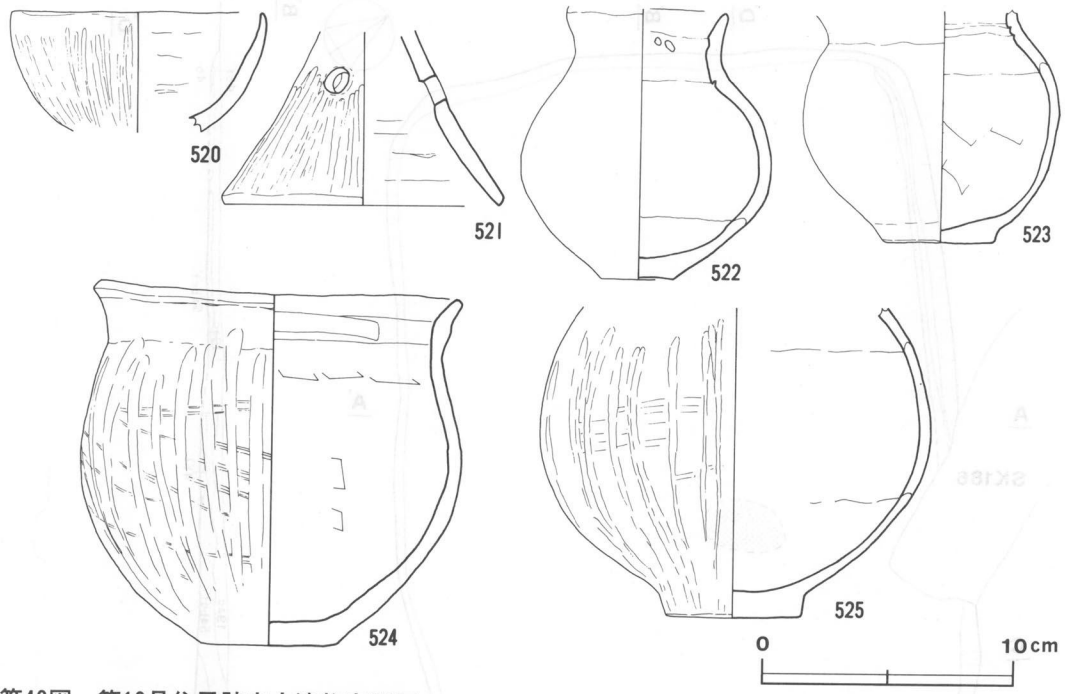
平面形は長方形状を呈し，長軸方向はＮ－28°－Ｅを指している。規模は長軸が5.8ｍ，短軸が4.4ｍである。壁はロームで，約85°の傾斜で立ち上がっている。壁高は約30cmであるが，北東側では６cmと低い。これは，本跡の東側に小支谷が入り込み，遺構確認面が東に向って傾斜しているためである。北西側壁下には，壁溝が検出されている。北コーナーから北西壁に沿って西へ延びるが，第186号土坑の西側には検出されない。壁溝の西端は，第186号土坑によって切られた壁下に位置していたことがわかる。床はロームで，全体に軟弱である。全体に平坦であるが，西コーナー付近がやや低い。ピットは検出できなかった。炉は，中央からやや西へ寄った位置に確認された。床を５cmほど掘り込んだ地床炉である。平面形は長径が80cm，短径が50cmの楕円形状を呈し，長径方向はＮ－48°－Ｗを指している。ピットは，検出できなかった。

覆土は３層から成り，自然堆積である。上位から，黒色土・暗褐色土・褐色土の順に堆積している。最下位の層は多量の炭化材を含み，また，長さ60～80cm，太さ10～15cmの炭化材がいくつか見られたことから，本跡は火災に遭ったものと考えられる。

遺物は第40図に示したもののほか，縄文式土器片３点，弥生式土器片28点，土師器の破片39点が出土した。第40図の520～525は床面直上にあり，しかも炭化材が上にかぶさるような状態にあった。このことから，520～525は，本跡が火災に遭うまで本跡に居住した人々によって実際に使用されていたものと判断された。これらの遺物が伝世されるとは考え難いため，本跡を古墳時代前期に比定した。



第39図　第10号住居跡実測図



第40図　第10号住居跡出土遺物実測図

表6　第10号住居跡出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
40 — 520	土師器 (器台受部)	A (10.0) E 4.8	体部は器厚を減じながら，内彎して立ち上がり，口縁は直立する。丸味を有しており，半球状を呈する。	外面はハケ目整形後 縦位の篦みがき，内面は横位のみがき	良(二次焼成) 砂粒，スコリア にぶい橙色	五領期
521	〃 (器台脚部)	B 10.8 E 6.9	裾は基部から，わずかに外反しながら広がる。裾下端はシャープな稜をなす。 透し孔は等間隔に3か所。	外面みがき 内面なで	普通(二次焼成) 砂粒 にぶい赤褐色	〃
522	〃 (坩)	A 6.2 B 2.8 C 10.0 D 10.9	胴部は強く張っていびつな球状を呈し，口縁はやや外反して立ち上がる。口縁内面に籾の圧痕。	外面縦位のみがき 内面なで	普通(二次焼成) 砂礫 にぶい橙色	〃
523	〃 (〃)	B 4.2 C 9.2 E 9.4	胴部はいびつな球状を呈する。頸部はくびれ，口縁は外反する。胴部上半に煤が付着。底部はやや突き出す。	外面横位なで。 内面輪積痕あり。	普通(二次焼成) 砂粒 にぶい橙色	〃
524	〃 (甕)	A 14.2 B 9.4 C 15.2 D 14.5	胴部は強く外傾して立ち上がり，内彎する。中ほどが強く張って球状を呈する。頸部のすぼまり方は弱い。頸部の器肉はやや肥厚し，口縁は外反する。	外面はハケ目整形後 粗い縦位のみがき 内面篦なで	普通(二次焼成) 砂礫 にぶい赤褐色	〃
525	〃 (〃)	B 5.5 C 15.6 E 12.4	胴部は強く外傾して立ち上がり，中ほどが強く張って球状を呈する。肩部は内傾し，頸部が細かったことをうかがわせる。底部はやや突き出す。	外面はハケ目整形後 粗い縦位のみがき 内面なで	普通(二次焼成) 砂礫 にぶい赤褐色	〃

2　鬼高期

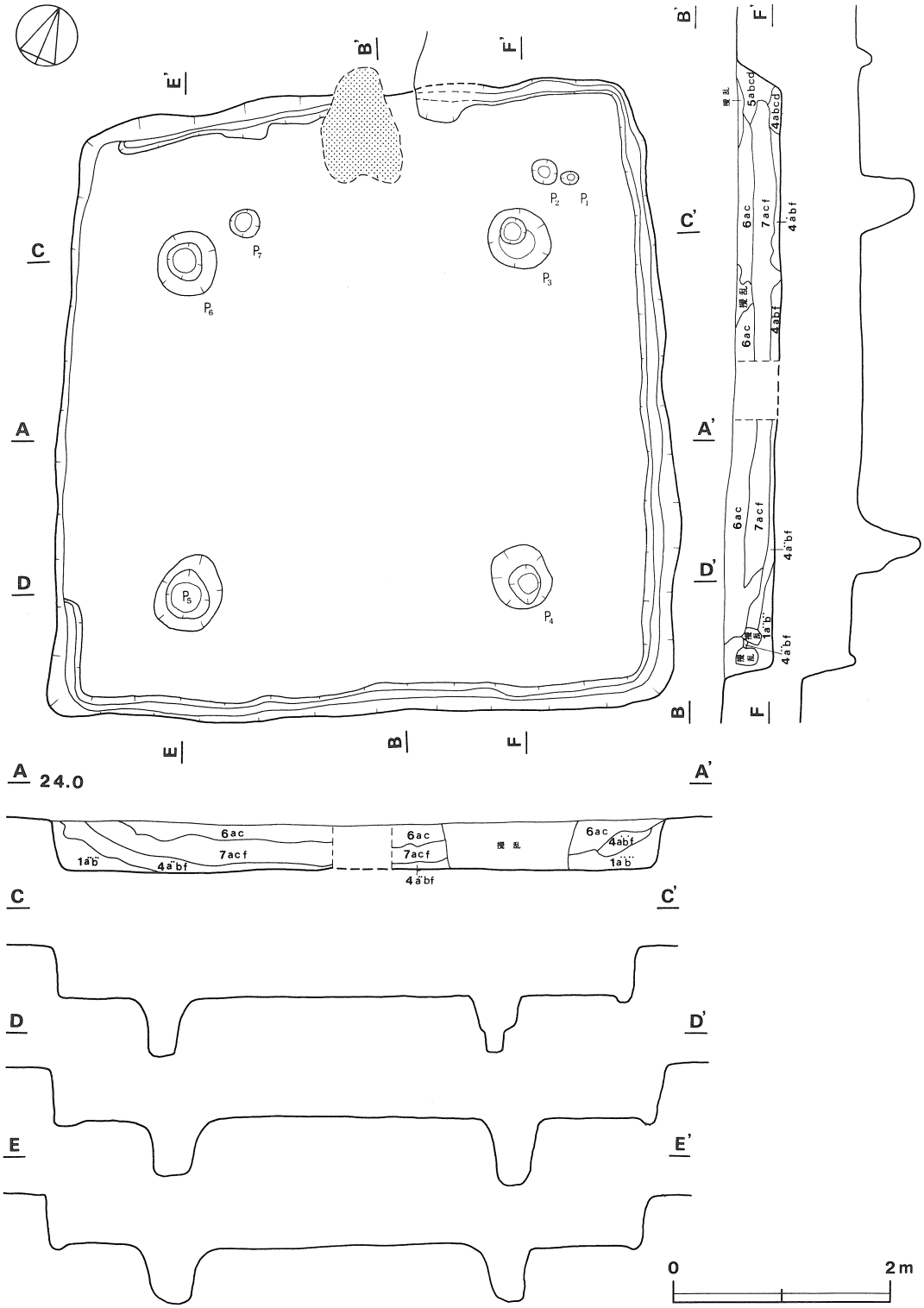
第11号住居跡（第41図）

本跡はB4d_9・B4e_9を中心に確認された竪穴住居跡で，第12号住居跡の西約10.5mに位置している。東側の壁の北側から北側の壁の中央部まで，攪乱を受けている。

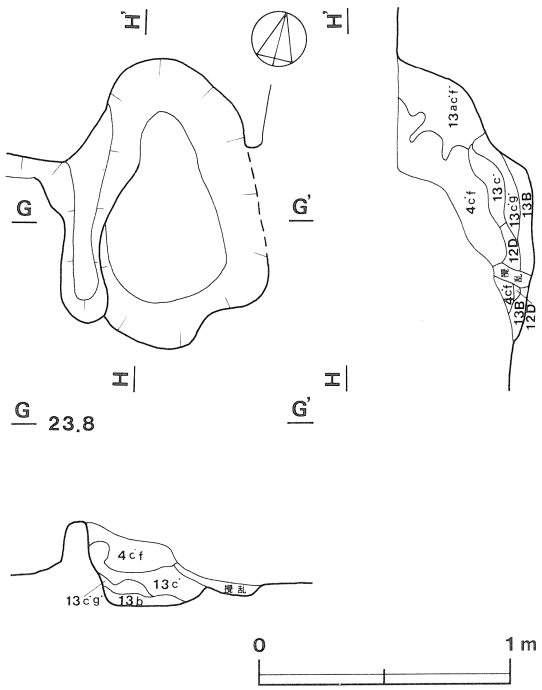
平面形は不整方形状を呈し，主軸はN－13°－Wを指している。規模は，主軸長が5.7mで，南側が5.8m，北側が推定で5.0mを測る。壁はロームで，南側の壁及びその付近では約80°の傾斜を有し，他はほぼ垂直に立ち上がっている。しかし，北東側のコーナー付近は，先述したように攪乱を受けているため，不明である。壁高は約50cmを測る。壁溝は，西側の壁下を除き周回している。攪乱を受けた北東側のコーナー付近でも，一部を除き検出された。幅約20cm，深さ約5cmを測る。床はロームである。平坦で，全体に硬い。中央部は，特に堅緻に踏み固められていた。ピットは，7か所を検出した。P_1・P_2は，遺物が入っていたものである。P_1には，坏形土器2個体が重なって入っていた。第43図の529・530がそれである。530が上，529が下になっていた。529は，口縁が住居跡の床面とほぼ同レベルにあり，単にこの坏形土器を地面に置いた際に安定させることを考慮したものではない。また，P_2には甕形土器と小型壺形土器が入っていた。第43図に示した535と536がそれである。535が，536の中に入っていた。P_1の場合と同様に，536の口縁は住居跡の床面とほぼ同レベルにある。このP_1とP_2は，明らかに各々土器を床に埋め込むことを目的として掘り込まれたものと思われ，P_1は7cm，P_2は12cmの深さを有している。P_3～P_6は主柱穴である。P_3は直径約60cm，深さ56cmで，30cmほどの深さのところに段を有している。P_4は，直径約60cm，深さ64cmで，この中から，第43図の533が，つぶれた状態で出土した。P_5は直径約70cm，深さ50cmで，P_6は，直径約60cm，深さ52cmである。P_7は直径30cmで，23cmの深さを有するが，性格は不明である。カマドは北壁中央部に構築されていた。攪乱のため右半分が失われていた。長さは115cmを測る。調査の結果，袖幅は約80cm，焚口部幅は推定で約35cmを測り，主軸方向はN－13°－Wを指すものと推定された。掘り方は，約40cmの幅で30cmほど壁を切り込み，奥壁を煙道としている。火床は，5cmほど掘り込まれ，火床のロームは長径70cm，短径40cmの楕円形に焼土化していた。焼土の厚さは，最大で7cmを測る。この焼土の状況から，火床は直径60～70cm，短径40cmの楕円形を呈していたものと推定される。火床の中央付近と思われる場所から，土製の支脚1点が出土している。

覆土はほぼ4層から成り，自然堆積である。上位から，極暗褐色土・黒褐色土・褐色土・明褐色土の順に堆積している。明褐色土層は壁際に堆積しており，いわゆる三角堆積の状況を呈している。本跡の第一次埋土と思われる。

遺物は第43～45図に示したもののほか，縄文式土器片55点，弥生式土器片4点，土師器片43点



第41図　第11号住居跡実測図

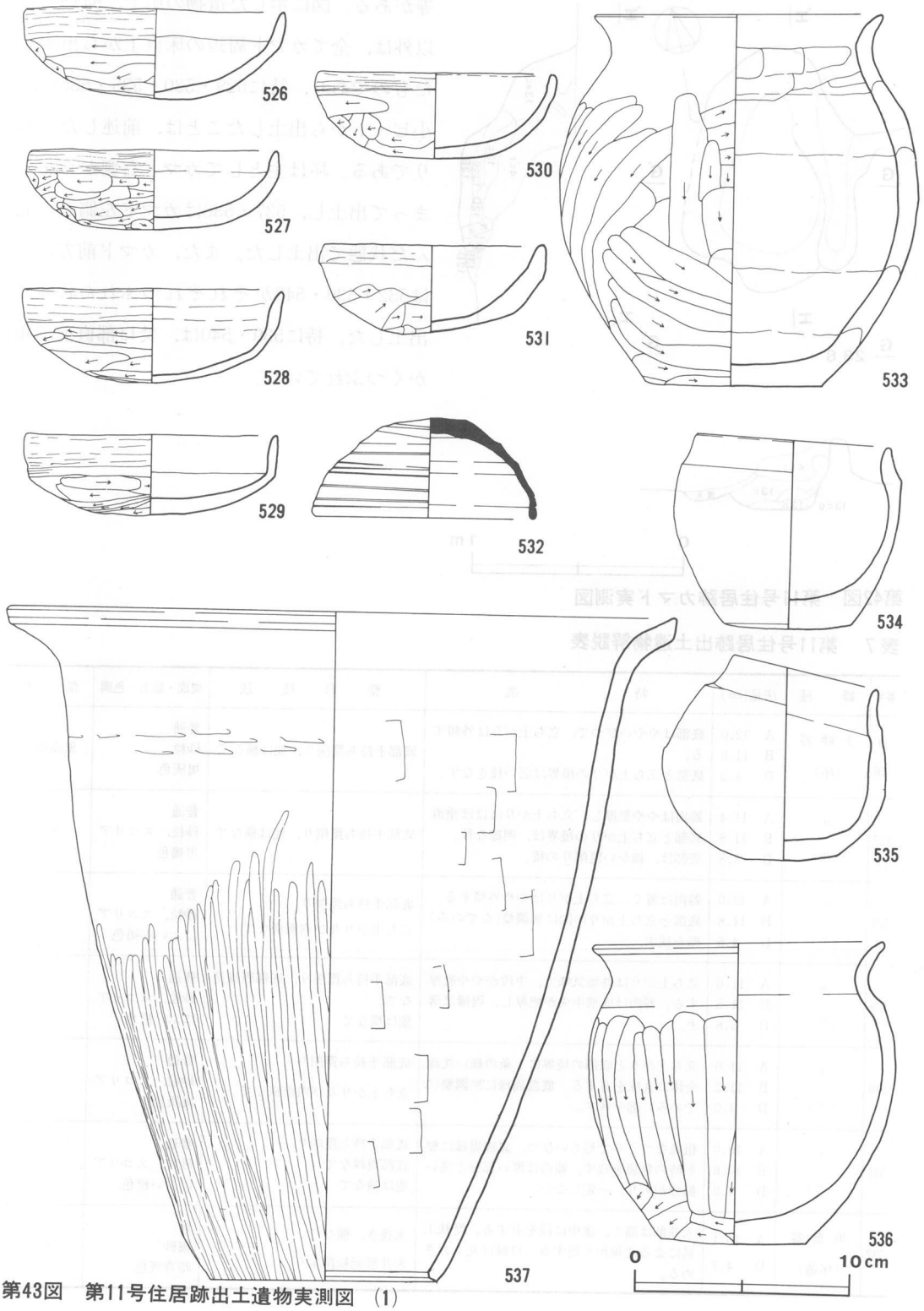


第42図　第11号住居跡カマド実測図

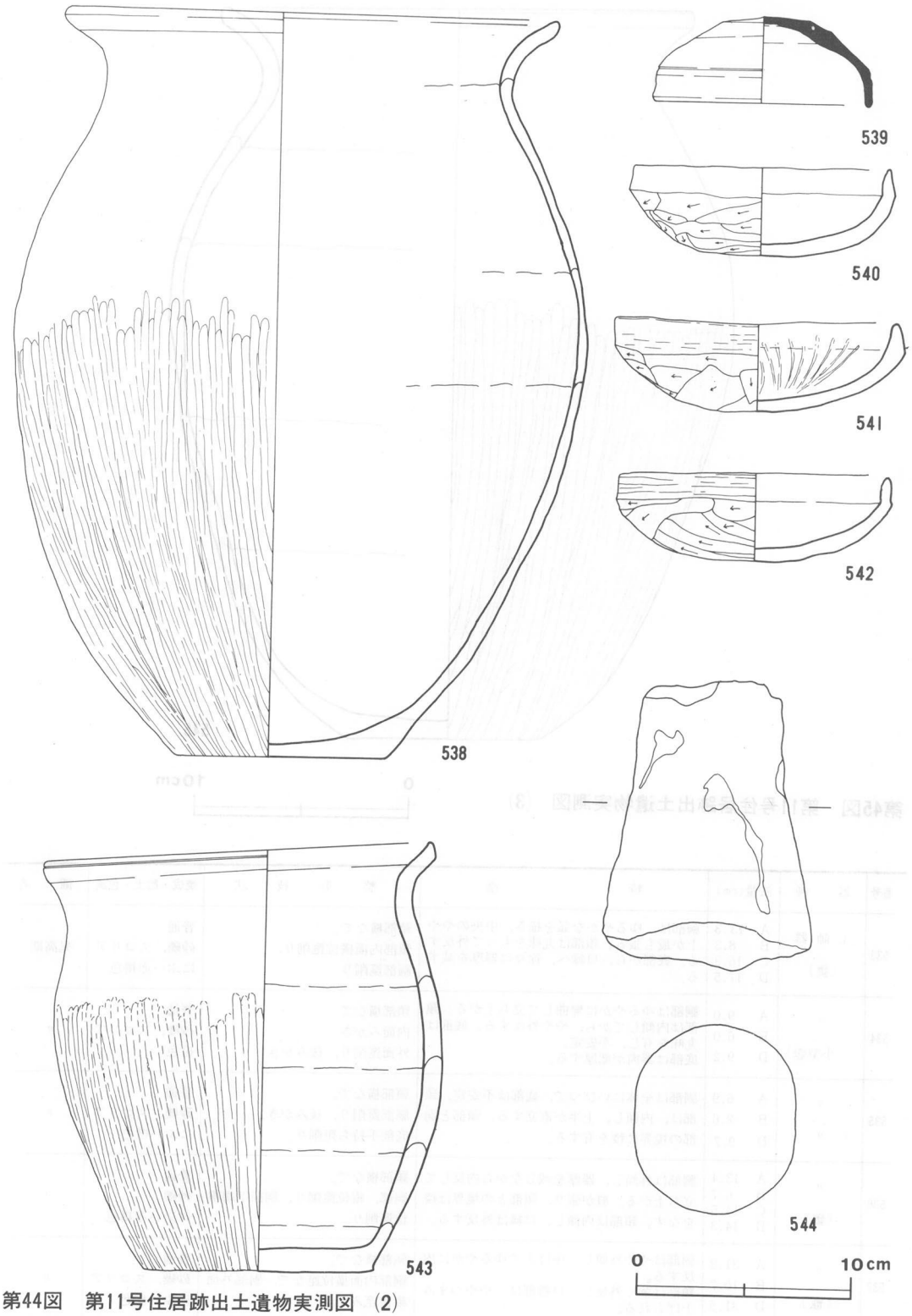
等がある。図に示した遺物の中で，541～544以外は，全てカマド周辺の床直上から出土したものであり，特に529・530・535・536が，小ピットから出土したことは，前述したとおりである。坏は主としてカマド右側からまとまって出土し，537・538はカマド左側から並んだ状態で出土した。また，カマド前方からは532・539・540がそれぞれつぶれた状態で出土した。特に539・540は，焚口部直前で細かくつぶれていた。

表7　第11号住居跡出土遺物解説表

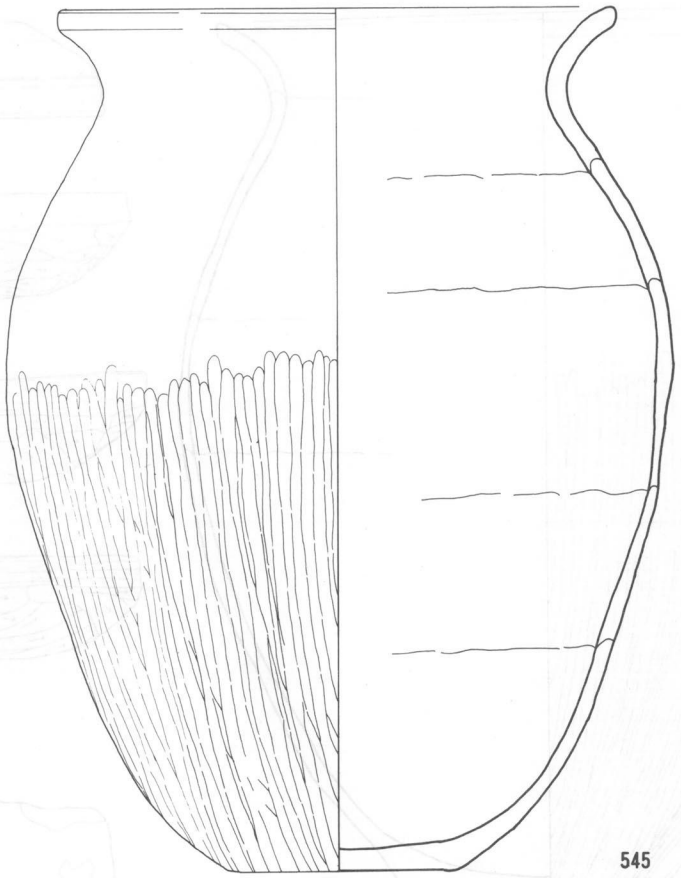
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
43 ｜ 526	土師器 (坏)	A 12.0 B 11.8 D 4.3	底部はややいびつで，立ち上がりは外傾する。 底部と立ち上がりの境界は弱い稜をなす。	底部手持ち篦削り，他は横なで	普通 砂粒 褐灰色	鬼高期
527	〃 (〃)	A 11.4 B 11.8 D 3.8	器肉はやや肥厚し，立ち上がりはほぼ垂直 底部と立ち上がりの境界は，明瞭な稜。 底部は，細かい篦削りの稜。	底部手持ち篦削り，他は横なで	普通 砂粒，スコリア 黒褐色	〃
528	〃 (〃)	A 12.0 B 11.8 D 4.5	器肉は薄く，立ち上がりはやや外傾する。 底部と立ち上がりの間に無調整(なでのみ)部を残す。	底部手持ち篦削り 立ち上がり及び内面横なで	普通 砂粒，スコリア にぶい赤褐色	〃
529	〃 (〃)	A 11.6 B 11.5 D 3.8	立ち上がりは外傾気味で，中段がやや肥厚する。器肉は底部中央が肥厚し，周縁は薄手。	底部手持ち篦削り，底部周縁篦なで。 他は横なで	普通 砂粒，スコリア にぶい橙色	〃
530	〃 (〃)	A 11.0 B 11.2 D 4.0	立ち上がりと底部の境界に1条の細い沈線。全体に丸味を有する。底部周縁に無調整(なでのみ)部を残す。	底部手持ち篦削り 立ち上がり及び内面横なで	普通 砂粒，スコリア 褐灰色	〃
531	〃 (〃)	A 10.0 B 10.6 D 4.2	粗雑なつくりで形もいびつ，底部周縁に整形時の亀裂を残す。器肉は厚い部分と薄い部分があり，一定しない。	底部手持ち篦削り 底部周縁なで 他は横なで	普通 砂粒，スコリア にぶい橙色	〃
532	須恵器 (坏蓋)	A 10.1 D 4.7	天井部は高く，途中に段を有する。篦状工具による沈線が6周する。口縁は丸くおさめる。	水挽き，横なで 天井部回転篦削り。	良 細砂 暗青灰色	〃



第43図　第11号住居跡出土遺物実測図　(1)



第44図　第11号住居跡出土遺物実測図（2）



第45図　第11号住居跡出土遺物実測図　(3)

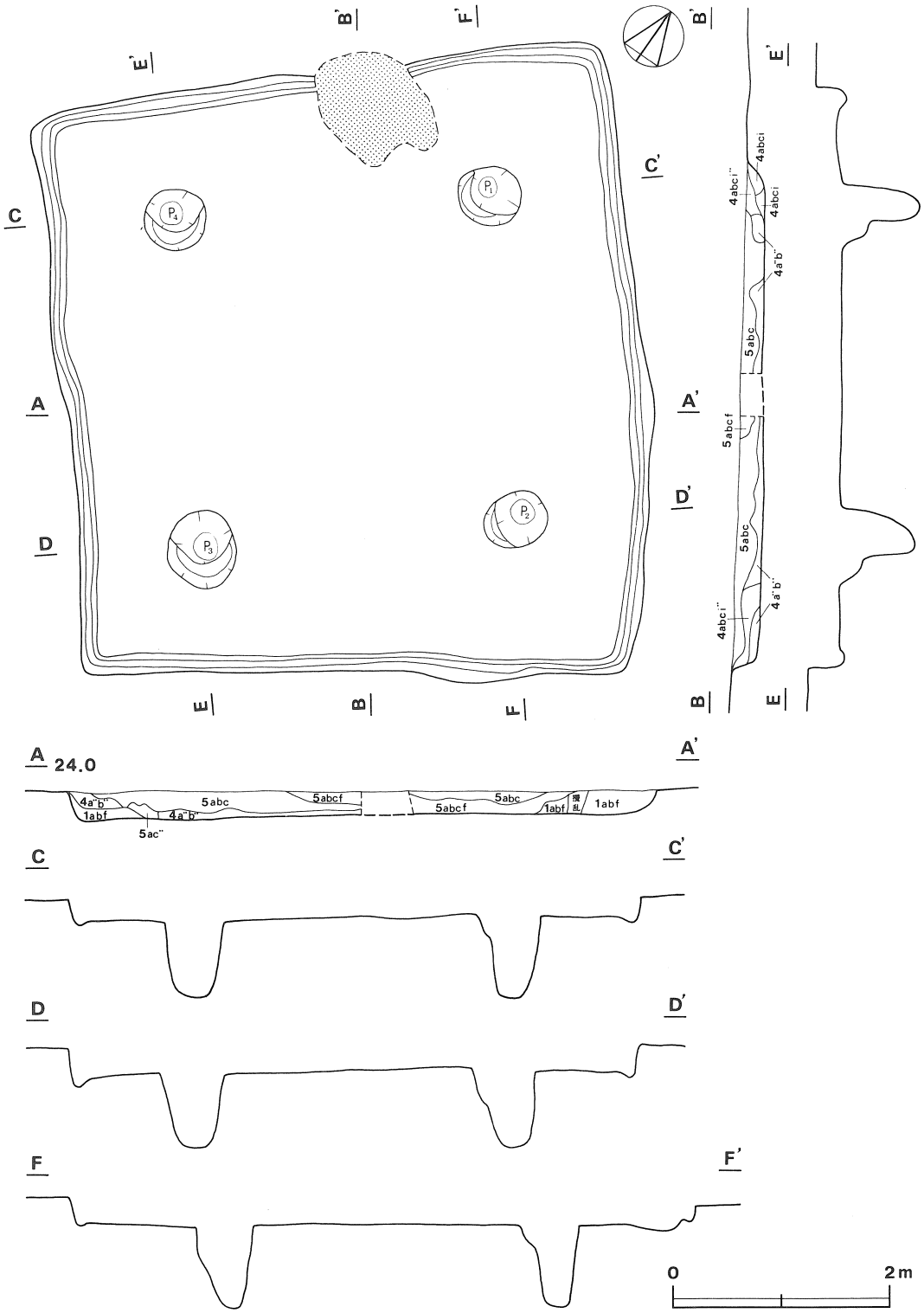
番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
533	土師器 (甕)	A 13.3 B 8.3 C 16.9 D 17.5	胴部は，ゆるやかな弧を描き，中央のやや上が最も張る。頸部は丸味をもって外反する。底部から，口縁へ，徐々に器厚を減ずる。	頸部横なで。 頸部内面横位箆削り。 胴部箆削り。	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	鬼高期
534	〃 (小型壺)	A 9.0 B 6.0 D 9.2	胴部はゆるやかに彎曲して立ち上がる。頸部は内傾してから，やや外反する。底部は丸味を有し，不安定。 底部は器肉が肥厚する。	頸部横なで。 内面みがき 外面箆削り，後みがき	普通 砂礫，スコリア 橙色	〃
535	〃 (〃)	A 6.9 B 2.6 D 9.7	胴部は全体にいびつで，底部は不安定。頸部は，内傾し，上半が直立する。頸部と胴部の境界に稜を有する。	頸部横なで。 胴部箆削り，後みがき。 底部手持ち箆削り。	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	〃
536	〃 (甕)	A 13.4 B 6.7 C 14.5 D 14.3	胴部は外傾し，器厚を減じながら内反して立ち上がる。肩が張り，頸部との境界は稜をなす。頸部は内傾し，口縁は外反する。	頸部横なで。 胴部，縦位箆削り，胴部下端横位箆削り。	普通 砂礫 にぶい赤褐色	〃
537	〃 (甑)	A 31.2 B 10.7 D 31.5	胴部はやや外傾し，中ほどでゆるやかに内反する。 頸部は強く外反し，口唇部は，ややつまみ上げられる。	頸部横なで。 胴部内面横位箆なで，胴部外面縦位箆みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	〃

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
44 — 538	土師器 (甕)	A 22.6 B 8.8 C 26.9 D 35.0	胴部は外傾し，内反して立ち上がる。肩のやや下位が最も張る。頸部はやや肥厚し，強く外傾する。口唇部はやや起き上がる。	頸部横なで 肩部及び内面なで 胴部縦位篦みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	鬼高期
539	須恵器 (坏蓋)	A 9.9 D 4.1	天井部は丸味を有し，天井と口縁の境界は，明瞭な稜をなし，細い沈線が1周する。口唇部は丸くおさめる。	水挽き，横なで。 天井部回転篦削り。	良 細砂 青灰色	〃
540	土師器 (坏)	A 11.9 B 12.4 D 4.2	底部と立ち上がりの境界は，明瞭な稜をなす。立ち上がりはやや内傾する。	底部手持ち篦削り。 他は横なで。	普通 砂礫，スコリア 褐灰色	〃
541	〃 (〃)	A 13.1 B 13.6 D 4.4	底部と立ち上がりの境界は明瞭な稜をなす。立ち上がりは肥厚し，やや内傾する。	底部手持ち篦削り 他は横なで 内面に粗い暗文	やや不良 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	〃
542	〃 (〃)	A 12.4 B 12.9 D 4.2	立ち上がりはほぼ垂直。底部と立ち上がりの境界は極めて明瞭な稜をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア 褐灰色	〃
543	〃 (甕)	A 17.9 B 10.7 C 14.4 D 20.2	胴部は上半が張り，頸部は外反する。口唇部は，直立する。底部が大き目である。胴部下端を除き，器厚はほぼ一定。	頸部横なで 胴部縦位篦みがき	やや不良 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	〃
544	支脚	A 13.6 C 9.7	———	———	砂礫，スコリア 赤褐色	
45 — 545	土師器 (甕)	A 21.7 B 9.4 C 26.4 D 34.2	胴部は外傾し，内反して立ち上がる。中ほどからやや上までが最も張り，肩部は内傾する。頸部は強く外傾し，口唇部はやや起き上がる。	頸部横なで 肩部及び内面なで 胴部縦位篦みがき	やや不良 砂礫，スコリア 褐灰色	鬼高期

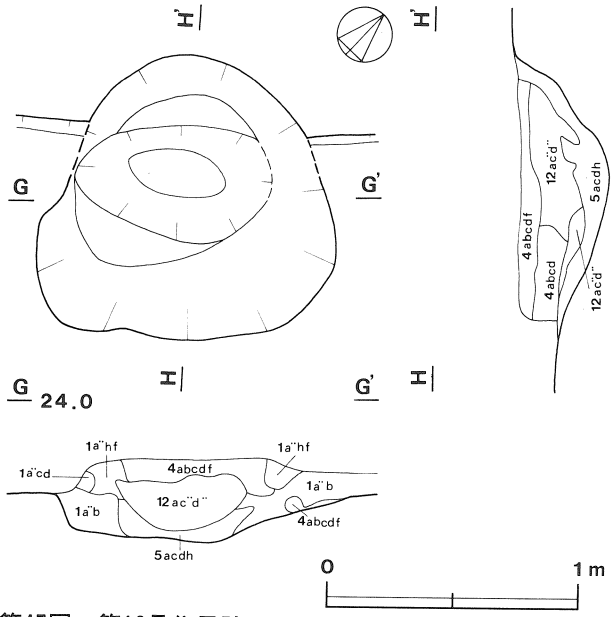
第12号住居跡（第46図）

本跡はB5 d_3を中心に確認された竪穴住居跡で，第10号住居跡の西南西約6mに位置している。

平面形は方形状を呈し，主軸方向はN－38°－Wを指している。規模は，長軸が5.5m，短軸が5.4mで，両軸の長さはほぼ等しい。壁はロームで，約80°の傾斜で立ち上がっている。壁高は，南東側の壁で約30cm，北西側の壁で約15cmを測り，北東側及び南西側の壁では約20cmである。これは，遺構確認面が若干傾斜していることによるものである。壁溝は，幅約15cm，深さ約4cmで1周している。床はロームで，平坦であるが軟弱である。ピットは，4か所を確認した。いずれも直径は約60～70cmで，主柱穴であろう。P_1が77cm，P_2が78cmの深さを有し，P_1は深さ約20cm，P_2は深さ約30cmのところに段を有している。この段は，P_1・P_2ともピット内壁の南西側に認められる。P_3・P_4にあっては，いずれも70cmの深さを有し，20cmの深さのところに段を有している。段の位置は，いずれもピット内壁の南東側である。この段の性格については，住居の建て替えに際し，柱穴を掘り直したために生じたものと考えるのが妥当であろう。カマドは，北西側の壁のやや北コーナーに寄った位置に構築されていたが，崩れており，天井部・袖部の構造等は不明である。煙道奥壁から火床先端までの長さは1.1mを測り，主軸方向はN－43°－Wを指している。



第46図　第12号住居跡実測図

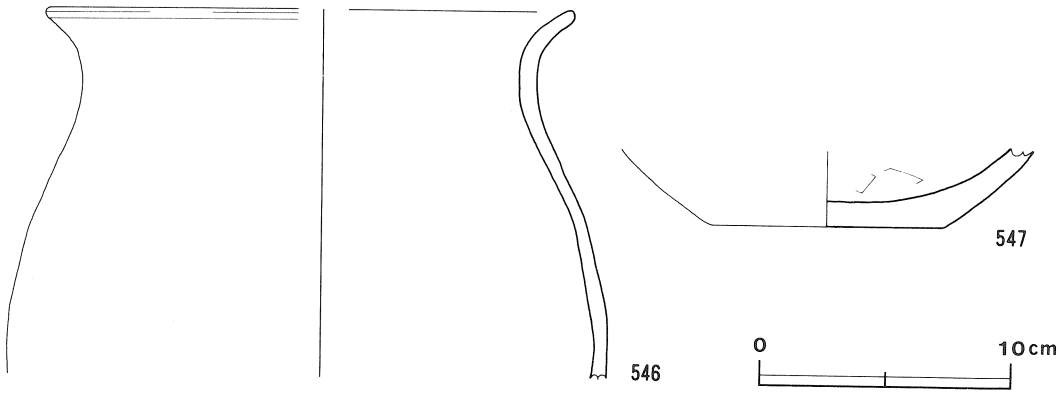


第47図　第12号住居跡カマド実測図

掘り方は，壁を85cmの幅で30cmほど丸く切り込み，奥壁を煙道にしている。火床は，5cmほど掘り込まれている。全体の掘り方を見ると，火床の周囲にカマド中央部に向うなだらかな傾斜を認めることができる。あるいは，これが袖部を構築していた場所かも知れない。カマドからの遺物の出土は無かった。

覆土はほぼ4層から成り，自然堆積である。上位から，暗褐色土・褐色土・明褐色土の順に堆積している。上位の暗褐色土層を明度の違いによって二分した。全体にしまりをおびている。

遺物は第48図に示したもののほか，縄文式土器片3点，土師器片8点が出土したのみである。



第48図　第12号住居跡出土遺物実測図

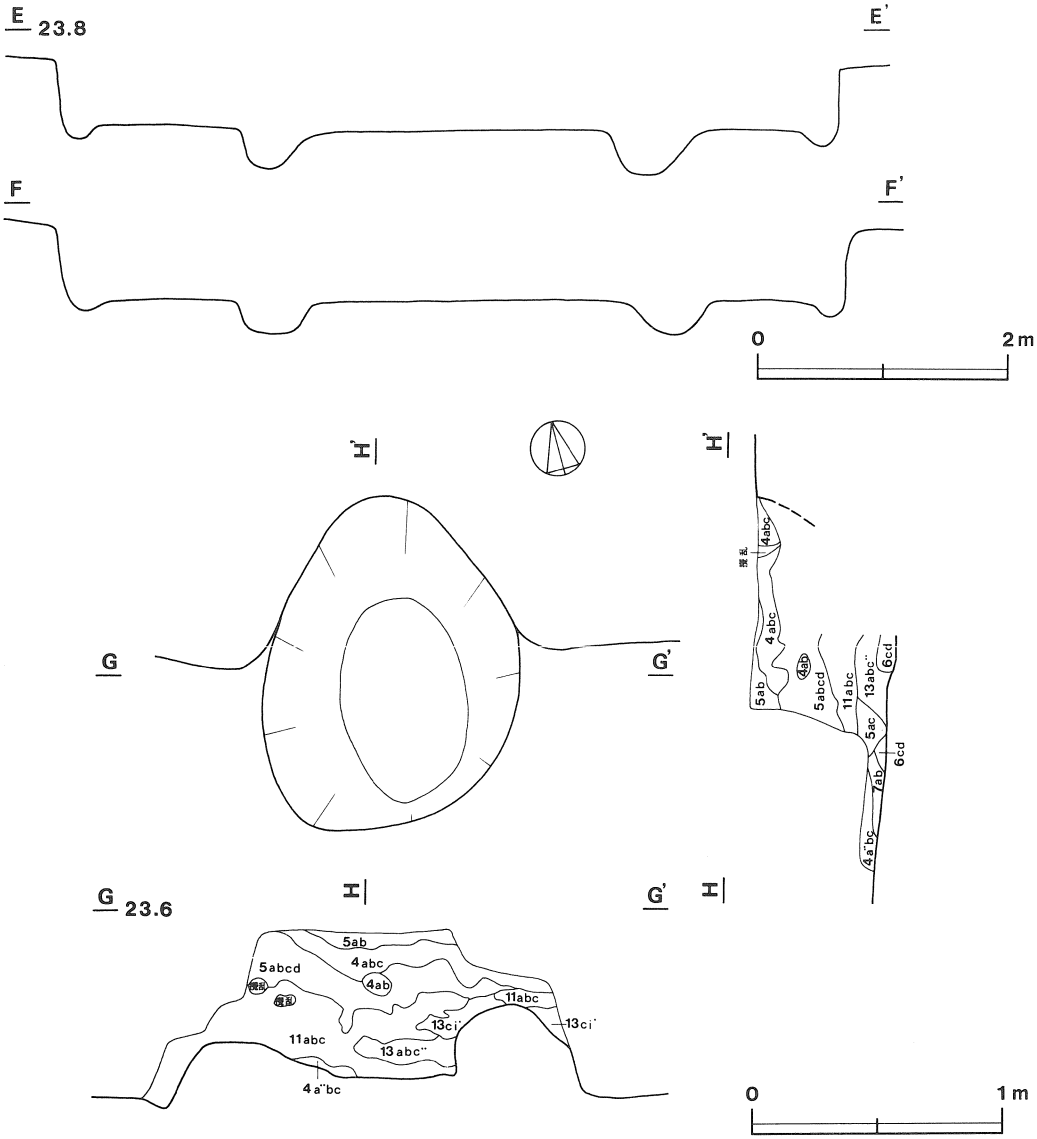
表8　第12号住居跡出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
48 — 546	土師器 (甕)	A (19.8) E 14.6	肩は内傾して頸部に至る。頸部はやや肥厚し，丸味を以って外反する。胴部以下欠損。	頸部横なで 肩部縦位篦なで 肩部内面横位なで	普通 砂礫 にぶい赤褐色	鬼高期
547	〃 (〃)	B (9.2) E 3.2	胴部は，強く外傾し，内彎しながら立ち上がる。胴部中位以上欠損。	内面篦なで 外面篦みがき	普通 砂礫 にぶい赤褐色	〃

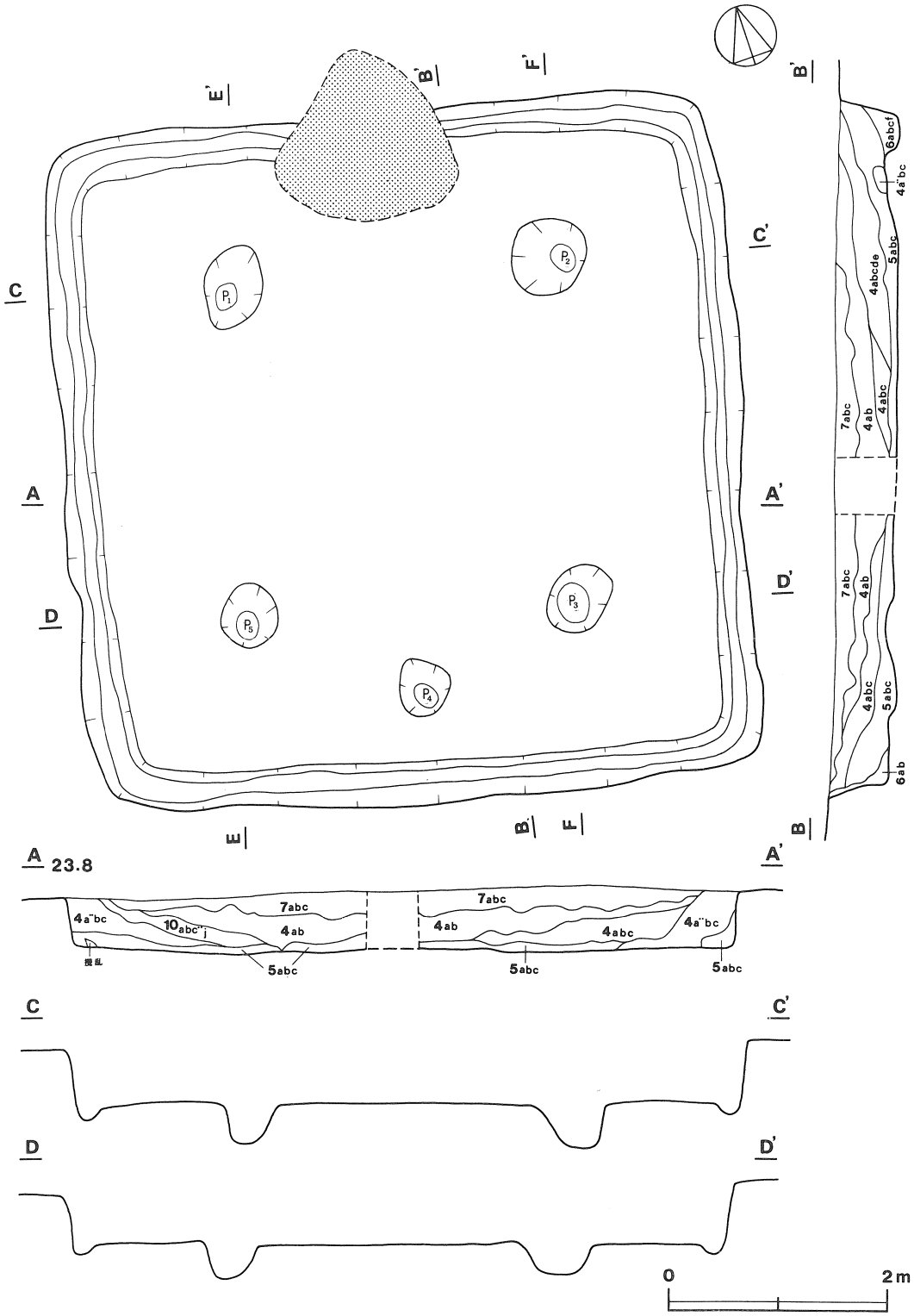
第13号住居跡（第50図）

本跡はC4 d_8・C4 d_9を中心に確認された竪穴住居跡で，第14号住居跡の南東約８ｍに位置している。

平面形は方形状を呈し，主軸方向はＮ－17°－Ｅを指している。規模は，長軸が6.4ｍ，短軸が6.2ｍで，主軸方向がやや長めである。壁はロームで，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は60cmである。壁溝は，幅25～30cm，深さ10～15cmで，全体に回っている。幅・深さとも，他の住居跡の壁溝をうわまわっている。床はロームで平坦である。全体に硬く，中央部は特に堅緻に踏み固



第49図　第13号住居跡カマド実測図



第50図　第13号住居跡実測図

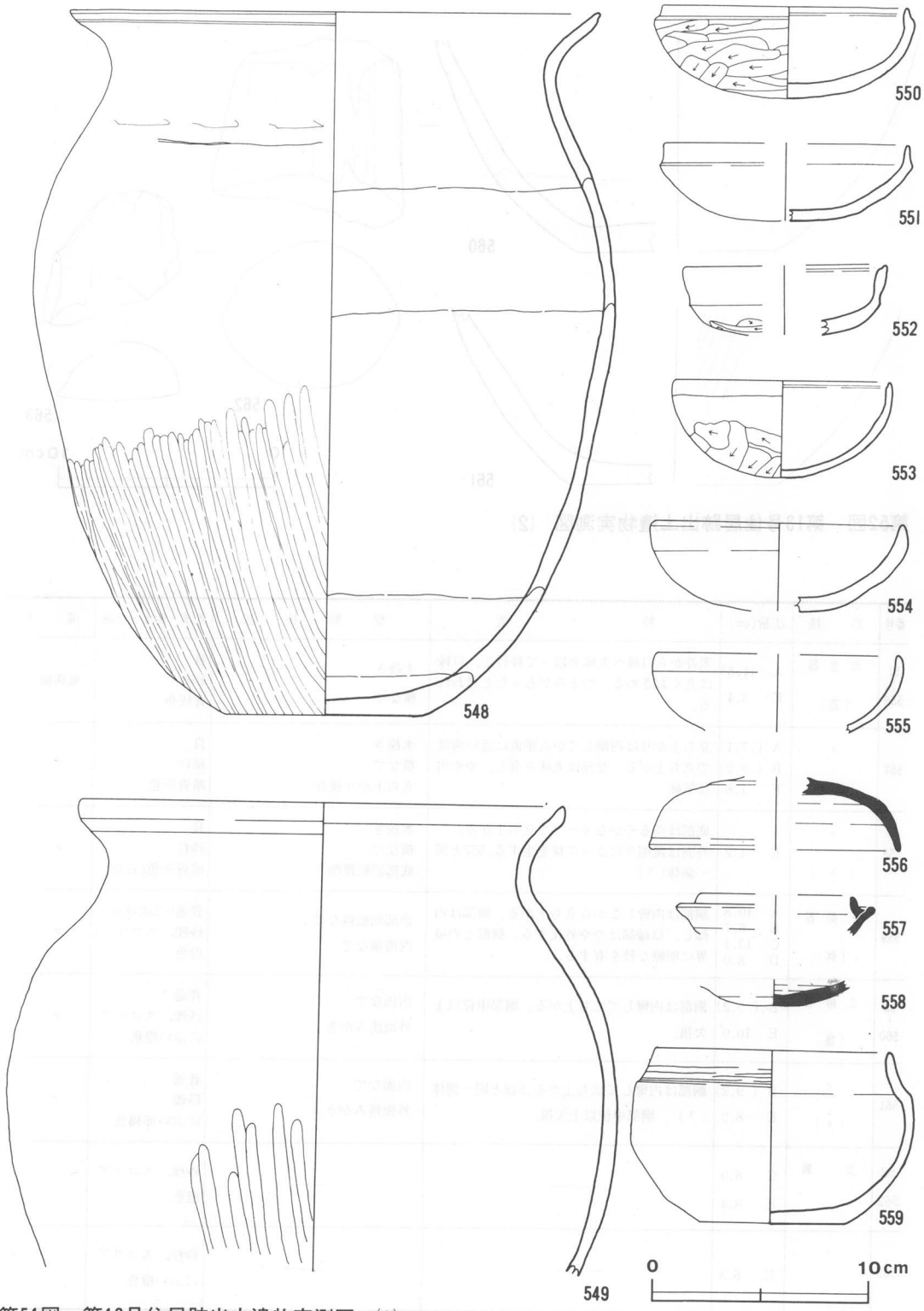
められている。ピットは5か所を検出した。P_1・P_2・P_3・P_5は，主柱穴であろう。各々の深さは，P_1が30cm，P_2が32cm，P_3が32cm，P_5が35cmで直径は50～70cmである。P_4は，直径約50cm，深さ38cmである。このピットは，その位置から判断して出入口等の施設に伴うものであると思われる。カマドは，北側の壁中央部に柔かい砂質粘土で構築されていたが，崩れているため構造等の詳細は不明である。規模を推定すると，長さは約1.3m，幅約1mを測り，主軸方向は，N－10°－E前後を指したと思われる。掘り方は壁を幅95cmで，50cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。火床は，床を5cmほど掘り込んでいる。

覆土は4層から成り，自然堆積である。上位から，黒褐色土・褐色土・暗褐色土・極暗褐色土の順に堆積している。極暗褐色土層は，一部で暗褐色を呈している。この層は壁際に見られ，いわゆる三角堆積の様相を呈している。本跡の第一次埋土と考えられる。また，褐色土層中には，大量の焼土が層を成して堆積していた。状況から判断して，この焼土は本跡の廃絶後に投棄されたものと断定できる。

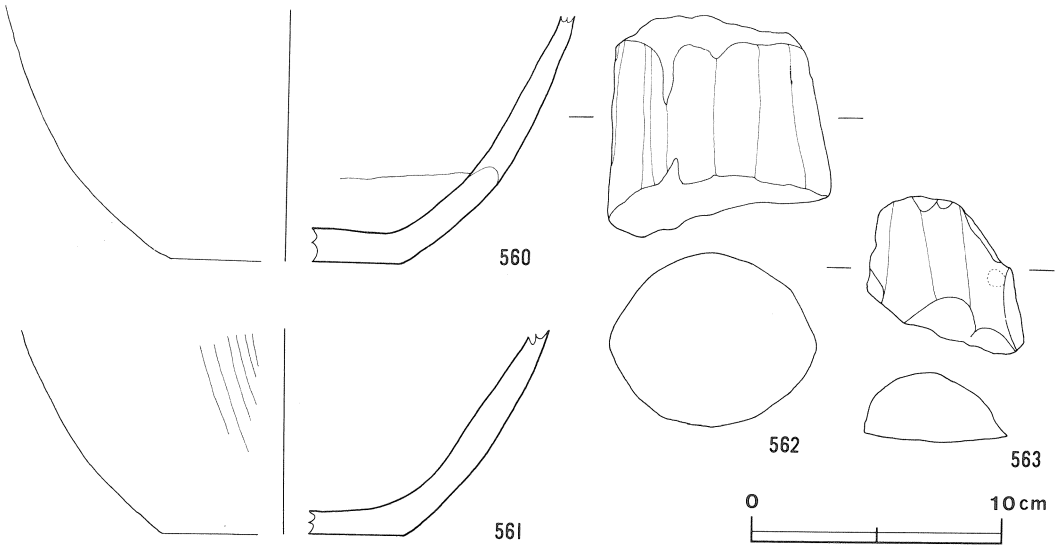
遺物は，第51・52図に示したもののほか，縄文式土器片1点，弥生式土器片3点，土師器片433点須恵器片2点が出土した。

表9　第13号住居跡出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
51 ｜ 548	土師器 （甕）	A 24.4 B 9.3 C 27.1 D 32.5	胴部は下位と肩部が張り，長胴型を呈する。頸部は強く外反し，口唇部はつまみ上げられる。 器肉は，底部付近が肥厚する。	頸部横なで 肩部及び内面なで 胴部縦位篦みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	鬼高期
549	〃 （〃）	A 22.4 C (28.4) D 21.8	胴部は中央よりもやや上が最も張る。頸部は強く外反し，口唇部はやや起き上がる。胴部中位以下欠損。	頸部横なで 肩部及び内面なで 胴部縦位篦みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	〃
550	〃 （坏）	A (11.3) B (12.1) D 4.2	底部は丸味を有し，立ち上がりと底部の境界は明瞭な稜をなす。口縁内側に浅い凹線。内外面とも，剥離が見られる。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア 黒褐色	〃
551	〃 （〃）	A (11.3) B (11.7) E 3.6	底部は丸味を有し，立ち上がりは直立する。 底部と立ち上がりの境界は明瞭な稜をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒 黒褐色	〃
552	〃 （〃）	A (9.4) B (8.9) E 3.2	底部は周縁が丸味を有し，立ち上がりはやや外傾。立ち上がりと底部の境界は明瞭な稜をなし，口唇部内側には1条の凹線が周回。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア 黒褐色	〃
553	〃 （〃）	A 10.0 B 10.2 D 4.5	底部から丸味を以って口唇に至る。口唇内側には凹線が施され，段をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂礫，スコリア 赤褐色	〃
554	〃 （〃）	A (11.5) B 11.7 E 4.1	全体に厚手，底部は丸味を有し，立ち上がりと底部の境界は弱い稜をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒 にぶい赤褐色	〃
555	〃 （〃）	A (11.2) B (11.6) E 3.6	全体に丸味を有する。口縁と底部の境界付近が最も肥厚する。	口縁外面みがき 底部内面横なで 底部外面篦削り	普通 砂粒 にぶい橙色	〃



第51図　第13号住居跡出土遺物実測図（1）



第52図　第13号住居跡出土遺物実測図　(2)

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
51 | 556	須恵器 (蓋)	A (11.5) E 3.4	天井から口縁へ丸味を以って移行し，口縁は丸くおさめる。つまみがあったと思われる。	水挽き 横なで	良 砂礫 青灰色	鬼高期
557	〃 (坏身)	A (7.1) B (9.2) E 1.8	立ち上がりは内傾してから垂直に近い角度で立ち上がる。受部は丸味を有し，やや内反気味	水挽き 横なで 立ち上がり接合	良 細砂 暗青灰色	〃
558	〃 (〃)	E 1.2	底部はゆるやかなカーブで立ち上がる。外面は箆削りによって稜を生ずる。557と同一個体(？)	水挽き 横なで 底部回転箆削り	良 砂粒 暗青灰色(白斑)	〃
559	土師器 (鉢)	A 10.8 B 6.7 C 13.1 D 8.0	胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部は内傾し，口縁部はやや外反する。胴部との境界に明瞭な稜を有する。	頸部回転箆なで 内面横なで	普通(二次焼成) 砂礫，スコリア 橙色	〃
52 | 560	土師器 (甕)	B (9.2) E 10.0	胴部は内彎して立ち上がる。胴部中位以上欠損。	内面なで 外面箆みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	〃
561	〃 (〃)	B (9.2) E 8.2	胴部は内彎して立ち上がる。548と同一個体(？)。胴部中位以上欠損。	内面なで 外面箆みがき	普通 砂礫 にぶい赤褐色	〃
52 | 562	支脚	C 8.9 E 8.4	――	――	砂礫，スコリア 橙色	
563	〃	E 6.3	――	――	砂粒，スコリア にぶい橙色	

第17号住居跡（第53図）

本跡はB3 j_2を中心に確認された竪穴住居跡で，第18号住居跡の西北西側７ｍに位置する。

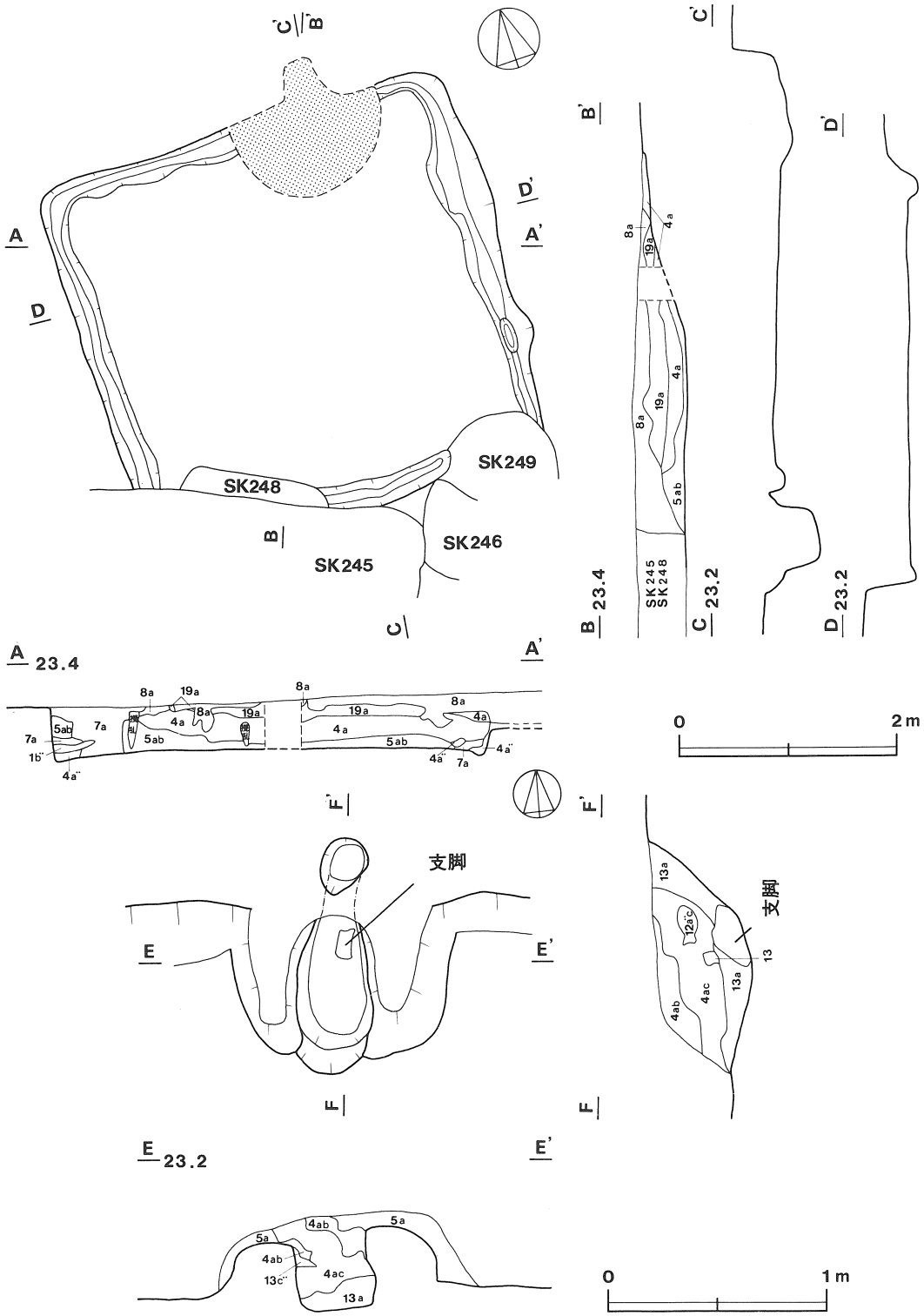
本跡は，南西コーナー部を第245号・248号土坑に切られ，南東コーナーを第249号土坑に切られている。また攪乱によって東側の壁と，西側の壁の南側半分が，南側の壁は中央の一部を除く両側が，それぞれ失われていた。しかし，壁溝の一部が残っていたことから，本跡の平面形を方形状，主軸方向をＮ－２°－Ｅ，規模を長軸が3.9ｍ，短軸が3.6ｍと推定することができた。主軸方向がやや長いと見られる。残存する壁はロームで，約80°の傾斜を有している。壁高は約40cmを測る。壁溝は，幅15～20cm，深さ約10cmで１周していたと考えられる。しかし，東側では攪乱により明瞭ではない。床はロームで，ほぼ平坦である。中央部が堅緻に踏み固められていた。しかし，東側の壁付近は極めて軟弱で，攪乱の影響が考えられる。ピットは検出できなかった。カマドは，北側の壁の東寄りの位置に構築されていた。長さ110cm，幅100cm，焚口部幅30cmを測り，主軸方向はＮ－８°－Ｅを指す。掘り方は，壁を約80cmの幅で35cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。床を10cmほど掘り込んで火床としている。火床の平面形は，直径25cmほどの円形状を呈している。この火床のやや奥に，粘土を固めて製作した支脚が残存していた。

覆土は４層から成る。最上位は攪乱層である。その下位は自然堆積で，上位から黒色土・褐色土・暗褐色土の順に堆積している。

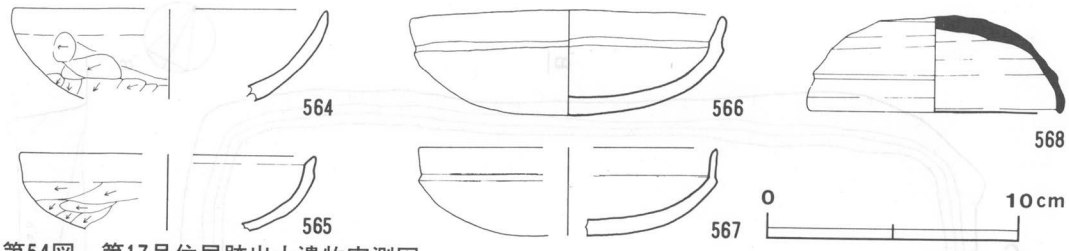
遺物は，第54図に示したもののほか，弥生式土器片４点，土師器片３点がある。また，攪乱層から中世の内耳土器片や陶磁器が出土している。

表10　第17号住居跡出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
54 ｜ 564	土師器 （坏）	A（12.4） B（12.3） E　3.6	底部からゆるやかなカーブで口唇に至る。器厚は，底部から口縁部まで，ほとんど変化しない。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒 にぶい赤褐色	鬼高期
565	〃 （〃）	A（11.6） B（11.4） E　3.0	底部はややいびつ。立ち上がりは直立してから外反する。口縁部と底部の境界は，篦削りによって明瞭になっている。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒 暗赤褐色	〃
566	〃 （〃）	A　12.4 B　12.4 D　4.2	底部はゆるやかなカーブで立ち上がる。底部と口縁部の境界は段をなし，口縁部は外傾する。内面口縁部下に浅い凹線が周回する。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア 黒褐色	〃
567	〃 （〃）	A（11.8） B（11.9） E　3.5	底部は厚みを減じながら，ゆるやかなカーブで立ち上がる。底部と口縁部の境界は段をなし，立ち上がりは直立し薄い。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア 黒褐色	〃
568	須恵器 （坏蓋）	A　9.8 D　3.9	天井部は高く丸味を有する。口縁部との境界は段をなし，口縁部はやや内彎する。口唇部は丸くおさめている。	水挽き 横なで 天井部回転篦削り 後手持ち篦削り	良 細砂 青灰色	〃



第53図　第17号住居跡実測図

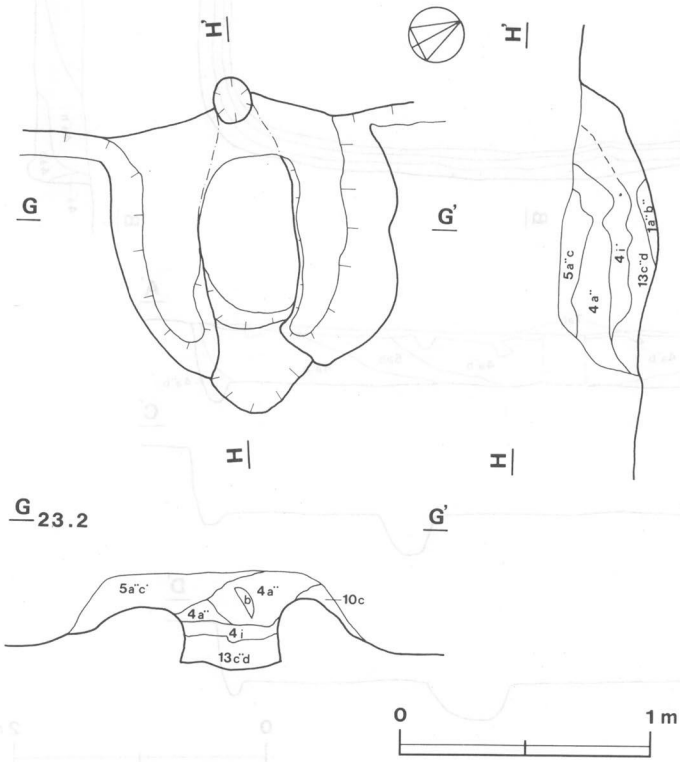


第54図　第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡（第56図）

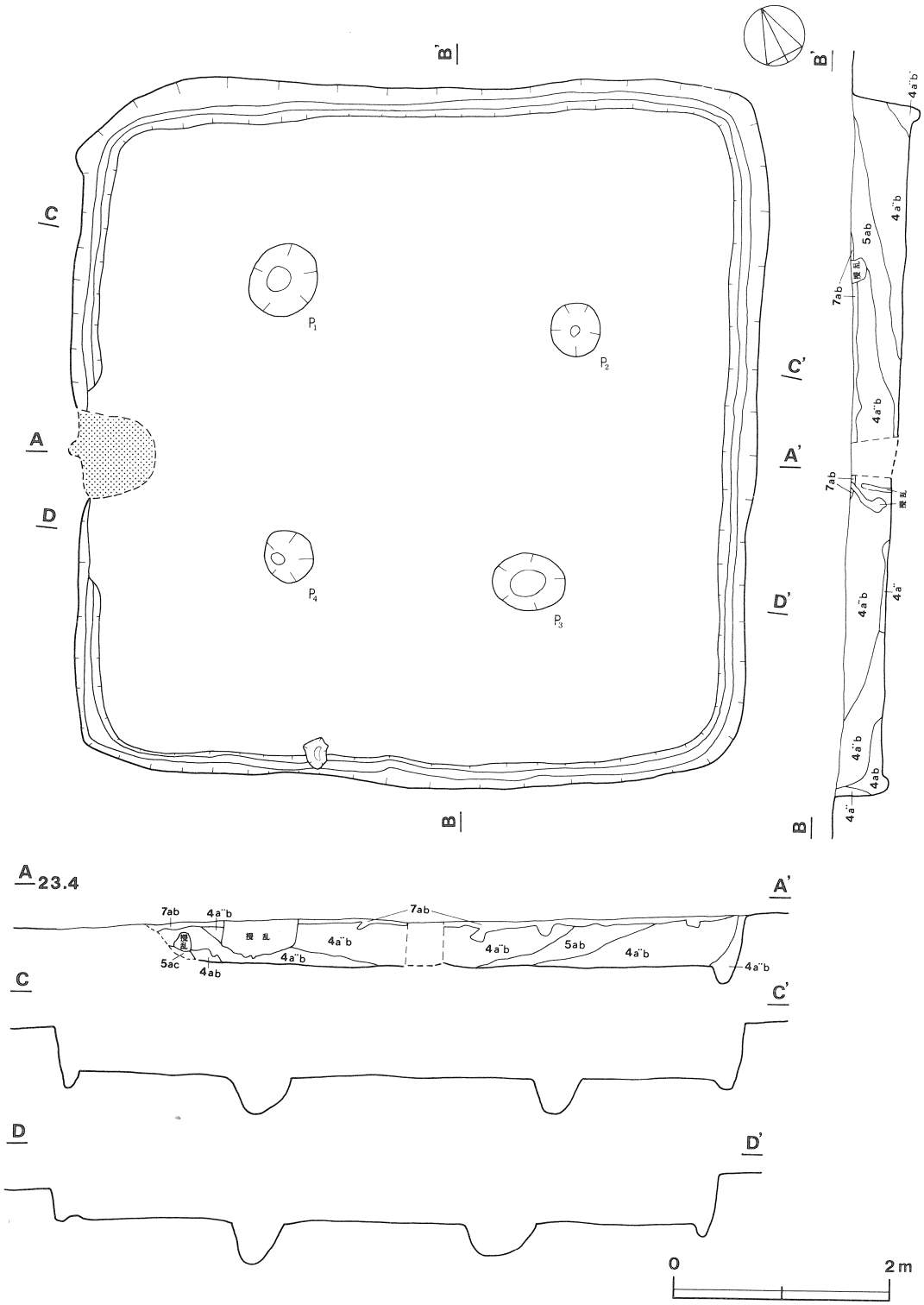
本跡はC3a$_4$・C3b$_4$を中心に確認された竪穴住居跡で，第17号住居跡の東南東約7mに位置する。

平面形は方形状を呈し，主軸方向はN－60°－Wを指している。規模は6.4m×6.4mである。壁はロームで，垂直に近い角度で立ち上がっている。壁高は，40～50cmである。壁溝は，幅約20cm，深さ約10cmで，カマドの部分を除き周回している。床はロームで，北東側へ向かってやや傾斜しているが，起伏は無い。中央付近は，特に堅緻に踏み固められている。ピットは，4か所を検出した。いずれも主柱穴であると思われる。直径は50～70cmで，深さはP$_1$が33cm，P$_2$が33cm，P$_3$が29cm，P$_4$が43cmである。カマドは，北西側の壁の中央からやや西コーナーへ寄った位置に構築されていた。長さ1.6m，幅1.1m，焚口部幅25cmで，主軸方向はN－66°－Wを指す。掘り方は，壁を幅約90cmで20cmほど切り込み，奥壁を煙道とし，床を5cmほど掘り込んで火床としている。火床の平面形は，直径40cmほどの円形状を呈する。カマド内には遺物は見られなかったが，カマドの右側へ1.3mの位置から粘土を固めて製作した支脚が出土している。

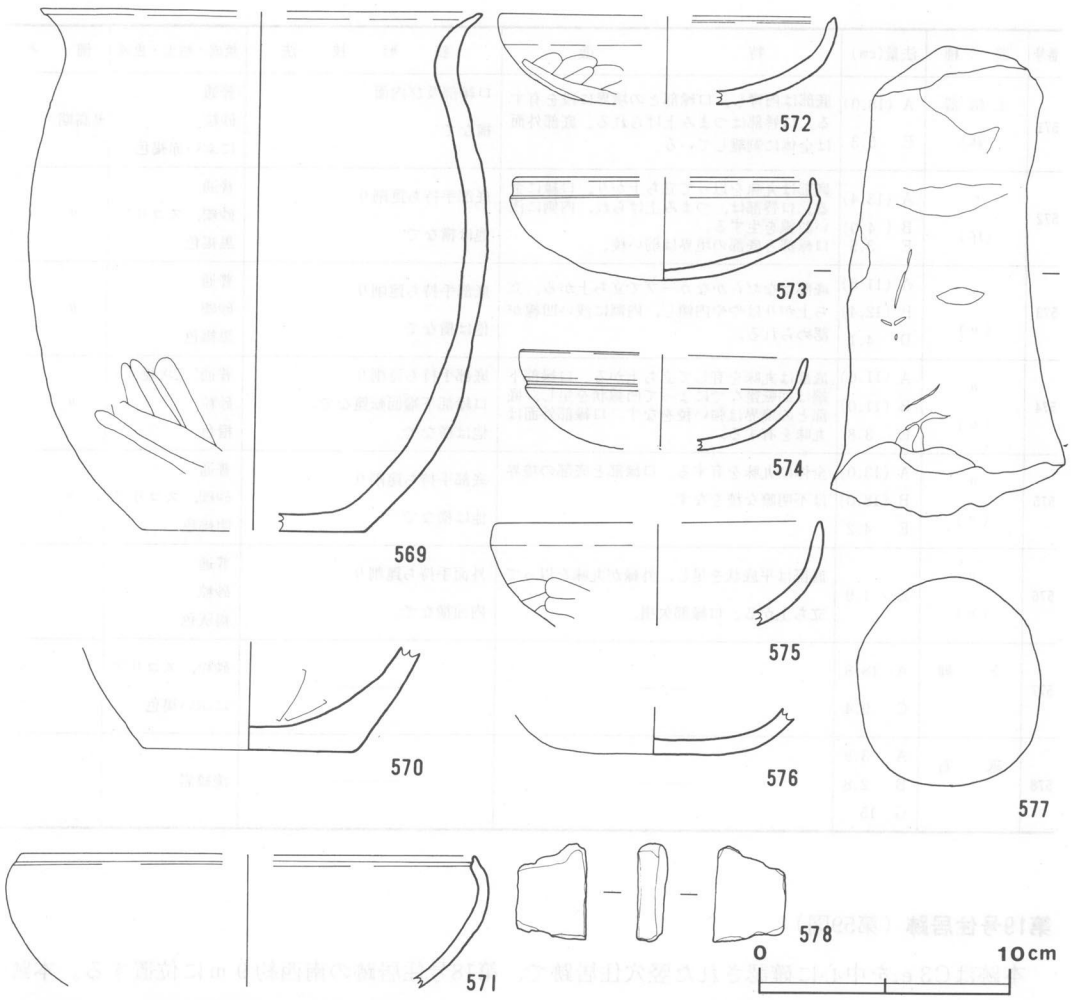


第55図　第18号住居跡カマド実測図

覆土はほぼ4層から成り，自然堆積である。上位から，黒褐色土・褐色土・暗褐色土・褐色土の順に堆積している。このほか，壁際には多量のローム粒子・



第56図　第18号住居跡実測図



第57図　第18号住居跡出土遺物実測図

ロームブロックを含む褐色土層が見られる。この土層は壁溝を埋めており，壁のロームが崩れて堆積したものと考えられる。

遺物は，第57図に示したもののほか，縄文式土器片1点，土師器片68点，鉄滓1点がある。

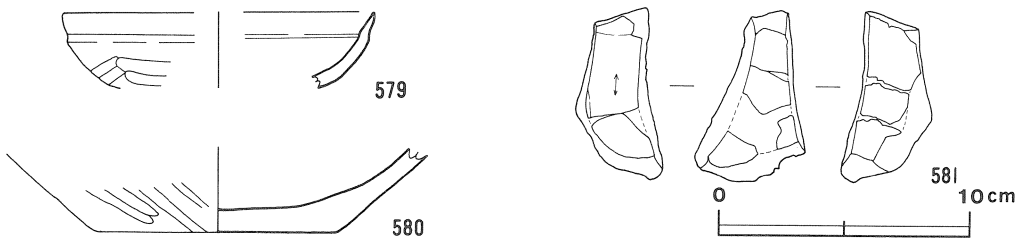
表11　第18号住居跡出土遺物解説表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
57 — 569	土師器 (甕)	A (17.6) B (9.0) C (18.2) D 20.8	胴部は外傾して立ち上がり，内反する。肩部がやや張り，長胴型を呈する。頸部は強く外反する。器肉は全体に肥厚し，口縁は急激に薄くなる。	頸部横なで 胴部内面なで 胴部外面下半箆みがき	普通 砂礫，スコリア 明赤褐色	鬼高期
570	〃 (〃)	B 8.4 E 4.3	胴部は開き，内彎しながら立ち上がる。 胴部中位以上欠損。	内面箆なで 外面なで	普通 砂礫，スコリア 明赤褐色	〃

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
571	土師器 (鉢)	A (18.0) E 5.3	底部は内彎し，口縁部との境界に段を有する。口唇部はつまみ上げられる。底部外面は全体に剝離している。	口縁部及び内面 横なで	普通 砂粒 にぶい赤褐色	鬼高期
572	〃 (坏)	A (13.4) B (4.0) E 3.5	底部は丸味を以って立ち上がり，口縁に至る。口唇部は，つまみ上げられ，内側に浅い凹線を生ずる。 口縁部と底部の境界は弱い稜。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂礫，スコリア 黒褐色	〃
573	〃 (〃)	A (11.8) B (12.4) D 4.1	底部はなだらかなカーブで立ち上がる。立ち上がりはやや内傾し，内側に浅い凹線が認められる。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂礫 黒褐色	〃
574	〃 (〃)	A (11.6) B (11.0) E 3.8	底部は丸味を有して立ち上がる。口縁部下端は回転篦なでによって凹線状を呈し，底部との境界は強い稜をなす。口縁部外面は丸味を有する。	底部手持ち篦削り 口縁部下端回転篦なで。 他は横なで。	普通(二次焼成) 砂粒 橙色	〃
575	〃 (〃)	A (13.0) B (18.0) E 4.2	全体に丸味を有する。口縁部と底部の境界は不明瞭な稜をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂礫，スコリア 明褐色	〃
576	〃 (〃)	E 1.9	底部は平底状を呈し，外縁が丸味を以って立ち上がる。口縁部欠損。	外面手持ち篦削り 内面横なで。	普通 砂粒 褐灰色	
577	支　脚	A 18.8 C 9.4	――	――	砂粒，スコリア にぶい褐色	
578	砥　石	A 3.9 B 2.8 G 15	――	――	流紋岩	

第19号住居跡（第59図）

本跡はC3 e_2を中心に確認された竪穴住居跡で，第18号住居跡の南西約9mに位置する。本跡の平面形は方形または長方形状を呈したと思われるが，西側の半分以上を第4号溝に切られており，規模等は不明である。壁はロームで，約80°の立ち上がりを示している。壁溝は，幅が約15cm，深さ5～10cmで，残存する壁下全体に回っている。壁の残存状況は，南側で2.4m，北側で0.7mである。南北の壁の間隔は5.8mになる。床はロームで，平坦である。あまり踏み固められた様子は無く，やや軟弱である。ピットは3か所検出した。P_1が直径約40cm，深さ70cm，P_3が直径約30cm，深さ75cmの規模を有していることから，このP_1とP_3は主柱穴であったものと判断される。P_2

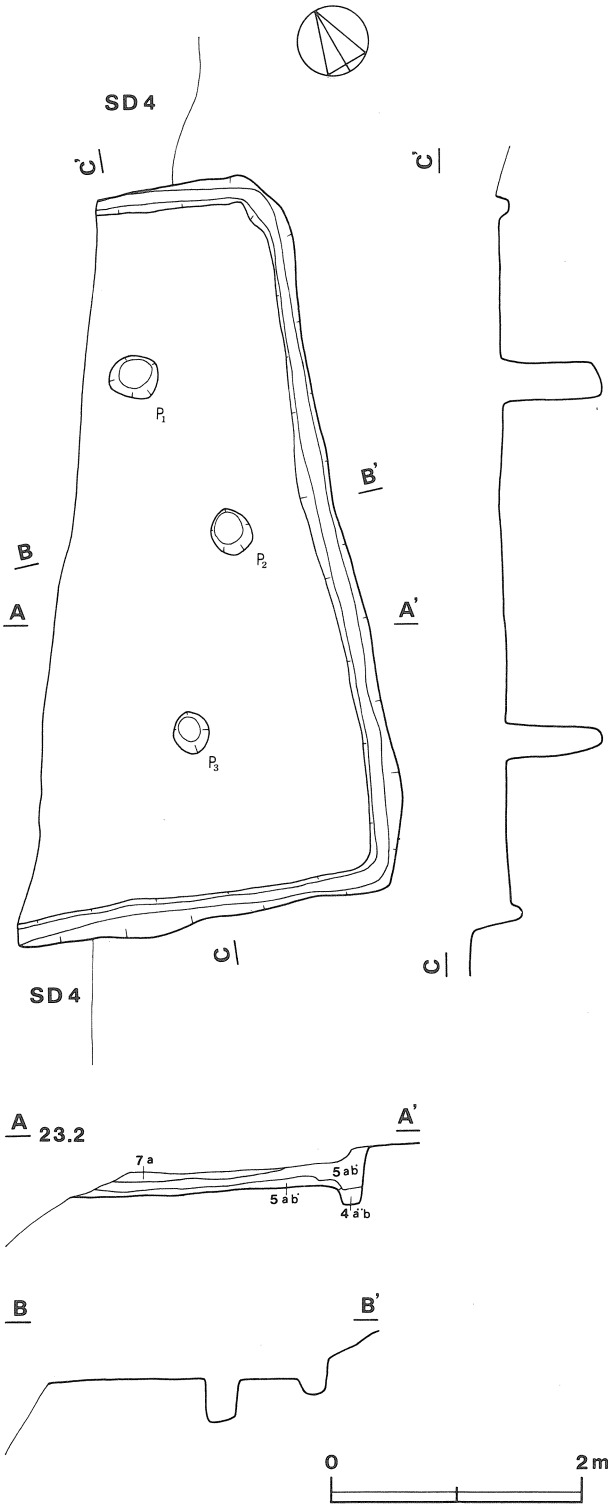


第58図　第19号住居跡出土遺物実測図

は直径約40cm，深さ37cmで，位置から判断して，出入口の施設に伴うものと思われる。このP_2がカマドの反対側に位置していたと考えると，本跡の主軸方向はN－43°－W前後を指したと見られる。

覆土は3層から成り，自然堆積である。上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の順に堆積している。暗褐色土層は，明度と含有物によって二分することが可能である。褐色土は，壁溝内に堆積している。

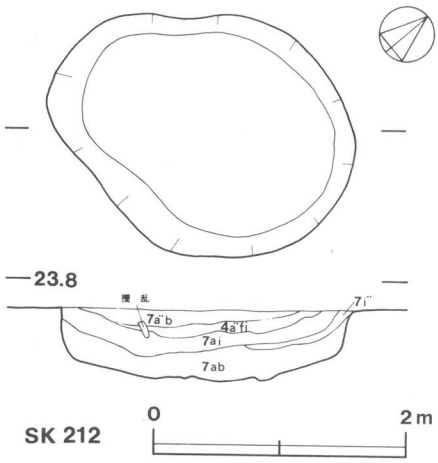
遺物は，第58図に示したもののほか，縄文式土器片や土師器片が少数出土したのみである



第59図　第19号住居跡実測図

表12　第19号住居跡出土遺物解説表

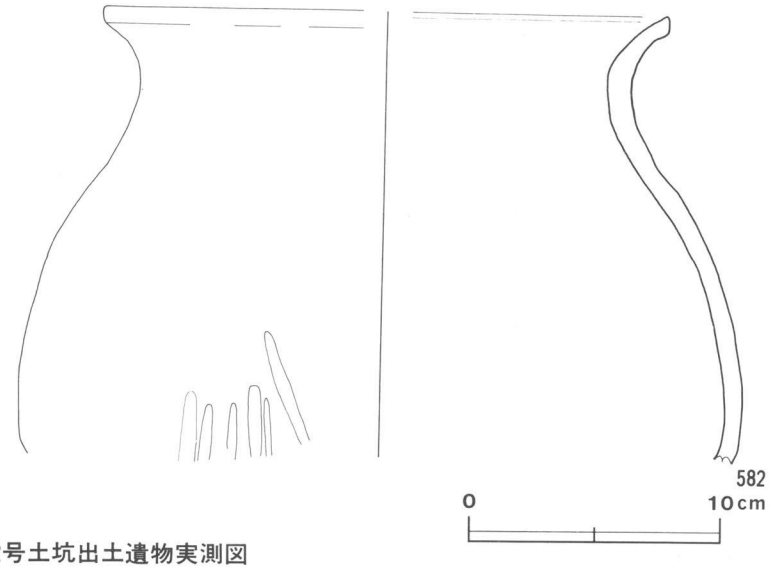
番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
58 ｜ 579	土師器 (坏)	A (12.4) B (12.0) E 3.0	底部は丸味を有する。口縁部は外傾し，口唇部は直立する。底部と口縁部の境界は強い稜をなす。	底部手持ち篦削り 他は横なで	普通 砂粒，スコリア にぶい橙色	鬼高期
580	〃 (甕)	B (9.8) E 3.4	胴部は外傾し，直線的に開く。内面は斑点状剥離が顕著。胴部中位以上欠損。	外面篦みがき (胴部縦位)	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	
581	砥　石	A 6.8 C 3.4 G 68.0	——	——	流紋岩	



第60図　第212号土坑実測図

第212号土坑（60図）

古墳時代の土坑として明確なものは第212号土坑1基だけであった。平面形は楕円形状を呈し，第13号住居跡の西南西約4mに位置している。覆土は4層から成り，自然堆積である。覆土中に，砂質粘土層が見られる。本坑からの出土遺物は，582である。この甕形土器が坑底の直上から出土していることから，本坑を古墳時代の土坑と判断した。



第61図　第212号土坑出土遺物実測図

表13　土坑一覧表(2)古墳時代

土坑番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
212	C4e7	N－29°－E	楕円形	2.5×1.95	50	II	2	N	縄文式土器片1 土師器(甕) 1，同破片7	

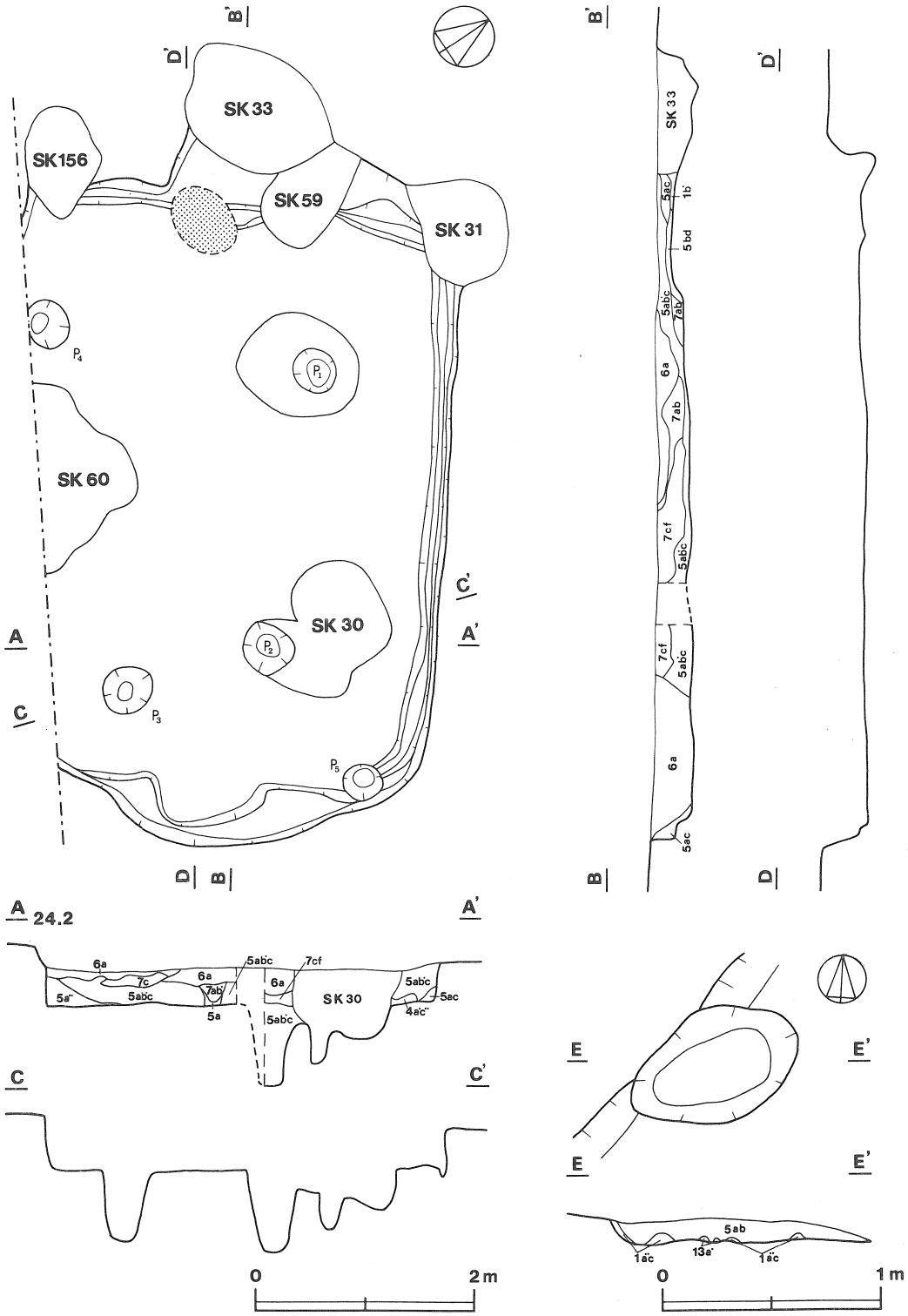
表14　第212号土坑出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
61 ｜ 582	土師器 (甕)	A (22.2) C (28.8) E 17.8	肩はなだらかにすぼまり，頸部は丸味を以って強く外反する。口唇部はややつまみ上げられる。胴部下半欠損。	頸部横なで 胴部下半縦位箆みがき	普通 砂礫，スコリアにぶい橙色	鬼高期

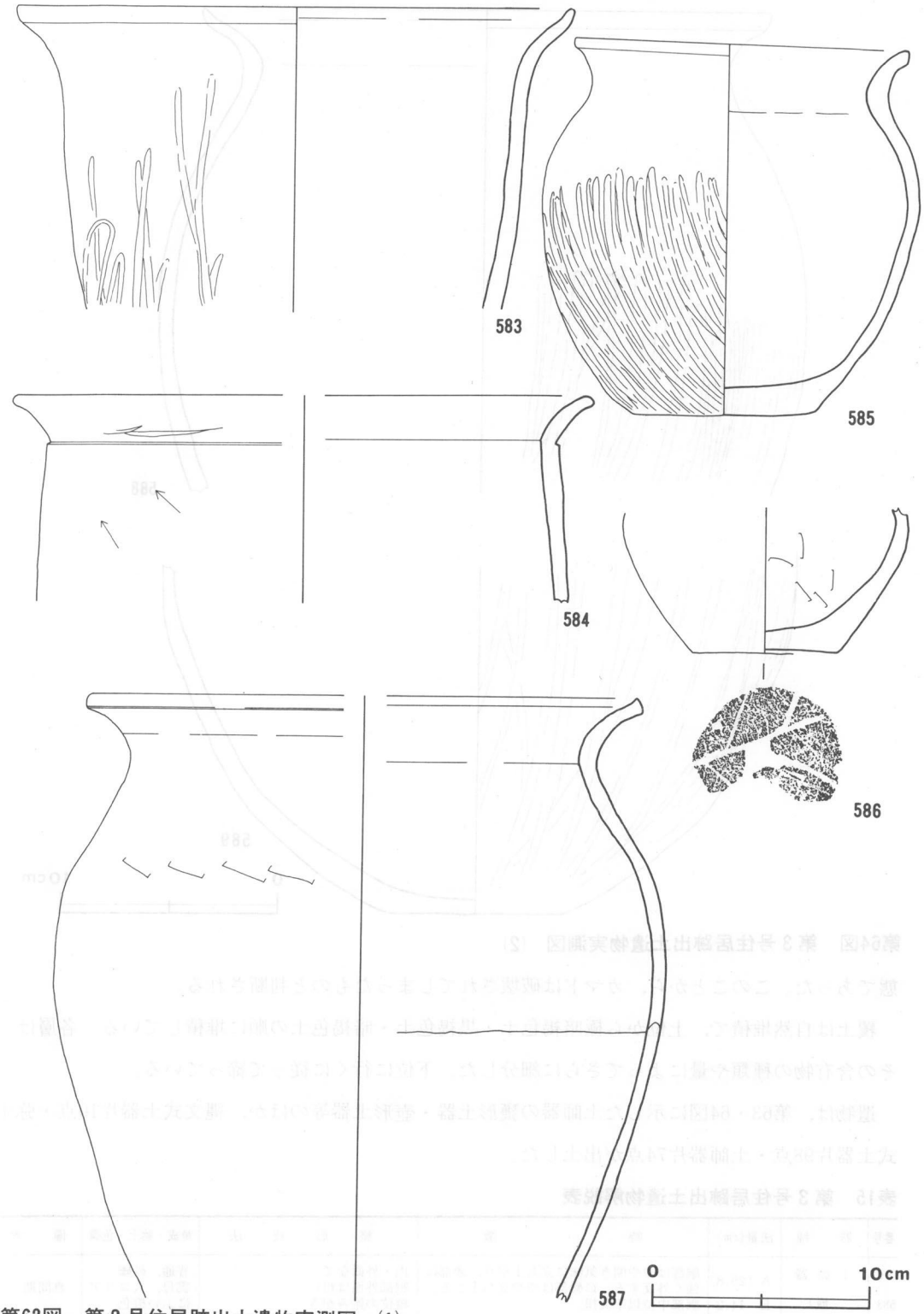
3　真間期

第3号住居跡（第62図）

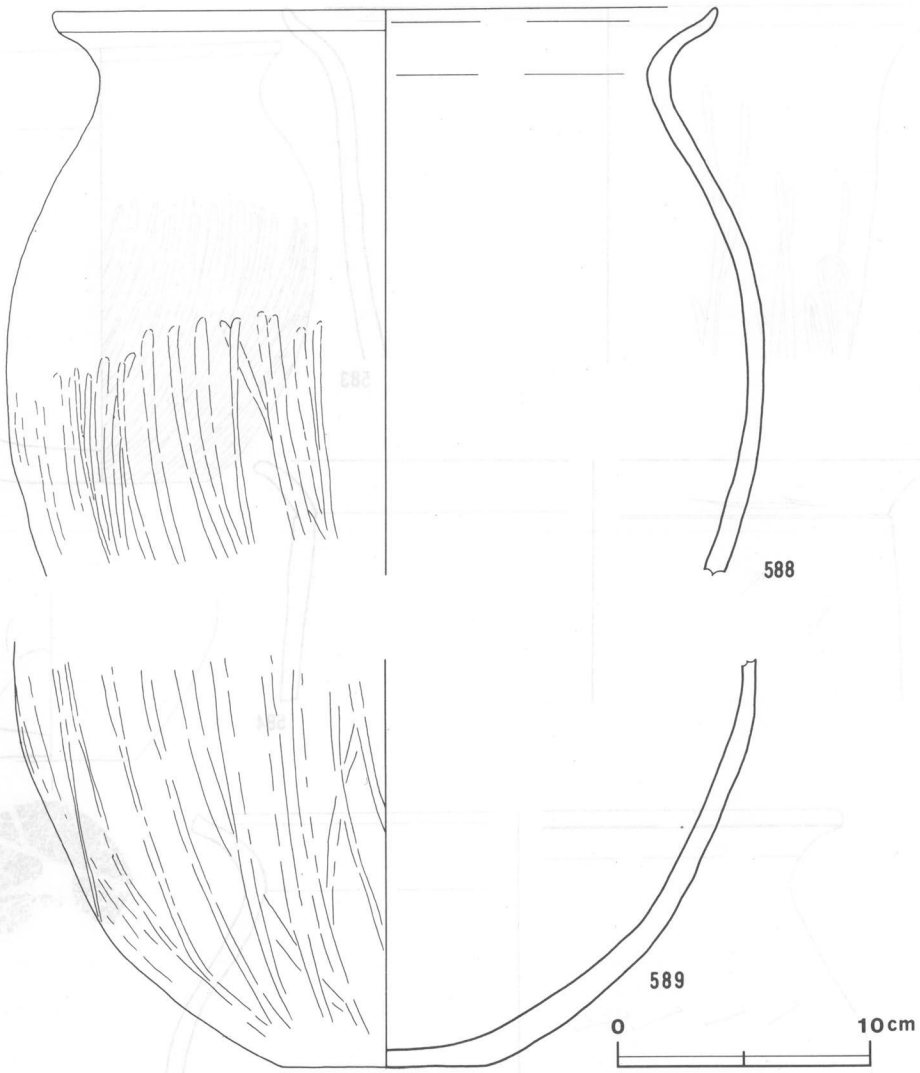
本跡はC7 j_4・D7 a_4を中心に確認された竪穴住居跡で，第4号住居跡の南東約6.5mに位置している。本跡は，北コーナーから北西壁にかけて第31号・33号・59号・156号土坑に切られ，南西側がエリア外にかかっているため，規模・平面形の詳細は不明である。調査された部分から推定すると，平面形は隅丸長方形または隅丸方形を呈したものと思われる。同様に，主軸方向はN－50°－Wを指し，主軸長は5.5m前後を測るものと思われる。壁はロームで，比較的原形を保っていると見られる北東側の壁では，ほぼ垂直に立ち上がっている。また，南東側の壁では，中央部と考えられる部分が床とともに50cm程外へ張り出している。北西側の壁は，土坑に切られているほか，攪乱等のために明確にできなかった。床はロームでP_1の上を第32号土坑，P_2の北半分を第30号土坑，P_3とP_4の中間を第60号土坑によって切られている。残存する床はほぼ平坦で，軟弱である。ピットは5か所を検出した。P_1は第32号土坑によって切られているが，下半分残っていた。床面からの深さは74cmである。P_2も北半分を第30号土坑によって切られているが，75cmの深さを有している。P_4は，一部がエリア外にかかっているが，大部分を調査できたものと思われる。直径45cm，深さ56cmである。この3か所のピットと，直径65cm，深さ64cmの規模を有するP_3が，本跡の主柱穴であろう。P_5は，深さが28cmとP_1～P_4と比較して浅い。位置から判断して，柱穴とするよりは壁溝との関係を考える方が妥当であろう。壁溝は，北東及び北西側壁下に検出された。溝の東端は，東コーナーをわずかに回った場所にある。P_5がこの溝の先端に位置することから，壁の崩れ防止施設の一部である可能性がある。また，南東側の壁下に溝が見られないのは，この部分が出入口であったことと関係があると思われる。北西側の壁下の中央部に焼土が検出され，調査の結果，この場所に炉またはカマドがあったことが判明した。炉やカマドの性質から判断して，ここではカマドの痕跡と考えるのが妥当である。しかし，この部分は，前述したように第33号・59号両土坑によって切られ，しかも攪乱によって壁が明瞭に検出できなかったという状



第62図　第３号住居跡実測図



第63図　第３号住居跡出土遺物実測図　(1)



第64図　第３号住居跡出土遺物実測図（2）

態であった。このことから，カマドは破壊されてしまったものと判断される。

覆土は自然堆積で，上位から極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土の順に堆積している。各層は，その含有物の種類や量によってさらに細分した。下位に行くに従って締っている。

遺物は，第63・64図に示した土師器の甕形土器・壺形土器等のほか，縄文式土器片10点・弥生式土器片98点・土師器片74点が出土した。

表15　第３号住居跡出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
63 ｜ 583	土師器 （甑）	A (25.8) E 14.2	胴部はやや開き気味に立ち上がり，頸部は強く外反する。口唇部はやや立ち上がる。胴部中位以下欠損。	内・外面なで 胴部外面は粗い縦位の篦みがき	普通，砂礫 雲母，スコリア にぶい橙色	真間期

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
63 — 584	土師器 (甑)	A (27.2) E 9.6	胴部は内傾し，段を経て頸部が外反する。 口辰部は外方へ開く。胴部中位以下欠損。	胴部内面横位なで 胴部外面篦削り 頸部内・外面なで	普通 砂礫(多) にぶい赤褐色	真間期
585	〃 (甕)	A 15.4 B 8.4 C 17.5 D 17.5	胴部は外傾し，ゆるく内反しながら立ち上がる。肩部が最も張る。頸部はやや肥厚し，強く外反する。 底部欠損。	頸部横なで 胴部内面なで 胴部外面縦位篦みがき	不良 砂礫 暗赤褐色	〃
586	〃 (〃)	B 6.7 C 13.2 E 6.7	胴部は強く外傾して立ち上がる。最も張っている所で強く内彎することから，ここが肩であろう。底部木葉痕。胴部中位以上欠損。	篦なで	不良 砂礫 にぶい赤褐色	
587	〃 (〃)	A (25.4) C (28.4) E (28.0)	胴部は肩が最も張る。頸部は強く多反し， 口唇部はわずかにつまみ上げられる。	頸部横なで 他はなで 肩に篦痕	普通 砂礫，スコリア にぶい橙色	真間期
64 — 588	〃 (〃)	A (26.2) C 30.0 E 22.5	胴部は中ほどと見られる所が最も張る。肩はなだらか。頸部はやや肥厚し，強く外反する。口唇部はやや起き上がる。胴下半欠損。	頸部横なで 胴部縦位篦みがき	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	〃
589	〃 (〃)	B 8.1 E 16.1	胴部は強く外傾し，内反しながら立ち上がる。(587と同一個体)胴部中位以上欠損。	内面なで 外面縦位篦みがき	普通 砂粒，スコリア にぶい赤褐色	〃

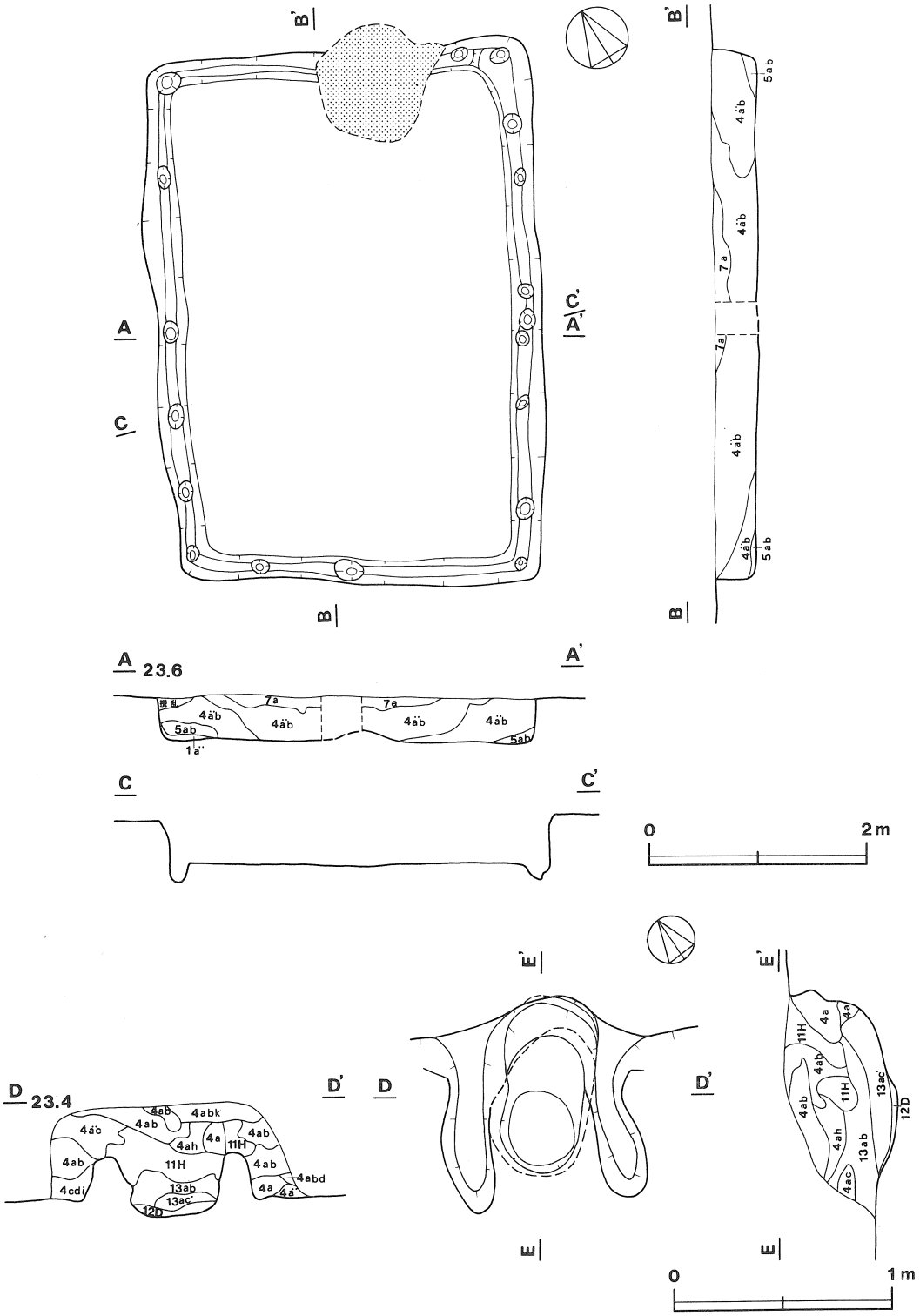
第15号住居跡（第65図）

本跡はC4 j_1・C4 j_2を中心に確認された竪穴住居跡で，第13号住居跡の南西約16mに位置している。

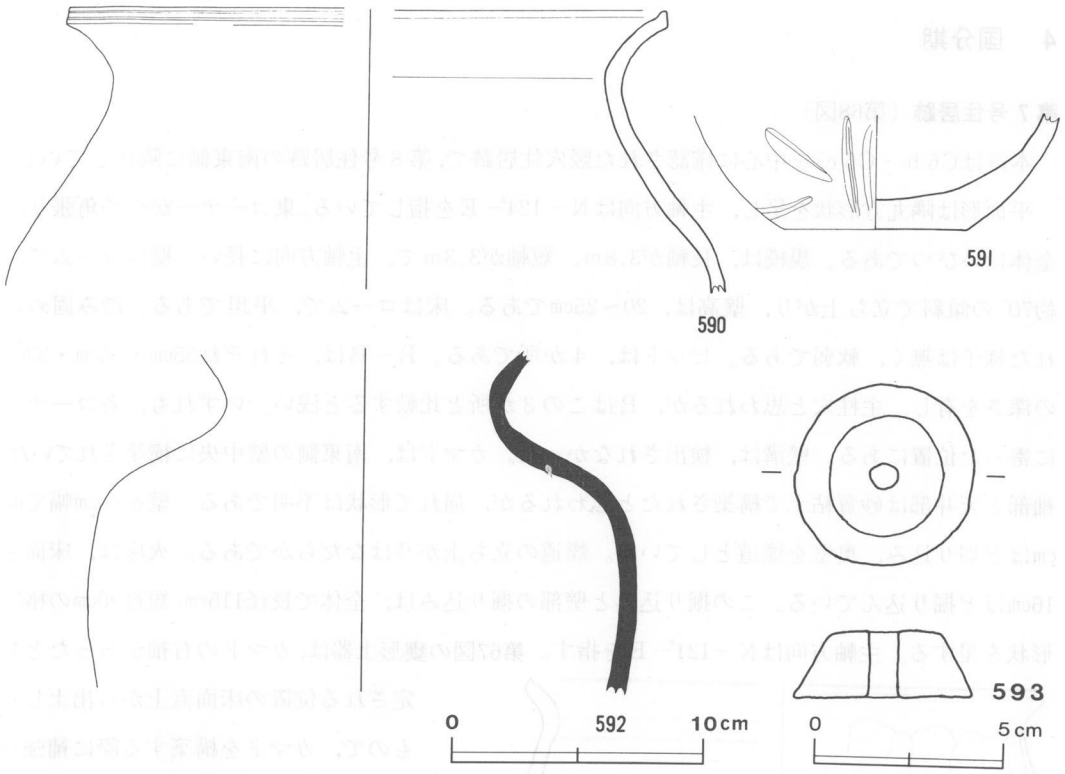
平面形は長方形状を呈し，主軸方向はN－29°－Eを指している。規模は，長軸が4.8m，短軸が3.6mで，主軸方向が長い。壁はロームで，約80°の傾斜を有し，壁高は，約40cmである。壁溝は，幅20～25cm，深さ約5cmで，カマドの部分を除き，1周している。溝の中には，深さ15～20cmの小ピットがほぼ等間隔に並んでいる。この小ピットは，南西側の壁溝の東半分と，北西側の壁のカマドと北コーナーの間には認められないが，合計で，18か所が検出された。床はロームで，平坦である。硬く踏み固められている。ピットは検出されなかった。屋外の柱穴も検出できなかったことから，壁溝の中に検出された小ピットが，柱穴の役割を果した可能性も考えられる。カマドは，北東側の壁のやや東へ寄った位置に構築されていたが，天井部は崩れていた。長さ95cm，幅90cm，焚口部幅50cmを測り，主軸方向はN－31°－Eを指す。掘り方は壁を幅60cmで20cmほど切り込み，袖は下半分をローム，上半分を砂質粘土を用いて構築している。火床は，床を7cmほど掘り込んでおり，長径35cmの楕円形状を呈する。

覆土は4層から成り，自然堆積である。上位から，黒褐色土・褐色土・暗褐色土の順に堆積している。褐色土層は，明度によって二分されるが，含有物の差は認められない。

遺物は，第66図に示したもののほか，縄文式土器片11点，土師器片10点が出土した。



第65図　第15号住居跡実測図



第66図　第15号住居跡出土遺物実測図

表16　第15号住居跡出土遺物解説表

番号	器　種	法量(cm)	持　　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
66 590	土師器 (甕)	A (23.6) E 11.3	頸部は強く外反する。口唇部のつまみ上げは大きく，断面はL字状を呈する。胴部中位以下欠損。	頸部横なで 肩部なで	普通 砂礫，スコリア 褐灰色	真間期
591	〃 (〃)	B (7.2) E 4.7	胴部は外傾し，内反して立ち上がる。砥石として利用され，外面に溝状の研磨痕が残る。胴部中位以上欠損。	内面なで 外面みがき	普通 砂礫，スコリア 赤褐色	
592	須恵器 (壺)	C (21.8) E 14.0	肩が張り，頸部は強くすぼまる。口縁は大きく開いたと思われる。胴部内面に同心円の叩き痕。口縁部及び胴下半欠損。	水挽き 横なで 胴部叩き	良 細砂 緑灰色	真間期
593	紡錘車	A 3.0 B 4.7 D 1.75 G 44.5	――	――	粘板岩	

4　国分期

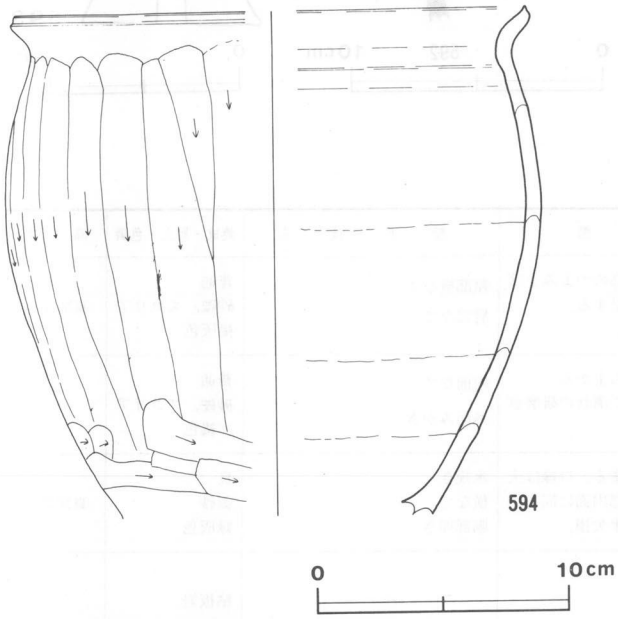
第７号住居跡（第68図）

本跡はC6 b_2・C6 c_2を中心に確認された竪穴住居跡で，第８号住居跡の南東側に隣接している。

平面形は隅丸方形状を呈し，主軸方向はＮ－124°－Ｅを指している。東コーナーがやや角張り，全体にいびつである。規模は，長軸が3.8m，短軸が3.3mで，主軸方向に長い。壁はロームで，約70°の傾斜で立ち上がり，壁高は，20～25cmである。床はロームで，平坦である。踏み固められた様子は無く，軟弱である。ピットは，４か所である。P_1～P_3は，それぞれ35cm・35cm・33cmの深さを有し，主柱穴と思われるが，P_4はこの３か所と比較すると浅い。いずれも，各コーナーに寄った位置にある。壁溝は，検出されなかった。カマドは，南東側の壁中央に構築されていた。袖部と天井部は砂質粘土で構築されたと思われるが，崩れて形状は不明である。壁を80cm幅で60cmほど切り込み，奥壁を煙道としている。煙道の立ち上がりはなだらかである。火床は，床面を16cmほど掘り込んでいる。この掘り込みと壁部の掘り込みは，全体で長径115cm，短径90cmの楕円形状を呈する。主軸方向はＮ－121°－Ｅを指す。第67図の甕形土器は，カマドの右袖があったと想定される位置の床面直上から出土したもので，カマドを構築する際に補強材として使用されたものと判断される。

覆土は自然堆積で，上位から黒褐色土・暗褐色土の順に堆積している。後者は，上部がローム粒子を極少量しか含まないのに対し，下部では多量に含んでいることから，さらに細分した。

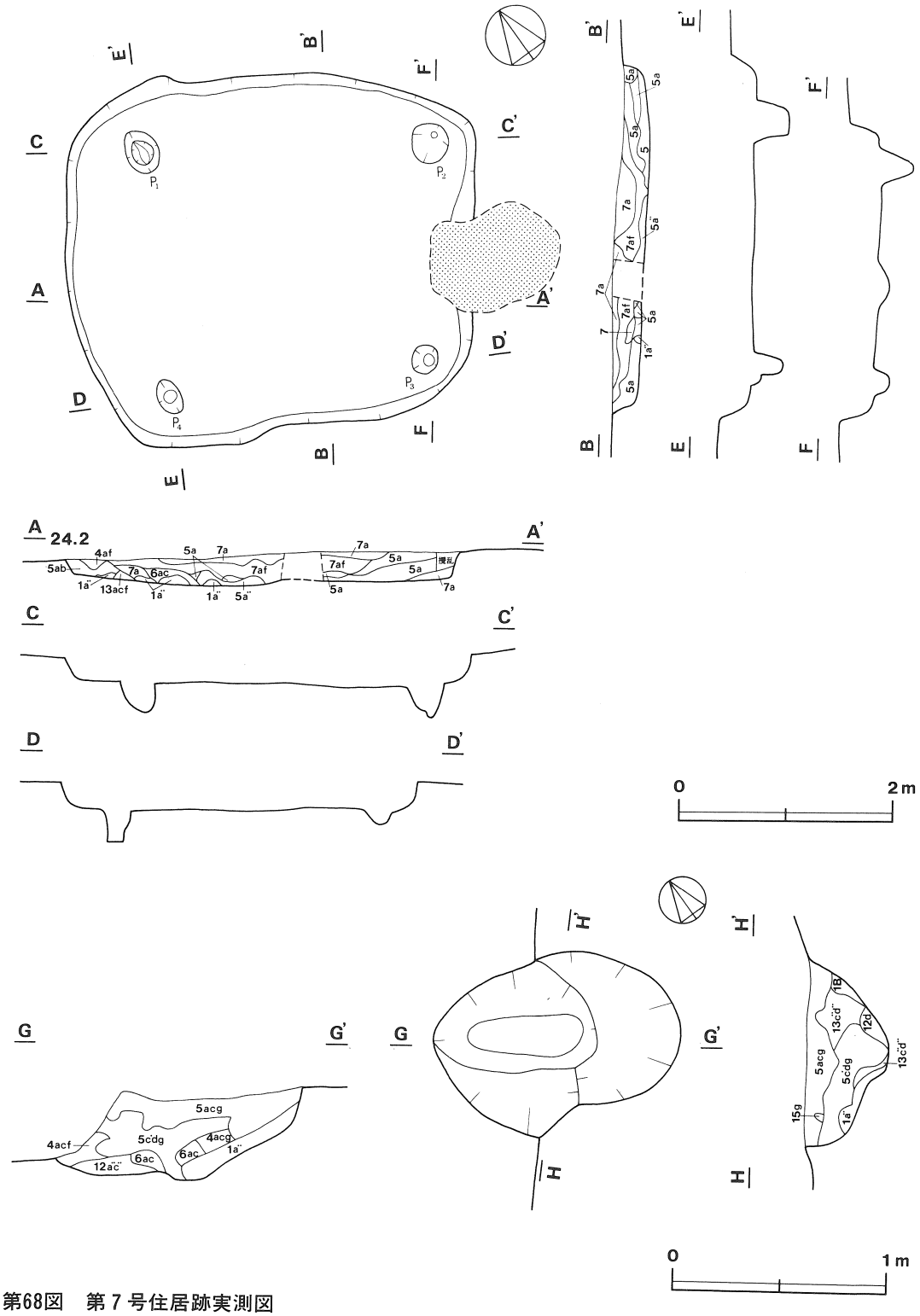
遺物は，第67図に示したもののほか，土師器の甕形土器の破片６点が出土している。



第67図　第７号住居跡出土遺物実測図

表17　第７号住居跡出土遺物解説表

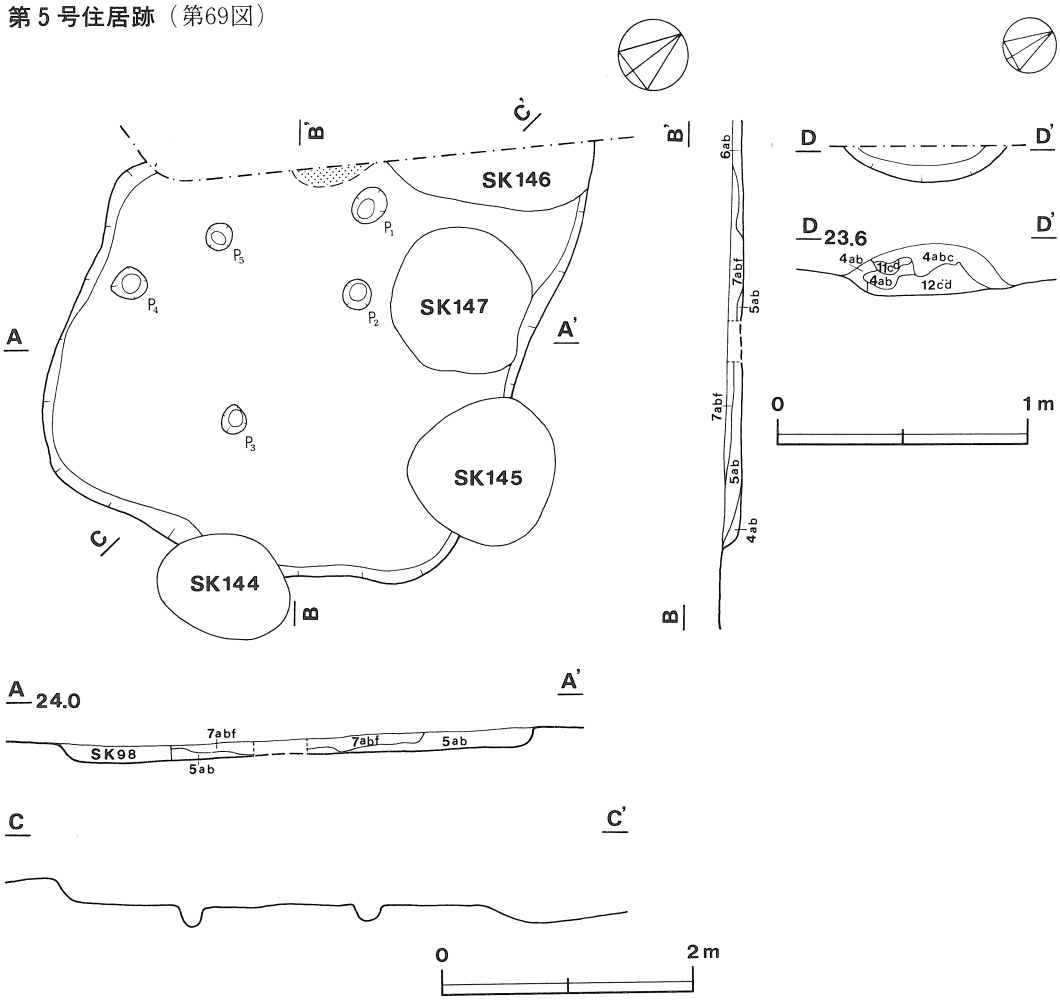
番号	器　種	法量(cm)	特　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
67 ｜ 594	土師器 （甕）	A (20.2) C (21.2) E 20.1	胴部は肩が最も張るが，全体にゆるやかなカーブである。頸部は強く外反し，口唇部はつまみ上げられる。底部欠損。	頸部横なで。 胴部縦位箆削り 胴部下端横位箆削り	良（二次焼成） 砂礫 暗赤灰色	国分期



第68図　第７号住居跡実測図

5　時期不明

第5号住居跡（第69図）



第69図　第5号住居跡実測図

本跡はC6 e_0・C7 e_1を中心に確認された竪穴住居跡で，第4号住居跡の北北西約9mに位置する。本跡は，北西側がエリア外にかかり，さらに南東辺の中央を第144号土坑，北東辺の東コーナー寄りの場所を第145号土坑，同じく北端と思われる箇所を第146号土坑によってそれぞれ切られており，平面形・規模等の詳細は不明である。調査された部分から推定すると，平面形は隅丸方形または隅丸長方形状を呈し，主軸方向はN－34°－Wを指したものと思われる。副軸長は，約3.5mである。壁はロームで，ほぼ平坦であるが，軟弱である。ピットは，5か所に認められた。しかし，いずれも小さく浅いもので，主柱穴とは判断できなかった。エリアとの境界付近に，炉またはカマドの一部と見られる焼土が検出された。大部分がエリア外にあるため，炉・カマドのいずれと

も断定できなかった。

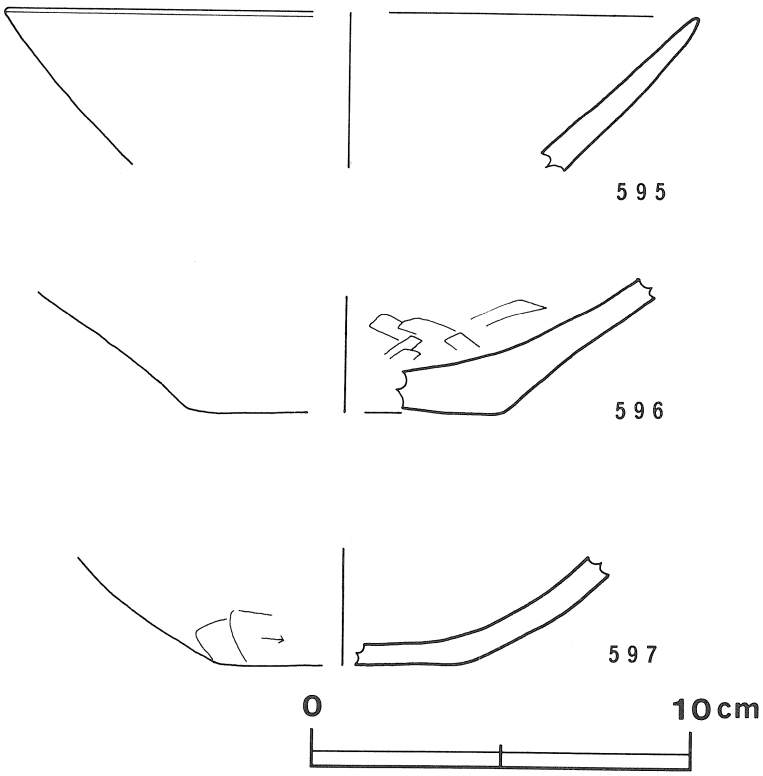
覆土は4層から成り，自然堆積である。上位から黒褐色土・暗褐色土の順に堆積している。その下位には，エリア外との境界付近に極暗褐色土が堆積し，南東側壁付近には褐色土が堆積している。この褐色土層は，いわゆる三角堆積の状況を呈し，本跡の第一次埋土と思われる。

遺物は極めて少なく，鬼高期の坏形土器口縁部の破片が1点，同甕形土器胴部の破片3点のみである。

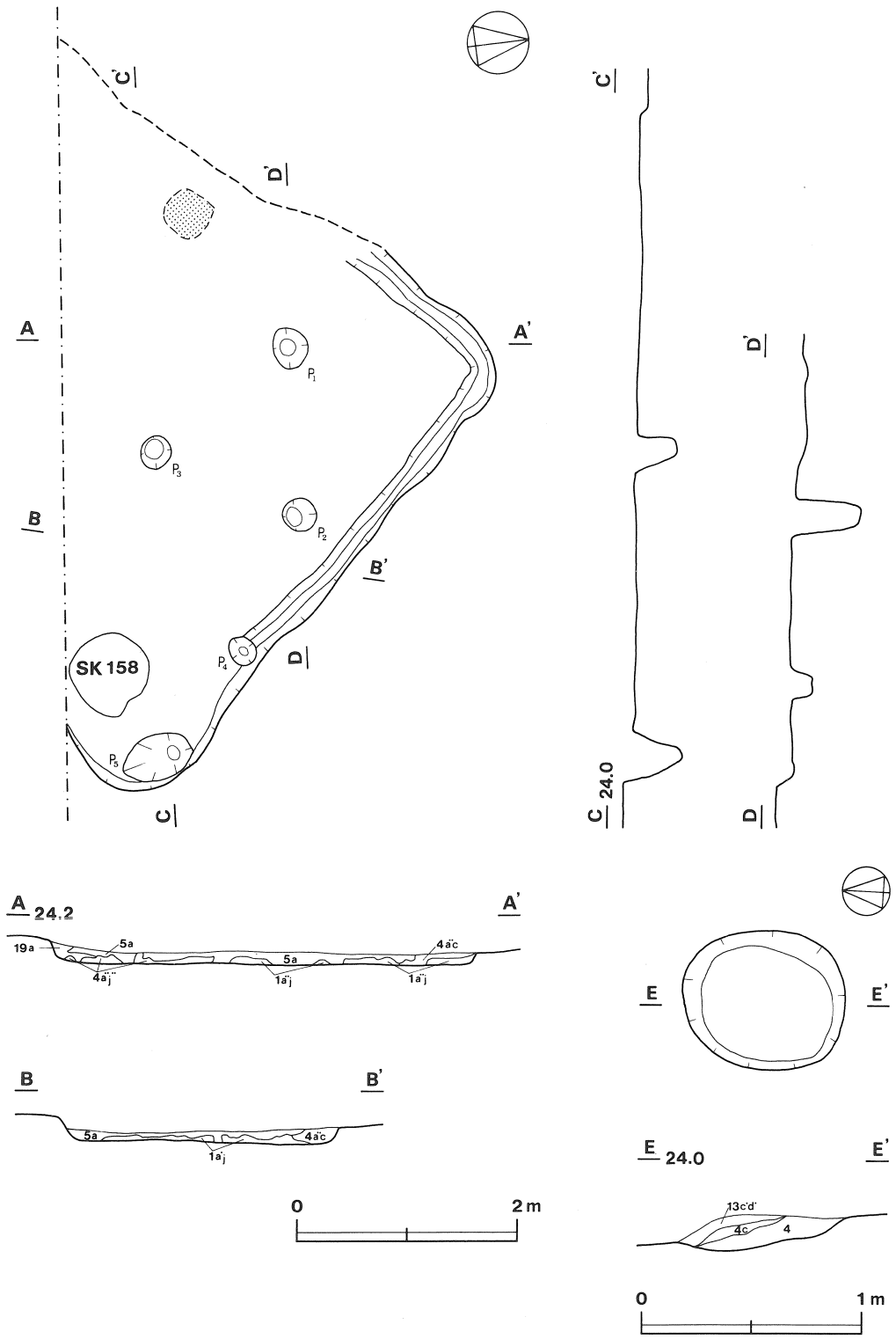
第6号住居跡（第71図）

本跡はC6 h_9・C6 i_9を中心に確認された竪穴住居跡で，第4号住居跡の西約4mに位置する。

本跡は，北西側の壁を第2号溝に切られ，しかも南半分がエリア外にかかっているため，平面形・規模等の詳細は不明である。調査された部分から推定すると，平面形は隅丸方形または隅丸長方形である。壁はロームで，約70°の傾斜を有している。壁高は約10cmである。北西壁は，先述したように第2号溝によって切られており，北コーナー付近を除いては検出できなかった。北東壁は，全体を検出し得た。この部分から，本跡の主軸長は約5.2mを測るものと考えられる。床はロームで，軟弱である。平坦であるが，北西側は第2号溝によって削平されている。また，東



第70図　第6号住居跡出土遺物実測図



第71図　第６号住居跡実測図

コーナー付近を第158号土坑によって切られている。北西壁の推定線付近から炉状遺構が検出された。平面形は長径0.8m，短径0.6mの楕円形状を呈し，炉床は北西側へ向かってやや深さを増している。このことは，検出された炉状遺構の中心部が北西壁に寄った位置にあることを示していると考えられる。上部が第2号溝によって削平されているため断定することはできないが，この炉状遺構がカマドの痕跡であることは，十分考えられることである。これをカマドとすると，本跡の主軸方向はN－42°－Wを指したものと思われる。壁溝は，北東側の壁下の東コーナーに近い場所から北西側の壁下にかけて検出された。幅は約20cm，深さは約5cmを測る。北東側の溝の端には，P_4が位置している。ピットは5か所を検出した。P_1は64cmの深さを有し，主柱穴と思われる。P_4は壁溝の端に位置し，第3号住居跡のP_5と同様の性格を有するものと考えられる。P_5は，貯蔵穴であろう。P_2・P_3の性格は不明である。

覆土は自然堆積で，上位から暗褐色土・明褐色土の順に堆積している。全体によくしまっている。

遺物は，全体にまばらに散らばって，弥生式土器片13点，土師器片56点が出土した。

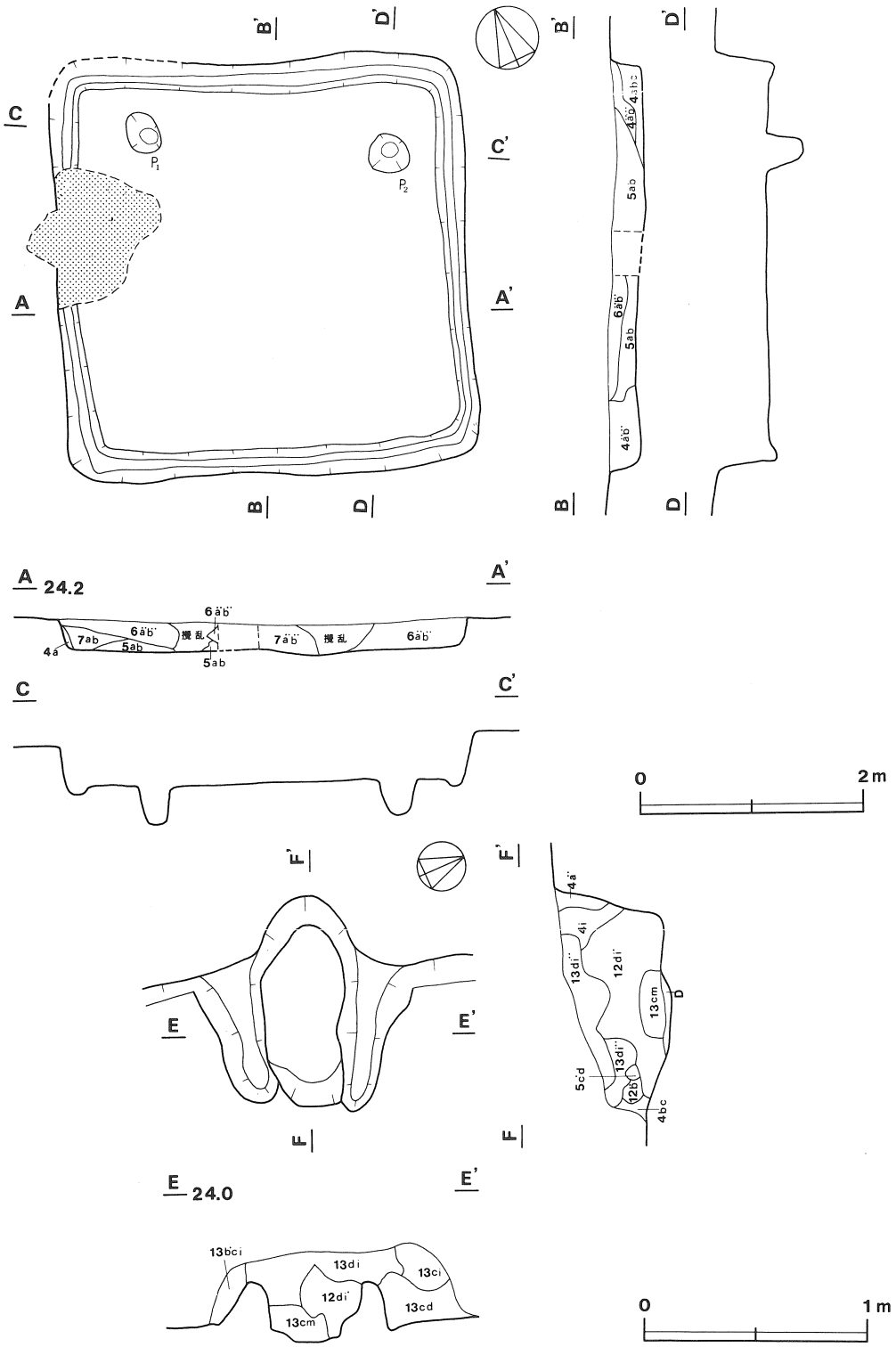
表18　第6号住居跡出土遺物解設表

番号	器　種	法量(cm)	特　徴	整　形　技　法	焼成・胎土・色調	備　考
70 — 595	土師器 (高坏)	A (18.2) E　4.2	受部は外傾し，直線的に開いている。基部以下欠損。	内外面ともなで後縦位篦みがき	普通 砂粒，スコリア にぶい赤褐色	
596	〃 (甕)	B (8.4) E　3.6	胴部は大きく外傾して直線的に開く。底部はやや上げ底気味。 胴部中位以上欠損。	内面篦削り 胴部外面篦削り 底部手持ち篦削り	普通 砂粒 黒褐色	
597	〃 (〃)	B (6.6) E　2.9	胴部は大きく外傾し，内反しながら開く。 胴部中位以上欠損。	内面，底部篦なで 胴部外面篦みがき 胴部下端篦削り	普通 砂粒，スコリア 灰褐色	

第8号住居跡（第72図）

本跡は，C6 b_1・C6 c_1を中心に確認された竪穴住居跡で，第7号住居跡の北西側に隣接している。

平面形は方形状を呈し，主軸方向はN－67°－Wを指す。規模は，長軸が3.7m，短軸が3.65mで，主軸方向がわずかに短い。壁はロームで，約80°の傾斜を有し，壁高は北東側で約40cm，南西側で45～50cmを測る。北コーナー部は，攪乱のため壁は検出できなかった。床はロームで，凹凸は無いものの，北東から南西にかけてゆるやかに傾斜している。中央からカマド前方にかけて，堅緻に踏み固められていた。この部分以外は，軟弱である。壁溝は，幅15～20cm，深さ約5cmで，カマドの部分を除き周回している。ピットは，2か所である。P_1は直径約40cm，深さ35cm，P_2は直径約35cm，深さ33cmで，本跡の主柱穴と思われる。この2か所が，各々北・東の両コーナー付近に位置していることから，南・西両コーナーにもピットが位置する可能性が高いと考えられたが，



第72図　第８号住居跡実測図

確認することができなかった。カマドは，北西側の壁の中央からやや北コーナーに寄った位置に構築されていた。天井部は崩れていた。長さ95cm，袖幅75cm，焚口部幅30cmほどで，袖部は砂質粘土を用いて構築されていた。掘り方は壁を50cmほどの幅で35cmほど切り込み，壁ぎわを煙道としている。火床は床面を10cmほど掘り込んでいる。カマドからの出土遺物は無かった。

覆土は，壁に近い土層については埋め戻されている可能性がある。ロームブロックを多量に含む層がそれにあたる。一方，中央付近には自然堆積の様相を呈している部分が認められる。このことから，本跡にあっては，一部埋め戻しが行われ，一部は自然堆積によって覆土が形成されたと見なされる。

遺物は少なく，縄文式土器片３点，土師器の甕形土器片８点のみである。

第14号住居跡（第73図）

本跡はC4 c_5・C4 c_6を中心に確認された竪穴住居跡で，第16号住居跡での南約３mに位置している。

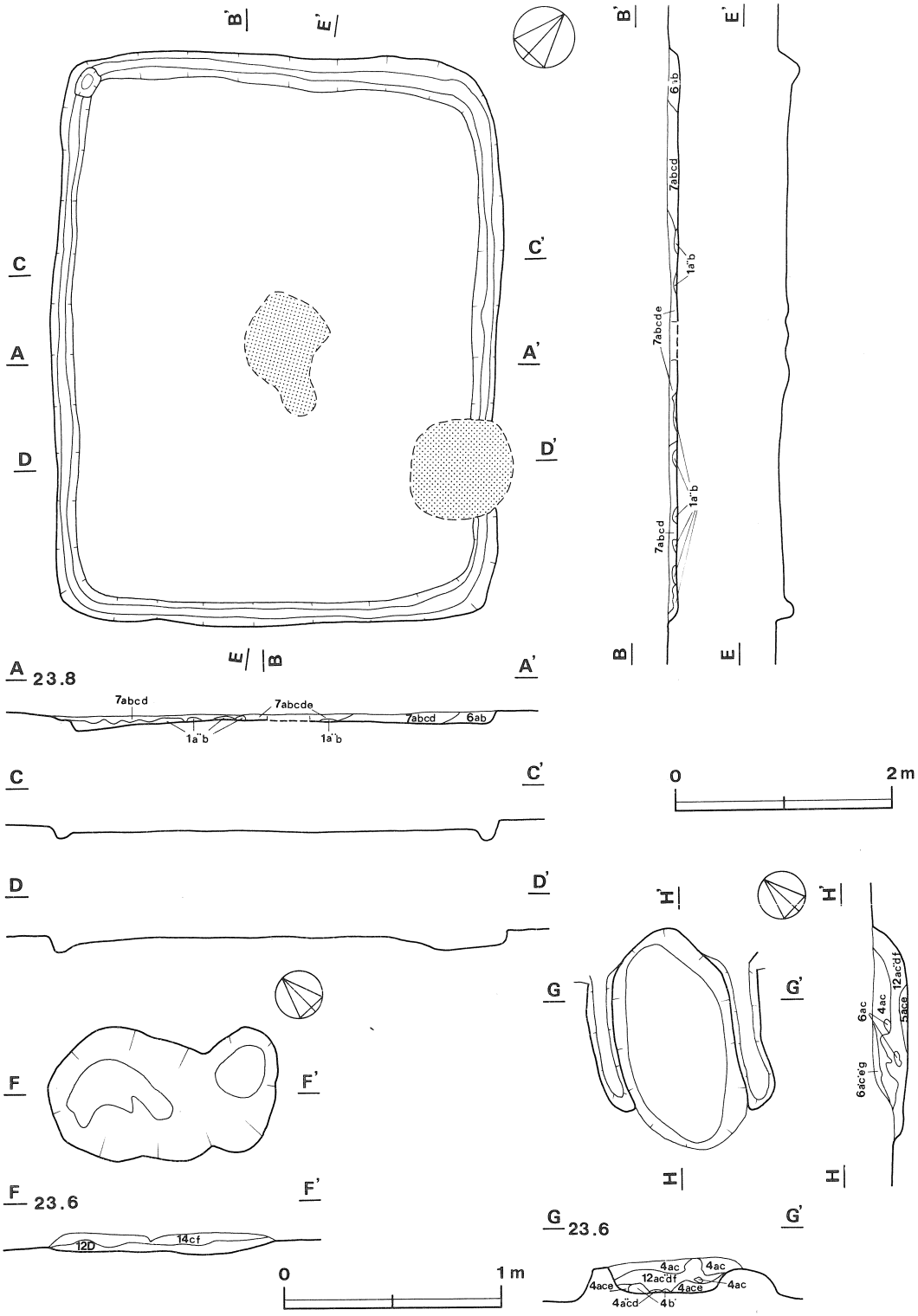
平面形は長方形状を呈し，主軸はN－47°－Eを指す。規模は，長軸が5.3m，短軸が4.1mで，主軸方向が短い。壁はロームで，70～80°の傾斜で立ち上がっている。壁高は，約10cmを測る。壁溝は，幅15～20cm，深さ約10cmで，カマドの部分を除き，１周している。床はロームで平坦であり，硬く踏み固められている。ピットは検出できなかった。本跡には，炉とカマドが認められた。炉は床のほぼ中央に位置し，長径105cm，短径60cmの南東側が大きく張り出す不整楕円形状を呈している。長径方向は，N－51°－Wを指している。床面を炉床としている。炉床の中心は北西寄りの部分に認められたが，掘り込みは無かった。また，南東側の張り出し部にも強い火熱を受けた部分が検出されたことから，この部分も炉床として使用されたことがわかった。いずれも，床のロームは，約５cmの厚さで焼土化していた。カマドは北東側の壁の東コーナーへ寄った位置に構築されていたが，天井部は崩れていた。長さ105cm，幅80cm，焚口部幅50cmを測り，主軸方向はN－40°－Eを指す。壁を幅70cmで30cmほど切り込み，奥壁を煙道としていた。火床は床を５cmほど掘り込んでいる。

覆土は，３層から成り，自然堆積である。上位から，黒褐色土・極暗褐色土の順に堆積している。上位の黒褐色土層を，その彩度によって二分した。

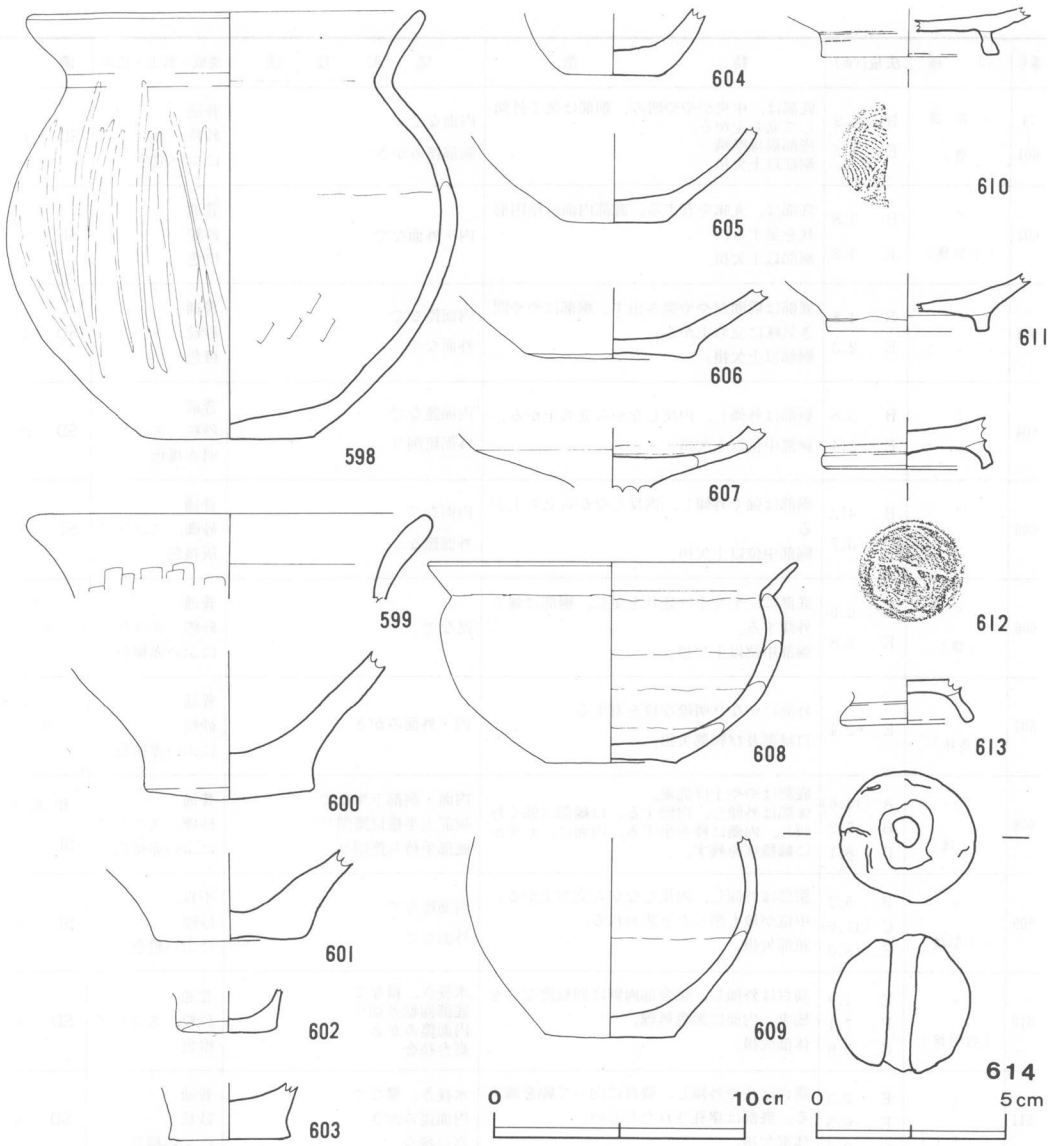
遺物の出土は見られなかった。

2　遺構外出土遺物

古墳・奈良・平安時代の遺物は，弥生時代や中世の遺構からも出土している。これらは，遺構外出土遺物として，本項に一括して掲載した。



第73図　第14号住居跡実測図



第74図　遺構外出土遺物実測図

表19　遺構外出土遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
74 — 598	土師器 (甕)	A 15.4 B 6.8 C 17.9 D 17.1	胴部は，中ほどのやや上が最も張り，球状を呈する。 頸部で，強く外反し，口縁は直線的に広がる。頸部内面は，ややシャープな稜をなす。	内面横位箆みがき 胴部外面横位箆削り 後縦位箆みがき	良 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	鬼高期 SI 9
599	〃 (〃)	A (17.4) E 3.4	頸部は外傾し，やや外反する。口唇部は丸くおさめ，器肉は肥厚する。胴部以下欠損。	横位なで 頸部縦位箆みがき	普通 砂粒 にぶい橙色	SI 4
600	〃 (〃)	B 6.7 E 5.9	底部は，中央がやや突き出す。胴部は強く外傾して立ち上がる。胴部以上欠損。	内面なで 外面箆みがき	やや不良 砂粒，スコリア 橙色	SD 4

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
74 — 601	土師器 (甕)	B 5.9 E 3.5	底部は，中央がやや凹み，胴部は強く外傾して立ち上がる。 底部周縁摩滅。 胴部以上欠損。	内面なで 胴部篦みがき	普通 砂粒，スコリア にぶい橙色	SD 4
602	〃 (小型甕)	B 3.8 E 1.8	底部は，丸味を有する。底部内面は楕円形状を呈する。 胴部以上欠損。	内・外面なで	普通 砂粒 橙色	SI 9
603	〃 (〃)	B 4.8 E 2.3	底部は周囲がやや突き出す。胴部はやや開き気味に立ち上がる。 胴部以上欠損。	内面篦なで 外面なで	普通 砂粒 橙色	SD 4
604	〃 (〃)	B 3.8 E 2.4	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。 胴部中位以上欠損。	内面篦なで 外面篦削り	普通 砂粒，スコリア 明赤褐色	SD 18
605	〃 (〃)	B 4.2 E 3.7	胴部は強く外傾し，内反しながら立ち上がる。 胴部中位以上欠損。	内面なで 外面篦なで	普通 砂礫，スコリア 灰褐色	SI 9
606	〃 (甕)	B 6.6 E 2.8	底部は，やや上げ底状を呈し，胴部は強く外傾する。 胴部中位以上欠損。	篦なで	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	〃
607	〃 (高坏)	E 2.4	外面にかなり明瞭な稜を有する。 口縁部及び脚部欠損。	内・外面みがき	普通 砂粒 にぶい赤褐色	〃
608	〃 (埦)	A (14.6) B 5.2 D 8.1	底部はやや上げ底風。 体部は外傾し，内彎する。口縁部は強く外傾し，内側に稜を生ずる。内面に，わずかに輪積痕を残す。	内面・胴部下半なで 胴部上半横位篦削り 底部手持ち篦削り	普通 砂礫，スコリア にぶい赤褐色	和泉期 SI 9
609	〃 (小型甕)	B 5.2 C (11.6) E 8.0	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。 中位が最も張ったと思われる。 頸部欠損。	内面篦なで 外面なで	不良 砂礫 にぶい橙色	SI 9
610	〃 (台付埦)	E 1.9 F 7.1 G 0.9	高台は外傾し，接合部両側に回転篦なでを施す。内面に黒色処理。 体部欠損。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 内面篦みがき 高台接合	普通 砂粒，スコリア 橙色	SD 4
611	〃 (〃)	E 2.3 F 6.5 G 0.6	高台はやや外傾し，畳付に向って幅を減ずる。底部は穿孔されたらしい。 体部欠損。	水挽き，横なで 内面篦みがき 高台接合。	普通 砂粒 にぶい橙色	SD 4
612	〃 (〃)	E 2.0 F 6.8 G 1.0	高台は外傾し，外側接合部は，回転篦なでによって凹線。内側は横なでにより丸味。 体部欠損。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 内面篦みがき 高台接合	普通 砂粒，スコリア にぶい橙色	SK 254
613	〃 (〃)	E 1.8 F 5.4 G 1.2	高台は強く外傾し，畳付は丸味を有する。 全体に剝離が顕著。 体部欠損。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	普通 砂粒，スコリア にぶい赤褐色	SD 4
614	土玉	A 3.55 D 3.7 G 42.5	———	———	———	SK 242

第5節　中世

本節では，中世以降の土坑・溝と，これらからの出土遺物を記載した。出土遺物は，本章の第2～4節のような遺構ごとの掲載方法を採らず，種類ごとに一括して掲載することとした。

1　土坑

当遺跡で検出・調査した遺構は，本章の第2～4節で述べた遺構を除き，その大部分が一つの方向性に従っている。この方向性は現代にまで影響を与えており，遺跡内の地籍図に見られる土地の境界線も，この例にもれない。このため，開発直前まで耕作されていた畑に掘られたいわゆる芋穴までが，畑の境界に沿って掘られるという性質上，中世の土坑と同じ方向性を有することになってしまった。また，いわゆる芋穴と中世の土坑(特に平面形が長方形状を呈するもの)は，坑底（平坦），壁（ほぼ垂直），覆土（埋め戻し）等，共通する性質が多い。

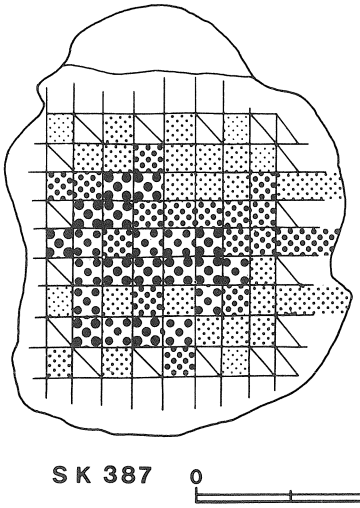
上記のことから，当遺跡での土坑の形態分類は重要な意味を有さないと判断し，付属施設や覆土の含有物及び土坑が所在する場所等を中心に分類し，一部の土坑については性格付けを試みた。

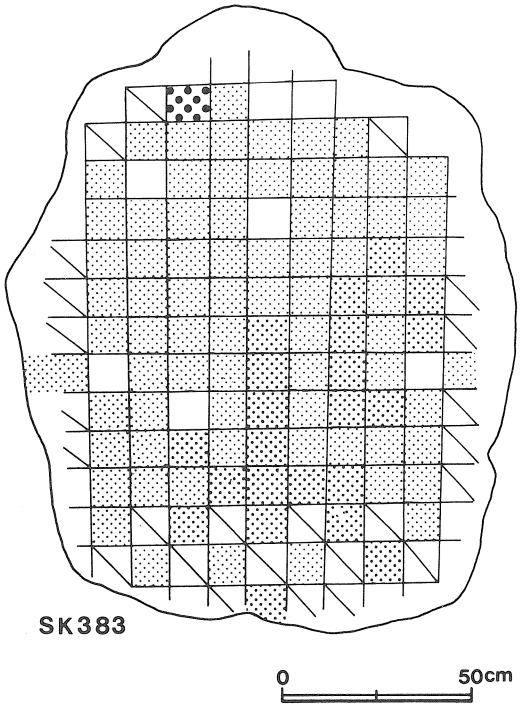
1．墓坑及び墓坑と思われる土坑（第76図～第80図）

第383号土坑と第387号土坑については，その覆土のうち坑底面直上に堆積する土壌のリン分析を実施した（第75図）。その結果，図に見られるように，第387号土坑の覆土は，部分的にリン（P_2O_5）を異常な高濃度で含有していることが明らかになった。これに対し，第383号土坑の覆土はリンの濃度が低く，第387号土坑の覆土に見られるコントラストが不明瞭になっている。図に示したように，第383号土坑の覆土に含まれるリンの量は，第387号土坑の覆土のリンの含有量が少ない部分と同レベルか，わずかに多い程度であり，表示の段階を細かく分けなければ，明瞭なコントラストを示さない。これは，第387号土坑の覆土に含まれるリンが，明らかに異常な量であることを如実に示すものである。このことから，第387号土坑を墓坑と断定した。一方，第383号土坑は，墓坑と断定するには無理があるものの，リンの含有量が示すコントラストが不明瞭ながら現れたことから，墓坑の可能性があるものとして，次項にまとめた。

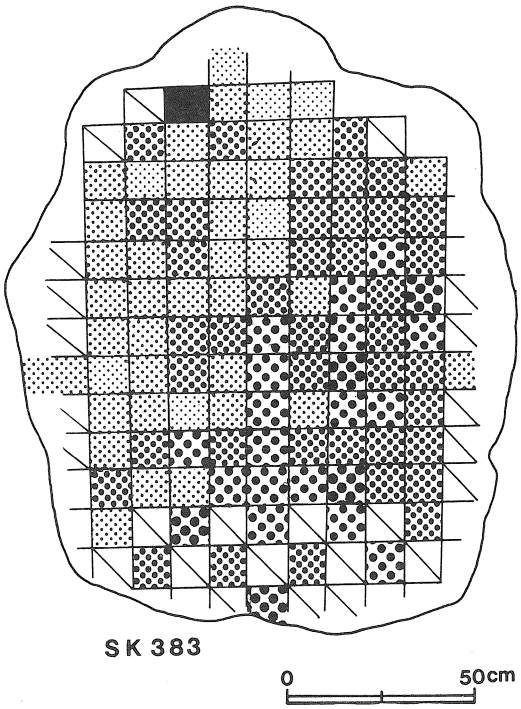
一方，当遺跡で調査した土坑には，特異な形態を有する一群が存在する。その形態は，次の要素の全部または一部を有するもので，平面形は方形または長方形を基本形とする。

・　出入口と考えられる張り出しを有する。
・　向かい合った壁下に各々ピットを有する。
・　坑底または覆土中に多量の炭化材・灰が見られる。





-2.00
2.01-2.50
2.51-3.00
3.01-3.50
3.51-4.00
4.01-



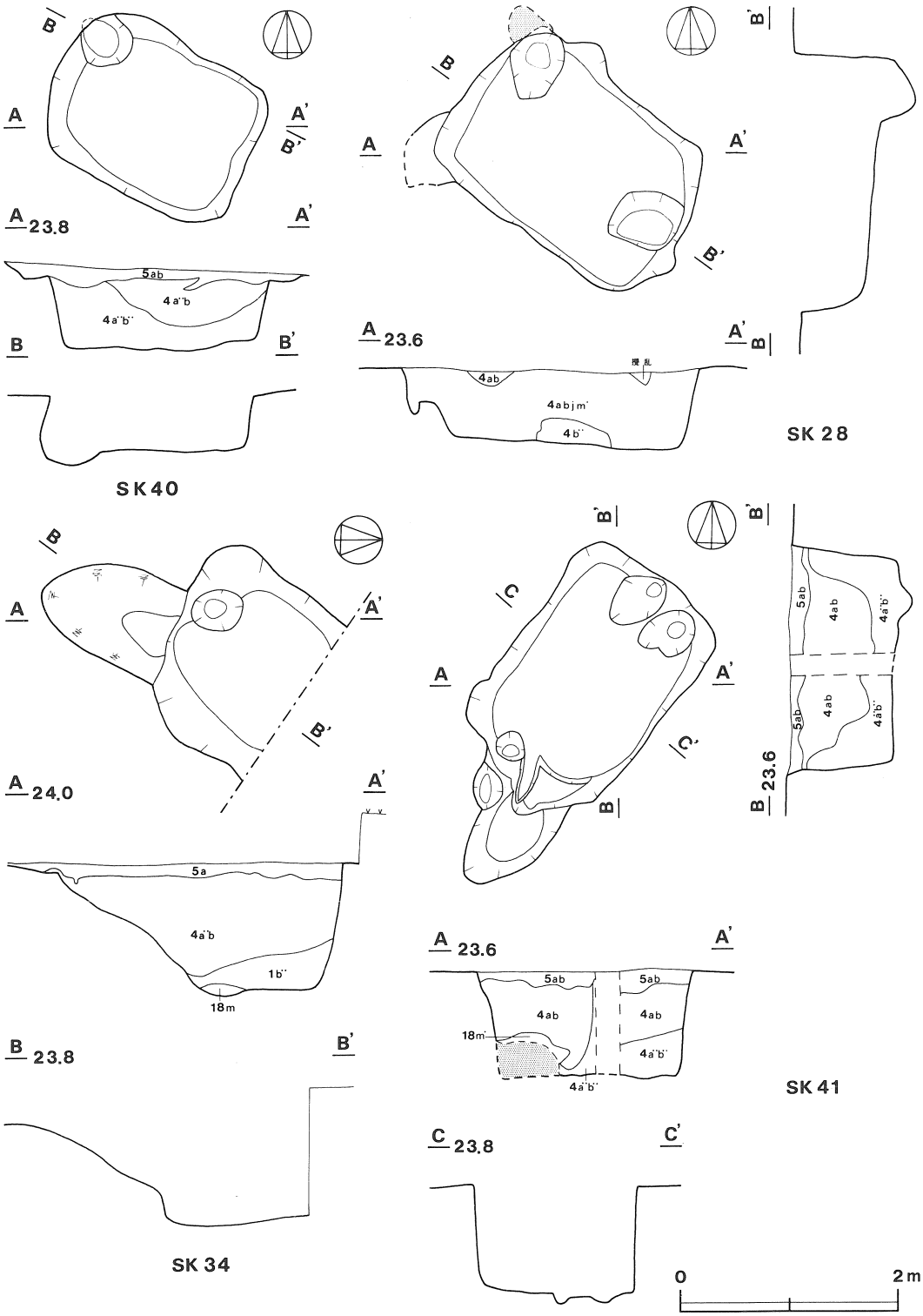
1.50-1.75
1.76-2.00
2.01-2.25
2.26-2.50
2.51-2.75
2.76-3.00
3.51-3.75

第75図　第383・387号土坑リン濃度分布図

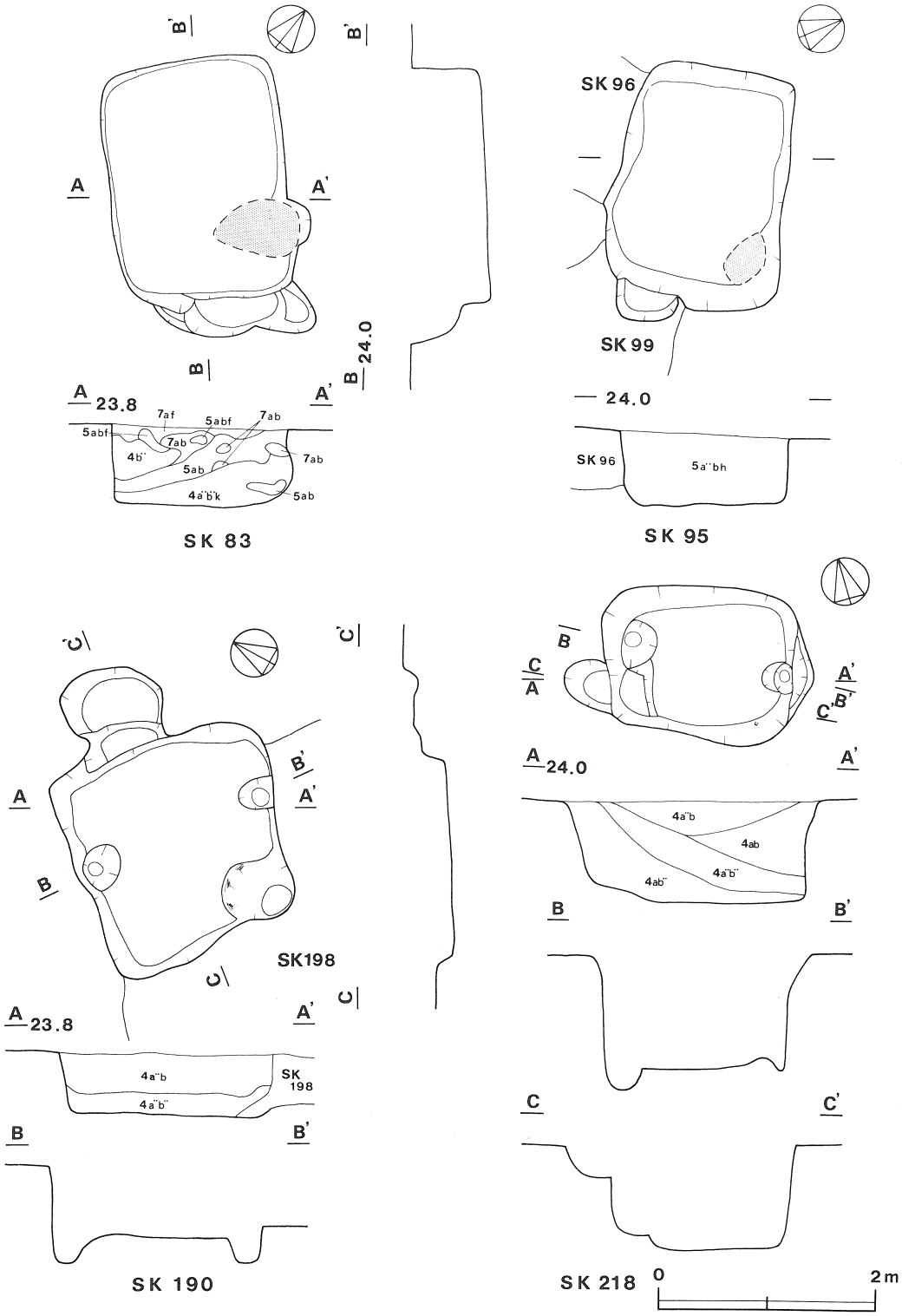
この種の土坑は，調査範囲内の３か所に集中して発見され，特にF2・G2の両区に多い。F2・G2区は周囲を堀にかこまれ，堀跡だけでなく第306号土坑や第４号地下式坑等の覆土中から五輪塔の一部が出土し，第278号土坑の覆土から仏花器等が出土していることから，墓域と考えることが可能である。第387号土坑も，この区域に存在する。この種の土坑が，その特異な形態から，特有な目的のために掘られたものであることは，容易に判断することができる。しかも，その覆土から出土している仏花器等を供献された物と考えれば，この特異な形態を有する土坑の一群を墓坑と判断することが可能である。以上の理由により，この一群を墓坑として分類した。

表20　土坑一覧表（３）　墓坑及び墓坑と思われる土坑

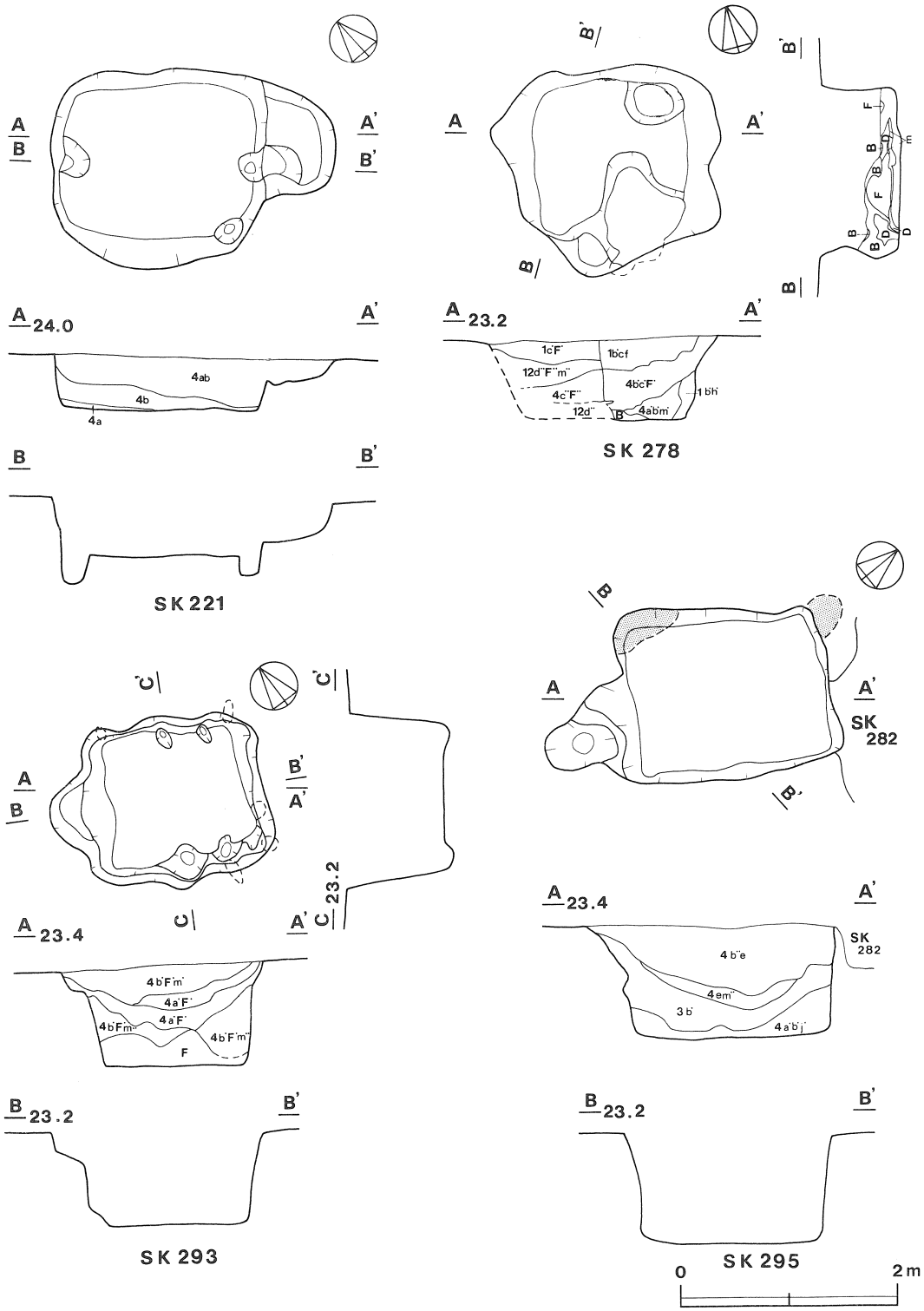
土坑番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
28	C7f5	N－48°－W	長方形	2.38×1.55	60	I	1	A	なし	出入口あり
34	C7e4	N－140°－W	（長方形）	－　×1.75	115	II	1	A	縄文式土器片1，弥生式土器片1 土師器片1，内耳土器片1	一部エリア外 〃
40	C7f4	N－61°－W	隅丸長方形	1.94×1.44	60	II	1	A	縄文式土器片1，弥生式土器片1 土師器片1，内耳土器片1	出入口不明瞭
41	C7e3	N－144°－W	〃	3.17×1.5	95	I	1	A	縄文式土器片11，弥生式土器片2 土師質土器1，内耳土器片2	出入口あり
83	C7e3	N－50°－W	〃	2.56×1.6	70	I	1	A	縄文式土器片5，弥生式土器片1 内耳土器片1	〃
95	C7e2	N－61°－W	長方形	2.25×1.51	60	I	3	A	なし	〃
190	B5d8	N－141°－W	不整方形	1.95×1.9	55	II	1	A	縄文式土器片1 土師器片1，内耳土器片1	〃
218	B5f6	N－159°－W	長方形	1.85×1.4	95	I	1	A	縄文式土器片1，弥生式土器片1 陶磁器片1	〃
221	B5f5	N－44°－W	隅丸方形	1.95×1.8	55	I	1	A	縄文式土器片2，陶磁器片3 土師器片1，内耳土器片1	〃
278	G2b7	N－165°－W	不整方形	2.03×1.74	70	IV	1	A	土師器片1，陶磁器3，陶磁器片2 土師質土器片1，内耳土器片2	
293	G2c7	N－59°－W	隅丸方形	1.97×1.92	80	I	1	A	縄文式土器片1，陶磁器2 土師質土器1，内耳土器片6	出入口あり
295	G2c5	N－148°－W	不整長方形	1.9×1.59	100	I	1	A	なし	〃
298	G2b4	N－25°－W	〃	2.45×1.02	45	I	1	A	土師質土器2 陶磁器片2，内耳土器片2	〃
306	G2a3	N－148°－W	長方形	2.42×1.8	100	I	1	A	内耳土器片9	
308	F2d4	N－71°－W	不整長方形	3.33×2.20	100	I	1	A	陶磁器1，土師質土器1 縄文式土器片2，土師質土器片4 内耳土器片25，陶磁器片1	出入口あり
333	F2c7	N－56°－W	隅丸長方形	3.13×2.05	60	II	1	A	縄文式土器片1 砥石1	〃
363	G2d5	N－152°－W	長方形	2.65×1.55	60	II	1	A	内耳土器片2 不明1	〃
365	G2c5	N－57°－W	隅丸方形	1.65×1.65	65	II	1	A	なし	〃
367	F2h6	N－149°－W	長方形	2.46×1.23	65	I	1	A	縄文式土器片4，内耳土器片21 陶磁器片6，土師質土器片1	〃
387	F2g7	N－65°－W	隅丸長方形	2.27×1.59	80	I	1	A	陶磁器1，土師質土器1 土師質土器片4，内耳土器片21 陶磁器片8	



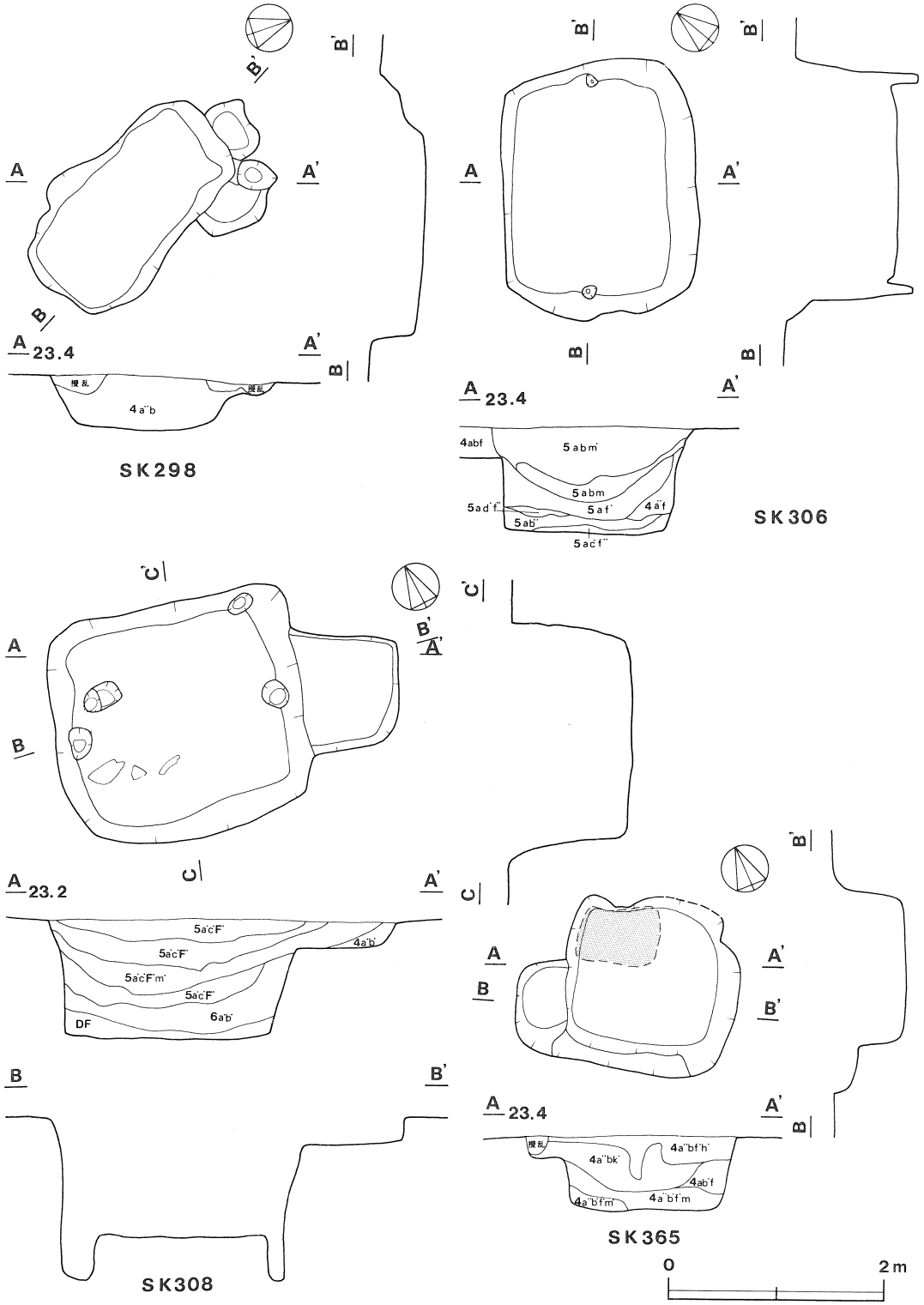
第76図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－1）



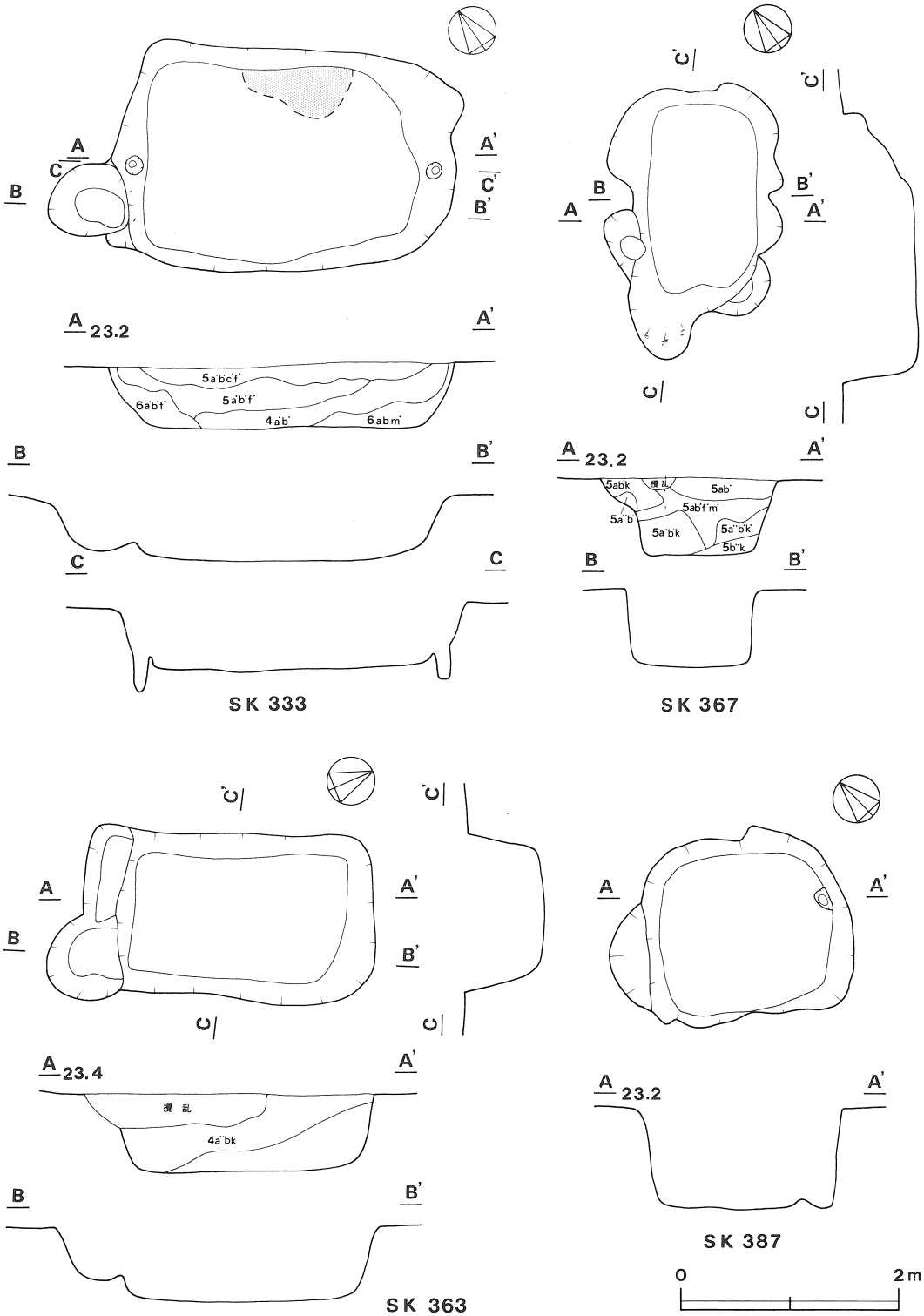
第77図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－2）



第78図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－3）



第79図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－4）



第80図　土坑実測図（墓坑及び墓坑と思われる土坑－5）

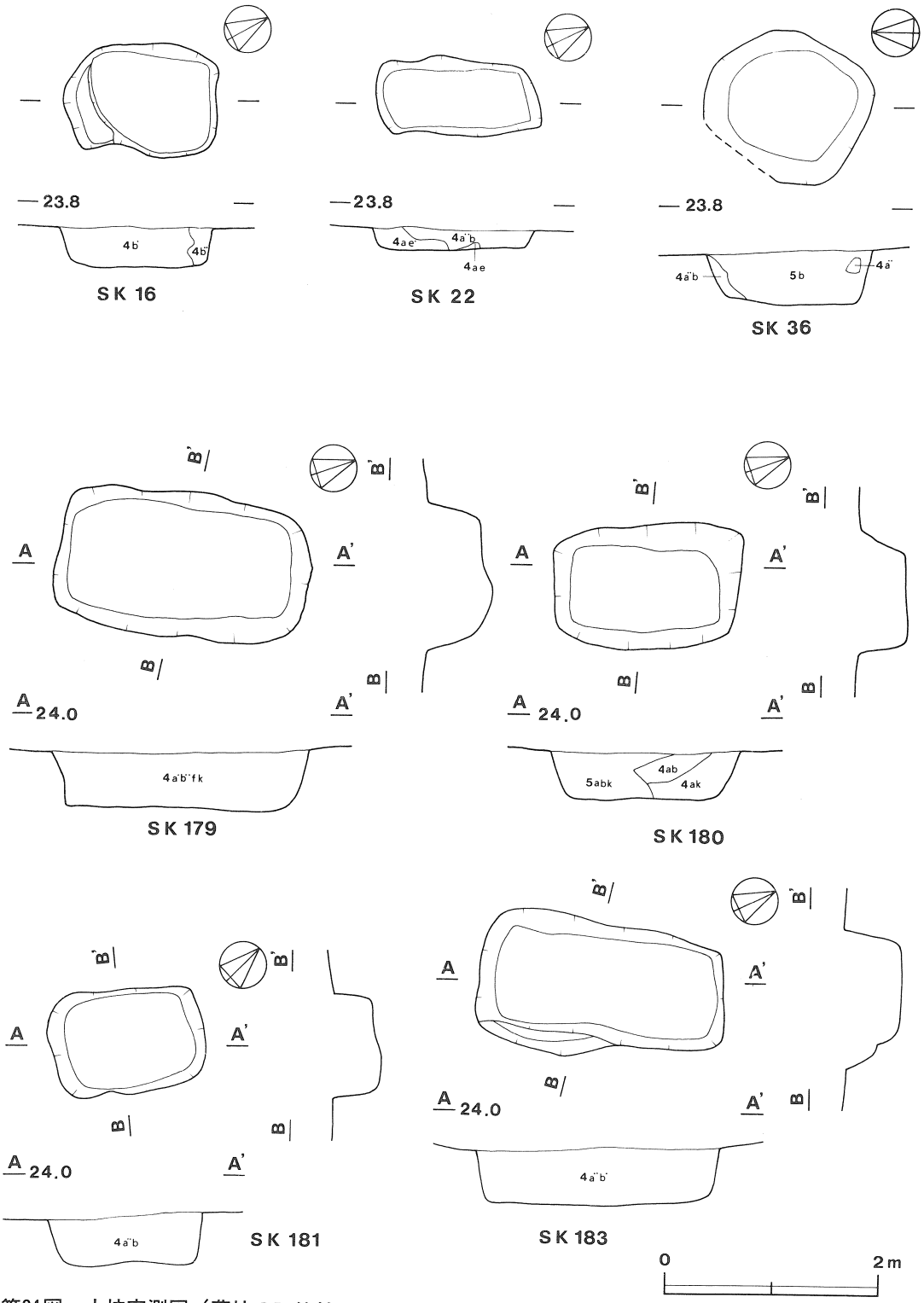
2　墓坑の可能性がある土坑（第81図～第89図）

前項に述べたように，墓坑及び墓坑と思われる土坑は，３か所に見られる。これらの場所には，前項に述べた土坑のほかに，平面形が方形または長方形を基本とし，覆土が明らかに人為的に埋め戻されたことがわかる土坑が数多く存在する。その多くは，基坑である可能性が高い。しかし，前に述べたように，いわゆる芋穴との区別が困難な場合があることから，本項にまとめることとした。また，墓坑の可能性が無い土坑であっても，ほぼ同時期と見なされ，葬送儀礼等に関係する可能性があると見られる土坑を併せて掲載した。

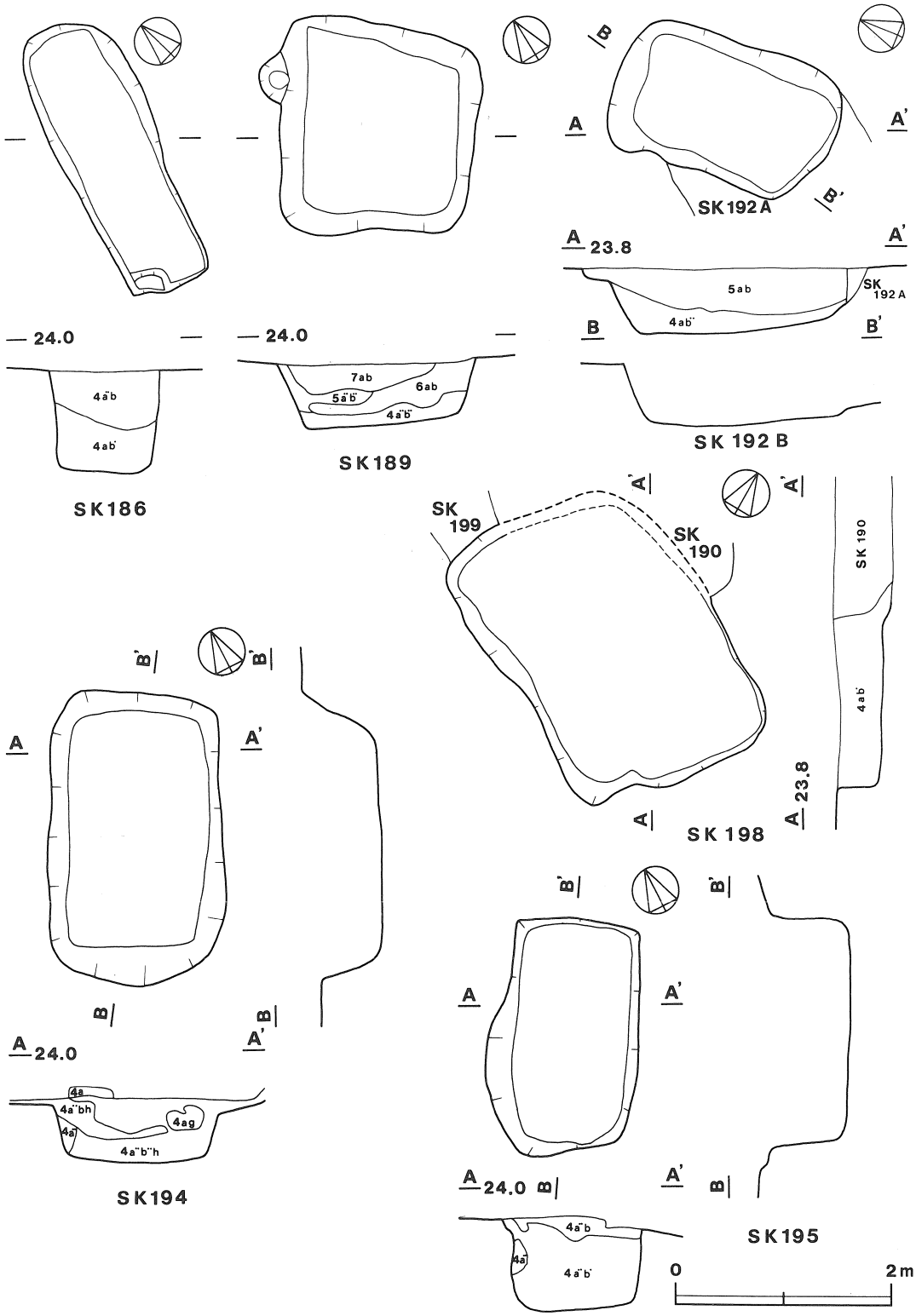
表21　土坑一覧表（４）　墓坑の可能性がある土坑

土坑番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
16	C７h５	N－146°－W	不整長方形	1.43×1.02	40	I	1	A	弥生式土器片２ 内耳土器片２，不明２	
22	C７h４	N－154°－W	長方形	1.55×0.71	20	II	1	A	土師質土器１	
36	C７f４	N－155°－W	楕円形	1.50×1.27	50	II	1	A	弥生式土器片２，土師器片３ 土師質土器片２，内耳土器片３	
179	B５a１	N－150°－W	長方形	2.35×1.35	50	II	1	A	なし	
180	B５a１	N－158°－W	長方形	1.72×1.16	50	II	1	A	縄文式土器片９	
181	B５b１	N－144°－W	長方形	1.43×1.00	40	II	1	A	土師質土器１	
183	B５b２	N－150°－W	長方形	2.29×1.12	50	II	1	A	縄文式土器片４	
186	B５b６	N－149°－W	長方形	9.30×2.70	90	I	1	A	弥生式土器片１ 土師器片１	
189	B５j２	N－53°－W	隅丸長方形	2.39×1.82	60	II	1	A	なし	出入口あり
192-B	B５f８	N－１°－W	隅丸長方形	2.05×1.23	55	II	1	A	〃	
194	B５f７	N－152°－W	長方形	2.71×1.62	60	II	1	A	〃	
195	B５f７	N－148°－W	長方形	2.24×1.39	80	I	1	A	縄文式土器片３，土師器片３ 内耳土器片４，土師質土器片１，陶磁器１	
198	B５e８	N－62°－W	隅丸長方形	2.86×1.91	50	I	1	A	なし	
217	B５e６	N－141°－W	不整方形	2.75×2.65	60	I	1	A	縄文式土器片2,弥生式土器片1 土師器片7,内耳土器片1	
224	B５f５	N－169°－W	不整楕円形	1.70×1.60	70	II	1	A	縄文式土器片3，土師質土器片1 陶磁器片2	
225	B５g６	N－53°－W	長方形	1.50×1.25	70	I	1	A	なし	粘土張り
235	B５g６	N－166°－W	不整長方形	1.34×1.18	60	I	1	A	〃	
271	F２h９	N－149°－W	隅丸長方形	1.85×1.43	30	I	3	A	〃	
272	F２g９	N－167°－W	不整長方形	2.04×1.45	30	II	1	A	〃	
281－B	G２a５	N－147°－W	不整長方形	2.12×0.95	40	I	1	A	〃	
286	F２j６	N－50°－W	不整長方形	1.84×1.16	20	II	1	A	〃	
292	F２i４	N－61°－W	隅丸長方形	2.65×1.60	90	I	1	A	土師器片２ 土師質土器片３，内耳土器片11	

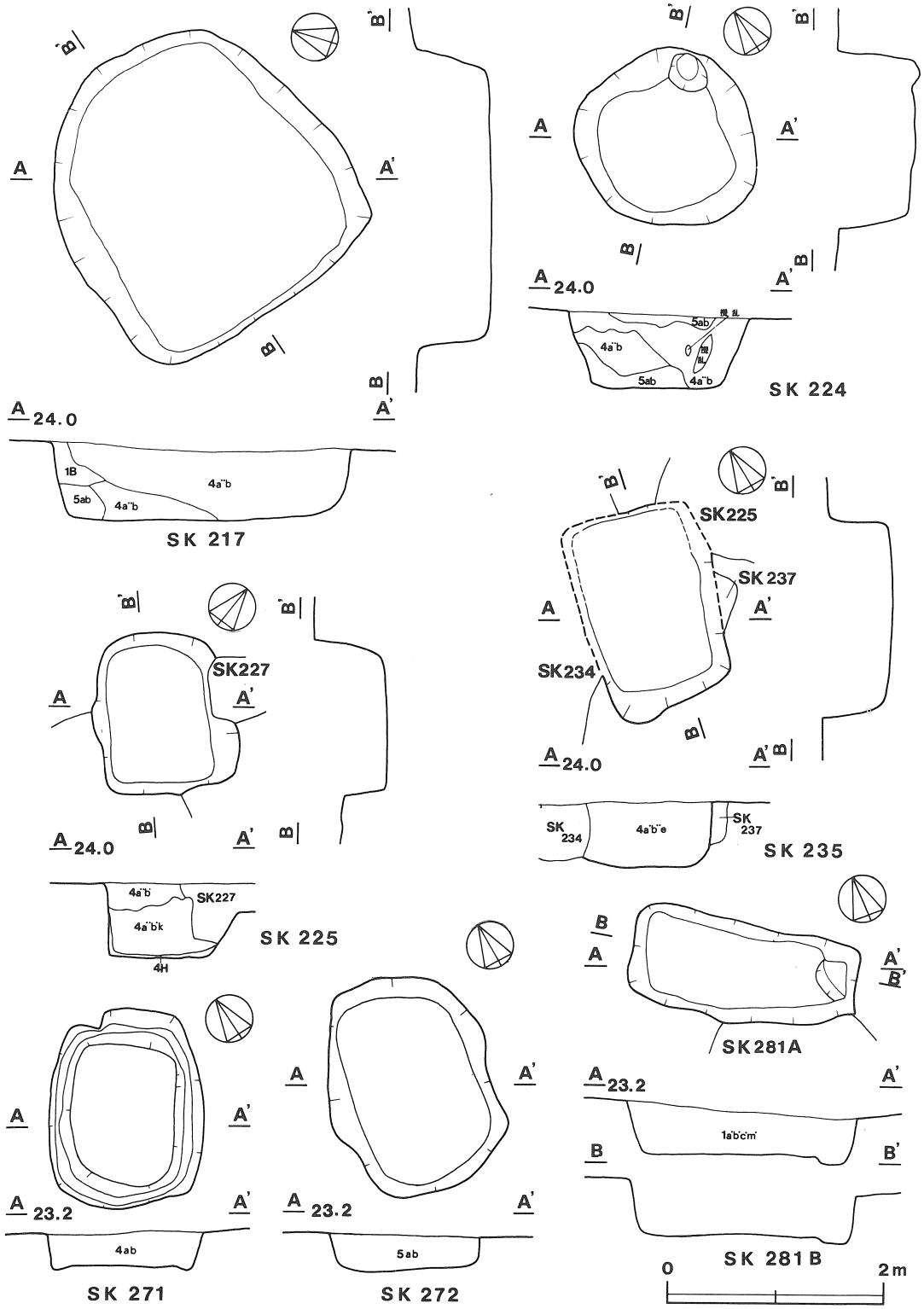
土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
300	G 2 a 3	N－64.5°－W	隅丸長方形	2.68×1.20	40	II	1	A	土師質土器 1 縄文式土器片 1	
304	G 2 c 3	N － 64°－ W	不整長方形	2.55×1.13	70	I	1	A	内耳土器片 1 陶磁器片 1	
305－A	G 2 a 2	N－164°－W	不整方形	1.35×1.12	75	I	1	A	縄文式土器片 1，土師器片 1 内耳土器片 1，陶磁器片 1	
305－B	G 2 a 2	N－165°－W	方形	1.65×1.50	90	I	1	A	なし	
305－C	G 2 a 2	N － 70°－ W	長方形	1.82×1.30	60	I	6	A	〃	
307	F 2 j 2	N－156°－W	長方形	2.20×1.50	30	I	1	A	〃	
309	F 2 j 2	N－167°－W	不整方形	2.50×2.10	30	II	1	A	〃	
310	F 2 i 3	N－164°－W	隅丸長方形	1.55×1.30	50	II	1	A	内耳土器片 2	
311	F 2 i 3	N － 71°－ W	隅丸長方形	1.85×1.37	40	II	1	A	内耳土器片 1，陶磁器片 1	
312	F 2 h 2	N － 20°－ W	長方形	3.03×1.36	25	II	1	A	なし	
314	F 2 h 2	N－150°－W	長方形	2.60×1.30	30	I	1	A	〃	
317	F 2 b 4	N－158°－W	長方形	2.07×0.90	65	I	1	A	〃	
318	F 2 g 2	N － 60°－ W	不正方形	1.20×1.05	30	II	1	A	〃	
319	F 2 h 4	N－157°－W	長方形	2.76×1.50	45	II	1	A	〃	
321	F 2 e 5	N － 47°－ W	方形	2.30×1.95	100	I	1	A	内耳土器 1，縄文式土器片 5 内耳土器片 4，陶磁器片 1，土師器片 1	
325	F 2 d 6	N － 52°－ W	不整隅丸方形	2.08×1.66	90	I	1	A	内耳土器片 1 土師質土器片 1，陶磁器片 1	
327	F 2 d 3	N－160°－W	長方形	1.80×0.90	40	IV	1	A	縄文式土器片 1，土師器片 1 内耳土器片 1，陶磁器片 2，不明 2	
328	F 2 d 4	N－158°－W	長方形	2.80×0.88	70	I	1	A	なし	
329	F 2 c 5	N－166°－W	隅丸長方形	2.70×1.50	40	II	1	A	〃	
330	F 2 d 4	N－159°－W	長方形	2.25×1.35	35	II	1	A	内耳土器片 4 陶磁器片 1	
331－A	F 2 d 5	N － 73°－ W	長方形	2.47×1.19	40	II	1	A	縄文式土器片 1 内耳土器片 6	
331－B	F 2 d 5	N－160°－W	隅丸長方形	1.54×1.15	60	II	1	A	なし	
332	F 2 d 6	N－165°－W	隅丸長方形	2.05×1.62	35	I	1	A	縄文式土器片 1 土師質土器片 1，陶磁器片 1	
336	F 2 g 8	N－151°－W	長方形	4.37×1.60	75	I	1	A	内耳土器片 8	
339	F 2 c 8	N － 61°－ W	不整長方形	2.53×1.20	65	I	1	A	なし	
340	F 2 c 9	N － 62°－ W	長方形	2.55×1.35	70	I	1	A	〃	
341	F 2 b 9	N－152°－W	長方形	2.55×1.65	55	II	1	A	内耳土器片 1	
344	F 2 d 9	N－154°－W	長方形	2.40×1.28	30	II	1	A	なし	
347	F 2 a 9	N－147°－W	長方形	2.50×1.45	35	II	1	A	内耳土器片 2	出入口あり
348	F 2 a 8	N－158°－W	不整長方形	2.90×0.87	50	V	1	A	なし	
354	F 2 c 8	N－62.5°－W	長方形	2.71×1.23	70	I	1	A	〃	
357	F 2 d 9	N － 64°－ W	長方形	1.81×1.23	45	II	1	A	内耳土器片 1 土師質土器片 1	
362	F 2 c 4	N－156°－W	長方形	2.19×0.82	60	I	1	A	不明 2	



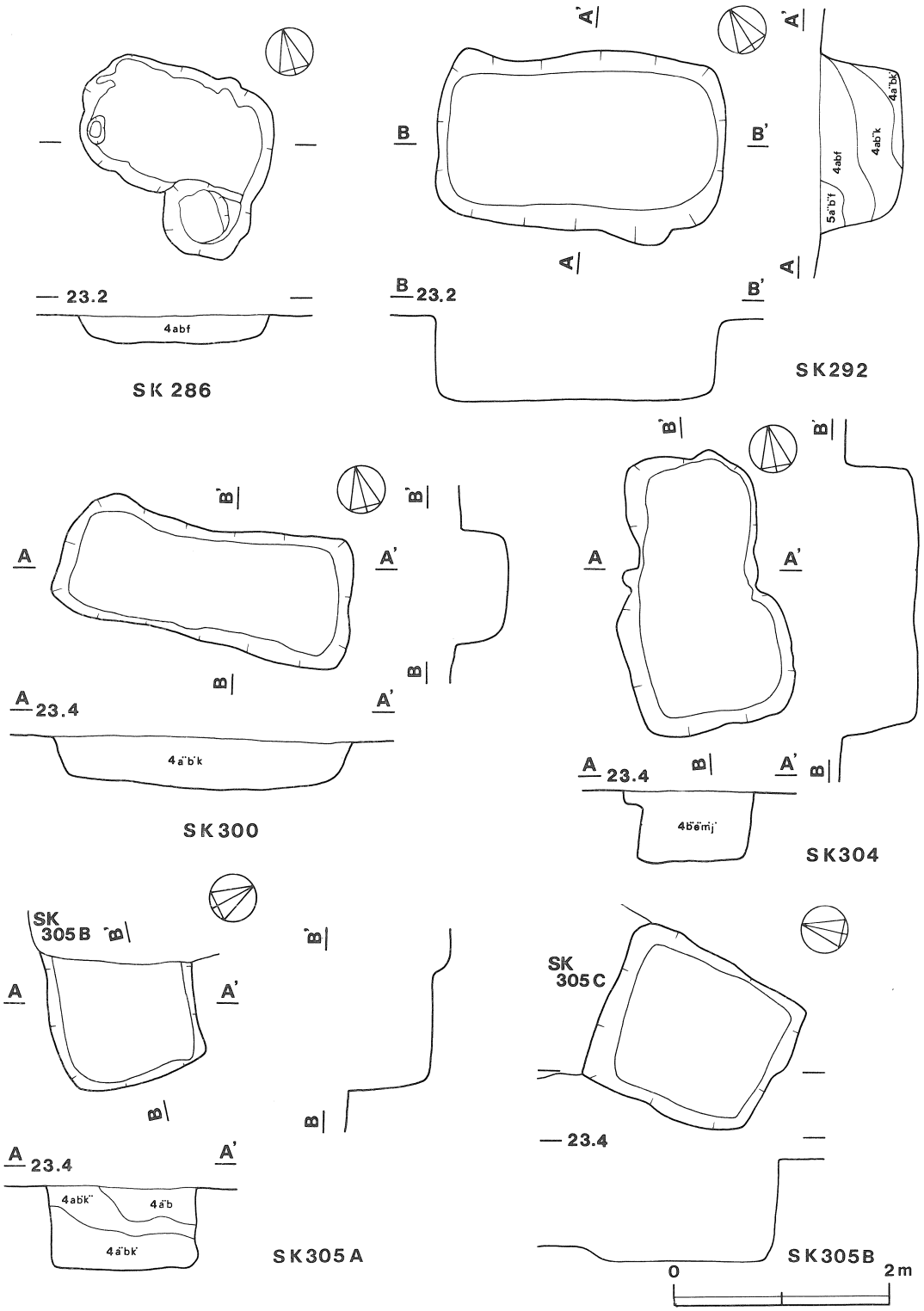
第81図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－１）



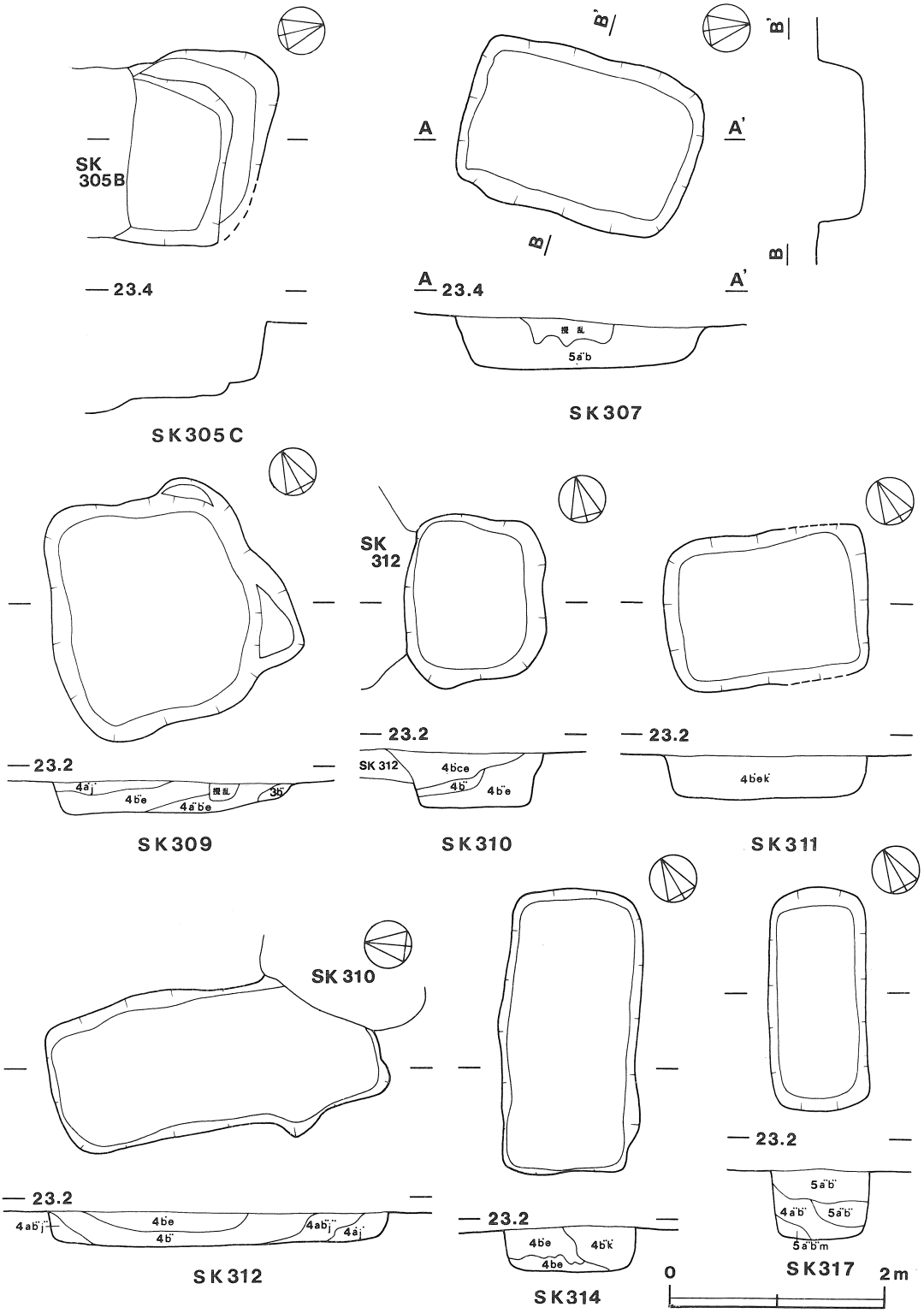
第82図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－２）



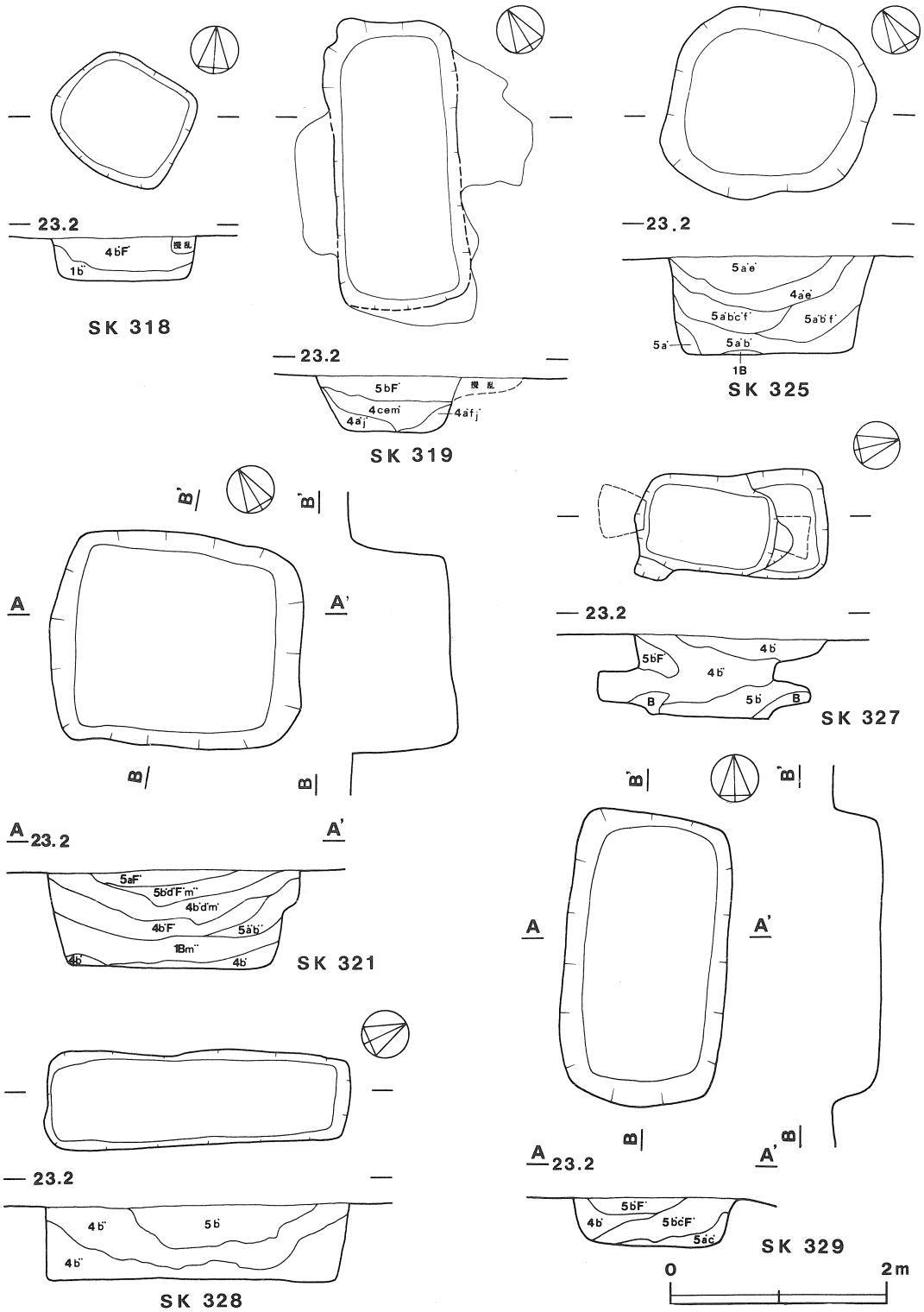
第83図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－３）



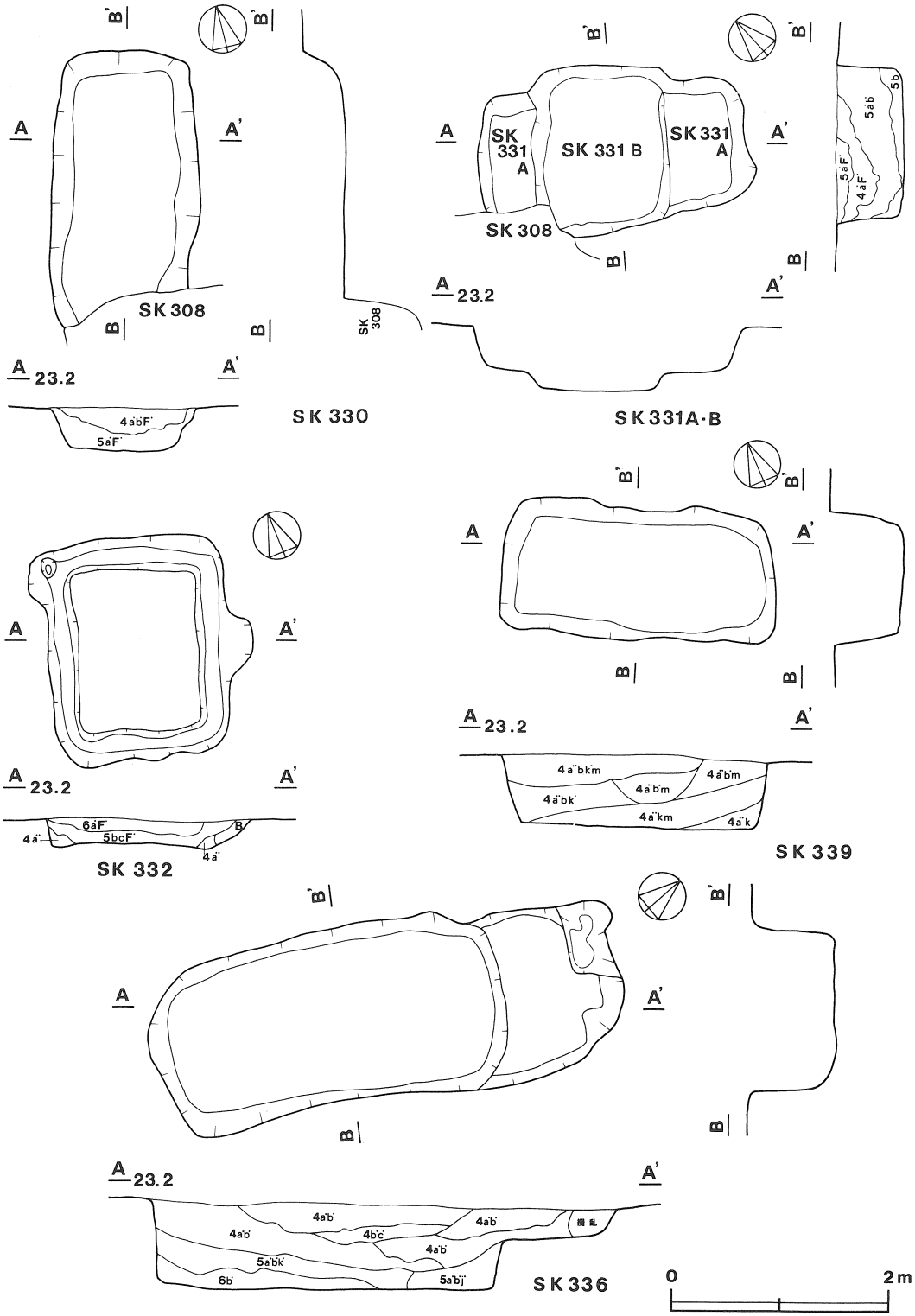
第84図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－４）



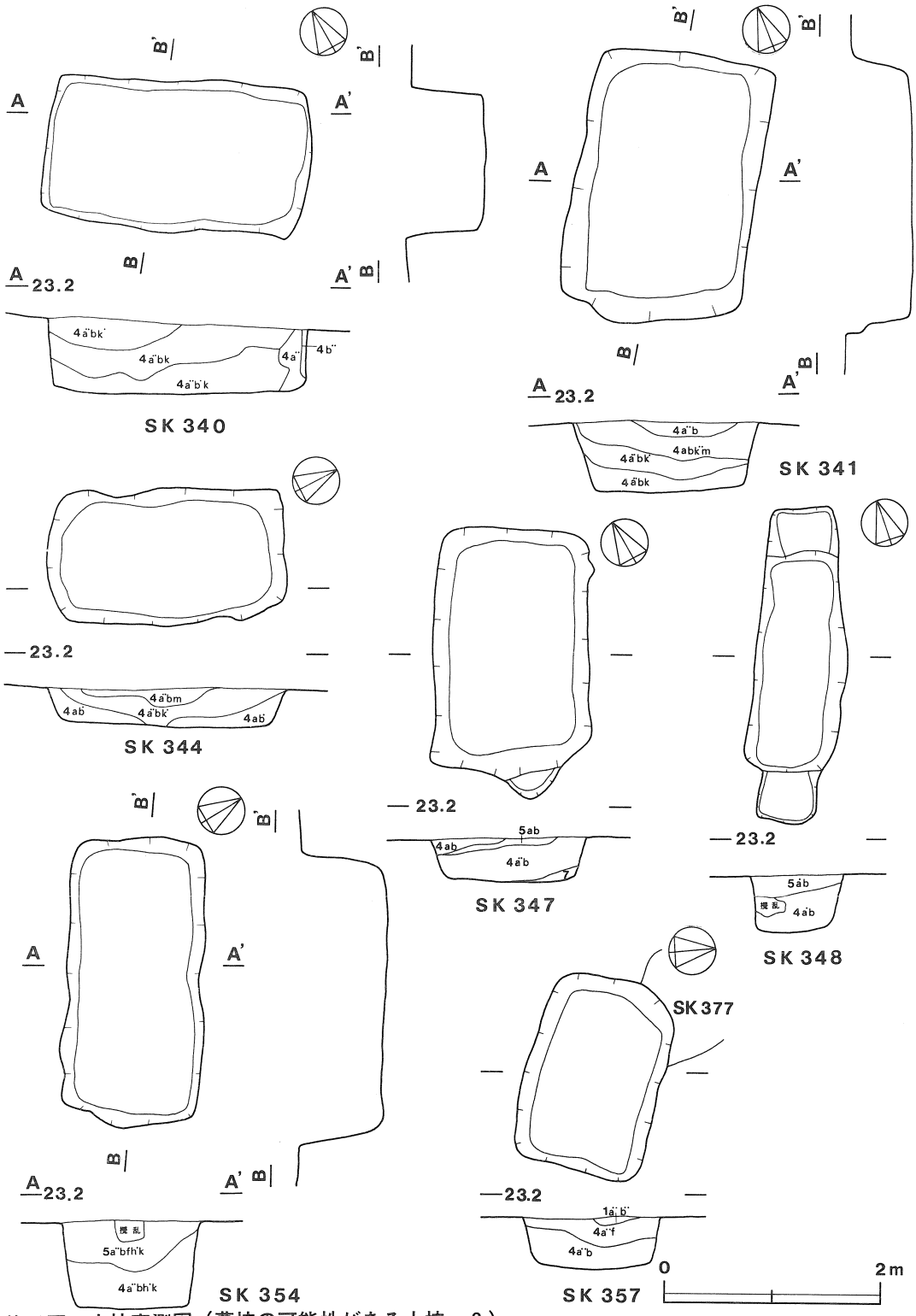
第85図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－５）



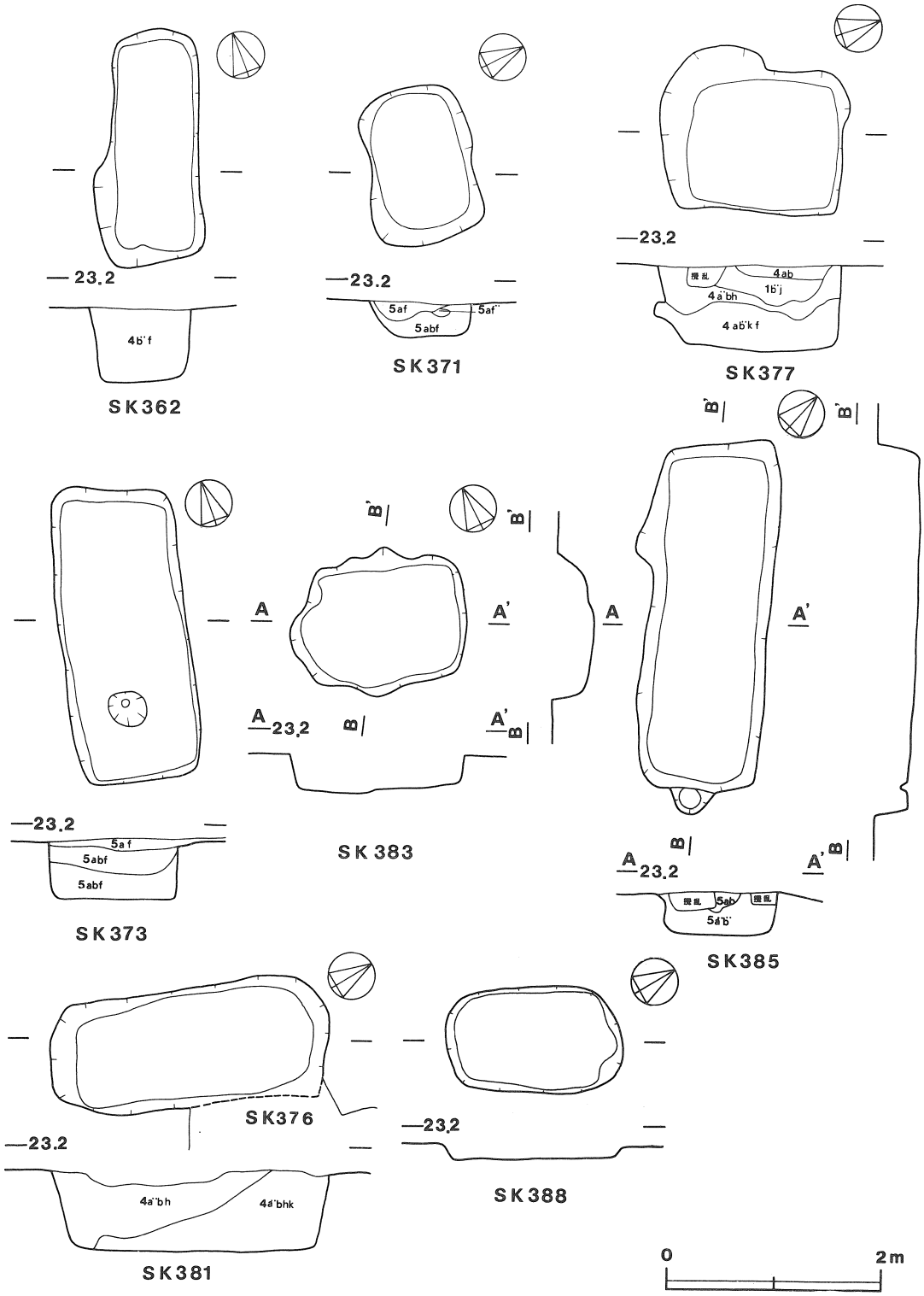
第86図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－６）



第87図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－７）



第88図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－８）



第89図　土坑実測図（墓坑の可能性がある土坑－９）

土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
371	F2j 7	N－84°－W	隅丸長方形	1.47×0.91	30	II	1	A	なし	
373	G2a 8	N－170°－W	長方形	2.73×1.18	55	I	1	A	内耳土器片7 土師質土器片4	
377	G2b 7	N－155°－W	隅丸長方形	1.72×1.33	80	I	1	A	なし	
381	G2a 7	N－158.5°－W	隅丸長方形	2.61×1.10	70	I	1	A	内耳土器片2 土師質土器片1，陶磁器片1	
383	F2e 9	N－72°－W	隅丸長方形	1.65×1.16	30	II	1	A	なし	
385	F2f 9	N－43°－W	長方形	3.46×1.12	40	I	1	A	〃	
388	F2h 8	N－154°－W	隅丸長方形	1.66×1.00	10	III	1	A	〃	

3　粘土貼り土坑（第90図～第92図）

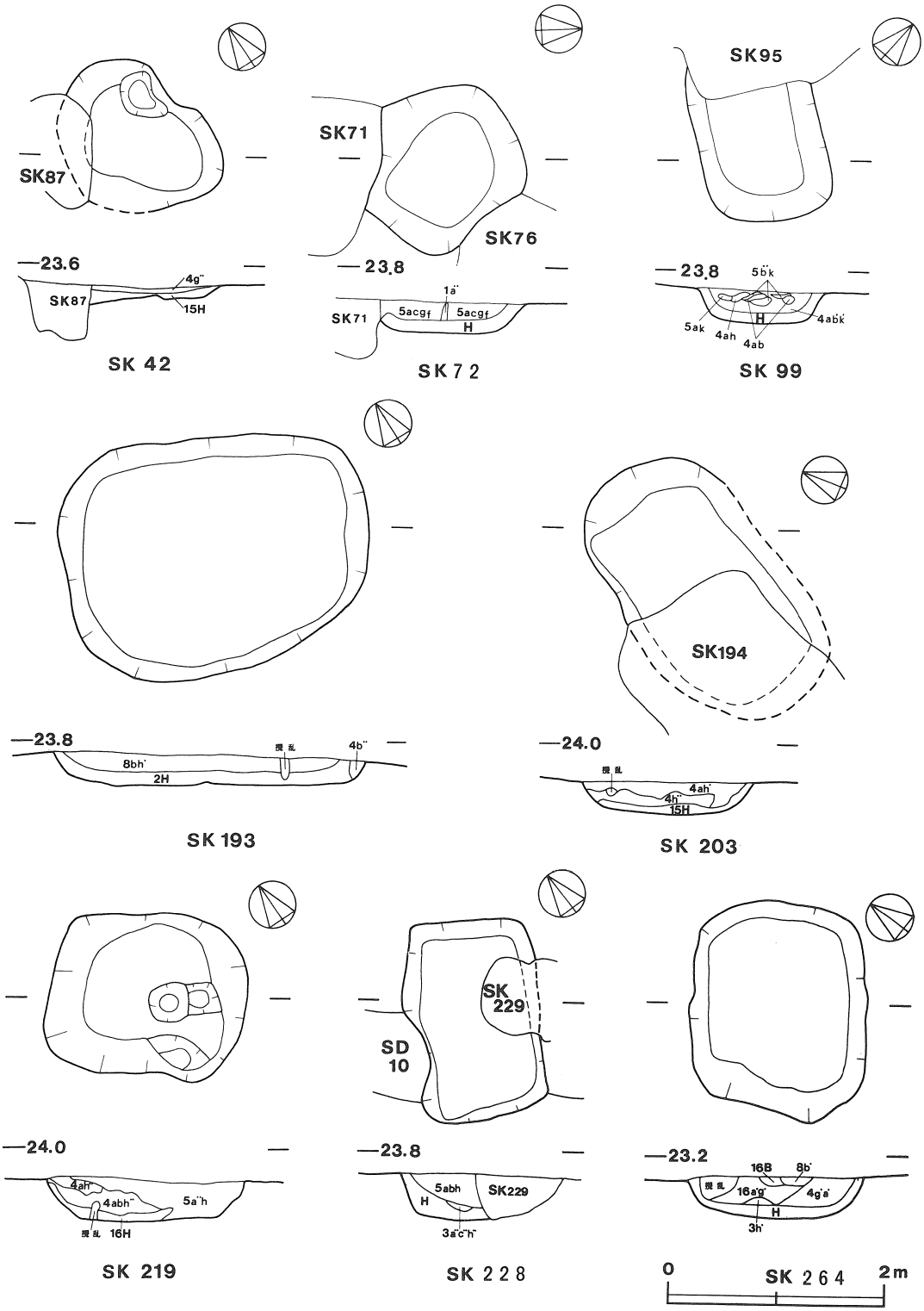
内側に粘土を貼った土坑が，19基確認された。すべて墓坑及び墓坑と思われる土坑の近辺に存存する。F2区では，墓坑と考えられる第333号土坑を粘土貼りの第334号土坑が切っている。一方C7区では，粘土貼りの第99号土坑を墓坑と考えられる第95号土坑が切っている。しかし，両例とも切り合いの状況や覆土の様子から大きな時期差を有さず，近接した時期であると見られる。

粘土は，常総粘土層と呼ばれる粘土層から採掘したものと思われ，10～20cmの厚さに貼られている。表面は，凹凸が著しいものとそうでないものがある

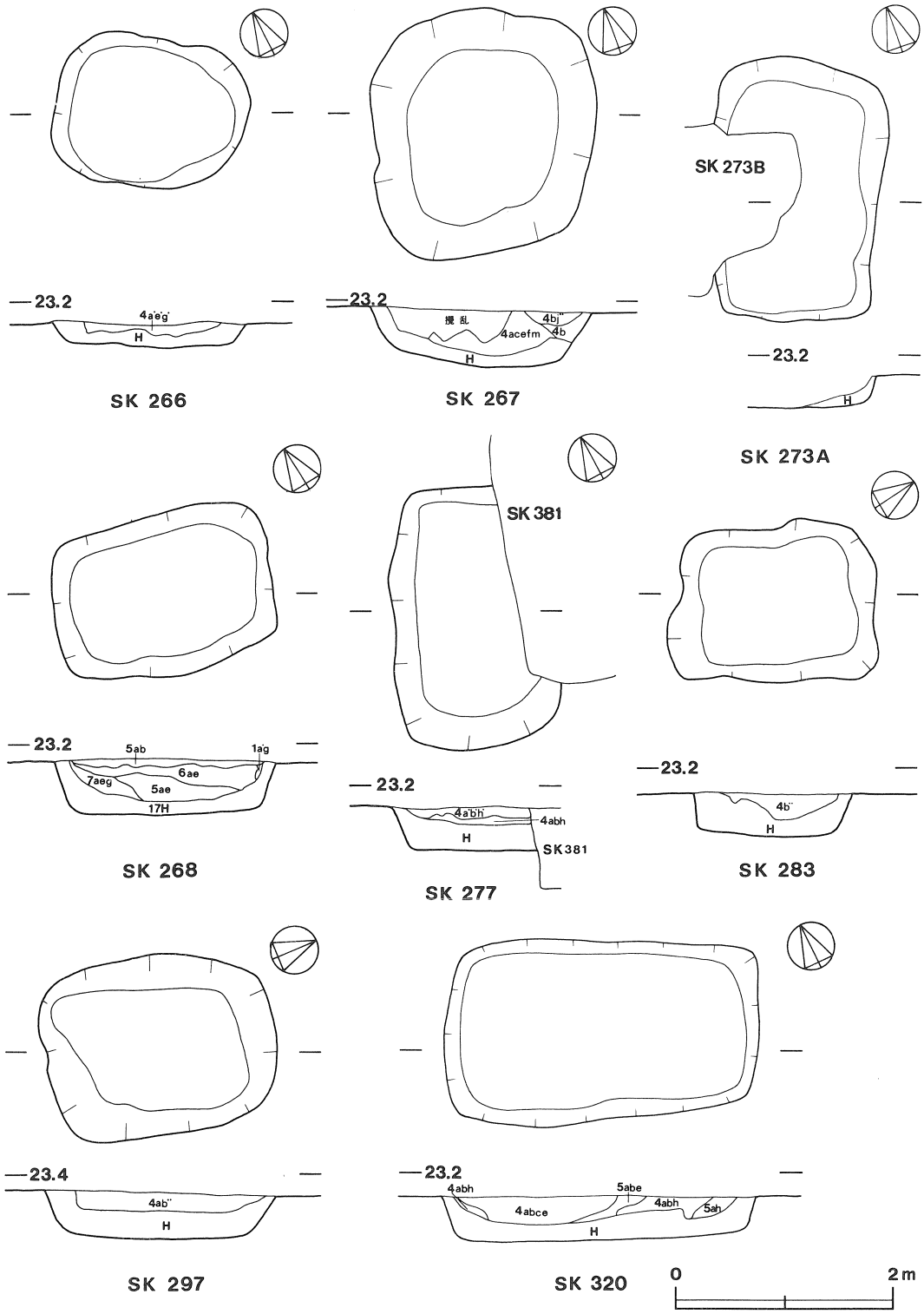
掘り方は，平面形が隅丸長方形状と楕円形状，断面形が逆台形状を呈するものが多い。深さは一定しない。

表22　土坑一覧表(5)　粘土貼り土坑

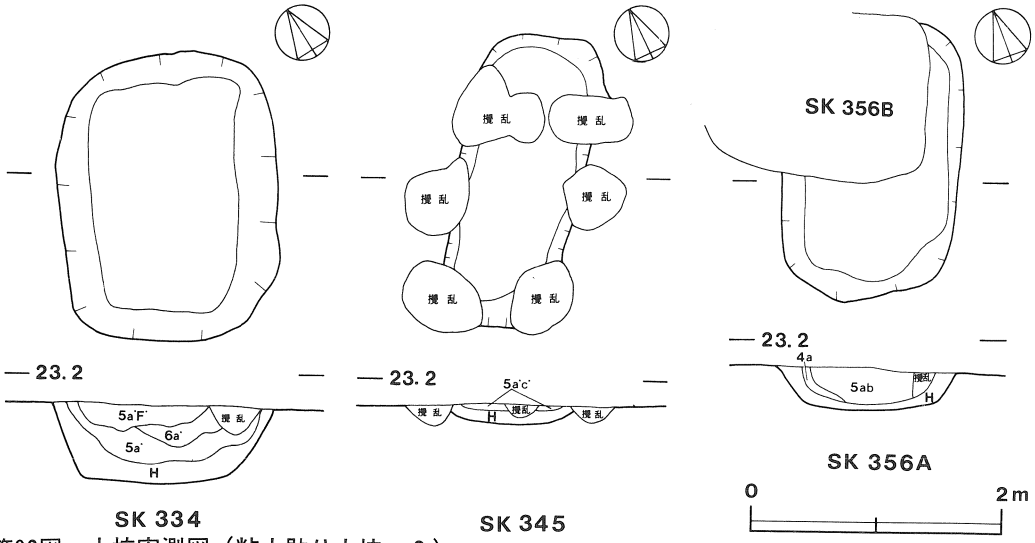
土坑番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
42	C7f 3	N－30°－W	不整楕円形	―――	10	III	1	N	陶磁器片1，石1	SK 89に切られる
72	C7f 3	N－50°－W	隅丸長方形	1.10×――	20	III	1	N	なし	SK 71,76に切られる
99	C7e 2	N－48°－W	隅丸長方形	―×0.99	20	III	1	A	〃	SK 95に切られる
193	B5j 8	N－68°－W	隅丸長方形	2.85×2.22	30	II	1	N	〃	
203	B5f 8	N－148°－W	―――	― ×1.50	25	II	1	N	〃	SK 194に切られる
219	B5g 6	N－51.5°－W	隅丸長方形	1.85×1.45	30	III	2	N	〃	SK 226に切られる
228	B5i 7	N－150°－W	隅丸長方形	1.85×1.05	40	II	1	N	縄文式土器片1 土師質土器片2	
264	F2g 7	N－153.5°－W	隅丸長方形	1.96×1.63	30	II	1	N	内耳土器片4	
266	F2j 4	N－59°－W	不整楕円形	1.98×1.35	15	III	1	N	内耳土器片1，不明1	
267	F2g 4	N－157.5°－W	隅丸方形	2.27×2.05	50	III	2	N	内耳土器1，土師質土器片2，陶磁器片3 縄文式土器片4，内耳土器片2，不明1	
268	F2h 9	N－69°－W	隅丸長方形	2.00×1.46	45	II	1	N	土師器片4 内耳土器片1，土師質土器片1	



第90図　土坑実測図（粘土貼り土坑－１）



第91図　土坑実測図（粘土貼り土坑－２）



第92図　土坑実測図（粘土貼り土坑－３）

土坑番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土	出土遺物	備考
273－A	F２j 8	N－157°－W	隅丸長方形	2.40×1.45	30	II	1	N	内耳土器片５ 陶磁器片３，不明３	
277	G２a 7	N－156°－W	隅丸長方形	2.40×1.50	40	III	1	A	なし	
283	G２a 6	N－151°－W	隅丸長方形	1.90×1.40	40	II	1	A	内耳土器片３ 土師質土器片１	
297	G２c 4	N－158°－W	隅丸長方形	2.13×1.65	40	III	1	A	縄文式土器片２	
320	F２e 5	N－35°－W	隅丸長方形	2.90×1.64	40	II	1	N	縄文式土器片２，内耳土器片５ 陶磁器片３	
334	F２c 7	N－149°－W	隅丸長方形	2.3×1.74	55	II	1	N	縄文式土器片１，土師質土器片１ 陶磁器片４	
345	F２f 7	N－142°－W	隅丸長方形	2.44×0.88	15	III	4	N	なし	
356－A	F２b 0	N－155°－W	隅丸長方形	－　×1.42	25	III	1	N	なし	SK 356-Bに切られる

2　地下式坑

当遺跡で確認・調査した地下式坑は，５基である。調査に際しては，一般の土坑と同一記号を用いており，ここでも同様とする。この５基の近辺には，墓坑と思われる土坑または墓坑の可能性がある土坑が数多く存在しており，地下式坑の性格を考える上で注目すべき傾向と言える。また，第３号地下式坑（SK 238）の主室床面直上から六器（ろっき）と見られる銅製品（第120図759～761）が出土し，第４号地下式坑（SK 343)の覆土から五輪塔の地輪（第132図860）が出土していることも，同様に注目すべきことである。

第1号地下式坑（SK 188，第93図）

本坑は，B4 c_9・c_0にまたがって検出され，第11号住居跡の北東約1.5mに位置する。主軸方向はN－59°－Wを指し，全長は約4.5mである。

竪坑は確認面から約1.7mの深さに掘り込まれており，底面は主室に向かってゆるやかに傾斜している。平面形は長軸1.25m，短軸1mの長方形状を呈し，主軸方向に長い。主室は竪坑の底面からさらに40cmほど掘り込まれており，底面は平坦である。平面形は奥行2.05m，幅2.2mのややいびつな方形状を呈している。竪坑・主室ともに，床はロームである。主室入口部はロームを削って階段を設けていたと思われるが，崩れて判然としない。

壁は，竪坑では70°～80°，主室ではほぼ垂直に立ち上がっている。主室の壁は，1.4mの高さの所に，部分的にややオーバーハングする部分があり，ここから天井に移行したものと推定される。この高さで，四囲の壁の様相が変化し，上位は天井が崩れたために生じた崩壊面の様相を呈している。

覆土は，自然堆積である。竪坑から主室に向かって褐色土の流れ込みが見られ，主室ではその上位に天井が崩れ落ちている。この後，竪坑と主室は一つの大きな落ち込みとなり，そこへ周囲から褐色土が流れ込んでいる。

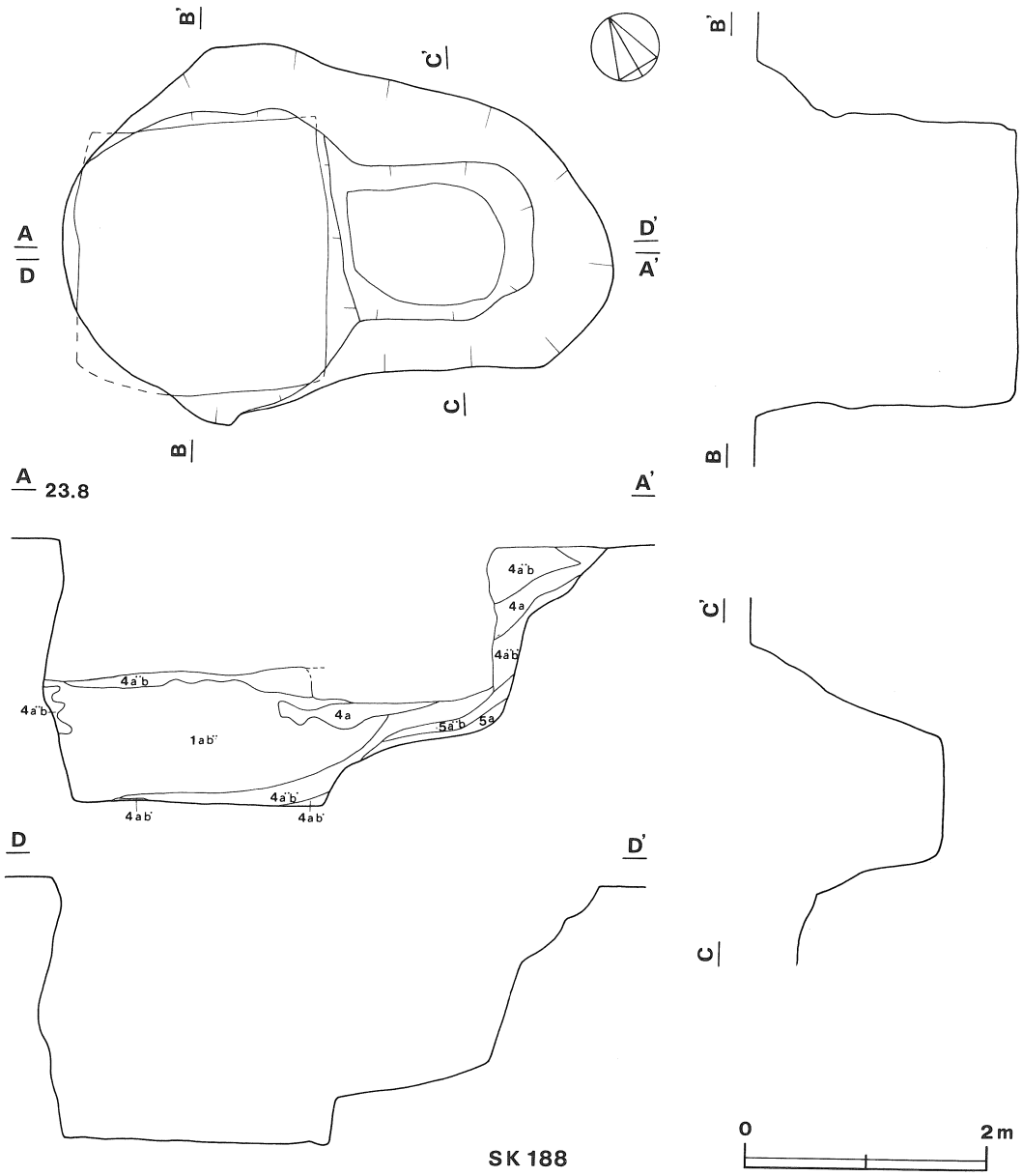
遺物は，縄文式土器片31点，弥生式土器片3点，土師器片39点，土師質土器片13点，陶磁器片3点のほか，石等が出土している。また，主室中央の床面直上には長さ40cm，幅20cmほどの粘土塊が見られ，その南西壁寄りの位置には長さ10cmほどの炭化材が見られた。

第2号地下式坑（SK 216，第94図）

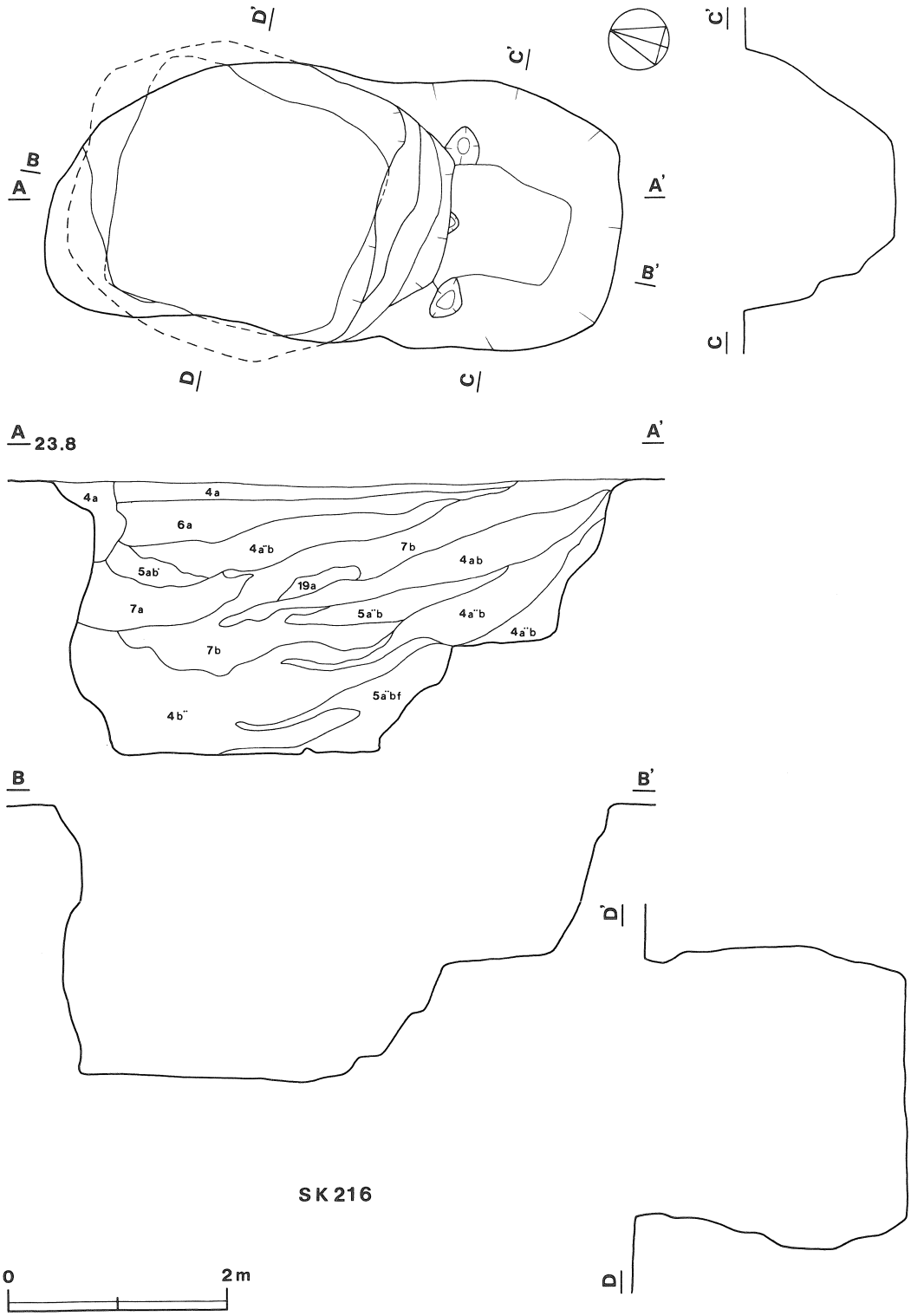
本坑は，B5 c_7・d_7にまたがって検出され，第10号住居跡の南々東約1mに位置する。主軸方向はN－8.5°－Wを指し，全長は約5.1mである。

竪坑は確認面から約1.4mの深さに掘り込まれており，　底面は主室に向かってわずかに傾斜している。平面形は，長軸約1.1m，短軸0.9mの長方形状を呈し，主軸方向に長い。主室は竪坑の底面からさらに1.1mほど掘り込まれ，底面は平坦である。平面形は奥行2.35m，幅2.1mのややいびつな方形状を呈している。竪坑・主室ともに，床はロームである。主室入口部は，ロームを削って3段の階段を設けている。また，竪坑の底面の最も主室に寄った位置には，左右対称にピットが掘られており，何らかの施設が設けられていたと思われる。

壁は，竪坑では60～70°の傾斜を有している。主室ではやや外傾して立ち上がり，1～1.2mの高さから，丸味を以ってオーバーハングする。このオーバーハングする状況は，主室奥壁に最も良く残っており，底面から最も高い部分までの高さは1.6mを測る。おそらく，そのまま天井へ移行したのであろう。



第93図　第１号地下式坑実測図



第94図　第２号地下式坑実測図

覆土は，自然堆積である。竪坑から主室へ暗褐色土の流れ込みがあり，主室ではその上に天井が崩れ落ちている。この後，周囲から褐色土・極暗褐色土が流れ込んでいるが，ほとんどの土層が竪坑側から流れ込んでいる。

遺物は，土師質土器（第117図700など），輸入銭（第124図798），砥石（第134図875）のほか，縄文式土器片42点，弥生式土器片６点，土師器片49点，土師質土器片１点，内耳土器片14点，陶磁器片12点等が出土した。

第３号地下式坑（SK 238，第95図）

本坑はB5 e_6・f_6にまたがって検出され，第10号住居跡の南約8.5ｍに位置する。主軸方向は，Ｎ－24°－Ｅを指す。主室の天井は一部が崩落したのみで，ほぼ完全に残っていた。

竪坑は確認面から約３ｍの深さまで掘り込まれており，ローム層下の常総粘土層を10～20cmほど掘り込んでいる。底面は平坦で，平面形は長軸0.95ｍ，短軸0.85ｍの隅丸方形状を呈し，主軸方向がやや長い。主室は，竪坑の底面から横に掘り込まれており，竪坑の底面と主室の底面は同一レベルにある。底面の平面形は，長軸2.3ｍ，短軸1.5ｍの隅丸長方形状を呈し，長軸方向は本坑の主軸方向と直交している。

壁は，竪坑では80～85°の傾斜で立ち上がり，主室ではやや丸味を以って立ち上がっている。壁から天井への移行も丸味を有しており，主室の横断面形はカマボコ状を呈する。主室の底面から天井までの高さは，最高で1.8ｍを測るが，覆土内に40～50cmの厚さの天井崩落層が見られることから，本来は1.4ｍ前後であったと推定される。主室の西側の壁には，幅約30cm，高さ60cm，奥行15cmほどの掘り込みが見られるが，その目的は不明である。

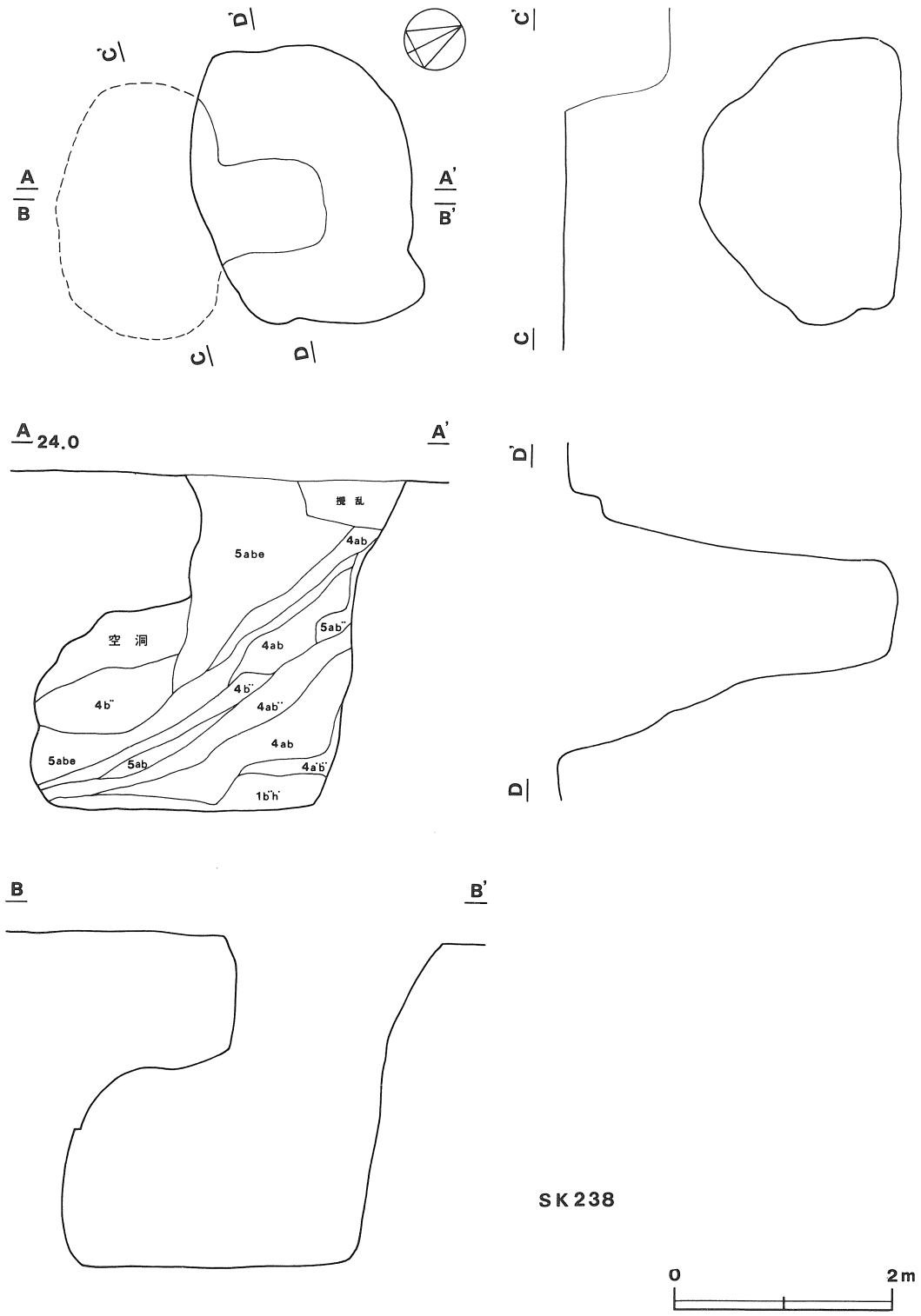
覆土は，自然堆積である。主室内の覆土の最上層である天井崩落層を除けば，すべて竪坑側から流れ込んでいる。天井崩落層と天井との間は，空洞になっている。

遺物は，床面直上から六器と見られる青銅製品２個体分（第120図759～761），覆土中から擂鉢（第110図660・662），石臼（第133図863）が出土している。

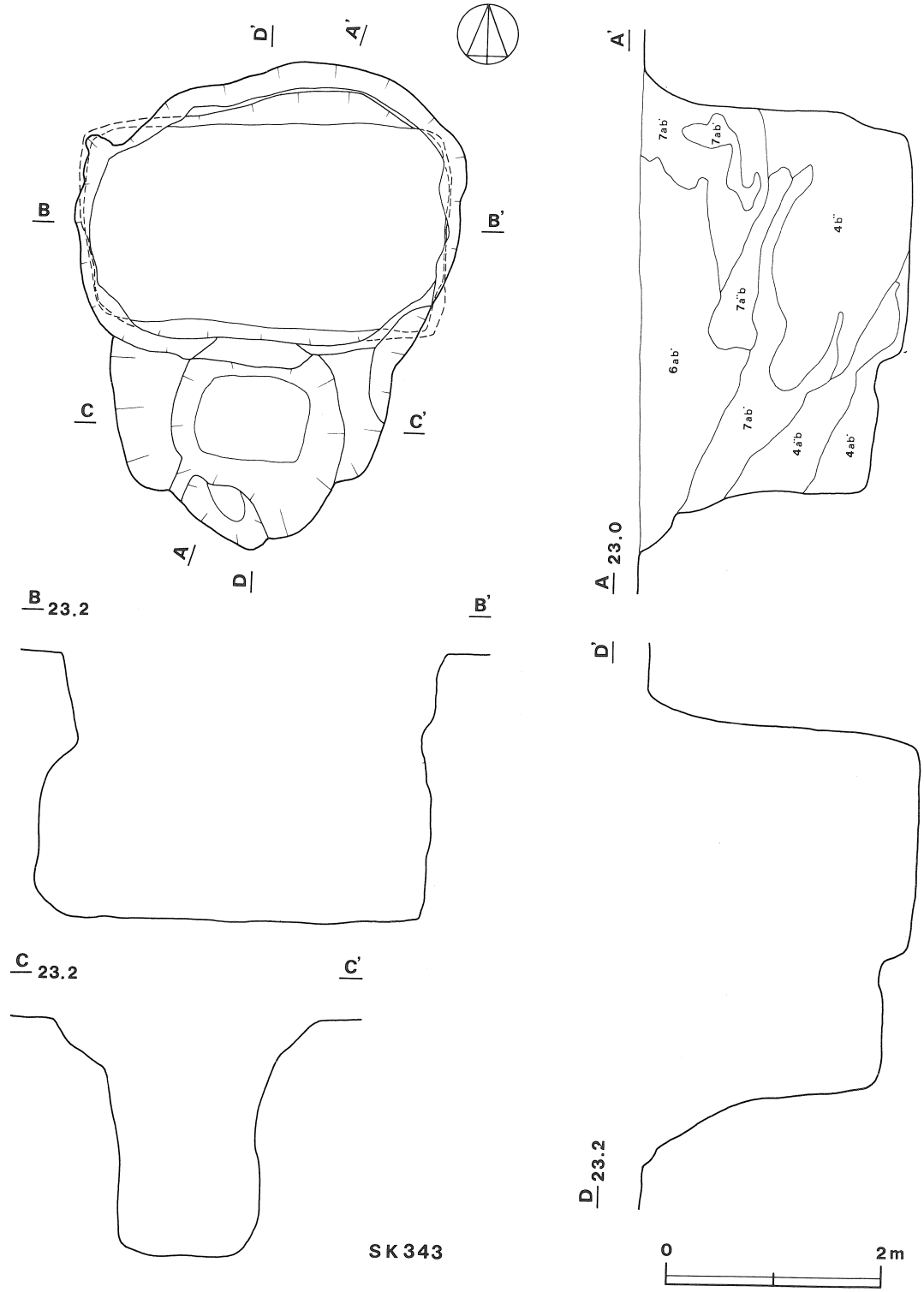
第４号地下式坑（SK 343，第96図）

本坑はE2 i_6・i_7・j_6・j_7にまたがって検出され，第４号堀跡先端部の南側約２ｍに位置する。主軸方向はＮ－０°を指し，全長は4.4ｍである。

竪坑は，確認面から2.2ｍの深さまで掘り込まれており，底面は平坦である。平面形は，長軸１ｍ，短軸0.8ｍの隅丸長方形状を呈し，長軸方向は本坑の主軸方向と直交している。主室は，竪坑と小さな土手を隔ててさらに30cmほど掘り込まれており，平面形は長軸3.4ｍ，短軸1.9ｍの長方形状を呈する。長軸方向は，本坑の主軸方向と直交している。竪坑・主室ともに，底面はロ



第95図　第３号地下式坑実測図



第96図　第４号地下式坑実測図

ームである。竪坑と主室を隔てる土手は，ロームを掘り残して造られたもので，竪坑の底面との比高は約５cm，主室の底面との比高は約35cmである。

壁は，竪坑では80°～90°，主室ではほぼ垂直に立ち上がっている。主室の底面から1.5mほどの高さにオーバーハングする部分があり，これよりも上位の四囲の壁面が崩壊面の様相を呈することから，この部分で天井へ移行するものと考えられる。

覆土は，自然堆積である。竪坑から主室に向かって褐色土が流れ込み，その上に天井が崩れ落ちている。その後，暗褐色土・褐色土が堆積しているが，全体的に見て竪坑側から主室側に向けての流れ込みが多い。

遺物は，主室の底面直上から五輪塔の台座(第132図860)，覆土中から宝篋印塔の笠(第130図842)が出土したほか，縄文式土器片10点，須恵器片１点，内耳土器片19点，擂鉢片１点等が出土している。

第５号地下式坑（SK 360，第97図）

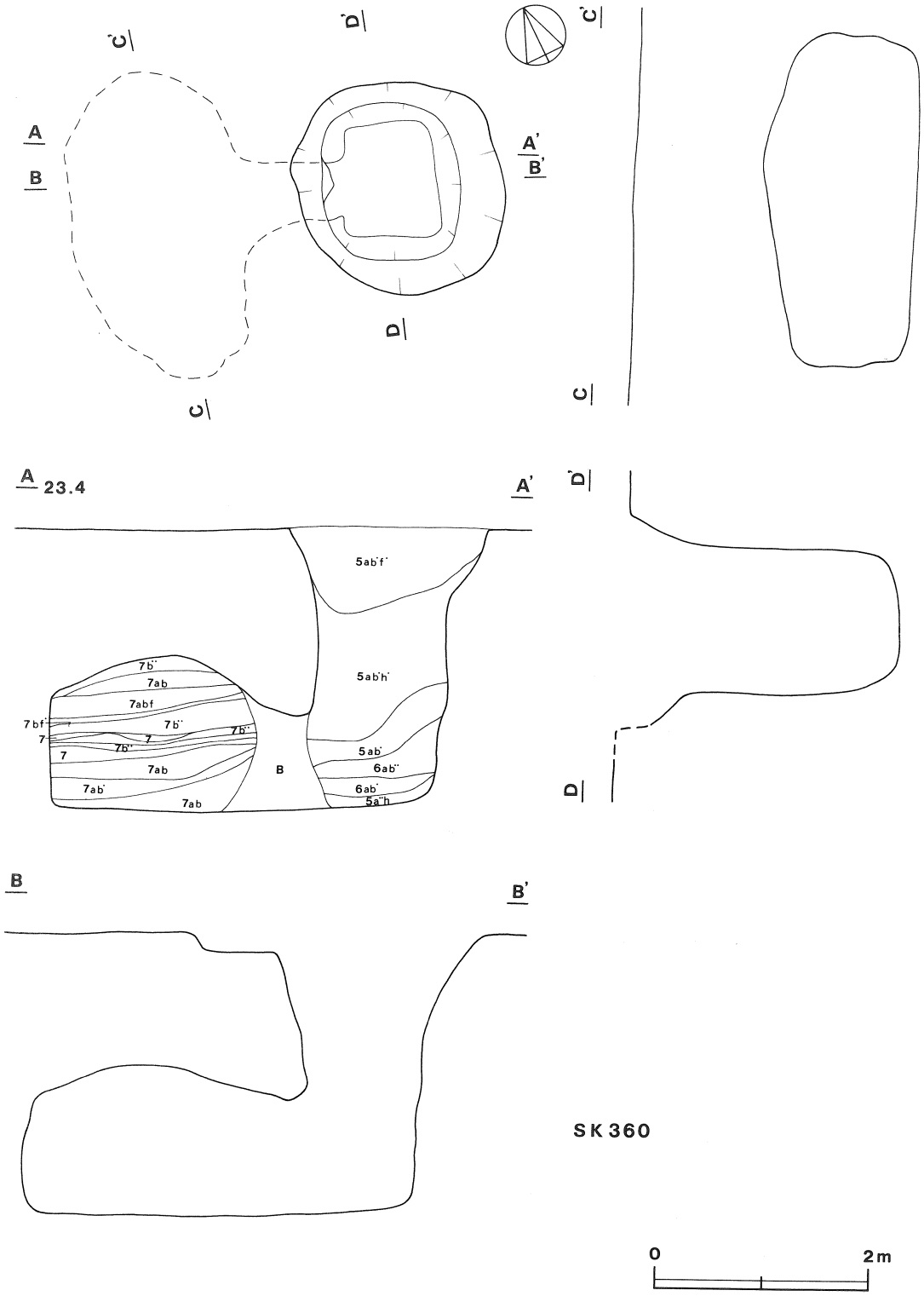
本坑はF2 f_3・f_4にまたがって検出され，竪坑は第５号堀跡の東約４mに位置している。主軸方向は，N－70°－Wを指し，全長は約４mである。

竪坑は，確認面から2.6mまで掘り込まれ，底面は主室に向かってゆるやかに傾斜している。平面形は，長軸1,05m，短軸0.85mの長方形状を呈し，長軸方向は本坑の主軸方向と直交している。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は，ロームである。

羨道は，竪坑から北西方向へ穿たれ，約１mで主室に至る。底面はほぼ平坦で，竪坑の底面よりもわずかに低くなり，主室に向かってなだらかに傾斜している。壁は丸味を有して立ち上がり，中段はほぼ直立する。右壁は主室に向かって直線的に延び，左壁は左側へカーブしている。天井は，アーチ状を呈する。底面はロームであるが，主室側の一部は粘土である。

主室は，羨道からほぼ水平に掘られており，平面形は長径2.9m，短径1.6mの楕円形状を呈する。底面の長径方向は，本坑の主軸方向から80°ほど東へ振れている。底面は，粘土で平坦である。壁は丸味を以って立ち上がり，中ほどで直立してから丸味を以って天井に移行する。天井は，偏平なドーム状を呈し，一部に小規模な落盤が見られる。最も高い部分は，底面から1.45mを測るが，本来は1.4mほどであったと思われる。

竪坑の覆土は，開口部から流れ込んでおり，自然堆積である。極暗褐色土，暗褐色土が堆積している。主室の覆土は，下層が竪坑からの流れ込みと見られ，奥壁に向かって薄くなっている。しかし，上位では水平に近付き，しかも各層の厚みも薄いものが多くなる。これらの土層には，極めて粒子がそろっている部分が随所に見られることから，土砂が地中の穴等から雨水とともに流れ込み，堆積したものと考えられる。本坑の天井は，厚み(1.2m）のほか，主室内の天井まで



第97図　第５号地下式坑実測図

堆積した土砂によって内側から保護されたため，崩れずに残ったものと思われる。

遺物は主として竪坑の覆土中から出土し，近世の磁器（第105図645），砥石（第134図877）や縄文式土器片４点，土師質土器片３点，内耳土器片１点，陶磁器片15点がある。

3　堀

当遺跡で検出・調査した堀は，６条である。これらは，屋代城に伴うものであり，一部には切り合いも認められる。調査に際しては溝と同一記号（ＳＤ）を用いたため，記述に際しては地下式坑と同一方法を用いた。

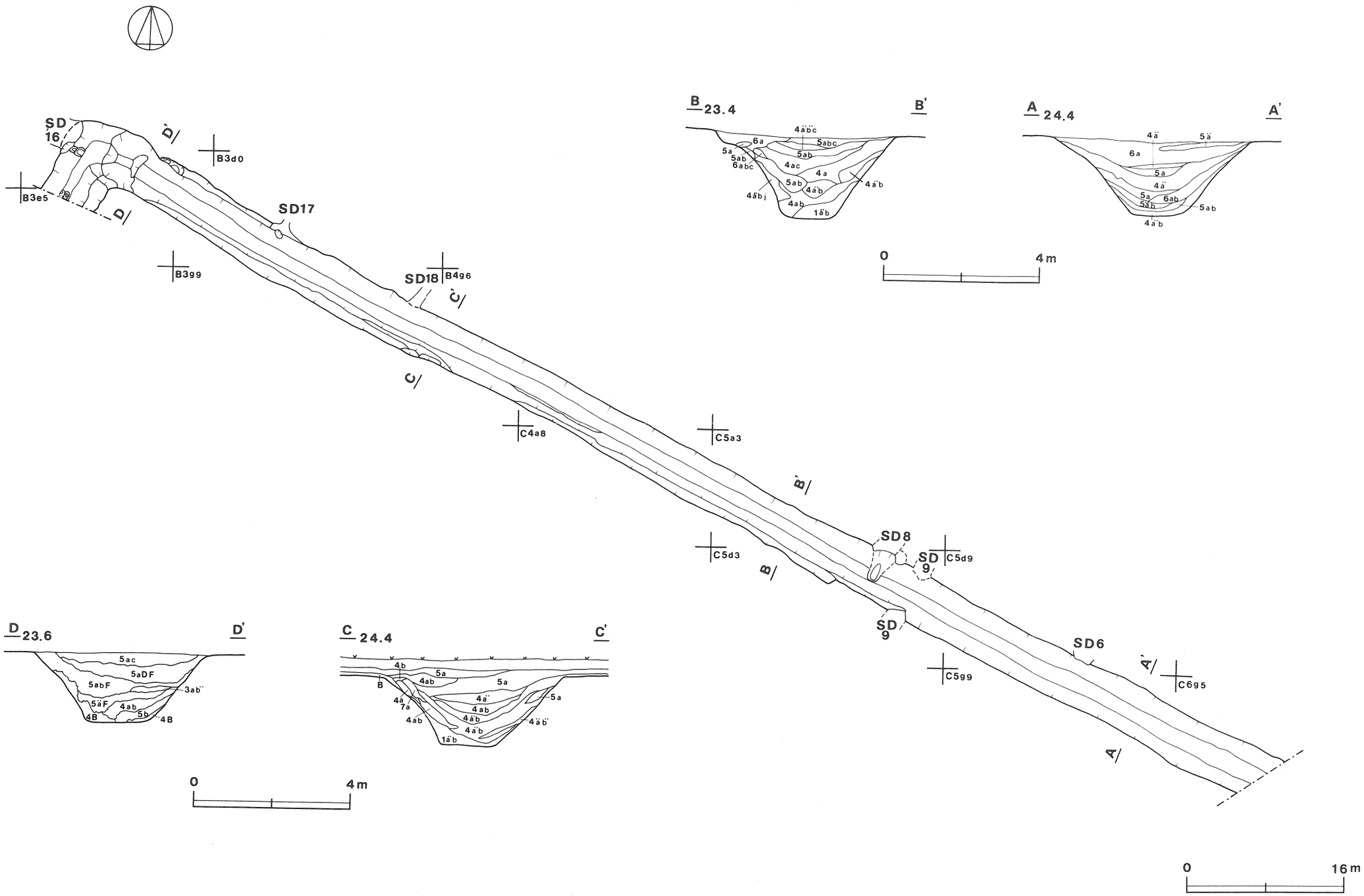
第１号堀跡（SD　4　第98・99図）

本跡は，B3・B4・C2・C3・C5・C6・D2・E2・F1・G1・G2の各区にまたがって検出された。C6区の東南東側とG2区の南東側は調査エリア外であるが，さらに堀跡が延びていることが確認されている（C6区の東南東側は，昭和60年度に調査した）。

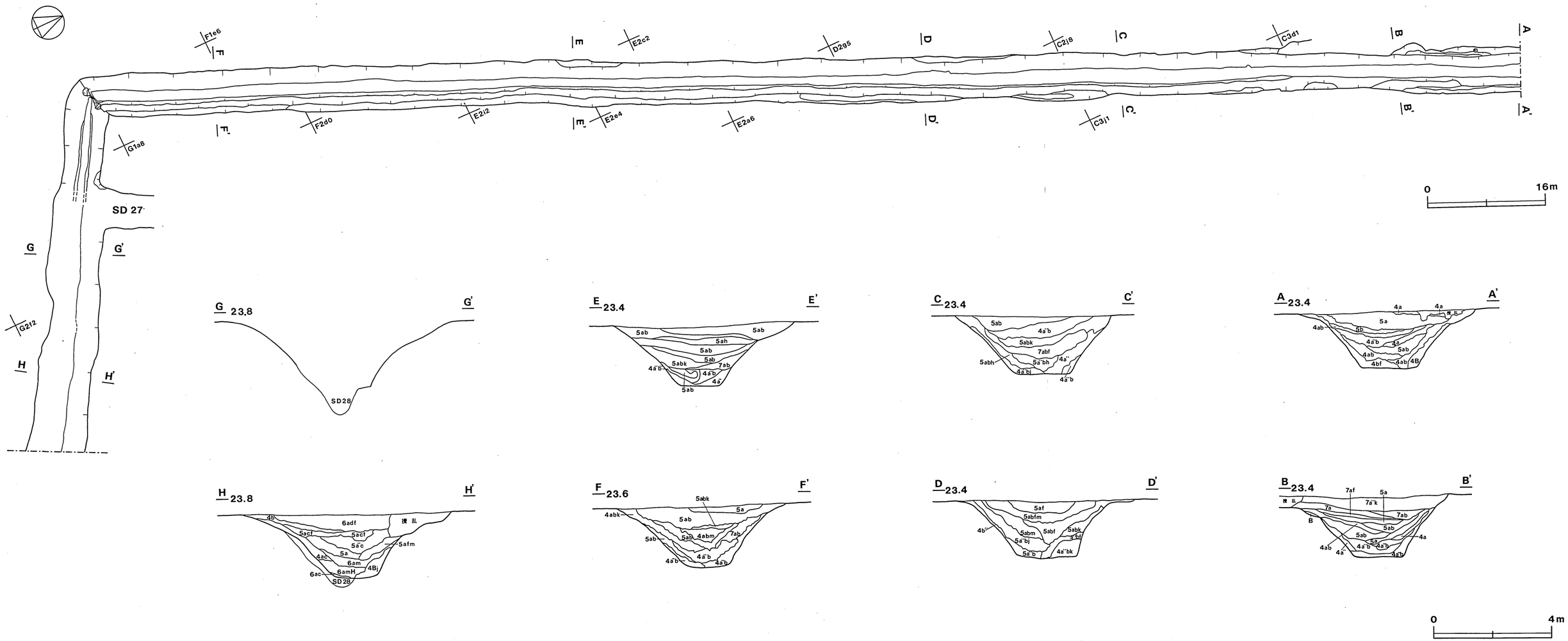
B3区からC6区では，145mを調査し，上幅約６m，底面幅約1.5m，深さ約２mの規模を有する。長軸方向はN－63°－Wを指し，ほぼ一直線に掘られている。B3区からG1区までは，全長約211mで，幅・深さ等は同様の規模を有する。長軸方向はN－24°－Eを指し，やはり一直線に掘られている。G1・G2区では，53mを調査し，上幅約６m，底面幅は１m，深さ1.8～２mの規模を有する。G2区側は，第６号堀（SD　28）を切っているため南側の壁が確認できず，規模の詳細は不明である。長軸方向はN－60°－Wを指し，一直線に掘られたものと思われる。壁・底面ともロームである。壁は50°ほどの傾斜を有し，断面形は逆台形状で，全体に箱薬研堀状を呈する。

B3区のコーナーを東南東側へ曲がった位置には，落とし穴が掘られている。平面形は長方形状を呈し，長軸3.7m，短軸2.3mで，堀底の幅一杯に掘られており，長軸方向は堀跡の長軸方向と一致している。深さは，確認面から約４m，堀の底面から約２mを測り，掘り込みは粘土層下の砂層にまで達している。G1区のコーナーは，一部に掘り残しが見られる。その形状から，２方向の堀の底面の先端が長方形の一端の形状を呈していることがわかる。

覆土は，下位にローム粒子を多量に含む褐色土・明褐色土が堆積している。これは，壁が崩れて生じたものと解される。中位には，極暗褐色土・黒褐色土が堆積しており，中世の遺物の多くは，この層から出土している。上位は褐色土が堆積しており，一部に人為的に埋め戻された層があると見られるが，判然としない。下位及び中位の土層と，上位の土層の大部分は自然堆積である。



第98図　第１号堀跡実測図 (1)



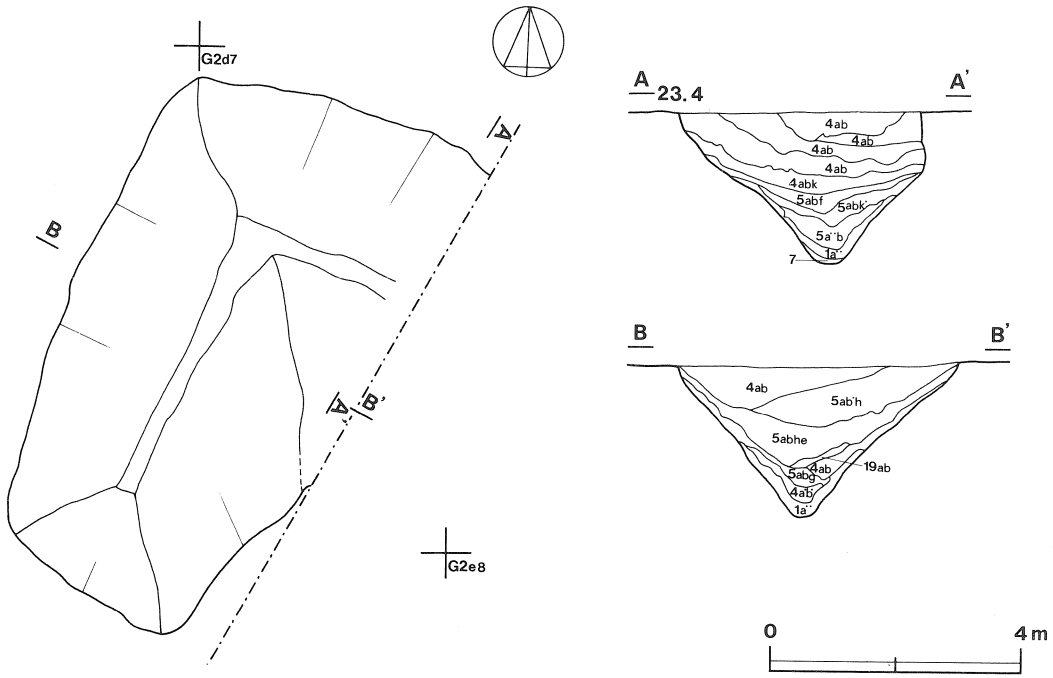
第99図　第１号堀跡実測図 (2)

第２号堀跡（SD 24，第100図）

本跡は，G2区に検出され，G2 b_6・b_7・c_6・c_7・d_6にまたがっている。南東側はエリア外であるが，堀はさらにエリア外に延びているものと思われる。

上幅約4.5m，底面幅30cmほどで，深さは約2.4mである。壁は45～50°の傾斜を有し，断面形はV字状であり，薬研堀状を呈する。堀の先端から，北々東（N－25°－E）へ６mほどの所で95°に屈曲し，そこからさらに２mほどでエリア外に達する。

覆土は，下位に褐色土・明褐色土が堆積し，中位には黒色土・暗褐色土が堆積している。この下位・中位の土層は自然堆積であり，中世の遺物は中位の土層中から出土している。上位には，褐色土・暗褐色土が堆積している。上位の土層は，人為的に埋め戻されたものである。

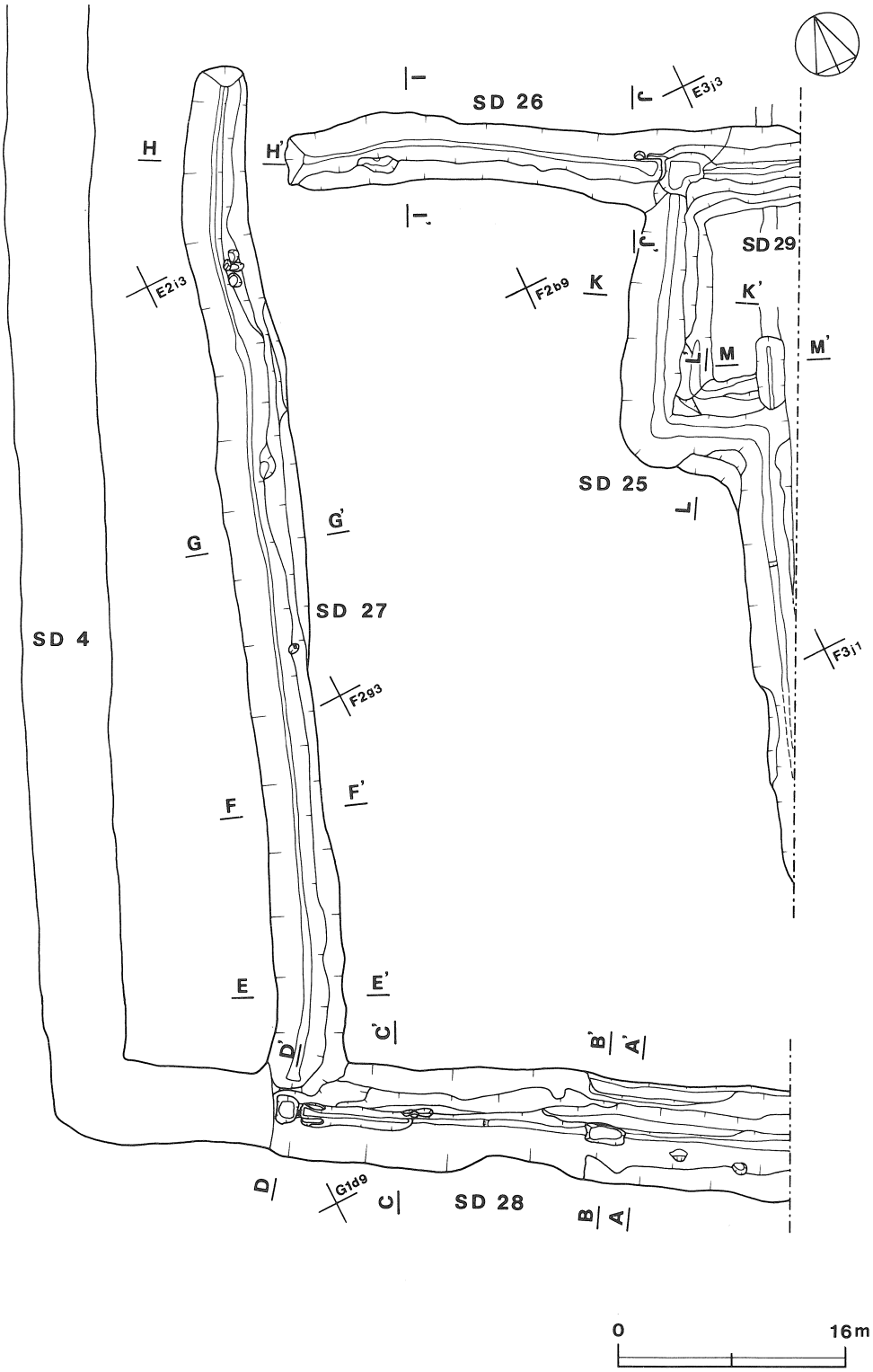


第100図　第２号堀跡実測図

第３号堀跡（SD 25，第101・102図）

本跡は，F2・F3区にまたがって検出され，出桝形状を呈している。

北東側は，F3 a_2のグリッドポイント付近から東南東（N－110°－E）へ延び，10mほどでエリアの境界に達し，さらにエリア外に延びている。一方，この堀はF3 a_2のグリッドポイント付近で南々西（N－135°－W）へ屈曲し，そこから約20mのところで再び南東（N－120°－E）へ屈曲する。そして，そこから約８mのところで，今度は南々西（N－160°－W）に屈曲し，第２号堀（SD 24）の東側のエリア外へ延びている。

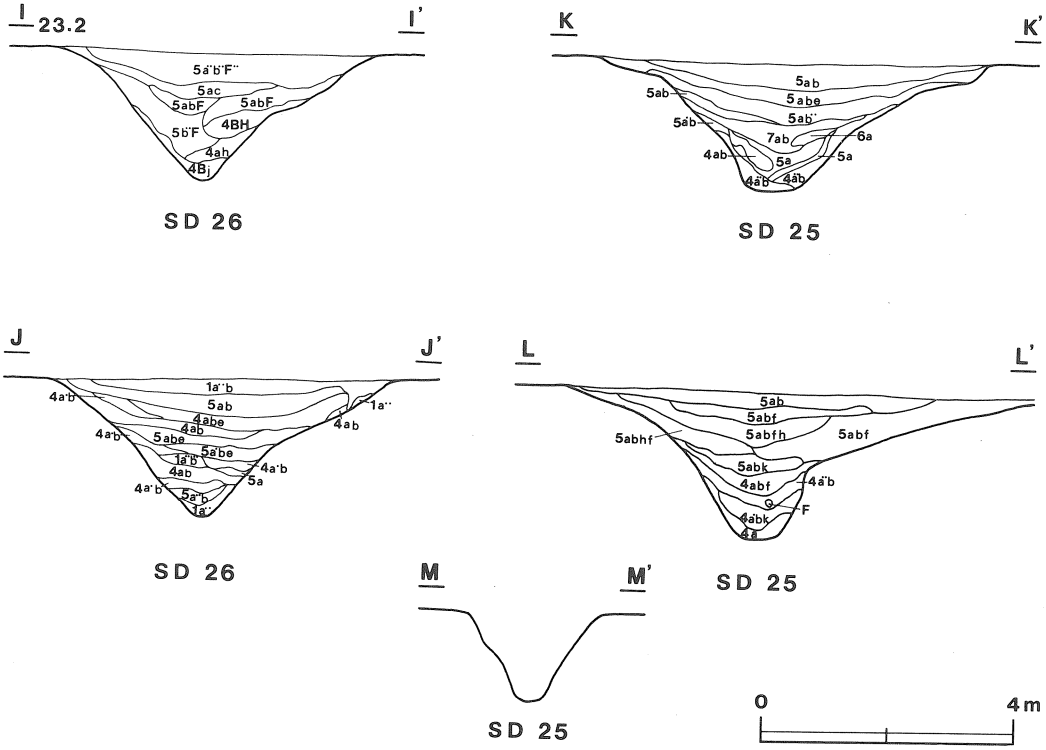


第101図　第３～６号堀跡実測図

規模は，上幅５～７ｍ，底面幅は50～80cm，深さ約２ｍで，断面形は逆台形状である。全体に，底面幅の狭い箱薬研堀状を呈する。上述した３か所のコーナーの中で，F3 a_2のグリッドポイント付近に位置するコーナーには，落し穴が掘られている。屈曲部を中心に，東南東へ延びる堀底が約１ｍ，南々西へ延びる堀底が約１ｍ，堀底の幅よりもやや広目に掘り込まれ，全体にＬ字状を呈している。堀底からの深さは，約１ｍである。壁・底面はロームで，壁の傾斜は約50°である。

F3 f_2のグリットポイント付近の壁には，Ｎ－25°－Ｅの方向に約３ｍの長さの掘り込みが見られる。上幅約２ｍ，底面幅10～20cm，確認面からの深さ約1.6ｍで，断面形はＶ字状を呈する。

覆土は，下位にローム粒子を多量に含む褐色土・明褐色土が堆積し，中位と上位には褐色土・暗褐色土が堆積している。いずれも自然堆積であるが，セクション（Ｋ－Ｋ′）には，上位から３番目の土層（５ａｂ''）のように人為的に埋め戻されたと思われる層も見られる。遺物は，下位の土層と中位の土層の中間から出土する例（688・689・873など）が多い。



第102図　第３・４号堀跡実測図

第４号堀跡（SD 26，第101・102図）

本跡は，F3区の北西隅からE2区にかけて検出された。第３号堀跡（SD 25）の北東側をそのまま延長する状態で，約26ｍほど西北西へ延びている。

規模は，上幅４～５ｍ，底面幅約20cm，確認面からの深さが約２ｍである。壁・底面はロームで，壁は45～55°の傾斜を有する。断面形はＶ字状で，薬研堀状を呈する。本跡はやや屈曲して掘られ，南東側16ｍの長軸方向はＮ－60°－Ｗを指し，北西側10ｍの長軸方向はＮ－70°－Ｗを指している。

本跡の東南東の端は，幅10cm前後，高さ50cmほどの土橋状に掘り残されており，これが，第３号堀（SD 25）との境界をなしている。

覆土は自然堆積であるが，上位には人為的に埋め戻されたと思われる層も見受けられる。

遺物は，先端部の底面の直上や壁際から五輪塔（849・850など）・宝篋印塔(843・844)が出土しているほか，覆土中からも多数の遺物が出土している。

第５号堀跡（SD 27，第101・103図）

本跡は，G1・F1・F2・E2の各区にまたがって検出され，第４号堀（SD 26）の先端部の北約６ｍの地点から，第１号堀（SD ４）の北西辺と平行に南々西へ延び，G1区で第1号堀（SD ４）の南西辺及び第６号堀跡の先端部につながる。

全長は約70ｍで，上幅５～６ｍ，底面幅20～30cm，確認面からの深さは２～2.2ｍである。壁は55～60°の傾斜を有し，断面形はＶ字状であり，薬研堀状を呈する。やや蛇行気味に掘られているが，全体としての長軸方向はＮ－22°－Ｅを指している。

本跡の南西端は，幅30cm前後，高さ50cmほどの土橋状に掘り残されており，これが第６号堀跡との境界になっている。

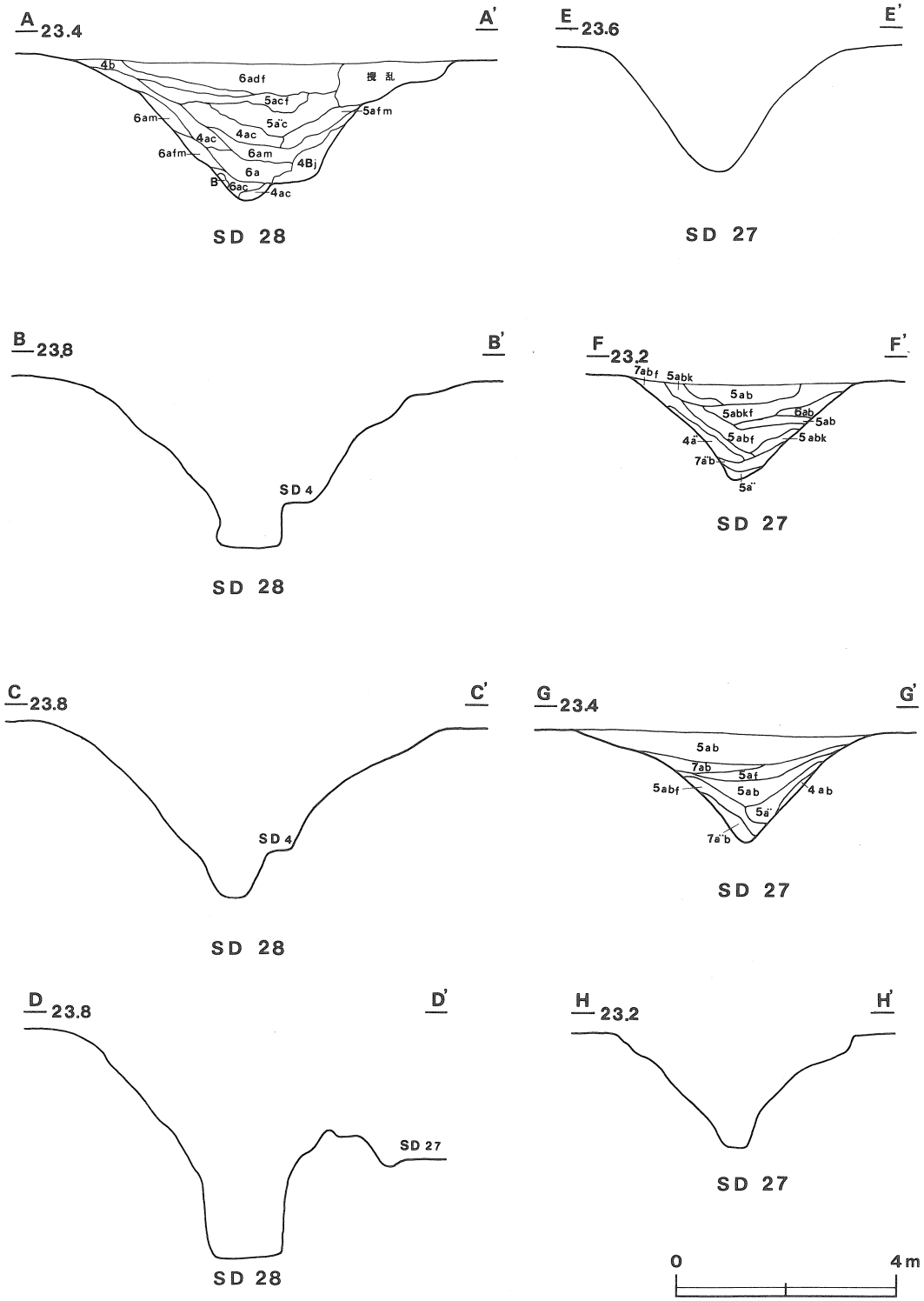
覆土は，下位から明褐色土・暗褐色土・褐色土の順に堆積している。そのほとんどは自然堆積と見られるが，上位に堆積する褐色土層の一部は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は，壁際から笄（第120図756）・白釉小皿（第104図634）が，底面直上から五輪塔の一部（第132図861）等が出土している。

第６号堀跡（SD 28，第101・103図）

本跡は，G1・G2両区にまたがって検出され，第１号堀（SD ４）の南西辺によって，その大部分を切られ，底面と南西側壁を残すのみである。したがって，規模の詳細は不明であるが，底面と南西側壁から推定される範囲で記述する。調査を実施したのは，調査エリア内の約37ｍである。

上幅は７～８ｍ，底面幅は30cm前後，確認面からの深さは2.7ｍ前後を測り，長軸方向は第１号堀跡（SD ４）の南西辺と一致し，Ｎ－60°－Ｗを指している。壁は40～50°の傾斜を有してり，断面形はＶ字状で，薬研堀状を呈する。底面と壁は，ロームである。

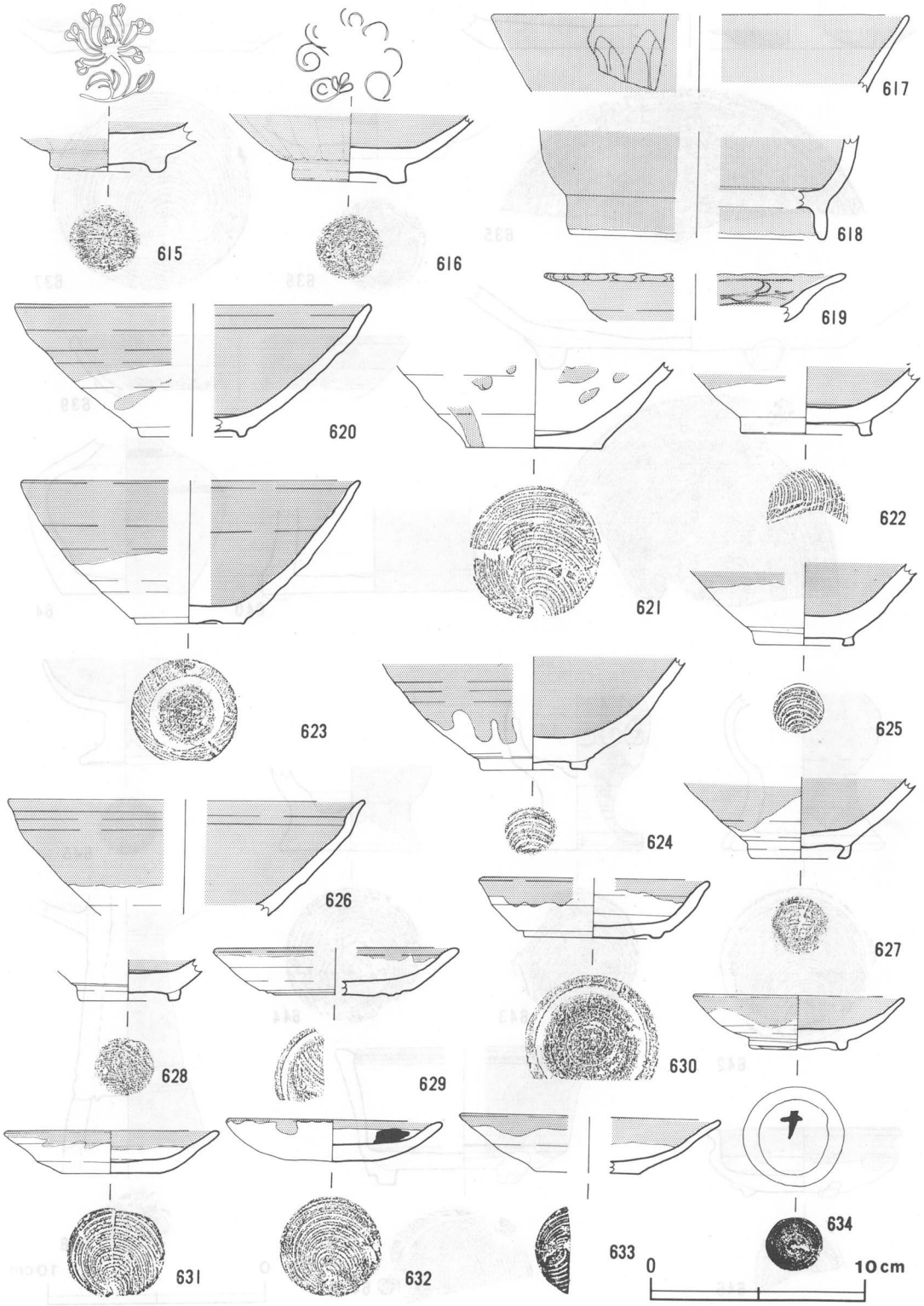


第103図　第５・６号堀跡実測図

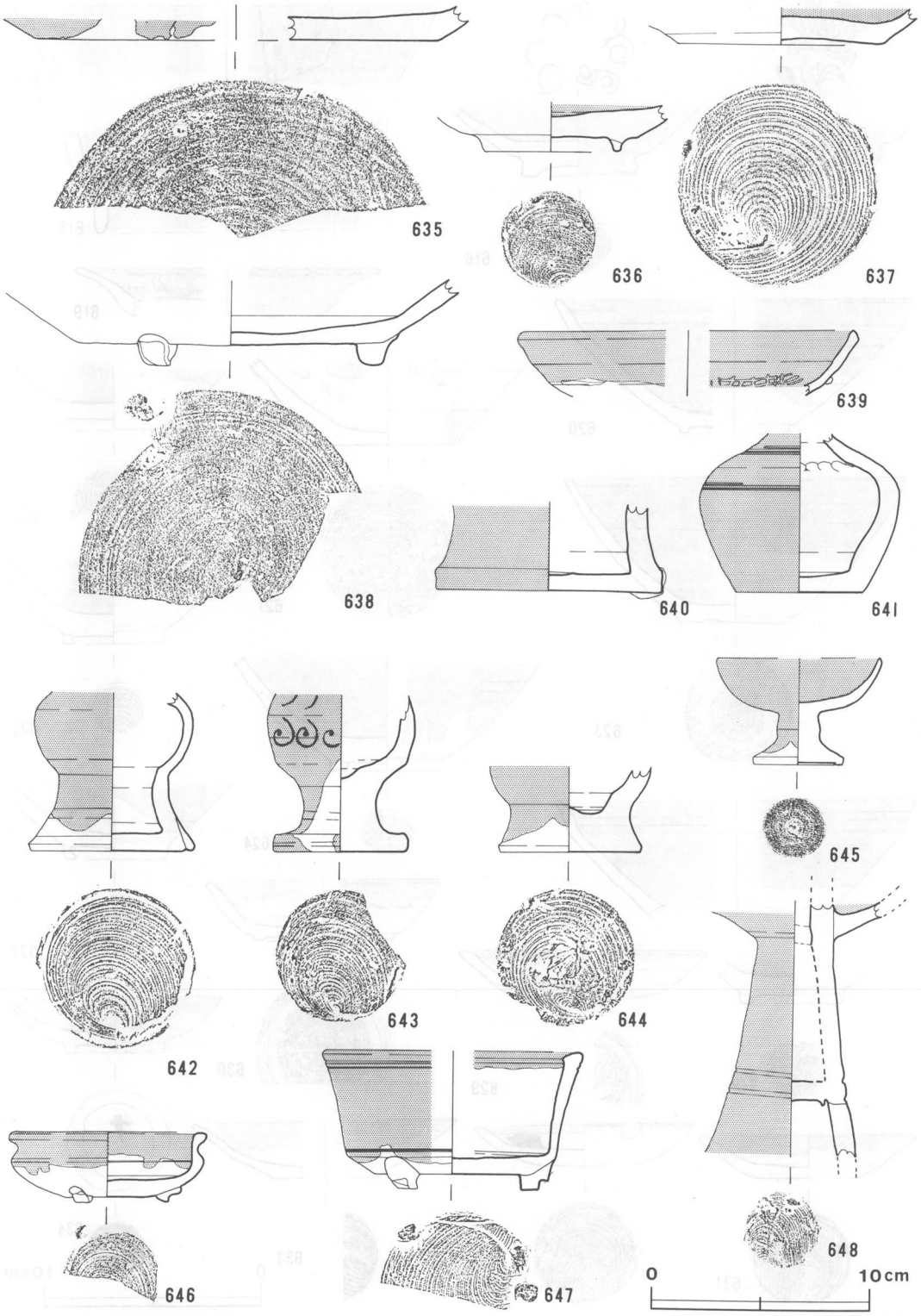
底面には，ローム層下の粘土層に達する掘り込みが見られる。この掘り込みは，長さ約８ｍで，幅は底面よりもやや広く，80°前後の傾斜で50cmほど掘り込まれている。床面は，やや丸味を有する。また，この掘り込みの一部が長さ約６ｍ，幅約1.3ｍで，堀の底面から約80cmの深さまで掘り下げられている。この部分の壁はややオーバーハングし，床面は丸味を有している。

本跡の先端部には，落し穴が掘られている。平面形は，１辺が約1.2ｍの方形状を呈している。この落し穴の横には，先述した堀底面の掘り込みと，幅40cm，高さ20cmの土手状の掘り残しがあり，この掘り残しの上面から落し穴床面までの深さは1.1ｍ，確認面からの深さは4.2ｍである。

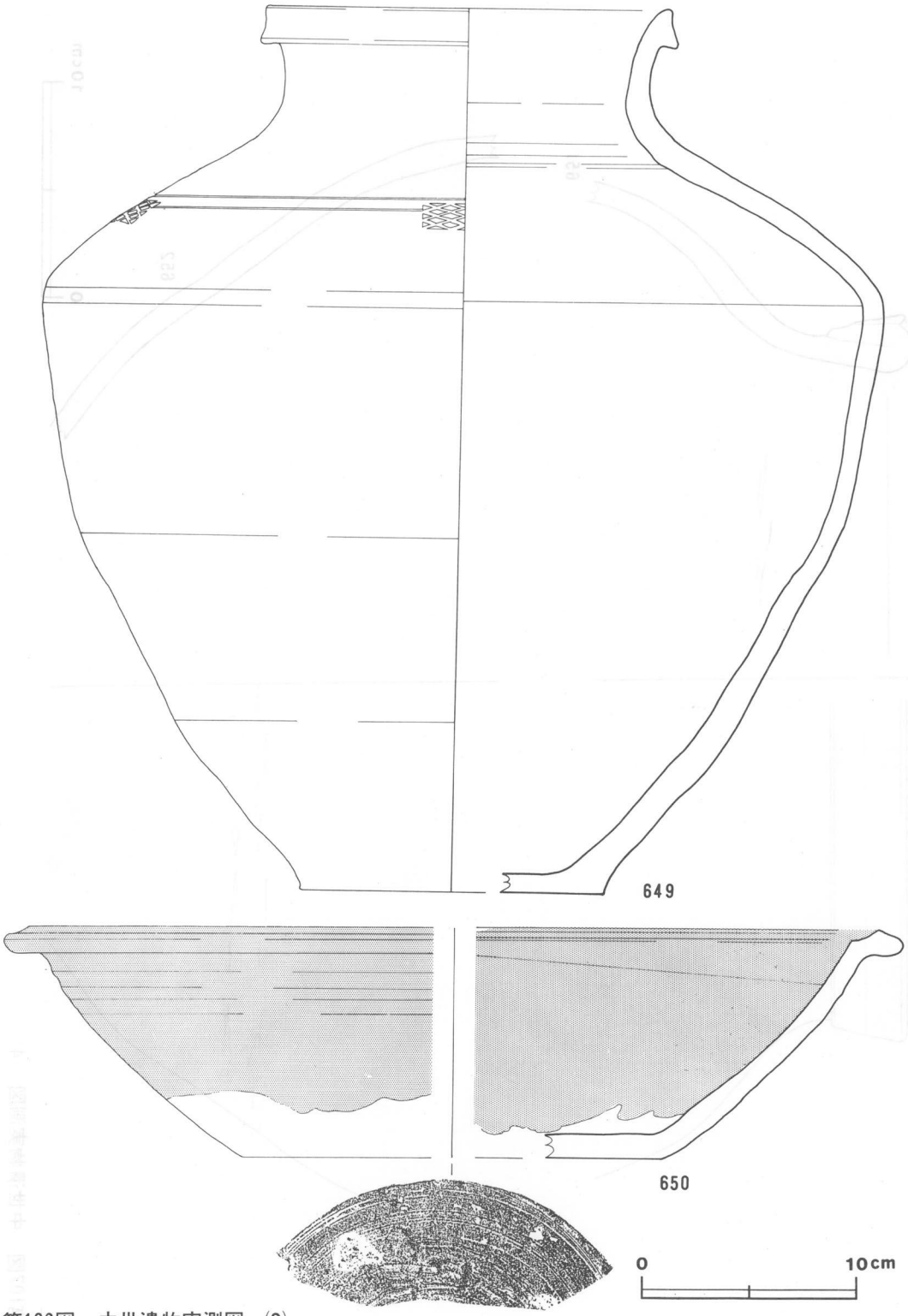
覆土は，自然堆積であるが，大部分を第１号堀（SD　4）に切られているため，詳細は不明である。また，遺物は第１号堀（SD　4）の底面下に位置する本跡の覆土中及び本跡の底面直上から出土している。特徴的な物としては，紐を通された状態で出土した貨幣（総数42）がある。これは，長さ７cmほどのわら状のものを撚った細縄が通されていたものである。貨幣の初鋳年で最も古い例は開元通寶の唐の武徳４（621）年，最も新しい例は永樂通寶の明の永樂６（1408)年である。そのほか，底面の直上から鉄製の鎌（第121図769），薄板状鉄製品（第121図767），五輪塔（第130図847）が出土しており，落し穴の床面直上から柄の木質が付着し，口金が見られる鉄製の鎌（第130図772）が出土している。



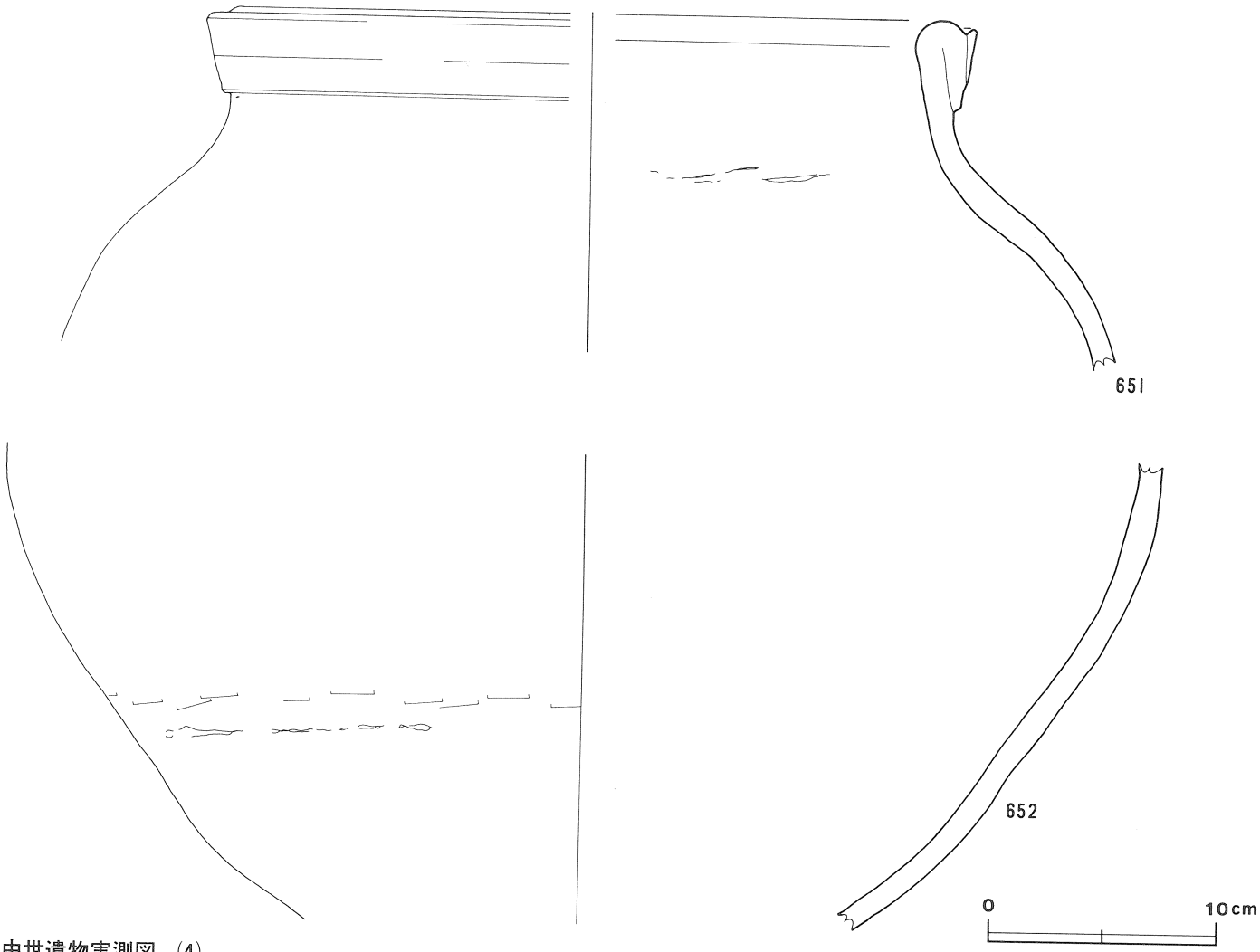
第104図　中世遺物実測図（1）



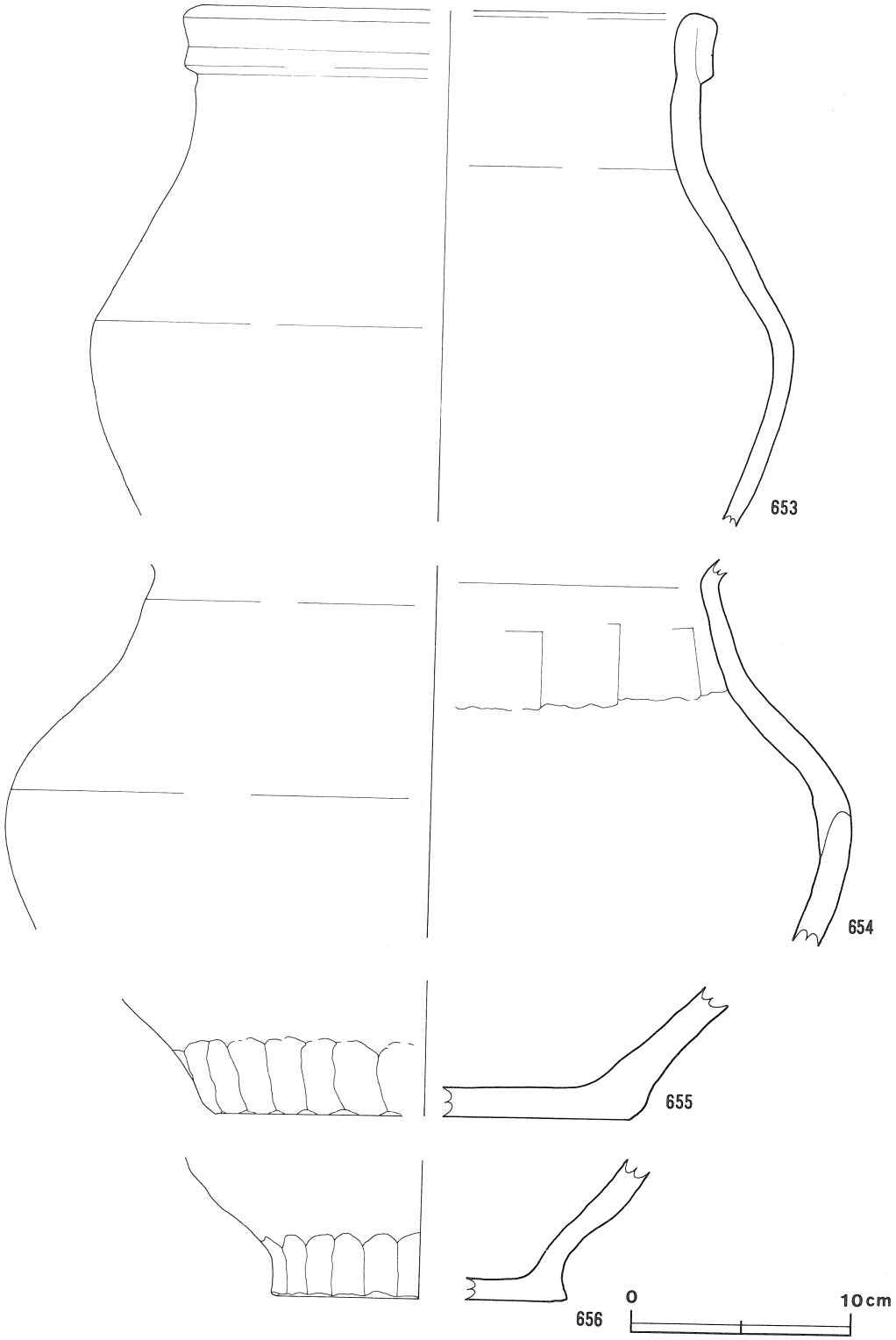
第105図　中世遺物実測図（2）



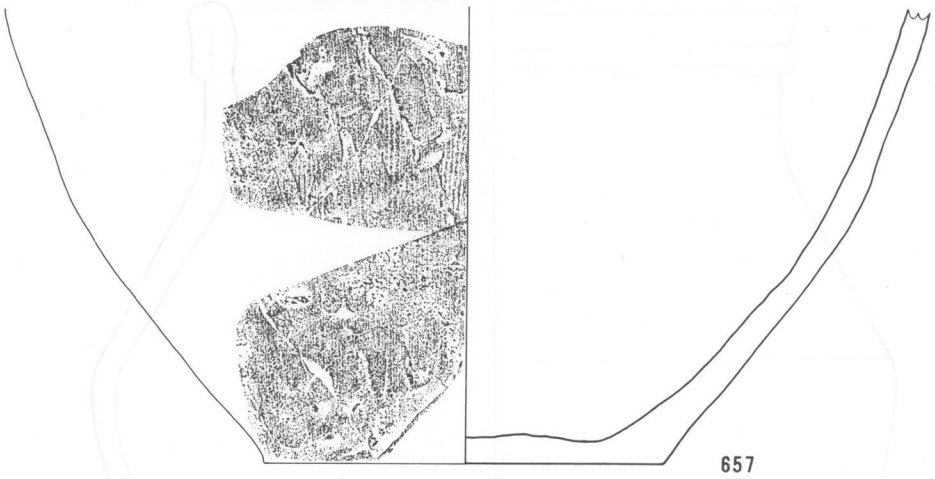
第106図　中世遺物実測図 (3)

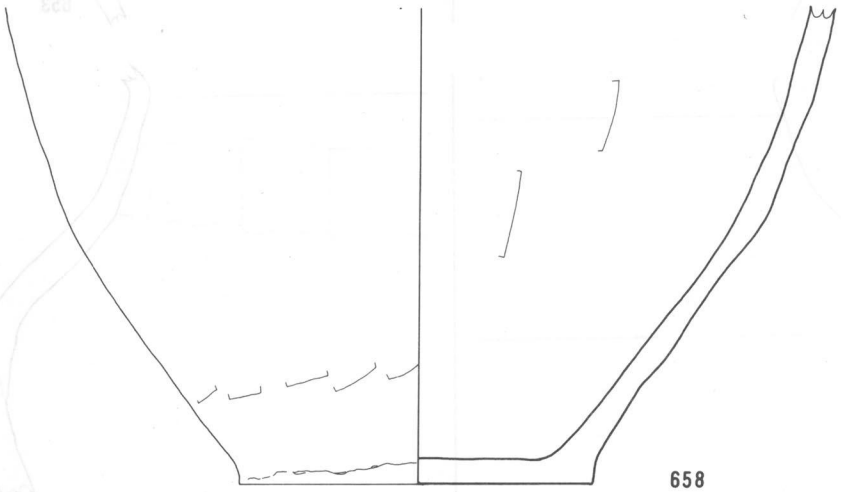


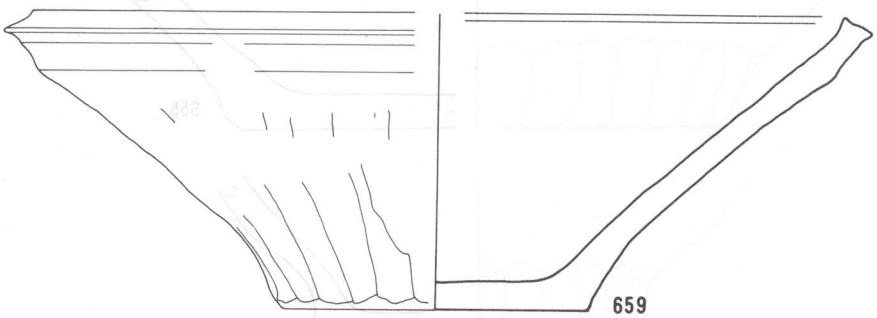
第107図　中世遺物実測図 (4)



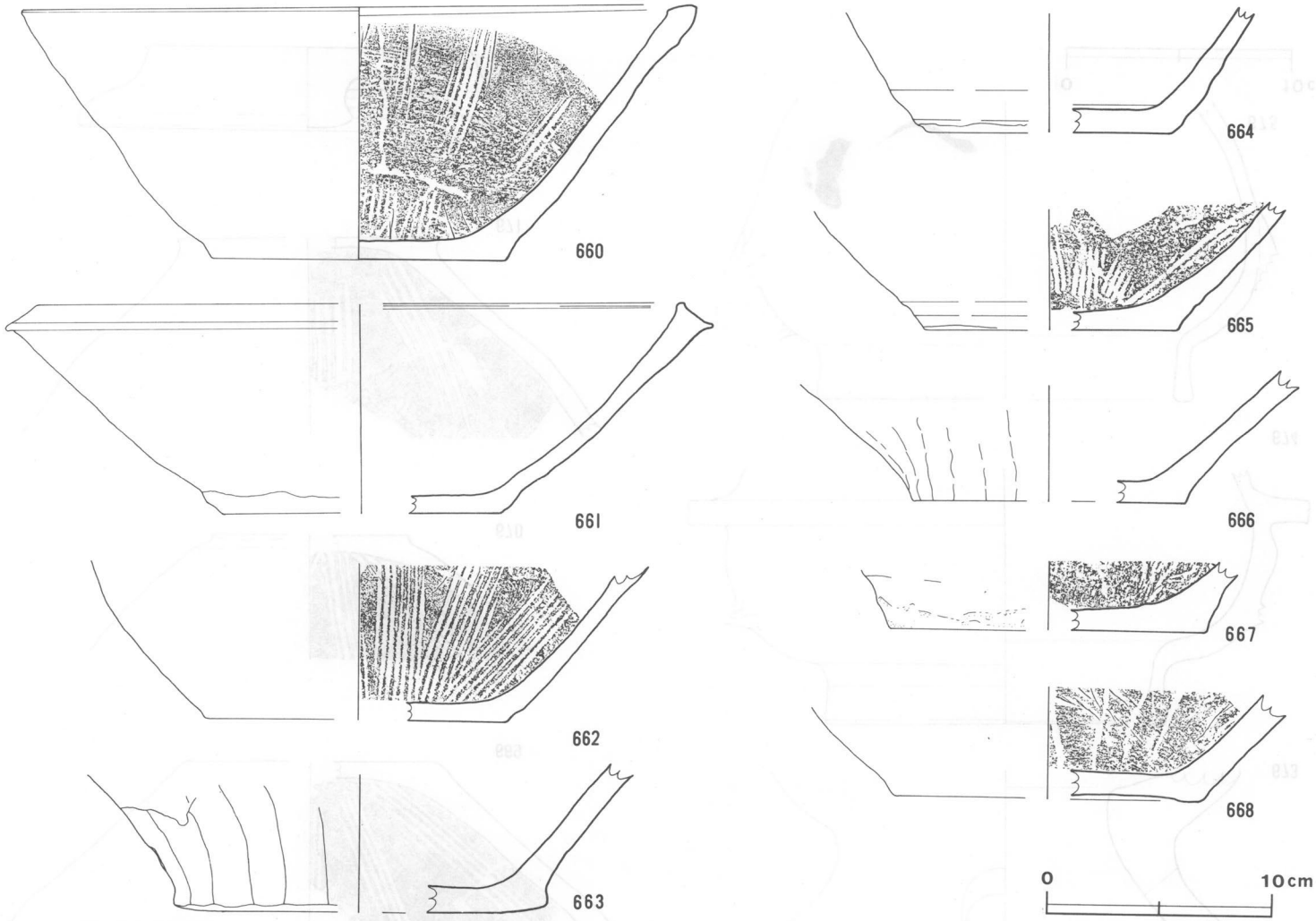
第108図　中世遺物実測図 (5)



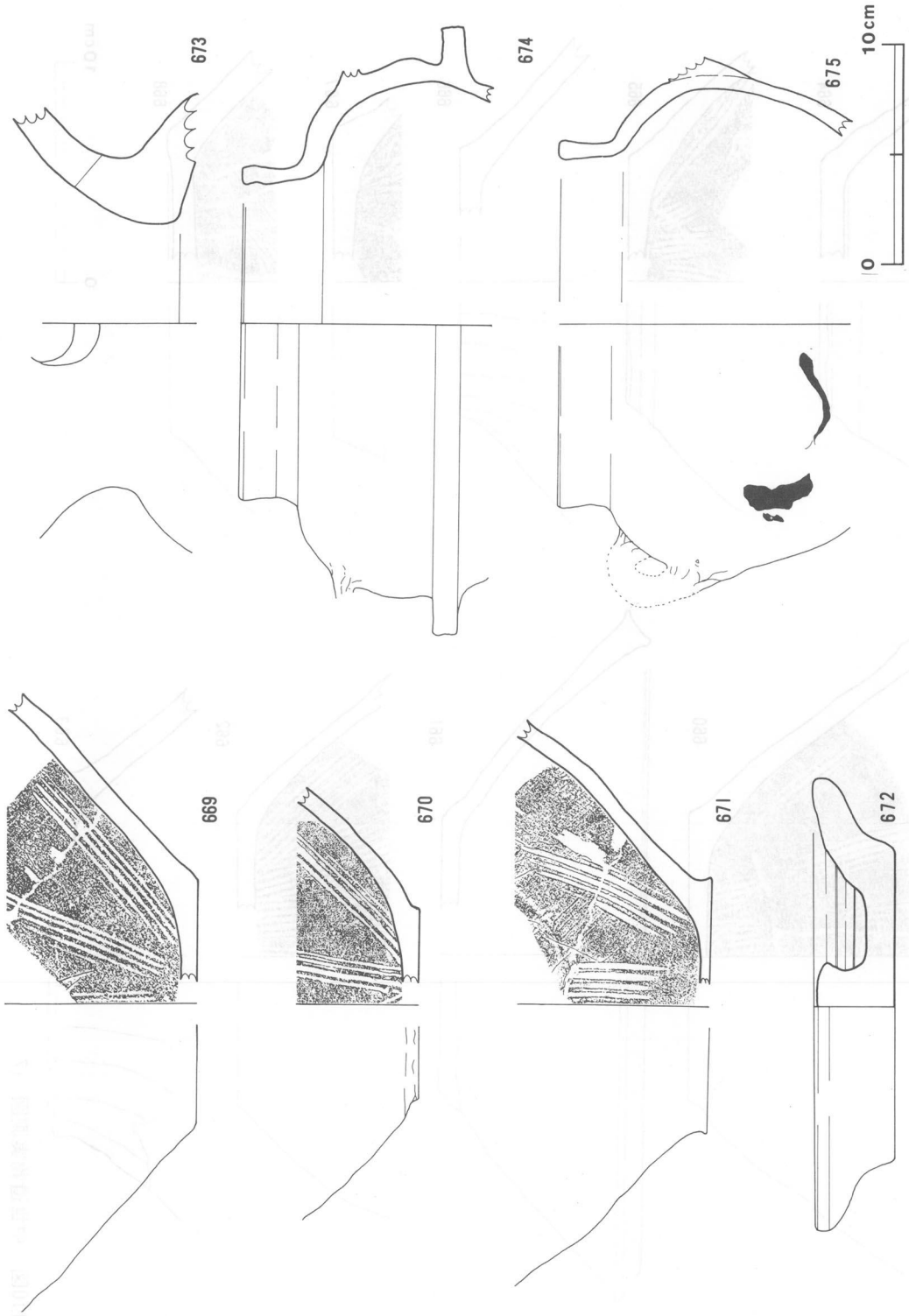




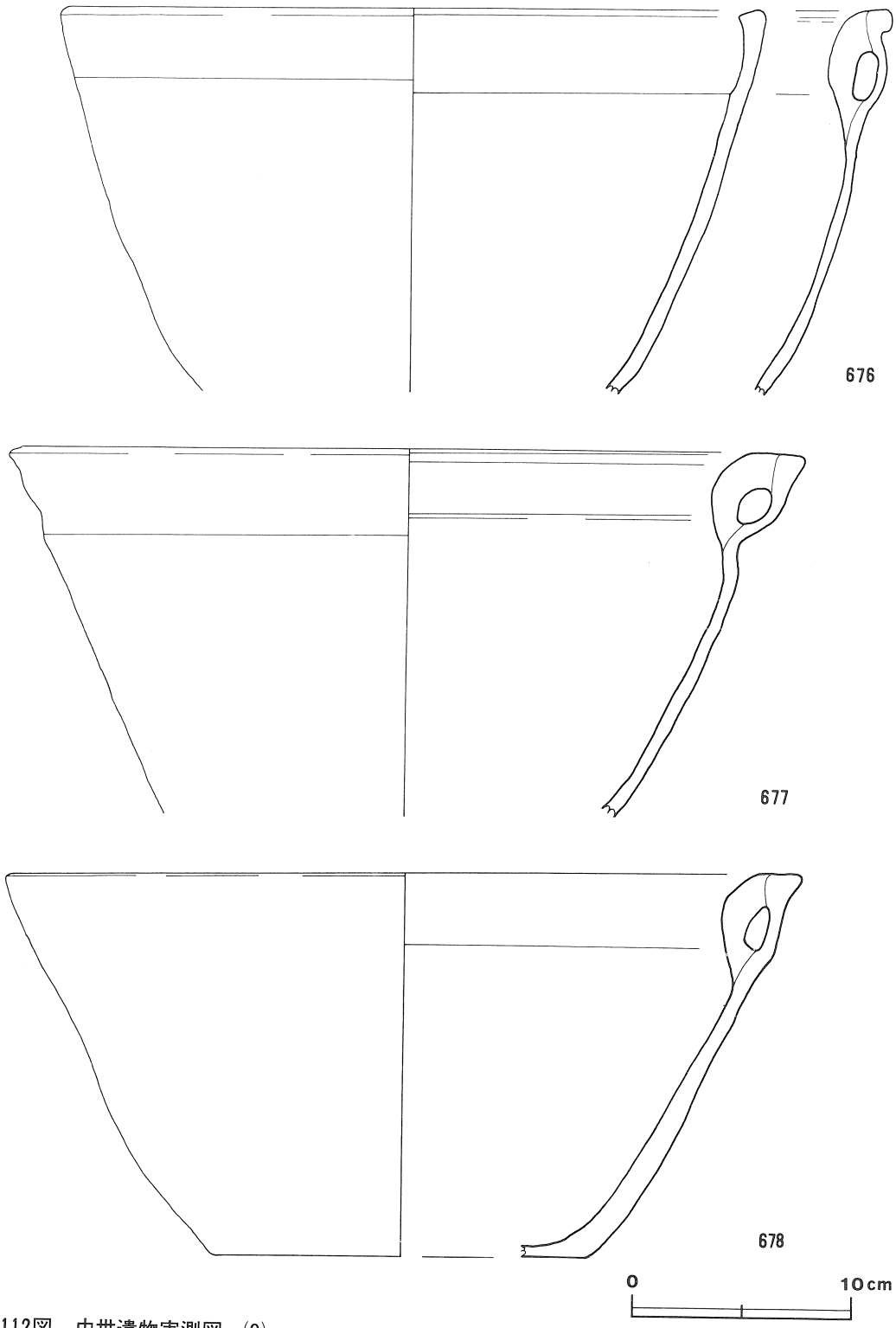
第109図　中世遺物実測図 (6)



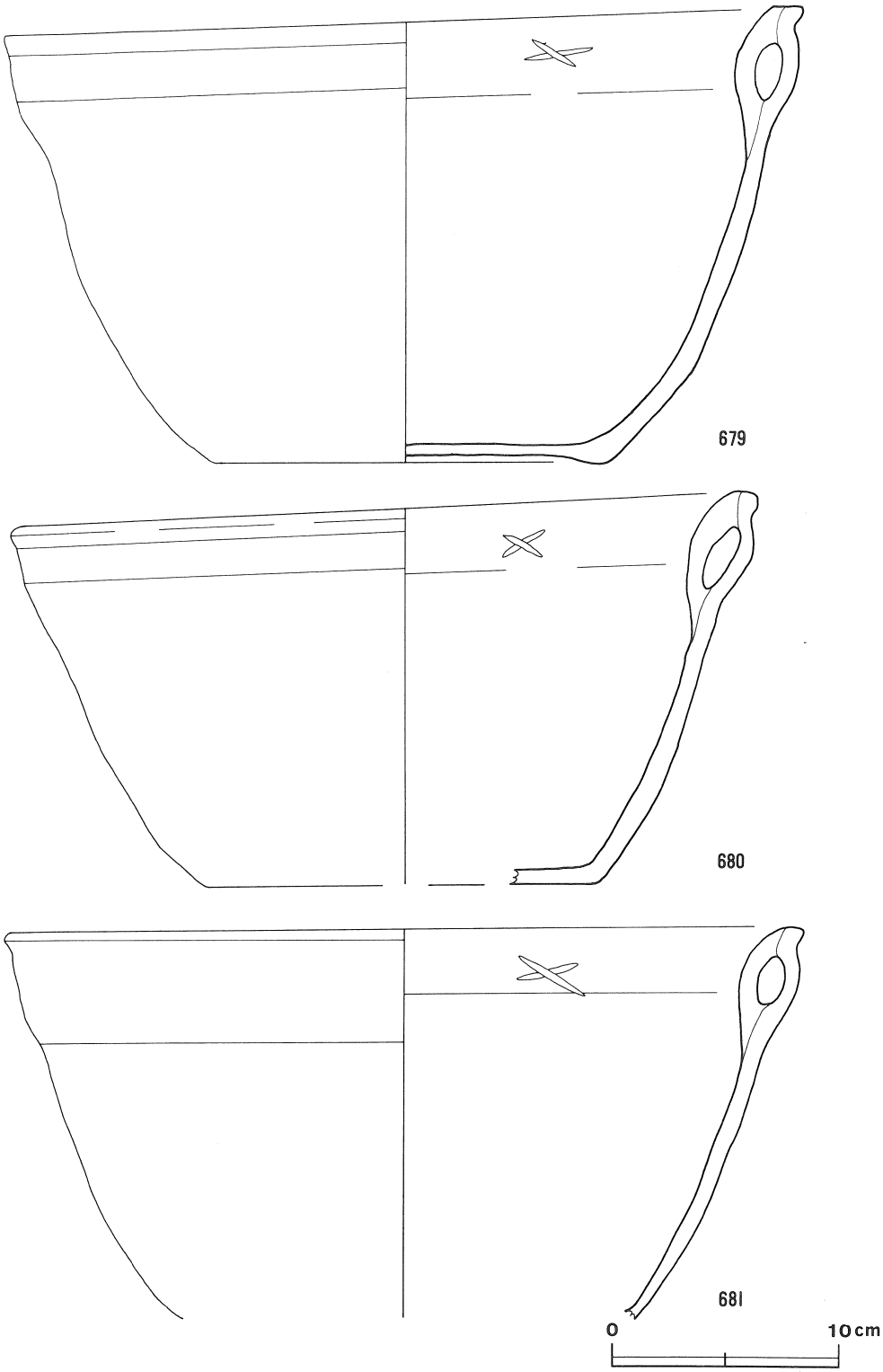
第110図　中世遺物実測図（7）



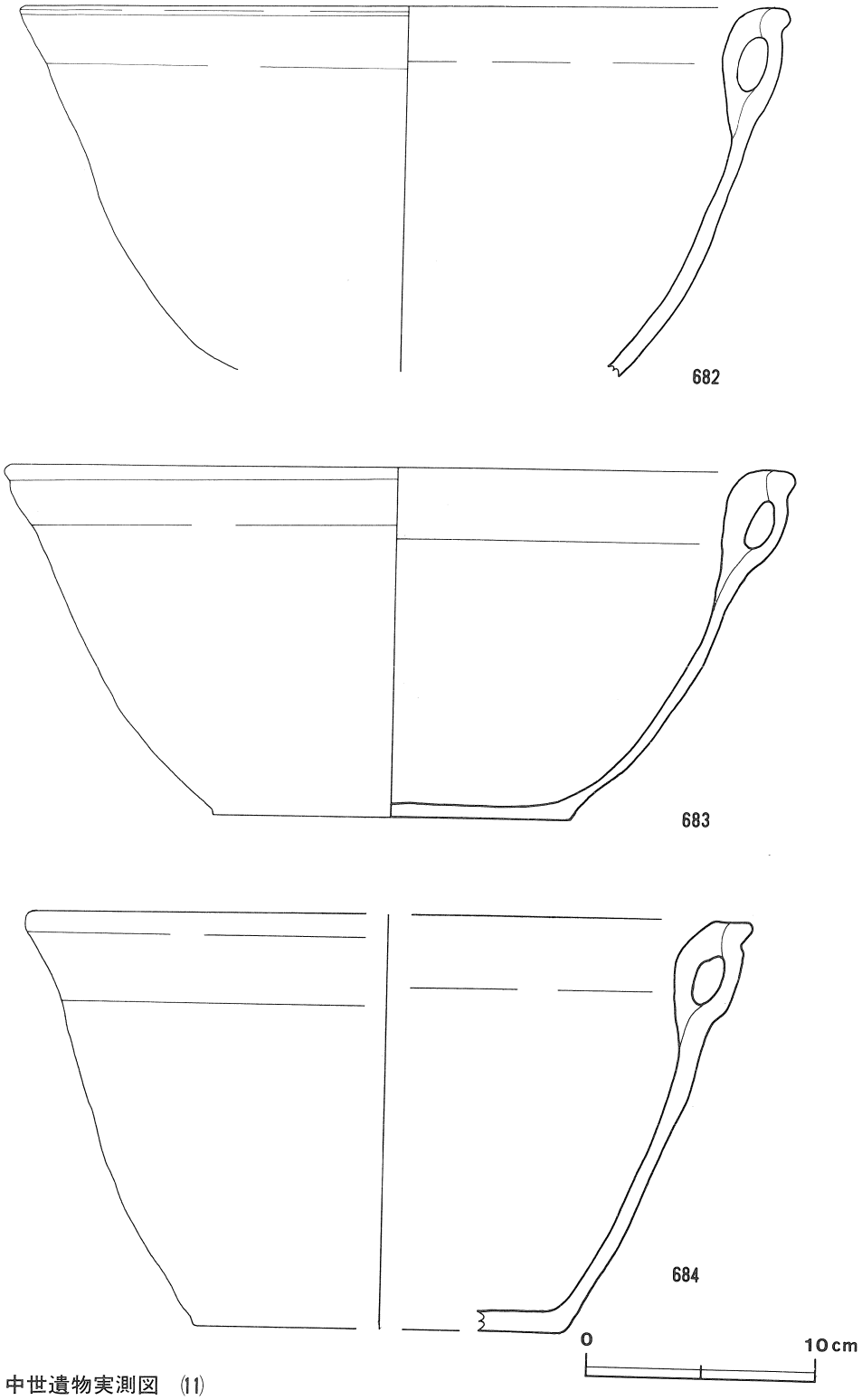
第111図　中世遺物実測図 (8)



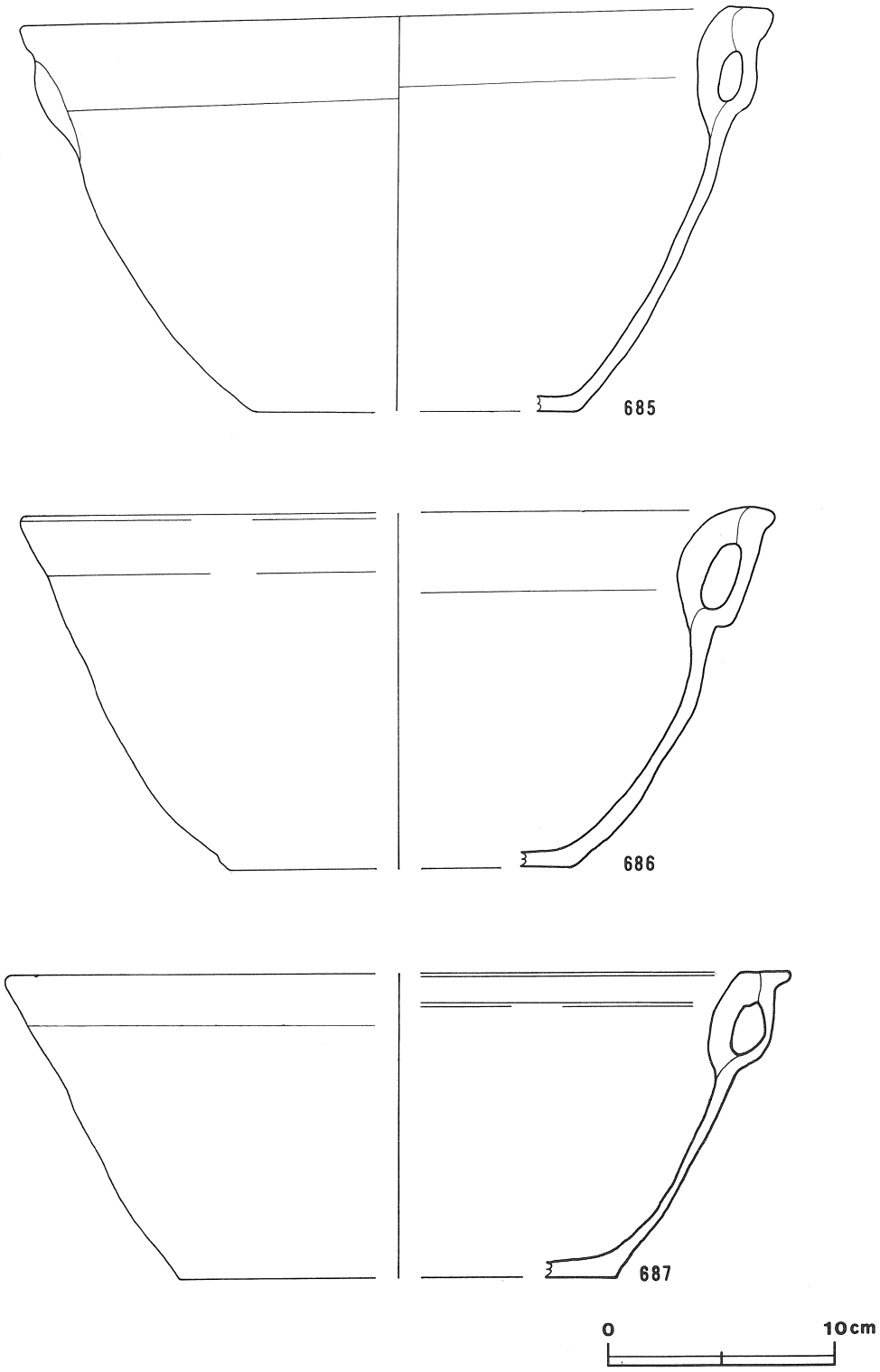
第112図　中世遺物実測図 (9)



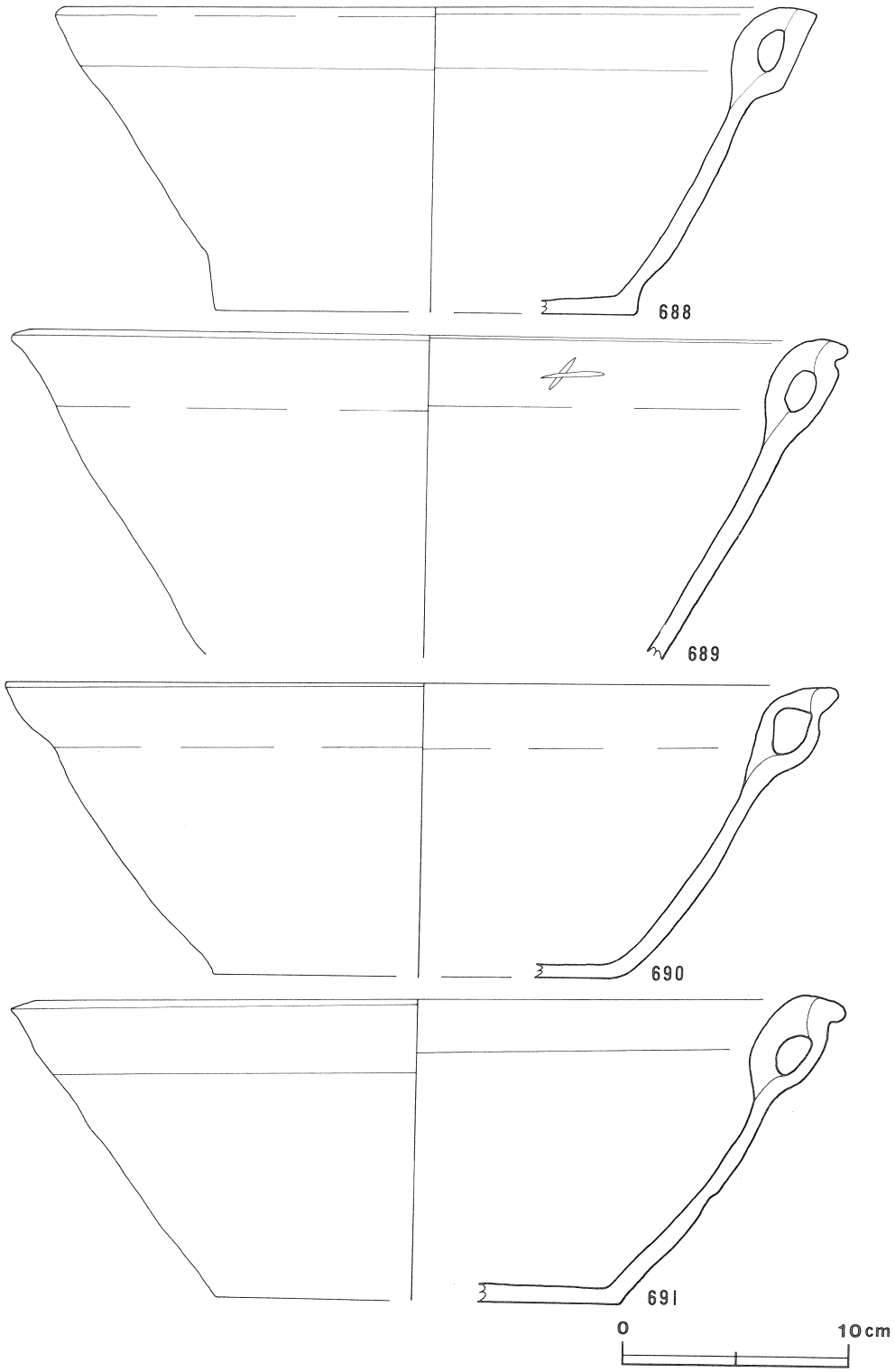
第113図　中世遺物実測図 (10)



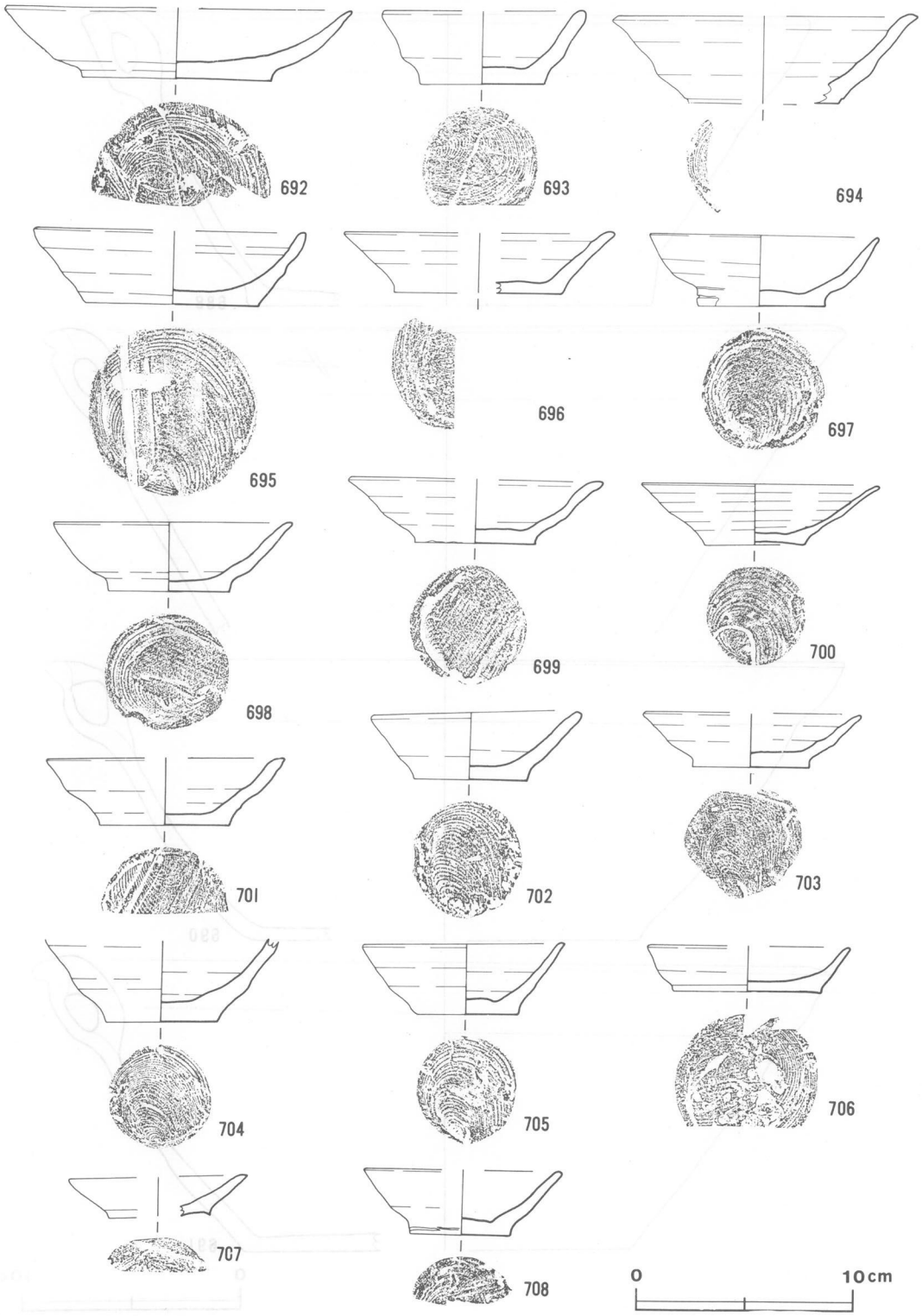
第114図　中世遺物実測図 (11)



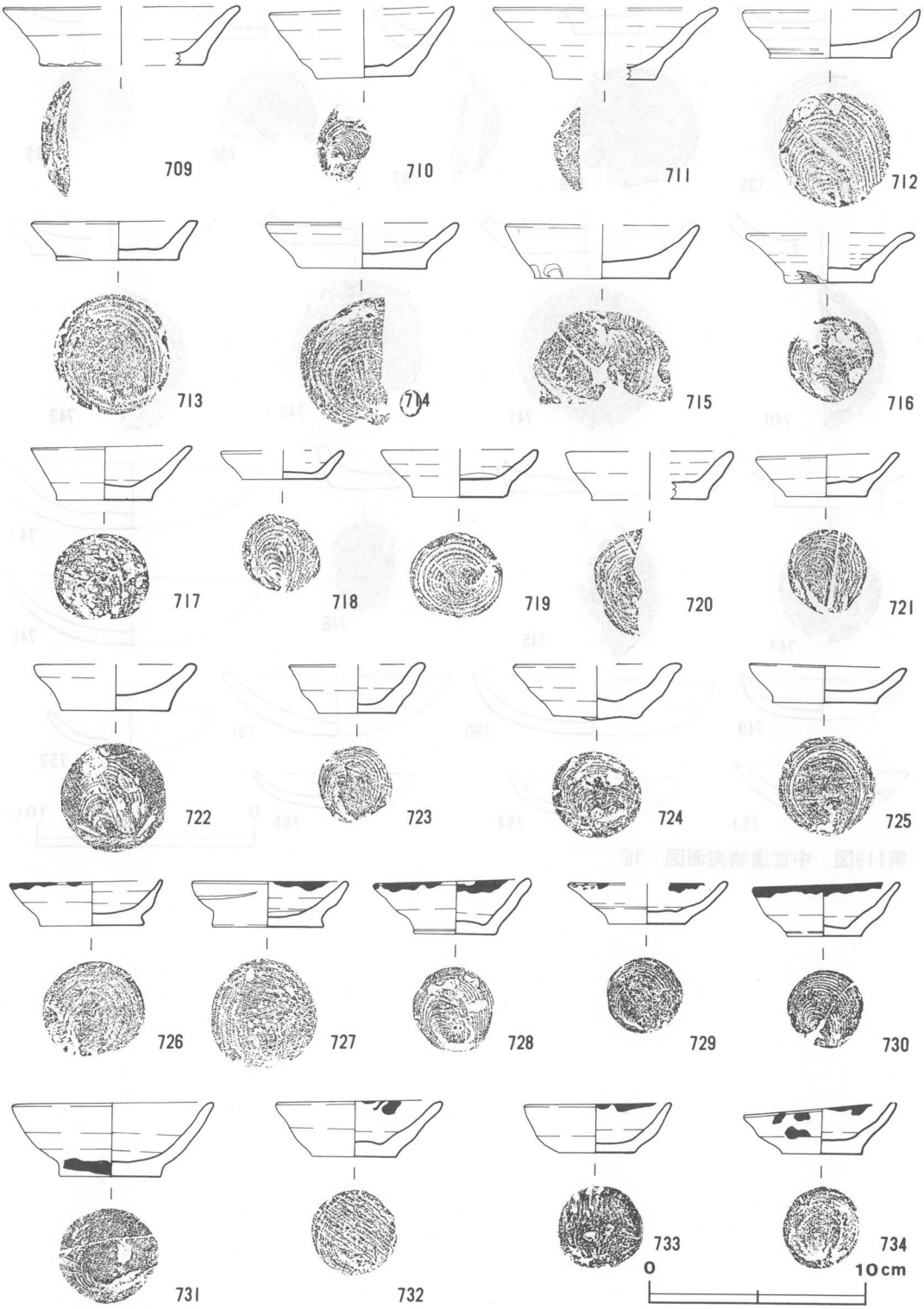
第115図　中世遺物実測図 (12)



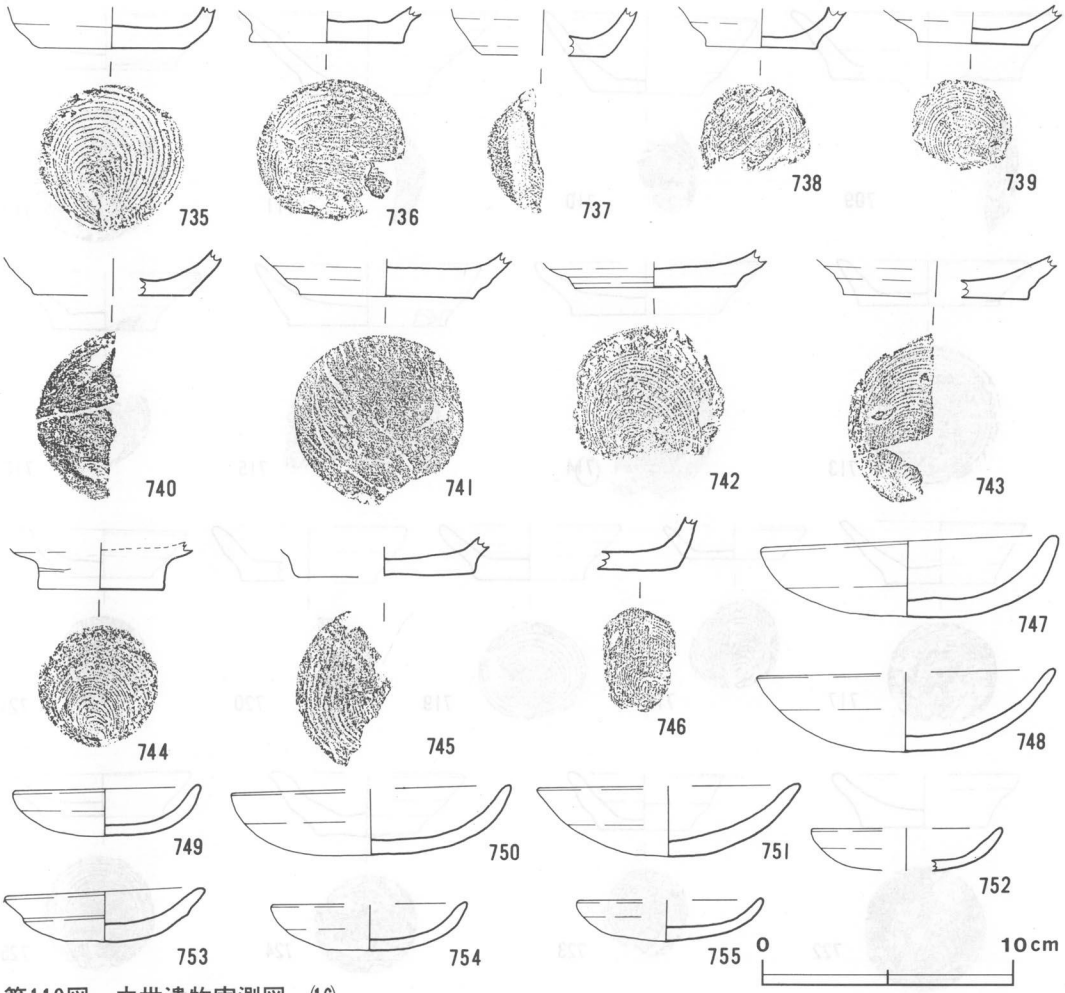
第116図　中世遺物実測図 (13)



第117図　中世遺物実測図 (14)



第118図　中世遺物実測図 (15)



第119図　中世遺物実測図 (16)

表23　中世遺物解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
104 ｜ 615	青磁 (碗)	E 2.3 F 5.4 G 0.9	体部外面に稜。見込みには，スタンプによる花文。高台内と畳付は露胎。	高台内回転篦削り	(胎土)明青灰色 (釉) 明緑灰色	元～明 SD 4
616	〃 (〃)	E 3.3 F 5.4 G 0.9	体部外面に稜。見込みには不明瞭な花文。高台内と畳付は露胎。	高台内回転篦削り	(胎土)明緑灰色 (釉) 緑灰色	元民窯 〃
617	〃 (〃)	A(19.4) E 3.6	小片であり，口径は不正確。蓮弁は先が尖り鎬が明瞭である。		(胎土)灰白色 (釉) 明オリーブ灰色	南宋 龍泉窯系 〃
618	〃 (鉢)	E 4.9 F(12.2) G 1.8	高台下端は露胎。釉は，粗い貫乳が見られる。		(胎土)オリーブ灰色 (釉) 緑灰色	宋 SD 24
619	〃 (皿)	A(14.1) E 2.2	体部は外傾し，口縁は外反する。体部中位に稜を有する。口唇は，細かい波状をなす。内側に，線刻文が施される。		(胎土)明オリーブ灰色 (釉) オリーブ灰色	宋～元 SD 25
620	陶器 (碗)	A(16.6) C 6.2 F(5.1) G 0.4	体部は外傾し中ほどでやや内反する。口縁でわずかに外反。外面はロクロ痕が明瞭。体部外面は下半が露胎。	水挽き 横なで 高台内回転篦削り	(胎土)灰色 (釉) 灰白色	美濃須衛 SD 8
621	〃 (〃)	B 6.4 E 4.2	体部は外傾し直線的に開く。底部は無台で糸切りのまま。釉は部分的（絵の一部か）。断面に接着剤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 暗赤褐色	瀬戸 SD 4
622	〃 (〃)	E 3.2 F 6.2 G 0.8	体部は外傾し，内反しながら立ち上がる。内面に窯道具痕が2か所。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉) 浅黄色	〃 〃
623	〃 (〃)	A 15.8 B 5.0 D 6.7	体部は外傾し，上半から内反する。外面はロクロ痕が残り，口縁は内そぎ気味。内面はふりものが付着。高台は，糸切り後に削り出す。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで 底部回転糸切り， 削り出し高台	(胎土)灰白色 (釉) 灰オリーブ色	〃 〃
624	〃 (〃)	E 5.3 F 4.8 G 0.5	体部は外傾し，中ほどで内反。底部は器肉が肥厚する。底部は糸切り後高台接合。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)淡黄色 (釉) オリーブ灰色	〃 〃
625	〃 (〃)	E 3.9 F 4.7 G 0.5	底部は，やや肥厚する。内面は窯道具痕が4か所。高台は畳付がやや内側へ突き出す。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ黄色	〃 〃
626	〃 (〃)	A(16.4) E 5.4	体部は外傾し，上位で直立する。口縁は再び外傾し，全体で弱いS字状を呈する。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 〃
627	〃 (〃)	E 3.8 F 4.6 G 0.7	内面に窯道具痕が4か所。高台は内傾し，底面に亀裂が見られる。外面の体部下半露胎。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)淡黄色 (釉) 浅黄色	〃 〃
628	〃 (平碗)	E 1.9 F 4.8 G 0.5	高台の，外面は，U字型の回転篦削り。内面の釉には白斑と細かい貫乳が見られる。	水挽き，横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)明オリーブ灰色 (釉) 浅黄色	〃 SK 216
629	陶器 (皿)	A(11.2) D 2.2 F(5.4) G 0.2	体部は外傾し，中ほどから内反。口縁はやや外反。口唇は丸くおさめる。高台は，回転篦削りによって造り出す。口縁のみ施釉。	水挽き 内面横なで 外面回転篦削り 底部回転糸切り	(胎土)灰色 (釉) オリーブ灰色	〃 SD 25

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
630	陶器 (皿)	A(10.8) D 2.9 F 6.5 G 0.2	体部は外傾し，強く内反して立ち上がる。口縁は外反する。体部外面に稜を持つ。口縁のみ施釉。	水挽き 内面横なで 体部外面下半及び底部回転篦削り。	(胎土)灰色 (釉) 灰オリーブ色	瀬戸 SD 25
631	〃 (〃)	A 10.0 B 4.5 D 2.0	体部は強く外傾し，丸味をもって立ち上がる。口縁は外反する。口縁のみ施釉。全体に黒変。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰色 (釉) 暗オリーブ褐色	〃 〃
632	〃 (〃)	A 10.1 B 4.4 D 1.9	体部は強く外傾し，中ほどで内反する。口縁は丸くおさめる。口縁のみ施釉。内面煤付着。二次焼成。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 灰黄色	〃 SK 278
633	〃 (〃)	A(12.2) B(4.9) D 2.6	体部は強く外傾して立ち上がる。中ほどで内反し，口縁は外反する。全体に薄手。口縁のみ施釉。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 F 2 i 7
634	〃 (〃)	A 9.9 D 2.5 F 4.7 G 0.5	体部は外傾し，下半がなめらかに内反する。高台は削り出され，畳付は4か所が篦で弧状に切り取られる。高台内に「十」の墨書。外面体部下半露胎。	水挽き 横なで 底部回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	瀬戸系美濃白釉小皿 (15C) SD 27
105 — 635	〃 (〃)	B(18.6) E 1.6	体部は強く外傾して立ち上がる。底部はややゆがみがある。	水挽き 横なで	(胎土)灰白色 (釉) 灰白色	瀬戸 SD 4
636	〃 (〃)	E 2.2 F 6.5 G 0.4	器肉はやや肥厚する。内面は3か所に窯道具の痕。釉には貫乳がある。	水挽き 横なで 底部回転糸切り 高台接合	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 SK 216
637	〃 (鉢)	B 9.4 E 1.7	底部はやや肥厚し，体部は薄い。底部はゆがんでいる。内面3か所に窯道具の痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 灰オリーブ色	〃 SD 4
638	〃 (足付鉢)	E 3.9 G 0.9	体部は強く外傾し，直線的に開く。足は3か所に付けられる。内面釉は刷毛塗り。外面露胎。	水挽き 横なで 外面回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 SD 25
639	〃 (おろし皿)	A(15.8) E 3.0	体部は外傾し，下半部は内反する。体部下位に，焼成時の付着物がある。付着物以下は露胎。内面に刻み。	水挽き 横なで	(胎土)にぶい黄色 (釉) 黄灰色	〃 SD 4
640	〃 (瓶子)	B(10.4) E 4.1	胴部は内傾し，やや外反して立ち上がる。底部は平坦で，胴部下端に稜を有する。釉は，一部底部にまで流れている。	横なで 底部接合	(胎土)灰白色 (釉) 灰赤色	〃 SK 125 SD 4
641	〃 (小型壺)	B(5.8) E 7.4	胴部は外傾して立ち上がる。肩部から強く内彎し，頸部に向かってやや外反する。肩部内面は凹凸が著しい。	水挽き 横なで 肩部回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 SD 4
642	〃 (仏花器)	B 7.6 E 7.3	胴部は強く張って球状を呈し，脚は広がる。脚の周囲に粘土を貼り，脚の開きを増す。脚部下半露胎。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 灰オリーブ色	〃 SK 278
643	〃 (〃)	B 6.2 E 7.2	胴部は張り，やや強い稜を有する。基部は強くしぼられている。胴部外面には，唐草状の線彫りが施される。胴部以下一部露胎。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 黒褐色	〃 SK 217 SD 4
644	〃 (〃)	B 6.4 E 3.9	基部はしぼられ，胴部は丸味を以ってふくらむ。裾は広がる。裾下半露胎。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) 黒色	〃 SD 25

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
645	磁器 (台付坏)	A(7.4) B 4.1 D 4.95	基部はしぼられ，中ほどに稜を有する。坏部は半球状を呈する。裾は広がり下半は露胎である。	水挽き 横なで 底部回転篦削り	(胎土)明青灰色 (釉) 明緑灰色	伊万里 (近世) SK 360
646	陶器 (香炉)	A(9.0) B(8.8) D 3.2	底部外縁は，丸味を以って立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部外面に太い凹線が1周する。口縁部のみ施釉。	水挽き 横なで 底部回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	瀬戸 SD 25
647	〃 (〃)	A(12.0) B 9.5 D 6.4	体部はやや外反する。体部上端と下端には，各2本の筋が横走。口縁内側はやや内側へ突き出し，稜をなす。内面及び底部は露胎。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	〃 SK 278 SD 25
648	〃 (燭台)	E 11.8	台から基部へ細くなり，受部は大きく広がる。受部は基部を挽き上げてから，台は基部を回転糸切りしてから，各々接合。	水挽き 横なで 基部回転糸切り 受部・台接合	(胎土)明オリーブ灰色 (釉) 灰オリーブ色	〃 SD 4
106 | 649	〃 (壺)	A 18.8 B 14.2 C 39.2 D 41.1	胴部は内反しながら立ち上がり，肩が強く張る。頸部は外反し，口縁は折り返される。肩に筋と4か所の斜格子スタンプ。	巻き上げ 横なで	青灰色	常滑 鎌倉時代 二次焼成 SD 25
650	〃 (鉢)	A(41.6) B 19.6 D 10.6	体部は外傾し，中ほどが内反する。口縁は強く外反し，ほぼ水平。口唇はつまみ上げられて凸帯状をなす。外面体部下半は露胎。	水挽き 横なで 外面回転篦削り	(胎土)灰白色 (釉) オリーブ灰色	瀬戸 SD 25
107 | 651	〃 (甕)	A(33.8) E 21.0	口縁は折り返し口縁で，外側に薄い粘土板を貼る。肩から胴へ，ゆるいS字を描く。	巻き上げ 横なで	紫灰色	常滑 (15C) 二次焼成 SK 308
652	〃 (〃)	E 21.0	胴部は丸味を有して立ち上がる。下半部に，付着物があり一周する。651と同一個体であろう。	巻き上げ なで 篦なで	青灰色	〃 〃
108 | 653	〃 (〃)	A(22.4) C(31.8) E 23.2	肩の張りは弱く，内傾して頸部に移行する。口縁部は折り返し口縁である。	巻き上げ 横なで	灰赤色	〃 SK 267, 387 SD 4, 25 26, 27
654	〃 (〃)	D(38.4) E 17.5	肩は強く張り，強く内傾して頸部に移行する。口縁は丸味を以って外反する。	巻き上げ 横なで 篦横位なで	灰褐色	〃 鎌倉時代 SK 332 SD 4, 26, 27
655	〃 (鉢)	C(19.0) E 5.2	体部は強く外傾して直線的に開く。断面が磨られており，再利用されたのであろう。	体部下端篦なで 内面横なで	にぶい橙色	〃 SD 4
656	〃 (〃)	C(13.4) E 6.2	体部は直立してから外反し，直線的に開く。	体部下端篦なで 内面横なで	にぶい橙色	〃 〃
109 | 657	〃 (甕)	B 15.8 E 18.2	胴部は外傾し，内反しながら立ち上がる。外面に浅い平行線叩き目。	巻き上げ 叩き	灰褐色	常滑 (15C) SD 4
658	〃 (〃)	B 14.0 E 19.0	胴部は外傾し，ゆるく内反しながら立ち上がる。	巻き上げ 篦なで	褐灰色	〃 SK 387 SD 26
659	〃 (擂鉢)	A(34.4) B 12.2 D 11.8	体部は外傾し，やや外反してから直線的に開く。口縁・口唇は各々突き出している。体部下端は篦削りによって面をとっている。	なで 横なで 篦削り	明赤褐色	〃 内面磨滅 SD 4

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
110 | 660	土師質土器 (擂鉢)	A 30.0 B 13.0 D 11.2	体部は外傾し，直線的に開く。内面の筋は5本が1組になっている。	なで 口縁部横なで	明赤褐色	磨滅が顕著 SK 238
661	陶器 (〃)	A(31.4) B(12.4) D 8.3	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。口縁部は外方と上方へ突き出している。	なで 口縁部横なで	にぶい橙色	口縁部磨滅 SK 293
662	土師質土器 (〃)	B(13.4) E 7.0	体部は外傾し，下半部がやや内反する。筋は7本1組。	なで	明赤褐色	SK 238
663	陶器 (〃)	B(16.4) E 5.9	体部は外傾し，直線的に開く。底部周囲はやや突き出す。体部下半は，篦削りによって面をとっている。	なで 体部下半篦削り	褐灰色	常滑 SD 4
664	〃 (〃)	B(10.8) E 5.3	体部は外傾し，やや内反気味に立ち上がる。外面は横に段がつく。	横なで	明褐灰色	〃 〃
665	土師質土器 (〃)	B(11.2) E 5.4	体部は外傾し，やや内反して開く。体部下半に稜が認められる。筋は4本で1組。		橙色	斑点状剥離 〃
666	陶器 (〃)	B(12.2) E 5.2	体部は外傾し，直線的に開く。体部下半は，篦削りによって面とりをしている。	なで 篦削り	にぶい赤褐色	常滑 〃
667	土師質土器 (〃)	B(14.2) E 2.6	体部は外傾して開く。	なで	橙色	底部周縁磨減 SD 7
668	〃 (〃)	B(13.6) E 3.9	体部は外傾し，直線的に開く。筋は1本ずつ彫られている。	なで	橙色	SD 8
111 | 669	〃 (〃)	B(11.2) E 8.0	体部は外傾し，直線的に開く。筋は5本1組。	なで	明赤褐色	SD 25
670	〃 (〃)	B(8.6) E 5.2	体部は外傾し，内反して開く。筋は4本1組。	なで	褐色	SD 29
671	〃 (〃)	B(11.6) E 8.6	体部は外傾し，直線的に開く。中ほどで内反する。底部は薄く，周囲はやや突き出す。筋は5本1組。	なで	にぶい赤褐色	SD 27
672	〃 (蓋)	A 20.5 D 3.6	口縁は階段状に屈曲し，つまみよりも高くなる。	水挽き 横なで	明赤褐色	C 6 e 3
673	〃 (不明)	E 7.5	非常に厚手で，頸部が強くくびれる。頸部に孔が穿たれる。	横なで 回転篦削り	灰黄褐色	SD 4
674	〃 (土釜)	A 15.0 E 11.4	胴部は球状を呈したと思われる。鍔下面に煤が付着。肩部に把手の痕跡がある。口縁部は直立し，口唇部は平坦である。	横なで 篦なで 鍔・把手接合	橙色	SD 26, 29

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
675	土師質土器 (土釜)	A(16.6) E 13.3	口縁は直立し，口唇は平坦。胴部は肩が張る。最大径の部分に把手を接合し，その部分以下が黒変。	なで 横なで 把手接合	赤褐色	SD 8
112 — 676	内耳土器	A(32.2) E 17.5 ひなき	体部は内反し，頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹帯が見られる。耳は3か所。外面鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SK 267
677	〃	A 36.5 E 16.8	体部は外傾し，直線的に開く。頸部はやや外反する。頸部内面には，幅広の浅い凹帯。耳は3か所。外面鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒色	SD 4
678	〃	A 36.4 B 16.8 D 17.6	体部は外傾し，やや内反する。頸部内側に浅い凹帯。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒色	SD 24
113 — 679	〃	A 35.0 B 17.3 D 20.1	体部は外傾し，内反する。頸部はやや外反する。頸部内側に浅い凹帯が周回し，箆による記号が見られる。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SD 25
680	〃	A 33.0 B 17.2 D 16.8	体部は外傾し，やや内反する。頸部内側には幅広の浅い凹帯が周回し，箆による記号が見られる。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SD 24
681	〃	A 35.0 E 17.1	体部は外傾し，やや内反する。頸部は内側の凹帯により，外面がふくらむ。箆記号あり。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SD 25
114 — 682	〃	A 34.0 E 16.0	体部は外傾し，内反してから直線的に開く。頸部は外反し，内側に幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	〃
683	〃	A 34.8 B(15.6) D 15.5	体部は外傾し，内反する。体部下半にわずかにふくらみを有する。頸部は外反し，内側に幅広の浅い凹帯が周回。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒色	〃
684	〃	A 31.8 B(16.2) D 18.1	体部は外傾し，わずかに内反して開く。頸部は外反し，内側に幅広の浅い凹帯が周回する。未使用か。	なで 横なで 耳接合	明赤褐色	〃
115 — 685	〃	A 33.2 B(14.4) D 17.4	体部は外傾し，わずかに内反する。頸部は外反し，内側には幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着	なで 横なで 耳接合	黒褐色	〃
686	〃	A(33.4) B(15.2) D 15.8	体部は外傾し，内反する。頸部はわずかに外反し，内側に幅広の浅い凹帯が周回する。耳は3か所。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒色	〃
687	〃	A(31.8) B(19.2) D 13.4	体部は薄く，外傾して内反する。頸部は直線的で内側の浅い凹帯は他に比べてやや狭い。器高は低い。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SK 321
116 — 688	〃	A 33.6 B(18.6) D 13.6	体部は直立してから外傾して開く。頸部は直線的。器高は低い。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SD 25
689	〃	A 37.0 E 14.3	体部は外傾し，直線的に開く。頸部はやや外反し，口縁で再び外反する。頸部内側の浅い凹帯に箆記号。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	〃

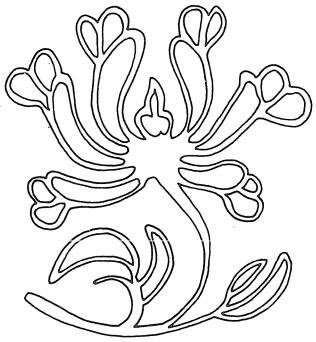
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
690	内耳土器	A 36.8 B(18.0) D 13.0	体部は強く外傾し，やや内反気味に開く。頸部は外反し，内側の凹帯も他に比べて浅い。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SD 25
691	〃	A 36.7 B(17.8) D 13.3	体部は強く外傾し，やや内反気味に開く。頸部は直線的で，内側の凹帯の幅は他に比べて狭い。外面に鍋墨付着。	なで 横なで 耳接合	黒褐色	SK 301 SD 27
117 ｜ 692	土師質土器 (ⅢA)	A 16.0 B 10.6 D 3.2	体部は強く外傾し，内反して立ち上がる。底部内面に仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SD 4
693	〃 (〃)	A(9.4) B 5.8 D 3.4	体部は外傾する。強いロクロ痕を残す。底部内面に仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	褐色	SD 25
694	〃 (〃)	A(14.0) B(7.0) D 4.0	体部は外傾し，やや内反する。内外面に強いロクロ痕を残す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	〃
695	〃 (〃)	A 12.5 B 8.0 D 2.9	体部は外傾し，内反する。外面に強いロクロ痕を残す。底部内面に仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	B 5 f 5
696	〃 (〃)	A(12.6) B(7.8) D 2.8	体部は外反して立ち上がり，直線的に広がる。底部内面に仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい赤褐色	SD 25
697	〃 (〃)	A 10.5 B 5.9 D 3.4	体部は外傾し，内反して丸味を有する。内面底部周縁は凹む。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	灰褐色	SK 293
698	〃 (〃)	A 11.0 B 5.6 D 3.2	体部は外傾し，内反する。内外面とも，横なでによって稜を消す。内面仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	〃
699	〃 (〃)	A(11.8) B 5.6 D 3.0	体部は外傾し，内反する。口縁はやや外反する。内面は仕上げなで。底部は板の圧痕。	水挽き 横なで	にぶい橙色	SK 308
700	〃 (〃)	A(11.1) B 4.6 D 2.8	体部は薄く，強く外傾する。内外面ともロクロ痕が見られ，斑点状剥離が明瞭。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SK 216
701	〃 (〃)	A(11.0) B(6.0) D 3.1	体部は外傾し，中ほどで内反する。底部には板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SK 298
702	〃 (〃)	A 9.7 B 5.2 D 3.2	体部は外傾し，直線的に開く。やや厚手。内面仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	赤褐色	SK 379
703	〃 (〃)	A(10.1) B 5.4 D 2.5	体部は外傾して開き，強いロクロ痕を残す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい褐色	SK 387
704	〃 (〃)	B 5.0 E 3.8	体部は外傾し，強いロクロ痕を有して立ち上がっている。内面仕上げなで。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	明赤褐色	SD 24

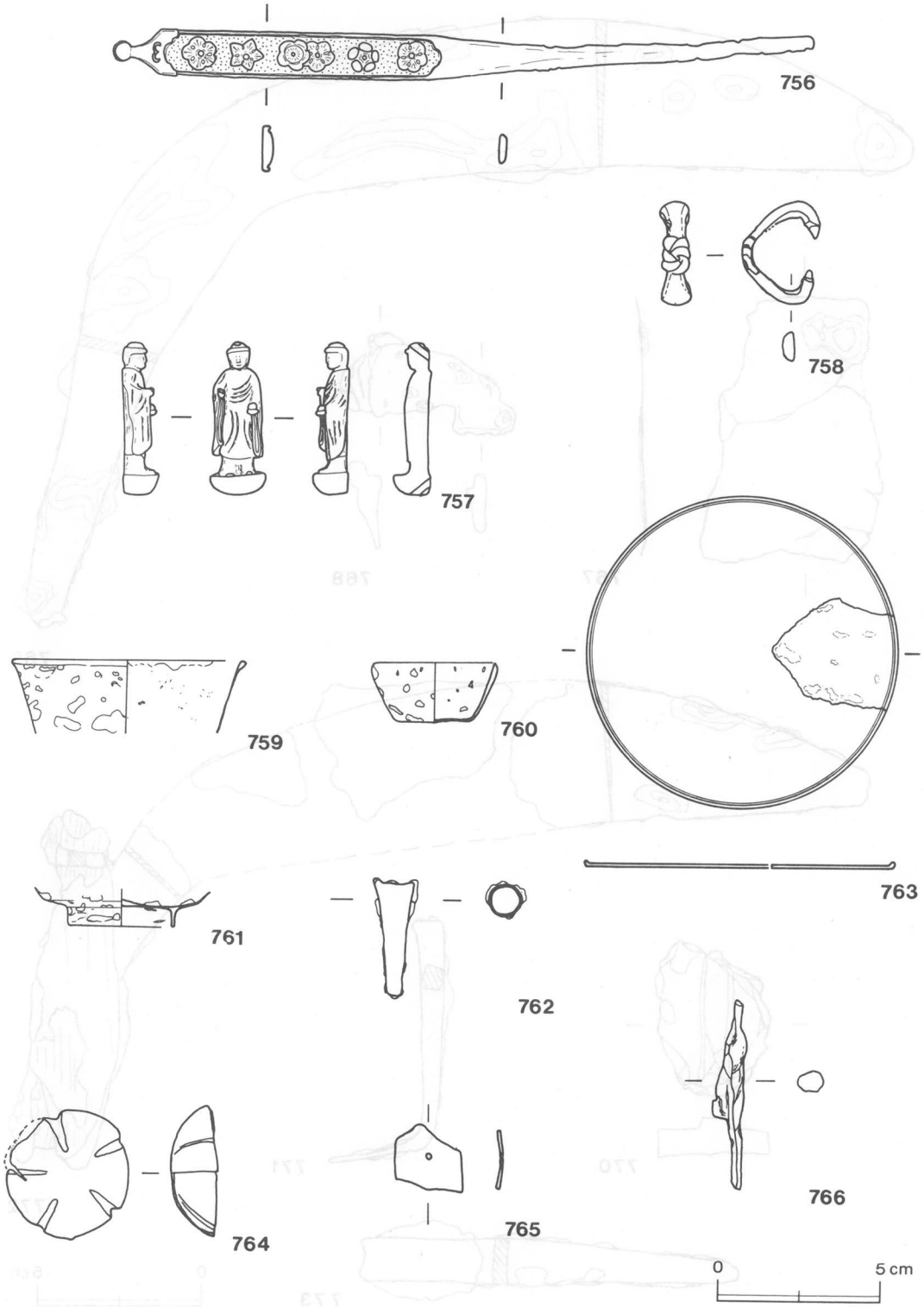
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
705	土師質土器 (皿A)	A 9.3 B 4.6 D 3.3	体部は外傾し，器厚を減じながら直線的に開く。強いロクロ痕が見られる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SD 4
706	〃 (〃)	A 9.4 B 6.8 D 2.1	体部は内反して立ち上がり，口縁は外反する。器高は低い。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	〃
707	〃 (〃)	A(8.2) B(4.6) D 1.8	体部は強く外傾し，直線的に開く。底部は板の圧痕により，ゆがむ。口縁部磨滅。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	明赤褐色	SK 41
708	〃 (〃)	A(11.2) B(4.6) D 3.0	体部は外傾し，内反する。底部はやや突き出す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SD 8
118 ｜ 709	〃 (〃)	A(11.0) B(7.4) D 2.6	体部は外傾し，やや外反気味に開く。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい赤褐色	SD 25
710	〃 (〃)	A(8.6) B(4.4) D 3.1	体部は外傾し，直線的に開く。底部内面は中央と周囲が凹む。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SD 4
711	〃 (〃)	A(10.4) B(4.8) D 3.2	体部は外傾し，直線的に開く。内外面とも，強いロクロ痕が見られる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SD 25
712	〃 (〃)	A 8.2 B 5.6 D 2.2	体部は外傾し，上半で内反する。体部下端に，箆による筋が2周する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SD 4
713	〃 (〃)	A 7.7 B 5.6 D 1.8	体部は外傾し，直線的に開く。やや厚手で器高は低い。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SD 8
714	〃 (〃)	A 9.0 B 6.0 D 2.1	体部は強く外傾して開く。底部はやや肥厚する。器高は低い。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SD 29
715	〃 (〃)	A 9.0 B 6.2 D 2.5	体部は外傾し，急激に厚みを減じながら立ち上がる。底部は肥厚し，器高は低い。底部周囲に指頭痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	淡橙色	SD 4
716	〃 (〃)	A 7.8 B 4.0 D 2.3	体部は外傾して直線的に開き，口縁は外反する。底部横が凹み，ゆがみを生ずる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	灰褐色	SD 25
717	〃 (〃)	A 7.4 B 4.4 D 2.5	体部は外傾し，やや内反する。内面底部周囲はやや凹む。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	B 5 i 6
718	〃 (〃)	A(5.6) B 3.8 D 1.3	全体に小さく，薄手。体部は外傾し，内面底部周囲は凹む。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	F 2 f 1
719	〃 (〃)	A 7.3 B 4.4 D 2.2	体部は外傾し，口縁はやや内反する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 32

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
720	土師質土器 (皿A)	A(7.8) B(5.4) D 2.2	全体に厚手。体部は外傾し，内面に強いロクロ痕を残す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 105
721	〃 (〃)	A 6.6 B 3.8 D 2.0	体部は薄く，内反する。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SD 24
722	〃 (〃)	A 7.6 B 5.0 D 2.1	全体に厚手。斑点状の剥離があり，底部周縁は磨滅する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SK 22
723	〃 (〃)	A(6.4) B 3.6 D 2.2	体部は外傾し，強いロクロ痕を残す。口縁は外反する。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 107
724	〃 (〃)	A(7.8) B 4.0 D 2.4	全体に厚手。底部中央がやや突き出す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	灰褐色	SD 25
725	〃 (〃)	A 7.2 B 4.8 D 1.8	体部は強く外傾し，なめらかに開く。内面に赤色顔料付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 298
726	〃 (〃)	A 7.0 B 4.8 D 2.0	体部は外傾し，ややゆがみがある。口唇部にタール状の煤付着。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい黄橙色	SK 300
727	〃 (〃)	A 7.3 B 5.2 D 2.1	体部は外傾し，内反して丸味を有する。底部周囲はやや突き出す。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SD 4
728	〃 (〃)	A 7.4 B 3.8 D 2.6	体部は外傾し，ややゆがむ。内面底部周囲はやや凹む。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	〃
729	〃 (〃)	A 7.4 B 3.6 D 1.9	体部は強く外傾し，内反する。やや薄手。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SD 26
730	〃 (〃)	A 6.9 B 3.5 D 2.5	体部は外傾し，強いロクロ痕を残す。底部は薄い。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SD 4
731	〃 (〃)	A 9.3 B 4.7 D 3.5	体部は外傾し内反して丸味を有する。底部に板の圧痕。体部下端にタール状の煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	〃
732	〃 (〃)	A 7.7 B 4.0 D 2.6	体部は外傾し，直線的に開く。底部に板の圧痕。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	〃
733	〃 (〃)	A 6.8 B 3.6 D 2.3	体部は外傾し，強く内反する。底部は磨滅が著しい。口縁に煤付着。	水挽き 横なで	にぶい橙色	〃
734	〃 (〃)	A 7.0 B 3.8 D 2.4	体部は外傾し，ゆがむ。底部は磨滅が著しい。口縁に煤付着。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SD 24

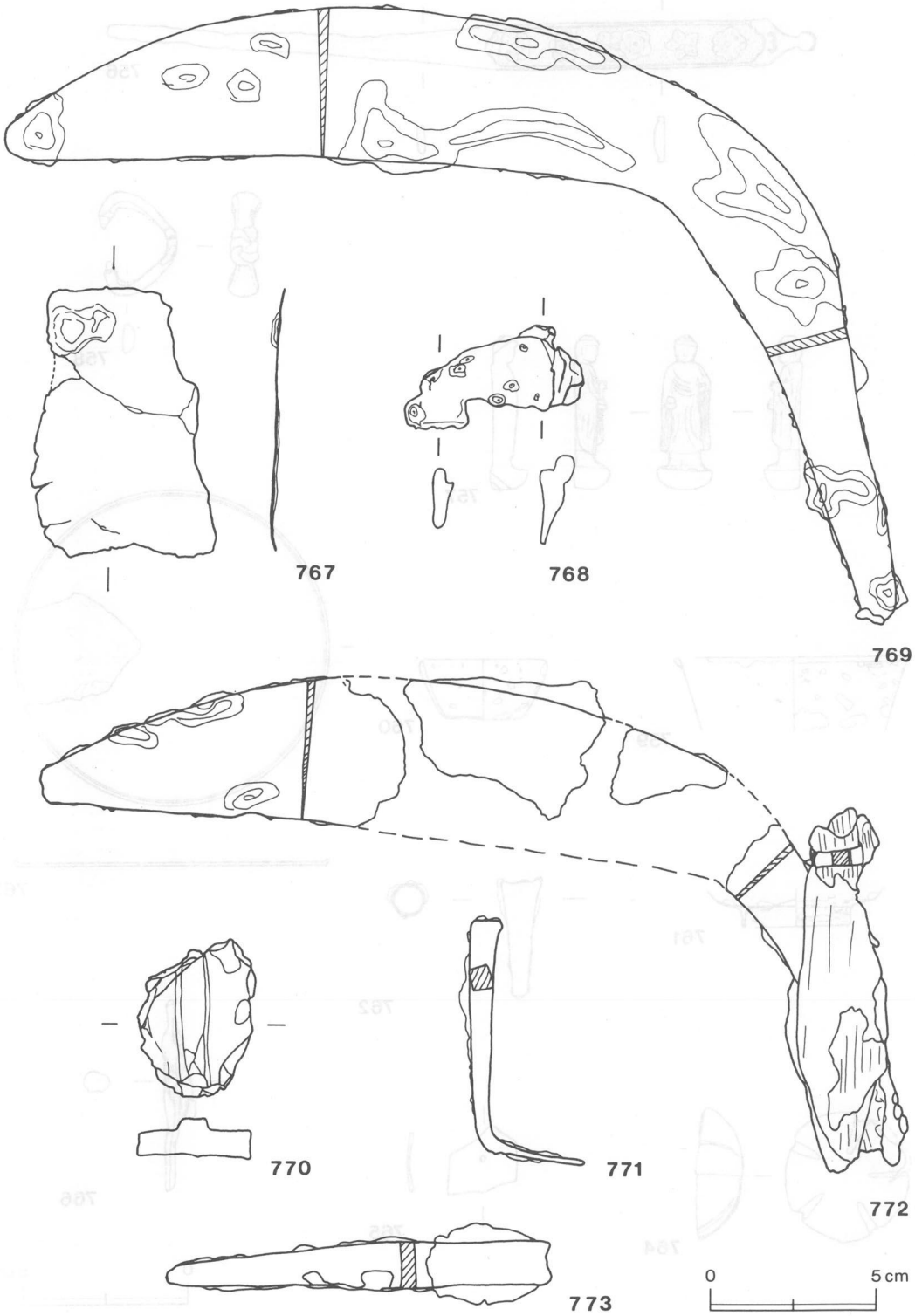
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
119 — 735	土師質土器 (皿A)	B 5.8 E 1.6	体部は外傾し，強く内反して立ち上がる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	橙色	SK 216
736	〃 (〃)	B 6.1 E 1.2	体部は強く外傾して開く。底部周囲は，やや突き出す。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	黒褐色	SD 25
737	〃 (〃)	B(5.0) E 1.8	体部は外傾し，内反する。外面に煤付着。底部に板の圧痕。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい赤褐色	SK 216
738	〃 (〃)	B(4.4) E 1.5	体部は外傾し，強いロクロ痕を残す。底部に板の圧痕，斑点状剥離が見られる。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	〃
739	〃 (〃)	B 4.4 E 1.2	体部は強く外傾する。底部はやや突き出す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい赤褐色	SD 27
740	〃 (〃)	B(6.2) E 1.5	体部は内反し，丸味を有する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	浅黄橙色	SD 8
741	〃 (〃)	B 6.8 E 1.5	底部は肥厚し，体部は薄い。外面に強いロクロ痕を残す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	灰褐色	底部磨滅 SD 16
742	〃 (〃)	B 6.4 E 1.0	体部は強く外傾する。底部はやや突き出す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SD 16
743	〃 (〃)	B(7.4) E 1.4	体部は強く外傾する。外面に強いロクロ痕を残す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 216
744	〃 (〃)	B 5.0 E 1.6	体部は強く外傾する。底部は円筒状に突き出し，内面は剥離。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい褐色	SD 25
745	〃 (〃)	B(7.2) E 1.5	体部は強く外傾し，底部はやや突き出す。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	にぶい橙色	SK 44
746	〃 (〃)	E 2.0	体部は内反し，丸味を有する。	水挽き 横なで 底部回転糸切り	極暗赤褐色	SK 36
747	〃 (皿B)	A 12.0 B 10.3 D 3.2	全体に厚手で，底部はややいびつ。	横なで	明赤褐色	SD 4
748	〃 (〃)	A 12.0 B 10.2 D 3.1	底部は丸味を有する。全体に薄手。	横なで	にぶい橙色	〃
749	〃 (〃)	A 7.5 B 6.8 D 1.9	底部は中央が平坦で，口縁が内反する。	横なで	橙色	〃

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
750	土師質土器 (皿B)	A(11.2) B(10.0) D 2.6	底部から口縁へ，丸味を以って内反する。	横なで	明赤褐色	SD 29
751	〃 (〃)	A(10.6) B(8.2) D 2.8	底部は中央が平坦で，口縁まで丸味を以って内反する。	横なで	にぶい橙色	SD 16
752	〃 (〃)	A 7.8 B 6.8 D 1.7	全体に薄手で，底部は中ほどに弱い稜を有する。	横なで	赤褐色	SD 4
753	〃 (〃)	A 8.0 B 6.4 D 2.0	やや厚手。底部は中ほどに弱い稜を有する。底部外周は，横なでによりシャープな稜をなす。	横なで	赤橙色	〃
754	〃 (〃)	A 7.8 B 6.4 D 1.8	全体に薄手で，底部は中ほどに弱い稜を有する。	横なで	にぶい橙色	〃
755	〃 (〃)	A 7.8 B 6.8 D 1.6	薄手。底部の中ほどに弱い稜を有し，口縁は内反する。	横なで	赤褐色	〃

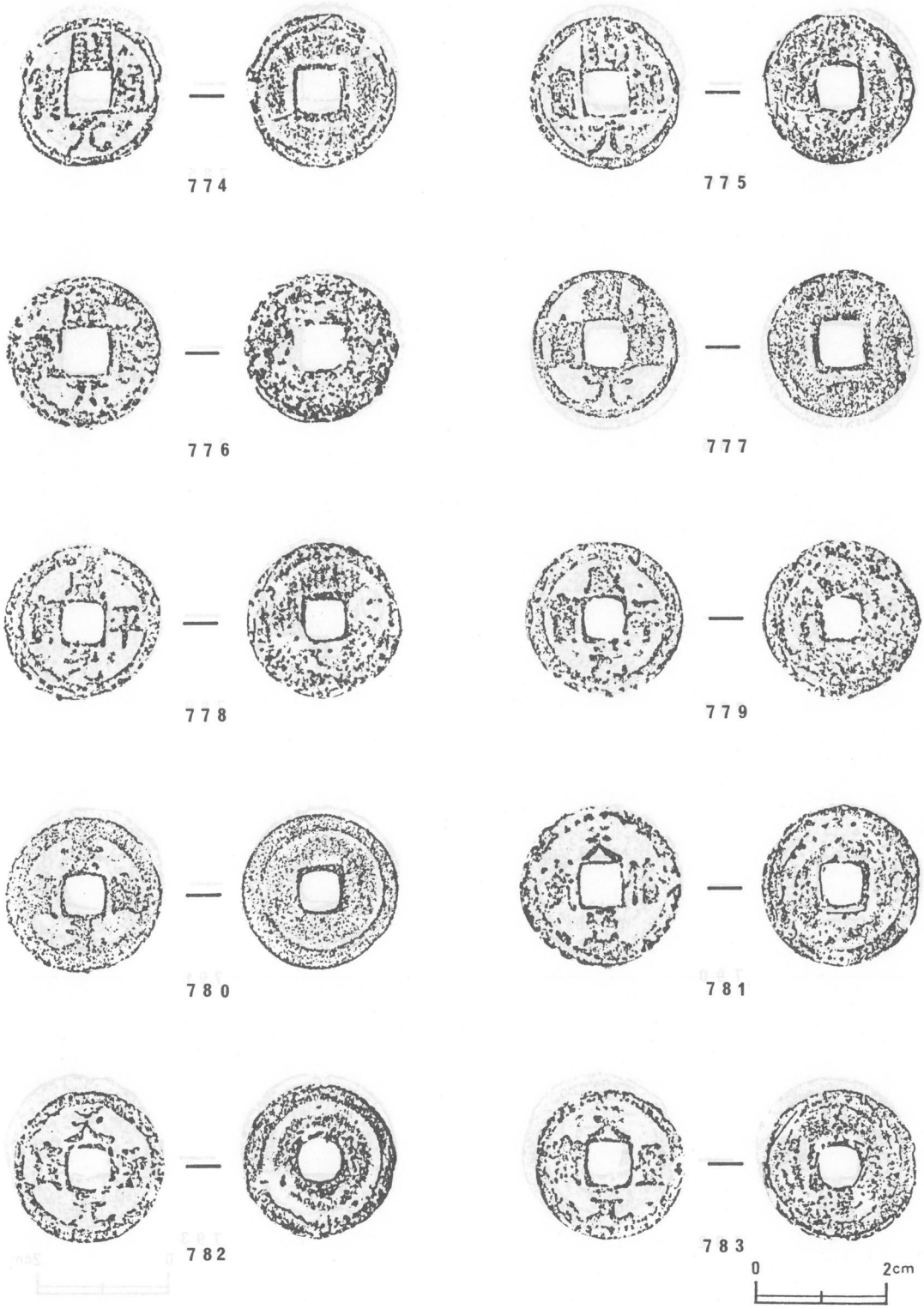




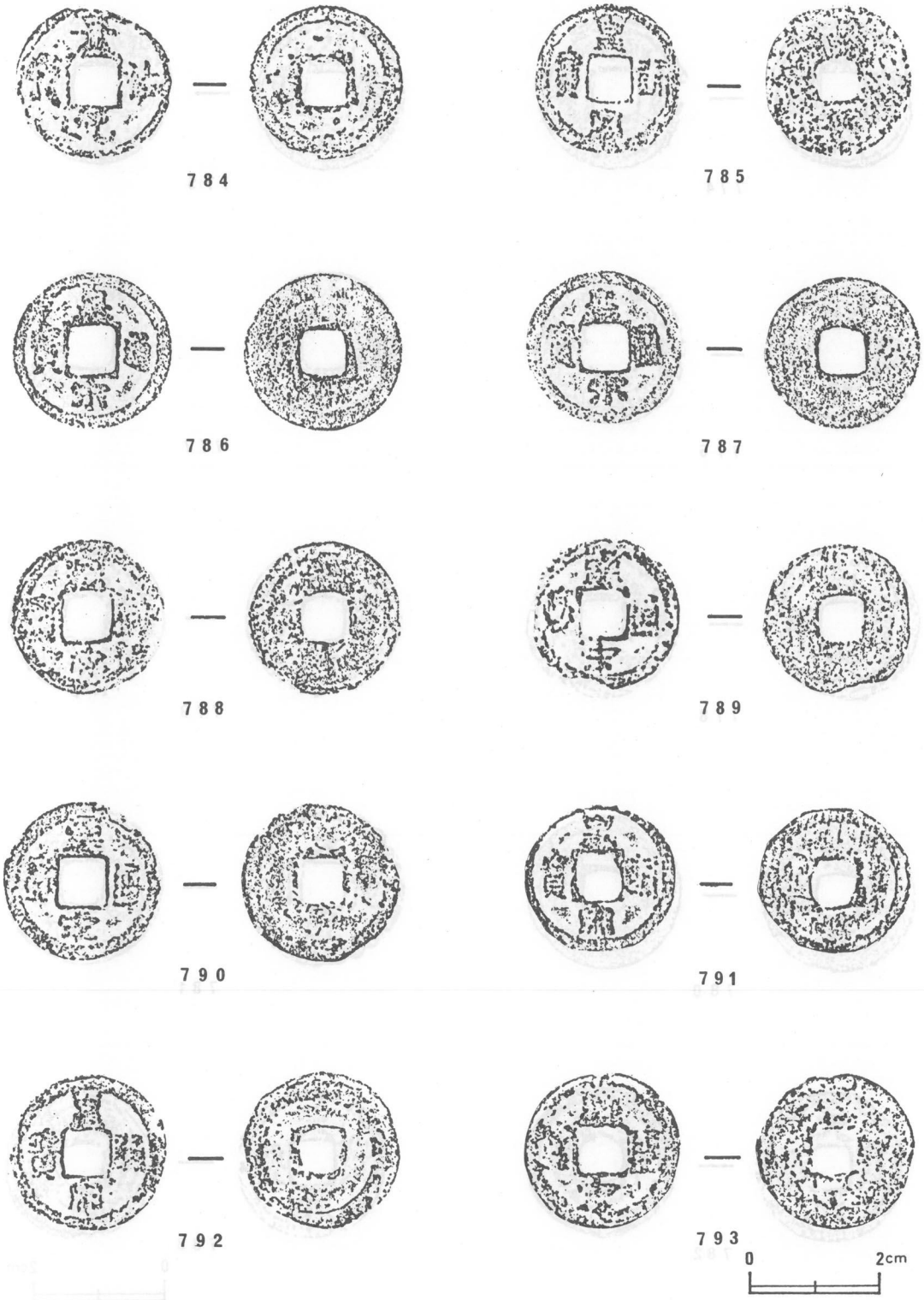
第120図　金属製品実測図（1）



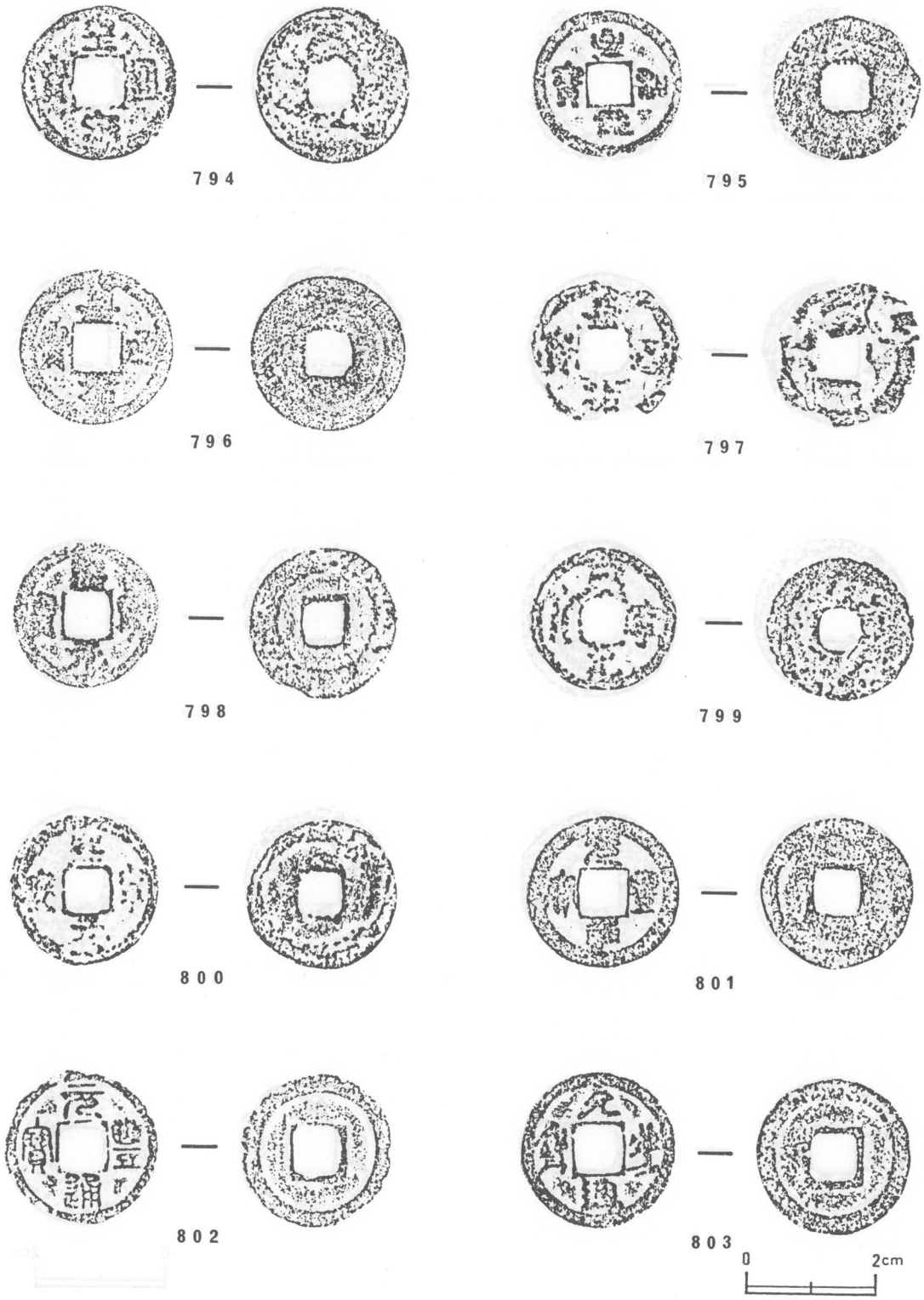
第121図　金属製品実測図 (2)



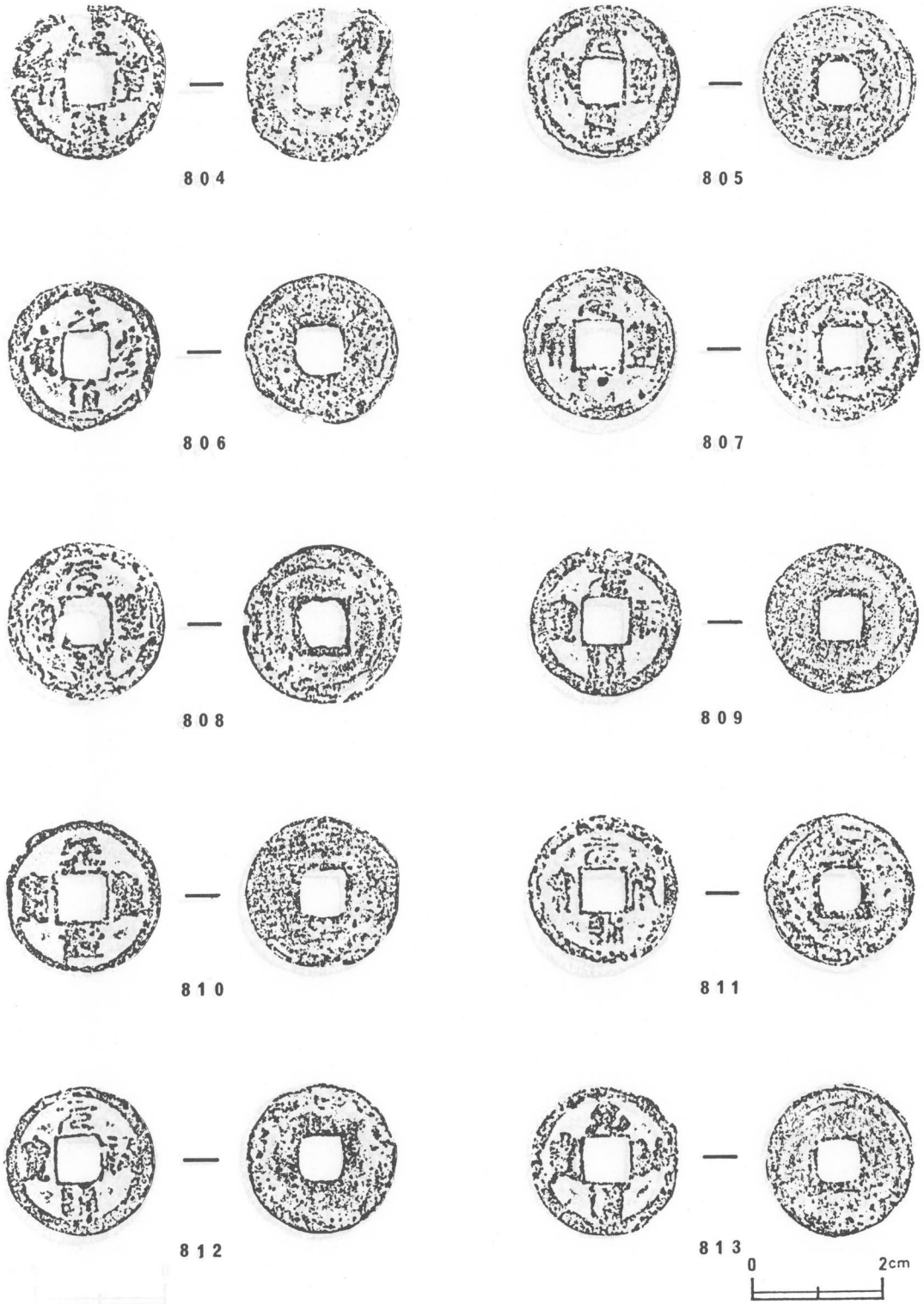
第122図　貨幣拓影図 (1)



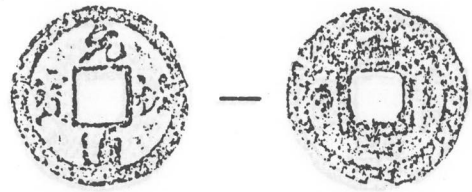
第123図　貨幣拓影図 (2)



第124図　貨幣拓影図 (3)

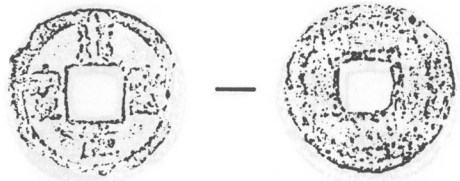


第125図　貨幣拓影図 (4)

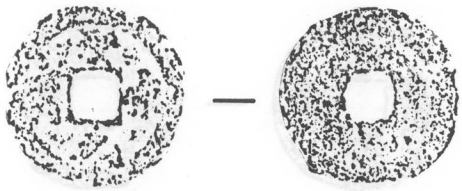


814

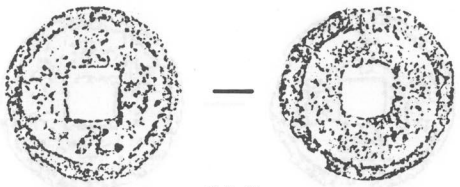
815



816

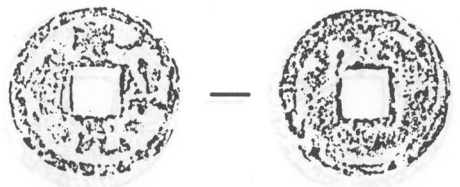


817

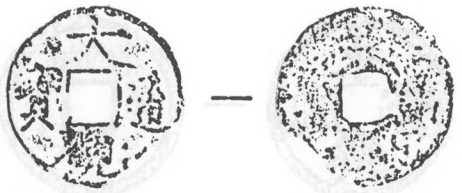


818

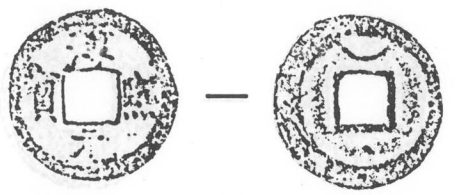
819



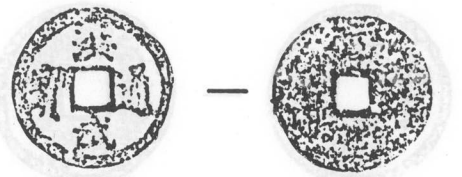
820



821



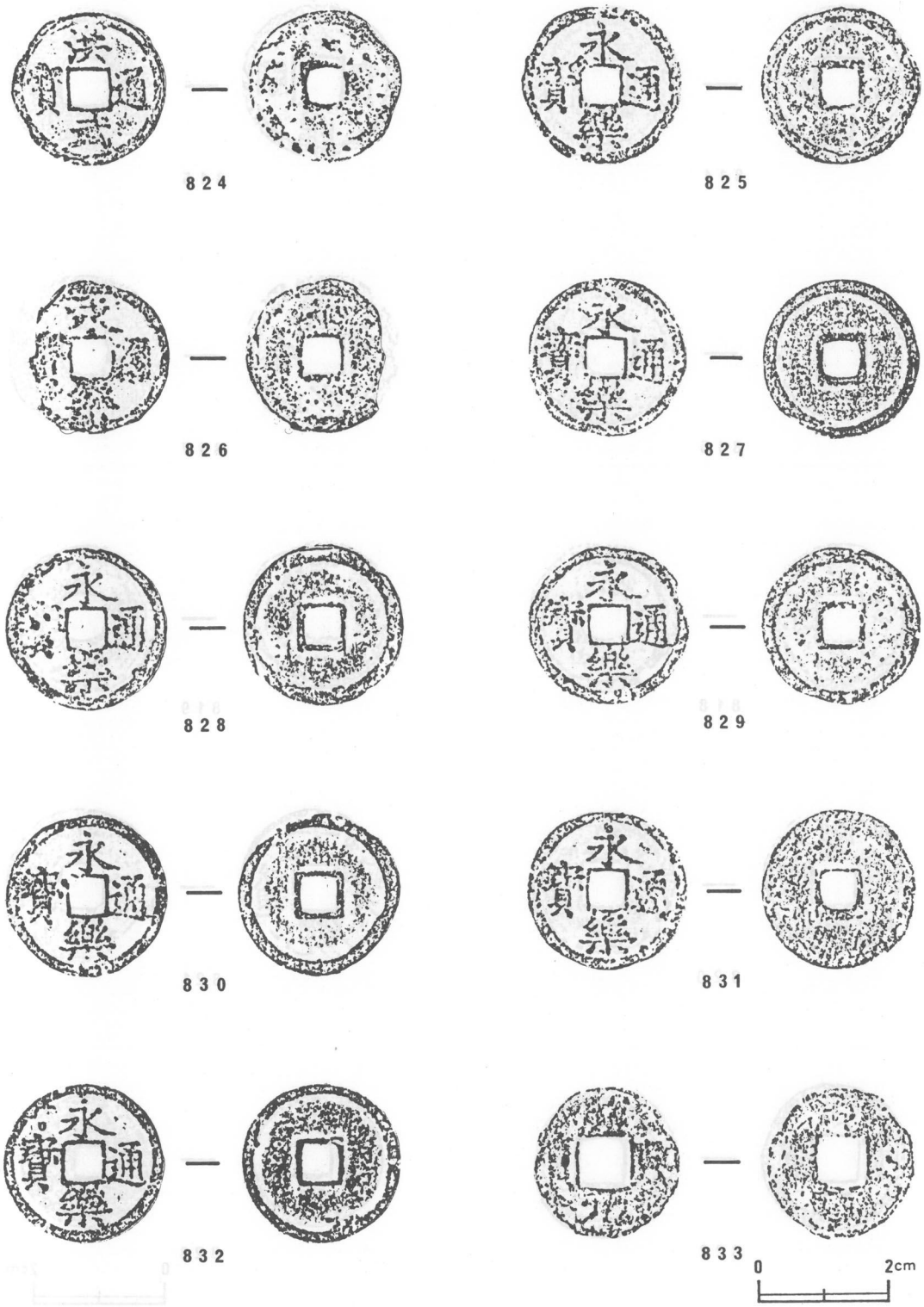
822



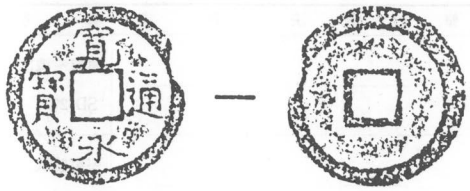
823

0 2cm

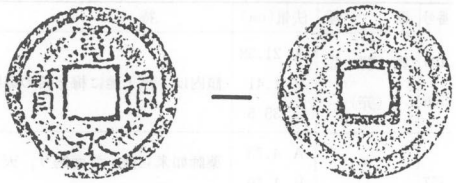
第126図　貨幣拓影図 (5)



第127図　貨幣拓影図 (6)

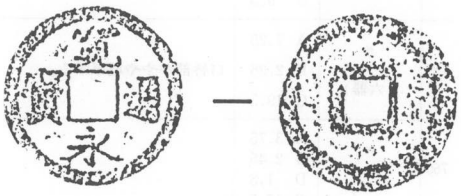


834

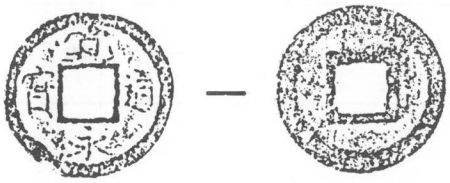


835

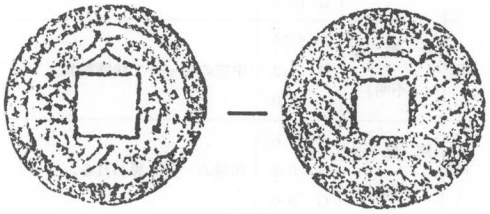
836



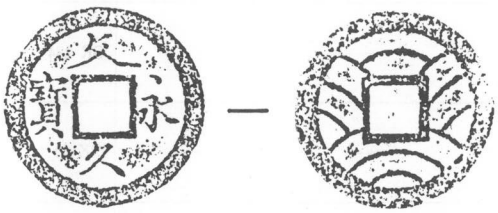
837



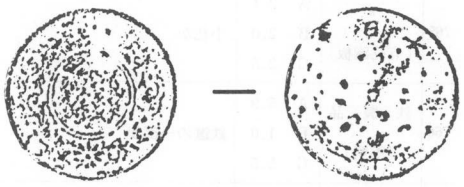
838



839



840



841

0 2cm

第128図　貨幣拓影図 (7)

表24　金属製品解説表

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
120 — 756	銅製品 (笄)	A 21.58 B 1.41 G 35.5	額内は，魚子地に梅と桜の高彫り。	――	――	室町～戦国 SD 27
757	〃 (仏像)	A 4.73 B 1.70 G 27.0	薬師如来立像。背面削り。天衣は，タガネによる線彫り。頭部と台座に孔。	――	――	室町時代 SK 330
758	〃 (猿手)	A 3.2 B 0.9 G 9.5	中央は，紐の結節をあしらう。	――	――	SD 25
759	〃 (六器)	A 7.25 E 2.25 G 19.5	口唇部がやや肥厚する。	――	――	SK 238
760	〃 (〃)	A 3.75 B 2.45 D 1.8 G 17.5		――	――	〃
761	〃 (〃)	E 1.2 F 3.3 G 16.5	759と同一個体。	――	――	〃
762	鉄製品 (不明)	A 3.55 B 1.2 G 5.0	中空のキャップ状鉄製品。	――	――	SD 4
763	銅製品 (和鏡)	A(9.6) B 0.2 G 9.0	和鏡の一部と思われる。	――	――	〃
764	〃 (紅入れ)	A 4.05 D 1.4 G 6.5	5弁の花を型どっている。	――	――	SK 336
765	〃 (有孔銅板)	A 2.1 B 2.0 G 2.5	小札か	――	――	SK 284
766	鉄製品 (不明)	A 5.9 B 1.0 G 5.5	鉄鏃の一部か	――	――	SK 60
121 — 767	〃 (板状製品)	A 8.15 B 5.55 G 19.5		――	――	SD 28
768	〃 (不明)	A 5.4 B 3.0 G 21.0		――	――	SD 29
769	〃 (鎌)	A 30.6 G 135.0	中茎部から刃部へのカーブは，ゆるやか。	――	――	SD 28
770	〃 (不明)	A 4.75 B 3.55 G 51.5	中央に凸帯を有する。	――	――	SD 26

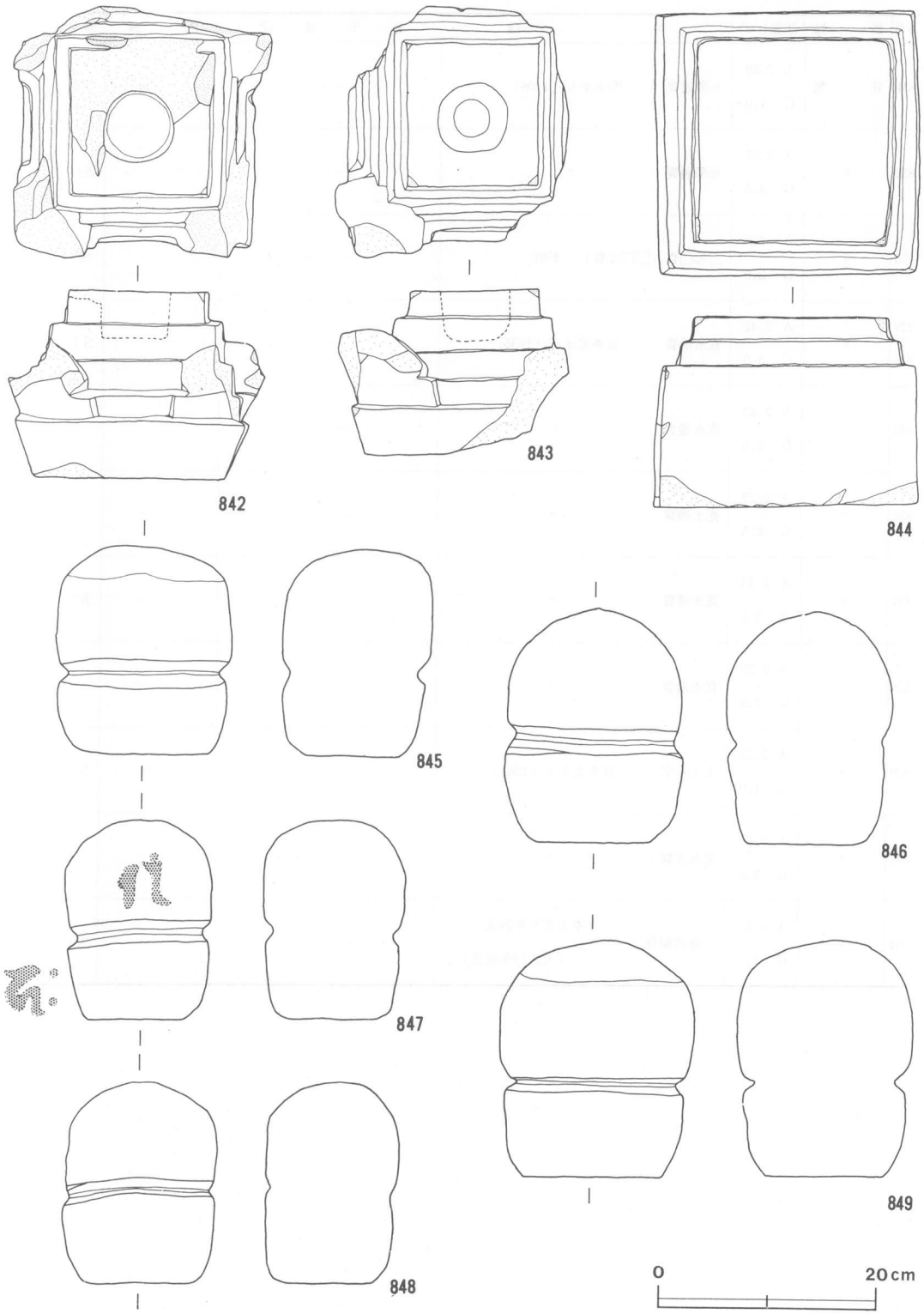
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
771	鉄製品 (釘)	A 7.4 G 13.5	断面四角形の和釘。先端が折れ曲る。	――	――	SK 273
772	〃 (鎌)	A(27.6) G155.5	中茎部に木製の柄と口金が付いている。 柄には，藤状の紐が巻かれている。	――	――	SK 384
773	〃 (不明)	A 11.6 B 4.5 G 15.0	鋸の中茎か	――	――	SK 278
122 ― 774	貨幣	A 2.4 G 2.5	開元通寶　唐武徳4（621）	――	――	SD 28Y
775	〃	A 2.35 G 3.5	開元通寶　〃	――	――	磨滅 〃
776	〃	A 2.41 G 3.5	開元通寶　〃	――	――	〃 SD 28
777	〃	A 2.34 G 2.5	乾元重寶　唐乾元2（759）（鋳印）	――	――	SK 343
778	〃	A 2.44 G 3.0	咸平元寶　北宋咸平元（998）	――	――	SD 28
779	〃	A 2.45 G 3.5	咸平元寶　〃	――	――	〃
780	〃	A 2.45 G 4.0	景德元寶　北宋景徳元（1004）	――	――	SK 321
781	〃	A 2.65 G 4.0	天禧通寶　北宋天禧年間(1017～1021)	――	――	SD 28
782	〃	A 2.37 G 4.0	天聖元寶　北宋天聖元（1023）	――	――	〃
783	〃	A 2.37 G 3.5	天聖元寶　〃	――	――	〃
123 ― 784	〃	A 2.44 G 3.5	景祐元寶　北宋景祐元（1034）	――	――	〃
785	〃	A 2.36 G 3.0	皇宋通寶　北宋宝元2（1039）	――	――	SK 305

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
786	貨幣	A 2.5 G 4.0	圜宋通寶　北宋宝元２（1039）	――	――	磨滅 SK 321
787	〃	A 2.45 G 2.5	圜宋通寶　〃	――	――	〃 〃
788	〃	A 2.44 G 2.0	皇宋通寶　〃	――	――	SD 28
789	〃	A 2.33 G 2.5	皇宋通寶　〃	――	――	〃
790	〃	A 2.49 G 3.5	皇宋通寶　〃	――	――	〃
791	〃	A 2.485 G 2.5	皇宋通寶　〃	――	――	〃
792	〃	A 2.47 G 3.5	皇宋通寶　〃	――	――	〃
793	〃	A 2.47 G 4.0	圜宋通寶　〃	――	――	〃
124 ｜ 794	〃	A 2.44 G 3.5	皇宋通寶　〃	――	――	〃
795	〃	A 2.37 G 2.0	至和元寶　北宋至和元（1054）	――	――	SK 306
796	〃	A 2.43 G 4.0	嘉祐通寶　北宋嘉祐元（1056）	――	――	SK 321
797	〃	A ―― G 1.5	圜祐通寶　〃	――	――	SD 28
798	〃	A 2.32 G 2.5	熙寧元寶　北宋熙寧元（1068）	――	――	SK 216
799	〃	A 2.29 G 3.5	熙寧元寶　〃	――	――	SD 28
800	〃	A 2.37 G 4.0	熙寧元寶　〃	――	――	〃

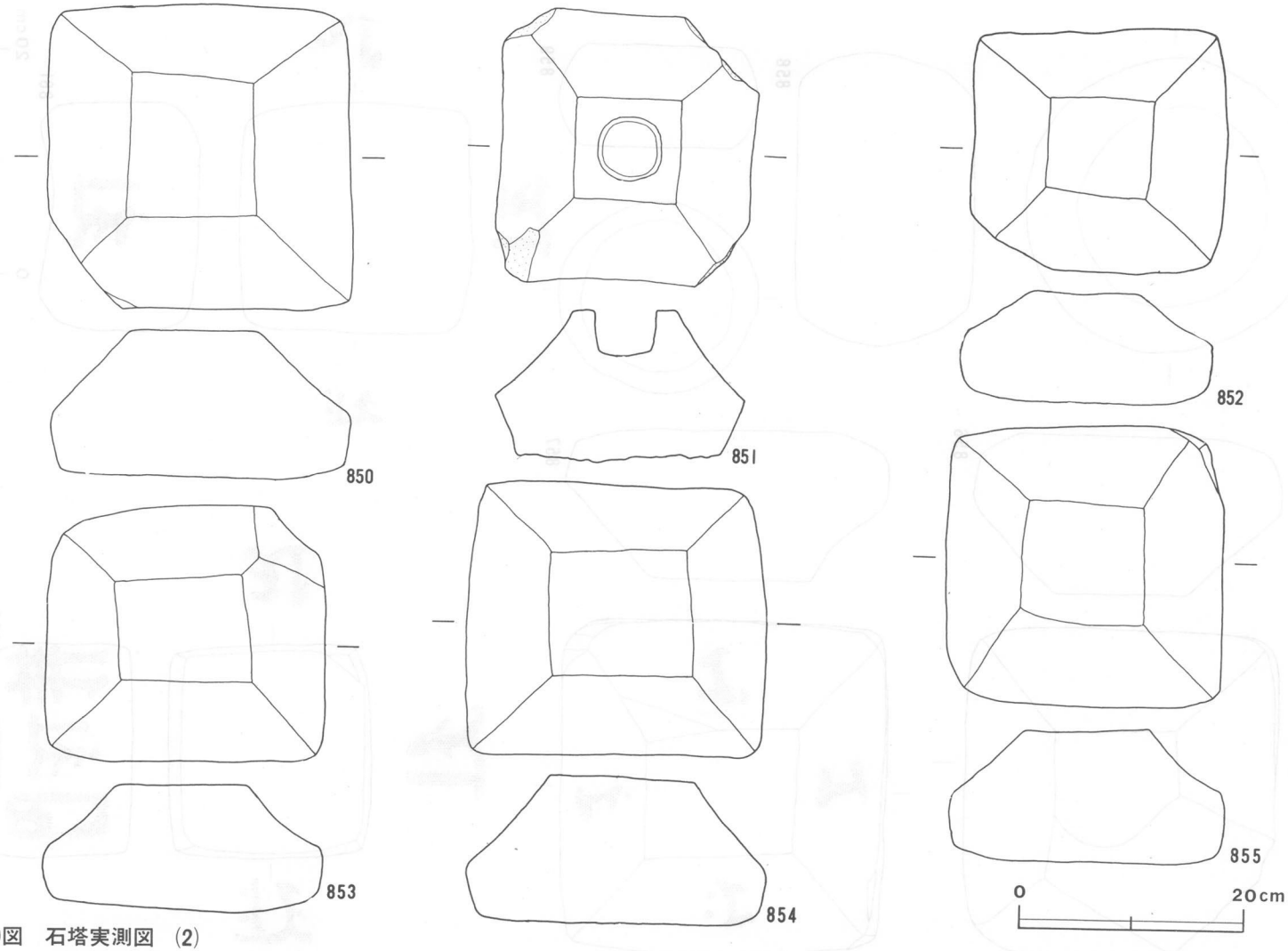
番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
801	貨幣	A 2.49 G 3.0	元豊通寶　北宋元豊元（1078）	――	――	SK 280
802	〃	A 2.41 G 2.0	元豊通寶　〃	――	――	SD 4
803	〃	A 2.47 G 2.5	元豊通寶　〃	――	――	〃
126 ｜ 804	〃	A 2.47 G 2.5	元豊通寶　〃	――	――	〃
805	〃	A 2.45 G 4.0	元豊通寶　〃	――	――	SD 28
806	〃	A 2.4 G 3.0	元豊通寶　〃	――	――	〃
807	〃	A 2.42 G 4.0	元豊通寶　〃	――	――	〃
808	〃	A 2.49 G 4.0	元豊通寶　〃	――	――	〃
809	〃	A 2.49 G 4.0	元祐通寶　北宋元祐元（1086）	――	――	SD 25
810	〃	A 2.4 G 3.0	元圏通寶　〃	――	――	SD 28
811	〃	A 2.36 G 4.0	元祐通寶　〃	――	――	〃
812	〃	A 2.35 G 3.5	元祐通寶　〃	――	――	〃
813	〃	A 2.4 G 3.5	元圏通寶　〃	――	――	〃
127 ｜ 814	〃	A 2.43 G 3.5	元祐通寶　〃	――	――	C 7 f 3
815	〃	A 2.44 G 3.5	元祐通寶　〃	――	――	表採

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
816	貨幣	A 2.34 G 3.5	紹聖元寳　北宋紹聖元（1094）	――	――	SD 28
817	〃	A2.375 G 3.0	聖宋元寳　北宋建中靖国元（1101）	――	――	SK 224
818	〃	A 2.41 G 3.5	聖宋元寳　〃	――	――	SK 305
819	〃	A 2.35 G 3.5	聖宋元寳　〃	――	――	SD 28
820	〃	A 2.31 G 3.5	圜宋元寳　〃	――	――	〃
821	〃	A 2.4 G 3.5	大観通寳　北宋大観元（1107）	――	――	〃
822	〃	A 2.31 G 3.5	淳熙元寳　南宋淳熙元（1174）(鋳印)	――	――	〃
823	〃	A 2.16 G 2.5	洪武通寳　明洪武元（1368）	――	――	SD 4
128 ｜ 824	〃	A 2.36 G 3.0	洪武通寳　〃	――	――	SD 28
825	〃	A 2.48 G 3.5	永楽通寳　明永楽6（1408）	――	――	〃
826	〃	A 2.43 G 2.5	永楽通寳　〃	――	――	〃
827	〃	A 2.47 G 3.5	永楽通寳　〃	――	――	〃
828	〃	A 2.5 G 4.0	永楽通寳　〃	――	――	〃
829	〃	A 2.8 G 3.5	永楽通寳　〃	――	――	〃
830	〃	A 2.52 G 3.5	永楽通寳　〃	――	――	〃

番号	器種	法量(cm)	特徴	整形技法	色調	備考
831	貨幣	A 2.39 G 4.0	永楽通寳　明永楽6（1408）	――	――	SD 28
832	〃	A 2.37 G 3.5	永楽通寳　〃	――	――	表採
833	〃	A 2.3 G 2.0	□元□寳（□□元寳）　不明	――	――	SD 28
129 ｜ 834	〃	A 2.42 G 3.0	寛永通寳　日本寛永13（1636）	――	――	S D 4
835	〃	A 2.33 G 2.5	寛永通寳　〃	――	――	〃
836	〃	A 2.29 G 2.5	寛永通寳　〃	――	――	〃
837	〃	A 2.43 G 3.5	寛永通寳　〃	――	――	表採
838	〃	A 2.28 G 2.5	寛永通寳　〃	――	――	〃
839	〃	A 3.22 G 4.0	文久永宝　日本文久3（1863）	――	――	SD 4
840	〃	A 2.19 G 3.5	文久永寳　〃	――	――	〃
841	〃	A 2.32 G 3.5	一錢青銅貨　日本大正5年制定（大正12年鋳造）	――	――	SD 8



第129図　石塔実測図（1）



第130図　石塔実測図 (2)